ISSN 1882-9775

奈良市埋蔵文化財調査年報

令和３（2021）年度

奈良市教育委員会

2024

奈良市埋蔵文化財調査年報

令和３（2021）年度

奈良市教育委員会

2024

例　言

1．本書は、令和３（2021）年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要と、研究成果を収録したものである。

ただし、令和３年度に実施した調査のうち平城京跡第 752・760・761・763・764 次調査については、次年度以降に報告の予定であるため本書には収録していない。

また、富雄丸山古墳第５次調査は平成 29（2017）～令和２年度に実施した同第１（測量調査）～４次調査と併せて『富雄丸山古墳　発掘調査報告書１　―第１～５次調査―』（2022）に報告したため本書には収録していない。

同様に、史跡大安寺旧境内第 154 次調査については、令和６年度発行予定の『史跡大安寺旧境内Ⅱ』で報告するため本書には収録していない。

2．令和３（2021）年度～令和５（2023）年度の埋蔵文化財に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局　教育部

文化財課

課　　長　　松浦五輪美

課長補佐　　宮﨑正裕（令和５年度）　松石明久（令和３・４年度）

記念物係

係　　長　　池田裕英

主　　任　　小林広育

主　　務　　原田香織　永野智子

再任用職員　篠原豊一（令和３・４年度）

埋蔵文化財調査センター

所　　長　　鐘方正樹

所長補佐　　中島和彦　松石明久（令和５年度　管理係長事務取扱）

管理係

係　　長　　森田孝一（令和３・４年度）

主　　務　　山前智敬

再任用職員　松村健次（令和３年度は主任）

調査係

係　　長　　久保邦江

主　　任　　安井宣也

主　　務　　吉田朋史　菊井佳弥（令和４年度から）

主　　事　　鈴木（髙岡）桃子

技 術 員　　三澤朋未（令和３年度）

再任用職員　秋山成人（令和３年度は主任）

活用係

係　　長　　原田憲二郎

主　　務　　村瀬　陸（令和３年度は主事）

技 術 員　　山口等悟（令和４年度から）　柴原聡一郎（令和５年度から）

再任用職員　森下浩行

3．発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。

4．各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。遺跡の略記号は下記のとおりである。

ＨＪ　平城京跡　　ＤＡ　史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡（以下、附石橋瓦窯跡を省略）
ＡＤ　赤田横穴墓群　　ＴＯＭ　富雄丸山古墳

5．本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

ＳＡ（柱列・塀）　ＳＢ（掘立柱建物）　ＳＤ（溝・濠・溝状遺構・暗渠）　ＳＥ（井戸）
ＳＦ（道路）　ＳＫ（土坑）　ＳＸ（その他）

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

6．本文中で示した過去の調査については、調査次数等の前に下記の略記号を使用して調査機関を表記した。

奈良市教育委員会　―遺跡略記号　次数
独立行政法人奈良文化財研究所（旧奈良国立文化財研究所含む）　―国　次数
奈良県教育委員会　および　奈良県立橿原考古学研究所　―番号または調査年

7．本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代　軒　瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会　1996
土　器：『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』奈良国立文化財研究所　1976
『平城宮発掘調査報告書Ⅺ』奈良国立文化財研究所　1982
古墳時代　須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
弥生時代　土　器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所　2003

8．発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」（1/2,500）を、また調査地位置図については、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を利用した。

9．本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については単位（m）を省略した。

10．この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

11．執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員等が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。

12．本書の執筆および編集は令和５年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長　鐘方正樹、所長補佐　中島和彦の助言を得て、久保邦江と鈴木桃子が編集を担当した。

表紙写真：「ＡＤ第６次調査　17 号墓出土陶棺」

目　次

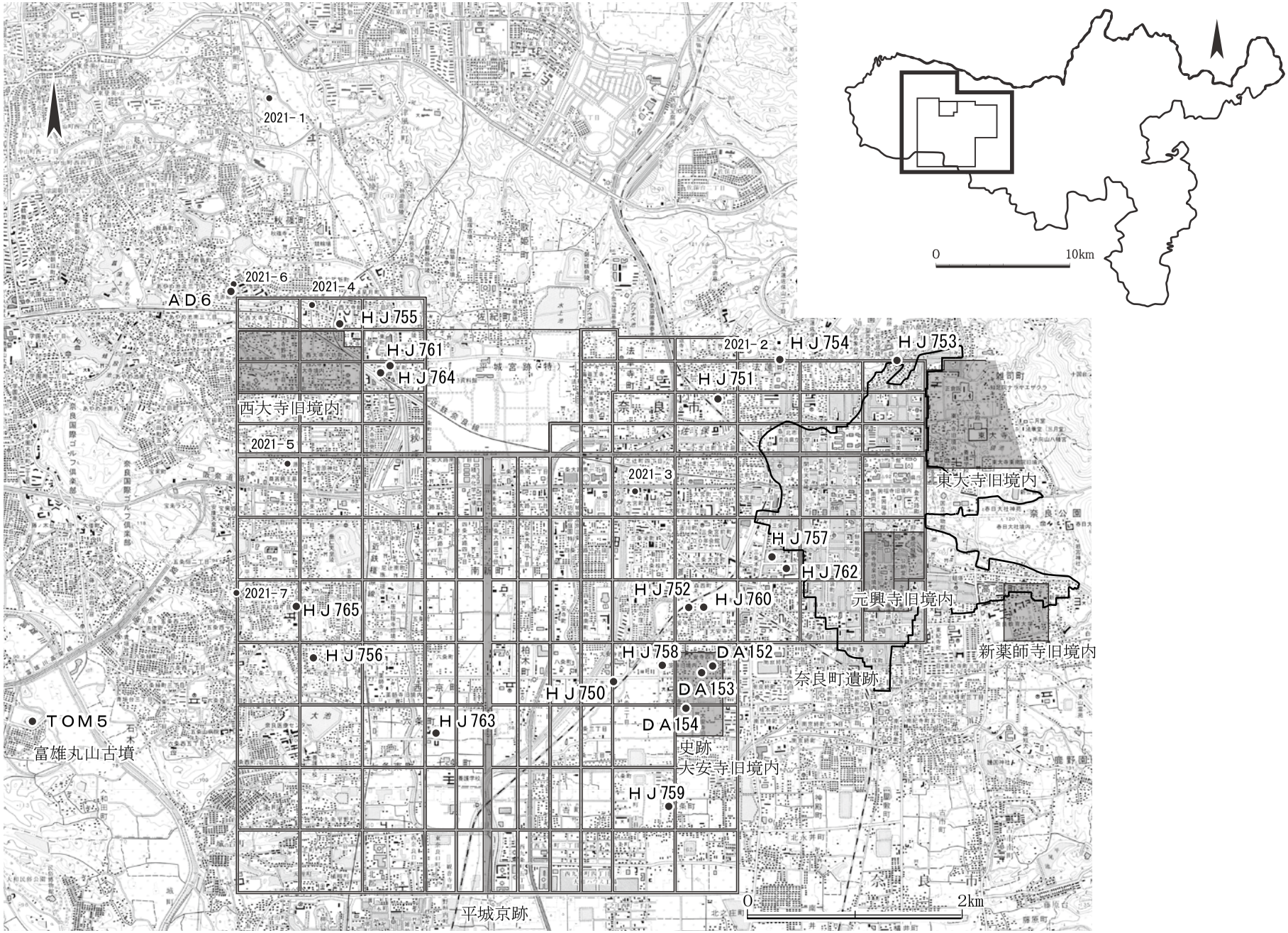
第１章　　令和３(2021)年度　埋蔵文化財発掘調査概要報告

１．　平城京跡（左京六条三坊三坪）の調査　　ＨＪ第 750 次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
２．　平城京跡（左京二条四坊九坪）の調査　　ＨＪ第 751 次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
３．　平城京跡（左京一条七坊五坪）・奈良町遺跡・多聞城跡隣接地の調査　　ＨＪ第 753 次・・・・・・・・・・ 38
４．　平城京跡（一条条間路（東五坊））の調査　　ＨＪ第 754 次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
５．　平城京跡（右京北辺三坊三坪）の調査　　ＨＪ第 755 次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
６．　平城京跡（右京六条三坊十六坪）の調査　　ＨＪ第 756 次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
７．　平城京跡（左京四条五坊十一坪）の調査　　ＨＪ第 757 次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
８．　平城京跡（左京六条三坊十五坪・六条条間北小路）の調査　　ＨＪ第 758 次・・・・・・・・・・・・・・・ 49
９．　平城京跡（左京八条三坊十四坪・東三坊大路）の調査　　ＨＪ第 759 次・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
10.　平城京跡（左京四条五坊十三坪）の調査　　ＨＪ第 762 次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
11.　平城京跡（右京五条四坊二坪）の調査　　ＨＪ第 765 次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
12.　赤田横穴墓群の調査　　ＡＤ第６次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
13.　史跡大安寺旧境内の調査・・・ 92
（１）池并岳または賤院の調査　　ＤＡ第 152 次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
（２）池并岳または賤院の調査　　ＤＡ第 153 次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
14.　令和３年度実施　遺跡有無確認踏査一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
15.　令和３年度実施　工事立会一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96

第２章　　令和３(2021)年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告・・・・・・・・・・・・・105

第３章　　研究報告

平城京出土軒瓦の新種・参考資料について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115



令和３（2021）年度　発掘調査位置図

令和3（2021）年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

調査次数		遺跡名	調査地	調査期間	調査面積 ㎡	調査担当者	調査原因・事業内容／届出者・申請者等	事業区分	届出等受理番号
1	HJ 750	平城京跡（左－6－3－3）	八条四丁目 684－1他	2021. 5.10 ～ 2022. 2.24	3,100	安井・三澤・久保	JR 新駅西口駅前広場街路整備事業／奈良市長	公共	R 2.3126
2	HJ 751	平城京跡（左－2－4－9）	法蓮町 410－7、-10	2021. 5.10 ～ 5.25	89	久保	有料老人ホーム新築／株式会社八重桜	原因者	R 3.3006
3	HJ 752	平城京跡（左－5－4－2・7）	大安寺七丁目 681－1他	2021. 5.20 ～ 11.16	2,041	鈴木	JR 奈良駅南特定土地区画整理事業／奈良市長	公共	H12.3145
4	HJ 753	平城京跡（左－1－7－5）・奈良町遺跡・多聞城跡隣接地	川上町 563 番3他	2021. 5.28 ～ 6. 7	186.25	中島・久保	宅地造成／株式会社 Dear	原因者	R 3.3395
5	HJ 754	平城京跡（一条条間路（東五坊））	法蓮町 775 番、786 番他	2021. 7.26 ～ 7.30	106	久保	個人住宅新築／東郷（香港）實業有限公司	原因者	R 3.3105
6	HJ 755	平城京跡（右－北辺－3－3）	西大寺本町 264－9	2021. 9. 6～ 9.14	102	中島	保育園新築／株式会社 nexus	原因者	R 3.3218
7	HJ 756	平城京跡（右－6－3-16）	六条一丁目 801－1、803	2021. 9.13	80	中島	宅地造成／個人	原因者	R 3.3289
8	HJ 757	平城京跡（左－4－5-11）	杉ヶ町 40 番1	2021.10.18 ～ 11.11	156	秋山	共同住宅新築／個人	原因者	R 3.3327
9	HJ 758	平城京跡（左－6－3-15・六条条間北小路）	大安寺三丁目 85 番2、85 番5、86 番	2021.11. 8～ 11.11	62	中島	宅地造成／大和ハウス工業株式会社	原因者	R 3.3254
10	HJ 759	平城京跡（左－8－3-14・東三坊大路）	東九条町 498 番1、499 番、502 番	2021.12. 1～ 12.17	176	秋山	宅地造成／株式会社 ハウスプロジェクト	原因者	R 3.3660
11	HJ 760	平城京跡（左－5－4－7）	大安寺七丁目 676－5他	2021.11.24 ～ 12.24	324	鈴木	JR 奈良駅南特定土地区画整理事業／奈良市長	公共	H12.3145
12	HJ 761	平城京跡（右－1－2-11・一条条間路）	西大寺栄町 2321－4、2321－7	2021.11.24 ～ 12. 7	84	中島	大和西大寺駅北口駅前広場整備事業／奈良市長	公共	H12.3512
13	HJ 762	平城京跡（左－4－5-13）	杉ヶ町8番1	2022. 2.28 ～ 3.25	200.75	秋山	共同住宅新築／檜尾建設株式会社	原因者	R 4.3487
14	HJ 763	平城京跡（右－7－1-10・15・七条々間路・西一坊坊間西小路）	六条町 86 番他	2022. 3. 1～ 5. 9	434	鈴木	介護医療院増設／医療法人 康仁会	原因者	R 4.3478
15	HJ 764	平城京跡（右－1－2-11・14）	西大寺栄町 2339－1他	2022. 3. 7～ 6.28	832	吉田	大和西大寺駅北口駅前広場整備事業／奈良市長	公共	H29.3512
16	HJ 765	平城京跡（右－5－4－2）	平松四丁目 360 番1他	2022. 3. 7～ 3.15	120	久保	宅地造成／株式会社 八州エイジェント	原因者	R 4.3504
17	AD6	赤田横穴墓群	西大寺赤田町一丁目 556-35 他	2022. 3. 8～ 8.31	757	吉田・三澤・鈴木	大和中央道街路整備事業／奈良市長	公共	H24.3045
18	DA 152	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1105 番1、1105 番2の各一部	2021. 4.12 ～ 4.22	51	秋山	個人住宅建築／個人	緊急	R 3.1133
19	DA 153	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1112 番	2021. 7. 9	3	秋山	個人住宅建築／個人	緊急	R 3.1015
20	DA 154	史跡大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	東九条町 1291－2、1292－1、1292－3	2021.10. 4～ 10.27	180	原田	範囲確認調査／奈良市教育委員会 教育長	緊急	R 3.1009
21	TOM5	富雄丸山古墳	丸山一丁目 1079-239	2021.12.20 ～ 2022. 2.18	278	村瀬	範囲確認調査／奈良市教育委員会 教育長	緊急	R 3. 文保 1121

令和3（2021）年度　奈良市教育委員会実施　小規模・試掘調査一覧

次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積（㎡）	事業者	事業内容	事業区分	届出受理番号
2021-1	奈良山第44号窯	中山町1534-1・-2、1535、1537-1・2・3、1536	2021.4.14～16	297	積水ハウス不動産関西（株）	宅地造成	原因者	R 3.3393
	調査結果：遺構は確認されず。西側隣接地にて遺構を確認したため、施工時立会。							
2021-2	平城京跡（左京一条条間路）	法蓮町775番、786番、2044番	2021.6.28～30	66	東郷（香港）實業有限公司	個人住宅新築	原因者	R 3.3105
	調査結果：遺構面・遺構とも確認。本調査を実施（HJ第754次調査）。							
2021-3	平城京跡（左－3-3-6）	大宮町四丁目297-2	2021.8.2～5	90	株式会社南都銀行	事務所新築	原因者	R 3.3081
	調査結果：遺構面・遺構とも確認。本調査を実施（HJ第768次調査）。							
2021-4	平城京跡（右－北辺－3-5）	西大寺北町三丁目398番、397番1、399番1	2021.9.10～11	45	株式会社喜仙荘	共同住宅新築	原因者	R 3.3271
	調査結果：遺構面・遺構とも確認。計画変更し、工事着手。							
2021-5	平城京跡（右－3-4-1、西四坊坊間東小路）、菅原寺跡	菅原町403-1、404他	2021.9.13～29	580.5	株式会社明日香不動産販売	宅地造成	原因者	R 3.3036
	調査結果：西側の丘陵部で室町時代の土坑・溝、東側の平坦部で奈良時代の井戸、室町時代の土坑を検出。試掘調査内で遺構の掘削をおこない、これ以上の調査は不要と判断、工事着工。							
2021-6	奈良県遺跡地図5-A35・36 古墳隣接地	西大寺赤田町一丁目546-97他	2021.11.22～2022.1.24	160	奈良市長	大和中央道街路整備事業	公共	H24.3045
	調査結果：東西方向の谷を検出、埴輪・瓦が出土。工事着手。							
2021-7	平城京跡（西四坊大路（五条））	五条畑一丁目597番1・2、610番9、610番10	2022.2.9・10	118	個人	宅地造成	原因者	R 4.3497
	調査結果：遺構は確認されず。施工時立会。							

※平城京跡に付している（○－○－○－○）は、○京○条○坊○坪の略である。

『奈良市埋蔵文化財調査年報』令和2（2022）年度　正誤表

頁	行・箇所	誤	正
i	31行目	主事　村瀬陸	主務　村瀬陸
39	右 29行目	(伊勢湾岸所在古墳の測量調査〉	〈伊勢湾岸所在古墳の測量調査〉
39	右 30行目	_倉正祥	城倉正祥
39	右 34行目	行頭1文字下げ	左に寄せる

第 1 章　令和 3(2021) 年度　埋蔵文化財発掘調査概要報告

1．平城京跡（左京六条三坊三坪）の調査　ＨＪ第 750 次

事 業 名　ＪＲ新駅西口駅前広場街路整備交付金事業	調 査 期 間　令和３年５月 10 日～令和４年２月 24 日
届出者名　奈良市長	調 査 面 積　3,100㎡
調 査 地　八条四丁目 684－１他	調査担当者　安井宣也・久保邦江・三澤朋未

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京六条三坊三坪の北西部にあたり、地形的には佐保川が形成した氾濫平野に位置する。現状は水田で、東二坊大路の東側溝が推定される西辺部は北側延長部が佐保川の現河道と重複する旧河道を反映した地割となっている。

三坪内の調査は今回が初めてである。周辺では、左京六条二坊十三・十四坪にあたる西隣接地において昭和 63 年度に奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）が病院建設に伴う事前調査を行っている（橿考研 1992）ほか、すぐ南方の左京六条二坊十三坪･同三坊三･四坪及び七条二坊三・七・九・十・十六坪にあたる京奈和自動車道奈良ＩＣ計画地内では、橿考研が平成 30 年度・令和元年度に試掘調査を行い、令和２年度から本格的に発掘調査を進めている。これらの調査は平城京内の宅地利用の様相確認を主な目的としているが、後者では、自然科学分析を活用して奈良時代の遺構面がある基盤層や中世の沖積層・旧河川の様相・性格の把握にも及んでいる（橿考研 2020・2021・2022・2023）。

今回の調査は、奈良時代の三坪北西部の宅地利用の様相確認を主な目的とし、橿考研の奈良 IC 計画地の調査と同様に奈良時代の遺構面がある基盤層や中世の沖積層・旧河川の様相・性格の把握にも留意して、3,100㎡の発掘区を１～４の四つに分けて実施した。

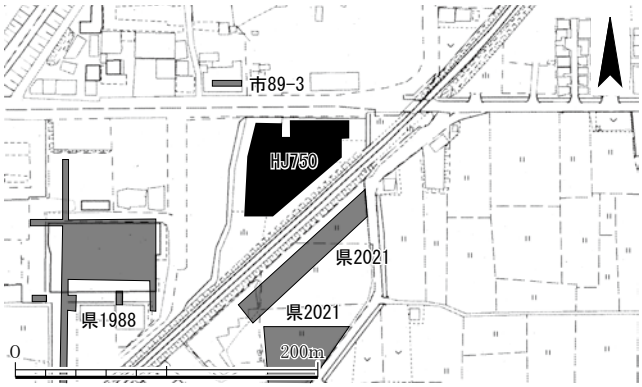
なお、調査と関連して下記の自然科学分析（委託分・協力分あり）を行った。成果については一部の概略を本稿で紹介するが、正式には稿を改めて報告予定である。

１．（一社）文化財科学研究センター：委託
　基盤層の微化石分析（花粉・珪藻）・火山灰分析・放射性炭素年代測定

２．金原正明氏（奈良教育大学）、金原正子氏・金原美奈子氏（(一社）文化財科学研究センター）：協力
　遺構埋土･旧河川堆積物及び基盤層の微化石分析(花粉・珪藻)、室町時代杭列の樹種同定

３．村田泰輔氏（(独法）奈良文化財研究所）：協力
　旧河川堆積物の堆積構造､室町時代杭列の年代測定･支持地盤の断面構造

また、室町時代杭列細部の Sfm 写真測量、奈良時代の墨書土器の文字の判読及び線刻土器の類例調査については、（独法）奈良文化財研究所の協力を得た。



HJ第 750 次調査　調査地位置図（1/5,000）

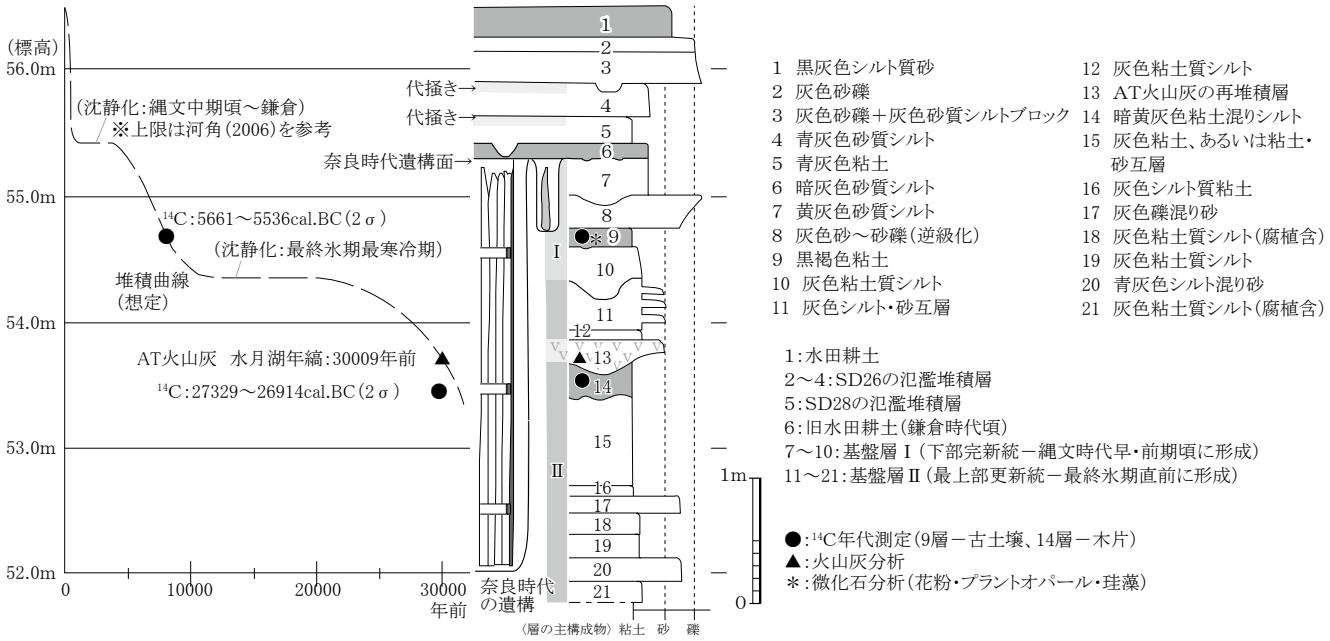
Ⅱ　基本層序

現水田の耕土・床土層（厚さ 0.2 m）の下に後述する鎌倉～江戸時代初頭の埋没河川ＳＤ 26・28 の氾濫堆積層（厚さ 0.9 m）、鎌倉時代頃の旧耕土層（厚さ 0.1m）があり、その下で氾濫平野の基盤層となる。

埋没河川ＳＤ 26 の氾濫堆積層は灰色のシルト層や砂礫層で、砂礫層は後述する堤防ＳＸ 04 を越えて堆積し、シルト層の上面に耕作に伴う代掻きの形跡がみられる。同ＳＤ 28 の氾濫堆積層は鎌倉時代の旧耕土上に堆積する青灰色のシルト・粘土層で、瓦質土器片を含む。上面は堤防ＳＸ 04 の基底面と対応し、耕作に伴う代掻きの形跡がみられる。鎌倉時代の旧耕土層は 13 世紀頃の瓦器片を含む暗灰色砂質シルト層で、乾裂痕がみられる。

基盤層最上層の黄灰色砂質シルト層上面（標高 55.3 m）が古墳～奈良時代の遺構面で、上面が低くくぼむ場所には８世紀の土器・瓦片を含む砂質シルトからなる奈良時代の整地土層（厚さ 0.2 m前後）がみられる。

基盤層は最上層上面から 3.6 m下（標高 51.7 m）まで確認した。概して灰色のシルト・粘土層が主体で厚さ 0.1 ～ 0.2 mの砂礫層や有機物を含む暗灰色や黒褐色のシルト・粘土層を挟む。最上層上面から 1.0 ～ 1.2 m下まで（標高 54.1 ～ 54.3 m、柱状図７～ 10 層）までは乾裂痕が顕著で、黒褐色粘土層（同９層）は放射性炭素年代測定で約 7,500 ～ 7,700 年前（縄文時代早期後葉～末）の年代値（暦年較正）が得られ、植物微遺体分析では花粉・珪藻が極めて少なくササ類やススキの植物珪

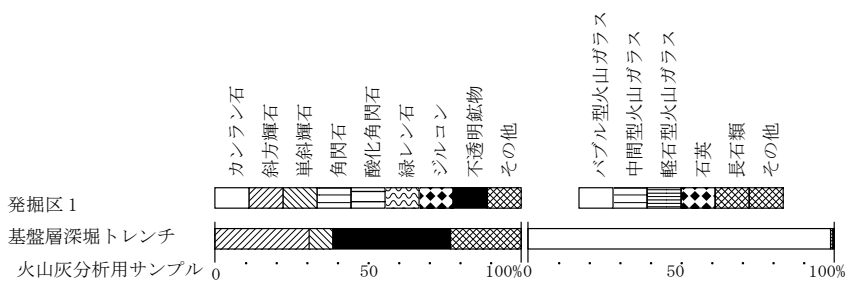


HJ第 750 次調査　基本層序柱状図（縦：1/60、発掘区北寄りの深掘部と井戸SE 04 の基盤層の観察結果を総合して構成）

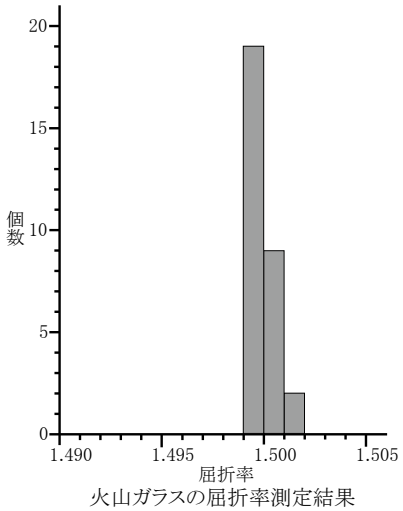
酸体が多いことがわかった。その下（同 11 層以下）は湿潤な沼沢地の様相で、標高 54.0 m付近に厚さ 0.1 ～ 0.2m の AT 火山灰（噴出年代：約 30,000 年前）の再堆積層（同 13 層）を挟む。直下の暗黄灰色粘土混りシルト層に含まれる木の放射性炭素年代測定で得られた年代値は約 28,000 ～ 29,000 年前（暦年較正）で、ＡＴ火山灰の噴出年代と新旧が逆転する。周辺の調査成果も踏まえると、最上層上面の 1.0 ～ 1.2 m下までが縄文時

重軽鉱物分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石類	その他	合計
発掘区1 基盤層 深堀トレンチ 火山灰分析用サンプル	0	4	1	0	0	0	0	5	3	13	247	0	2	0	0	1	250



重軽鉱物組成



火山ガラスの屈折率測定結果

HJ第 750 次調査　基盤層深掘トレンチ採取試料の自然科学分析結果　①柱状図 13 層のAT火山灰

花粉分析結果

Taxa（分類群） Scientific name （学名）	Japanese name（和名）	柱状図9層 上層	柱状図9層 下層
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Artemisia	ヨモギ属	2	
Nonarboreal pollen	草本花粉	2	0
Total pollen	花粉総数	2	0
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^3 中の花粉密度	0.2	−
		×10^2	−
Unknown pollen	未同定花粉	0	0
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	3	3
Total Fern spore	シダ植物胞子総数	3	3
Parasite eggs	寄生虫卵	(−)	(−)
Stone cell	石細胞	(−)	(−)
Digestion rimains	明らかな消化残渣	(−)	(−)
Charcoal ・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)
微細植物遺体(Charcoal ・woods fragments)	(×10^5)		
未分解遺体片			0.4
分解質遺体片		5.0	9.6
炭化遺体片（微粒炭）		1.3	0.4

植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

Taxa（分類群） Japanese name(和名)	Scientific name(学名)	柱状図9層 上層	柱状図9層 下層
イネ科	Gramineae		
ヨシ属	*Phragmites*	15	44
キビ族型	Paniceae type	10	10
ススキ属型	*Miscanthus* type	5	10
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	40	44
タケ亜科	Bambusoideae		
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	86	88
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	408	334
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	10	10
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	5	5
未分類等	Others	96	49
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin	5	5
棒状珪酸体	Rodshaped	91	69
茎部起源	Stem origin	5	5
未分類等	Others	146	118
植物珪酸体総数	Total	923	791

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

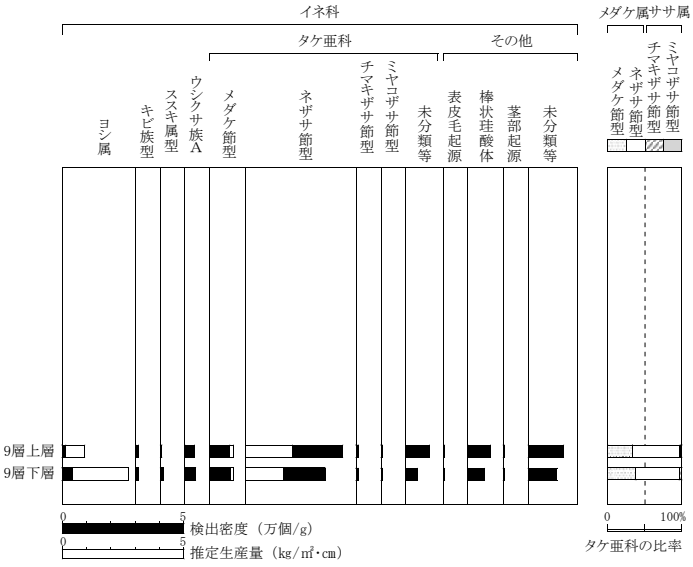
ヨシ属	*Phragmites*	0.95	2.79
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.06	0.12
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.99	1.03
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	1.96	1.60
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.08	0.07
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02	0.01

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	33	38
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	64	59
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	2	3
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0	1
メダケ率	Medake ratio	97	97

珪藻分析結果

分類群	柱状図9層 上層	柱状図9層 下層
貧塩性種（淡水生種）		
Hantzschia amphioxys		1
Navicula mutica		1
合　計	0	2
未同定	0	0
破片	24	4
試料1cm^{3}中の殻数密度	−	0.4
	−	×10^3
完形殻保存率（%）	−	−



植物珪酸体ダイアグラム

HJ第 750 次調査　基盤層深掘トレンチ採取試料の自然科学分析結果　②柱状図9層の微化石（花粉・植物珪酸体・珪藻）

放射性炭素年代測定結果①（δ13C補正値）

測定番号	採取場所	試料形態	処理方法	δ13C（‰）（AMS）	δ13C補正あり	
					Libby Age　(yrBP)	pMC（%）
IAAA-210979	基盤層深掘トレンチ 層位：柱状図９層	土壌	HCl	-23.61 ± 0.19	6,680 ± 30	43.52 ± 0.17
IAAA-210980	基盤層深掘トレンチ 層位：柱状図14層	植物片	AaA	-28.66 ± 0.26	24,930 ± 90	4.49 ± 0.05

［IAA 登録番号:#A916］

放射性炭素年代測定結果②（δ13C未補正値、暦年較正用14C年代、較正年代）

測定番号	δ13C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-210979	6,660 ± 30	43.65 ± 0.17	6,682 ± 31	5633calBC - 5612calBC (26.2%) 5591calBC - 5562calBC (42.0%)	5661calBC - 5536calBC (95.4%)
IAAA-210980	24,990 ± 90	4.46 ± 0.05	24,925 ± 93	27276calBC - 27116calBC (68.3%)	27329calBC - 26914calBC (95.4%)

［参考値］

HJ第750次調査　基盤層深掘トレンチ採取試料の自然科学分析結果　③柱状図9・14層採取試料の放射性炭素年代測定

代早・前期頃に堆積した下部完新統の地層、その下が河床の低下が進む最終氷期細寒冷期までに堆積した最上部更新統の地層で、古墳～奈良時代の遺構面は前者の堆積休止面と捉えることができる。

Ⅲ　検出遺構

遺構検出作業は基盤層最上層の上面で行い、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良～平安時代初頭、鎌倉～江戸時代初頭の遺構を検出した。概要は以下のとおり。

１．古墳時代後期～飛鳥時代の遺構

発掘区北西部で検出した掘立柱建物１棟（ＳＢ45）・溝１条（ＳＤ01）がある。

ＳＢ45　桁行３間（4.2ｍ）、梁行２間（3.6ｍ）の南北棟建物で、棟方向が方位北に対し東に振れる。先後関係から後述する奈良時代の溝ＳＤ03より古い。

ＳＤ01　北東から南西に続く溝で、幅1.3～3.0m、深さ0.4～0.7m。埋土は地山ブロック土からなる上層と暗灰色のシルト・粘土からなる下層に大別でき、上層からは８世紀の土器小片、下層からは６～７世紀頃の土師器甕と壺の破片が出土した。

２．奈良～平安時代初頭の遺構

掘立柱建物44棟（ＳＢ01～44）･掘立柱列37条（ＳＡ01～37）・溝24条（ＳＤ02～25）・井戸６基（ＳＥ01～06）・土坑10基（ＳＫ01～10）・小規模な池状遺構２基（ＳＸ01・02）・性格不明の土坑群（ＳＸ03）がある。主な遺構の形状・規模は一覧表の通り。

掘立柱建物・柱列は柱筋、溝は主軸・延長方向の方位に対する振れにより、以下の３つに分類できる。

Ａ類　方位東西・南北とほぼ合うもの。

Ｂ類　方位北に対し西、または同東に対し北にやや振れるもの。

Ｃ類　方位北に対し東、または同東に対し南にやや振れるもの。

また、遺構の性格に基づくと以下のようにまとめることができる。

（1）　区画割に関わるもの

三坪の四周を画する条坊道路で近隣の調査例があるのは、奈良IC計画地内の橿考研の調査地で確認された西辺を画する東二坊大路と南辺を画する六条条間南小路である。

東二坊大路は側溝心々間距離が14.4mで、同調査地で確認された六条大路（側溝心々間距離：15m、側溝を含めた幅員：17.8m）とほぼ同規模である。六条条間南小路は側溝を含めた幅員が8.8ｍで、同調査地で確認された東二坊坊間東小路・七条条間北小路もほぼ同規模であることから、三坪の東辺を画する東三坊坊間東小路の幅員も同規模の可能性が高い。北辺を画する六条条間路の調査例はないが、側溝を含めた幅員は13ｍ程度と想定できる。したがって、三坪の範囲は東西120ｍ×南北122ｍ程度で、南辺の位置はＸ＝－147,662.0付近、東辺の位置はＹ＝－17,643.4付近に推定できる。

上記の点も踏まえて区画割に伴うと考えられる遺構は、下記の通りである。

Ａ類　溝２条（ＳＤ02・03）と柱列２条（ＳＡ08・32）がある。

ＳＤ02・03　ともに南北方向の溝で、これらの溝をまたぐＡ類の建物がないことから区画割の溝とみる。三坪

東辺の推定位置からの溝心までの距離はＳＤ02が63ｍで坪内の東西1/2分割線付近、ＳＤ03が90ｍで同西1/4分割線付近にあたる。ともにＸ＝－147,572付近で溝幅が変わるが、この位置は三坪南辺の推定位置の90ｍ北で同1/4分割線付近にあたる。両者の埋土から8世紀後半の土器が出土した。

ＳＡ08・32　ともに発掘区の北東辺で検出した。ＳＡ08は三坪南辺の推定位置の108ｍ北に位置する東西方向の柱列で、Ａ類の建物ＳＢ41・42の間を画することから区画の塀とみる。ＳＡ32は区画割の溝ＳＤ02の東肩の3ｍ東に位置する南北方向の柱列で、ＳＤ02との間の空閑地にＡ類の建物がないことから、坪内通路の東縁に沿う区画割の塀とみる。

Ｂ類　柱列3条（ＳＡ06・07・15）がある。

ＳＡ06・07　ともに発掘区の北東辺で検出した。ＳＡ06は区画割の溝ＳＤ02の東肩の2～2.4ｍ東に位置する南北方向の柱列。ＳＡ07は西端がＳＡ06の南から2間目の柱穴に接続する東西方向の柱列で、前述のＳＡ08・23と位置・形状が近いことから同様の塀とみる。

ＳＡ15　Ａ類の区画割の溝ＳＤ03の西肩にほぼ沿う南北方向の柱列で、先後関係からＳＤ03より新しい。西側にＢ群の南北棟建物が重複して南北に並ぶことから、区画割の塀とみる。

Ｃ類　溝6条（ＳＤ20～25）がある。

ＳＤ20・21　ＳＤ20は南北方向の溝で、本来はＡ類とすべきだが南端部がＣ類の東西方向の溝ＳＤ21と接続することからＣ類に含める。ＳＤ21は先後関係からＡ類の区画割の溝ＳＤ03より新しく、ＳＤ20との接続部より東方では方眼方位東に対しやや南に振れるが、Ａ類の建物ＳＢ10・11の南側を通る西方では東西の方位とほぼ合う。一部の建物の北側柱列や東西方向の柱列が溝の北岸沿いにあるが、ここを境界にＣ類の建物の配置が変化することから、区画割の溝とみる。

ＳＤ20の位置は同東辺の推定位置の96ｍ西である。ＳＤ21の位置は三坪南辺の推定位置の概ね90ｍ北で、坪内の北1/4分割線付近にあたる。両者の埋土から8世紀後半の土器片が出土した。

ＳＤ22・23　ともにＳＤ21の南肩から南に約1.2～1.8ｍ隔てて掘削された東西方向の溝で、ＳＤ21を北側溝とする坪内通路の南側溝の可能性もある。ＳＤ22はＳＤ21の西端部に沿う。東端はＳＤ20・21の接続部付近と揃い、南側に後述する窪みＳＸ02を伴う。埋土はＳＸ02と一連である。ＳＤ23はＳＤ21の東端部に沿い、埋土から8世紀後半の土器が出土した。

ＳＤ24・25　ともに発掘区南東部で検出した東西方向の溝で、またいで建つ建物はない。ＳＤ24は区画割の溝ＳＤ21の9ｍ南に位置し、先後関係からＣ類の建物ＳＢ36より古い。ＳＤ25は同15ｍ南に位置し、坪内の北1/8分割線の位置に設けられた区画割の溝とみる。両者の埋土から8世紀後半の土器が出土した。

(2)　居住に関わるもの

建物・柱列と井戸、溝がある。

ａ．建物・柱列

Ａ類　建物24棟、柱列16条で、ともに発掘区内全体でみられる。前述したように南北方向のＡ類の区画割の溝ＳＤ02・03をまたいで建つものはなく、溝をはさんで東・中央・西の3群に識別できる。

◆東群：建物－ＳＢ41・42・44
　　柱列－ＳＡ05・09・10

建物は部分的な検出にとどまる。ＳＢ41・42は区画割の塀ＳＡ08を挟んで建つ。ＳＢ42と区画割の塀ＳＡ32とは位置が重複し、同時併存しない。ＳＢ41・44は位置が近接し、同時併存の可能性が低い。柱間2間の南北柱列ＳＡ05は区画割の塀ＳＡ08の西端の柱穴の北延長上に位置し、区画割の柵に取り付く門の可能性がある。

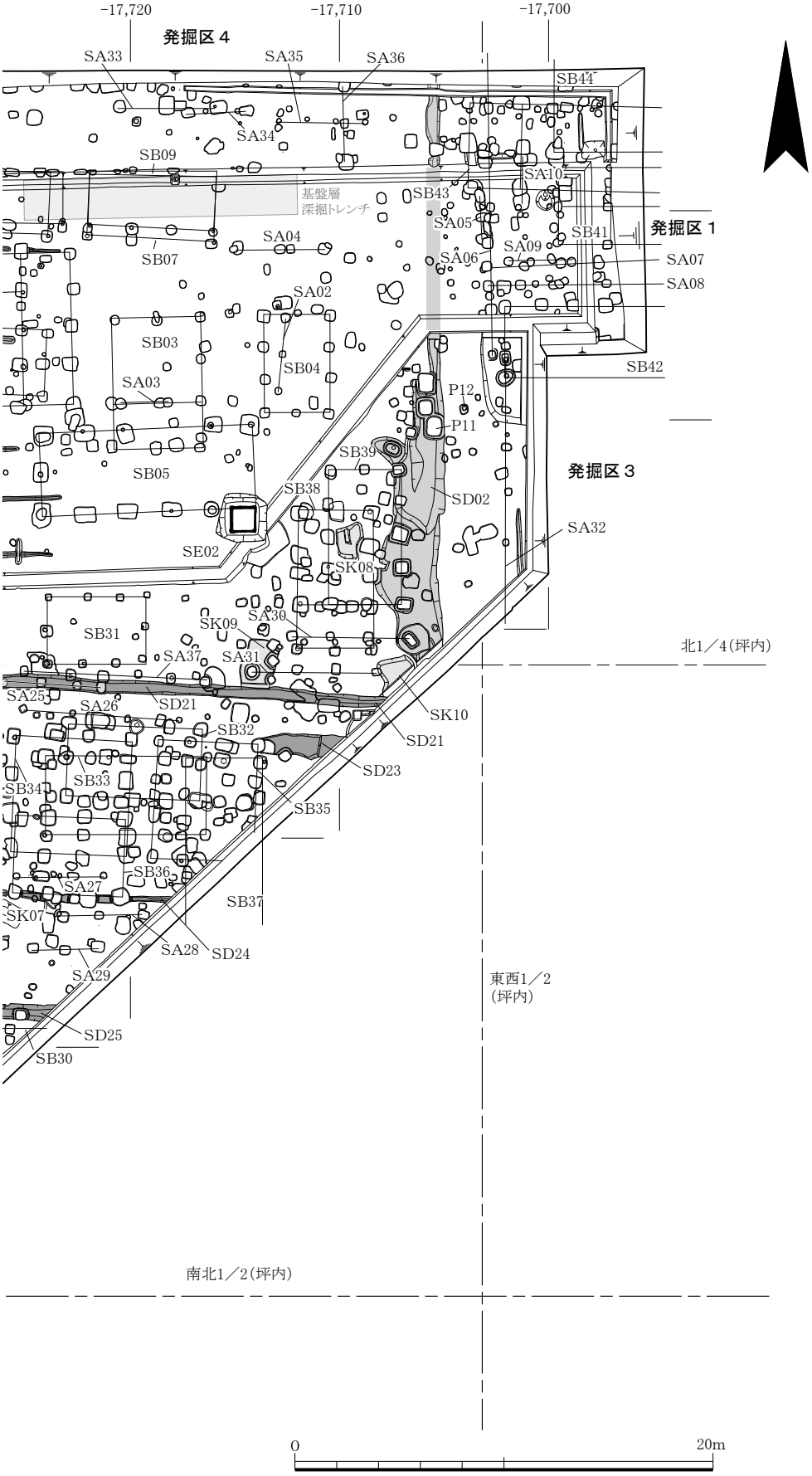
◆中央群：建物－ＳＢ 01・03・04・27 ～ 29・31・33・37～39
　　柱列－ＳＡ 01・04・21・23・27 ～ 31・33・36

建物の大半は南北棟で9棟（ＳＢ01・03・04・27～29・37～39）あり、規模のわかるものは桁行3間のもの（ＳＢ03・04・28・29）と同4間のもの（ＳＢ01・27・38・39）がある。東西棟は2棟で、ＳＢ31が桁行3間、ＳＢ33が同4間である。

桁行3間の南北棟は、北寄りでＳＢ03・04が北側柱列を揃えて東西に並び、南寄りでＳＢ28・29が区画割の溝ＳＤ03の東側に西側柱列を揃えて南北に並ぶ。また、ＳＢ04は桁行4間の南北棟ＳＢ01、ＳＢ28は桁行4間の東西棟ＳＢ33と柱筋が揃う。

桁行4間の南北棟は、ＳＢ01・27が区画割の溝ＳＤ03の東側に沿って南北に並び、ＳＢ38・39が同ＳＤ02の西側に沿って建つ。ＳＢ01は東廂付きで、比較的大型の建物である。ＳＢ27の東西中軸線とＳＢ31の南側柱列の位置は三坪南辺の推定位置の90ｍ北で、坪内の北1/4分割線付近にあたる。ＳＢ39は先後関係からＳＢ38や区画割の溝ＳＤ02より新しい。桁行4間の東西棟ＳＢ31・33は西側柱列を揃えて南北に並び、

HJ第 750 次調査　遺構平面図1



―古墳～平安時代初頭―（1/300）

HJ第 750 次調査　奈良時代　遺構一覧表1

◆掘立柱列（SA）

遺構番号	柱筋・棟方向		規模（間）	長さ（m）			柱間寸法（m）		備　考
	基本	傾き	桁行×梁行＋廂	桁行	梁行	廂の出	桁行	梁行	
SA 01	南北	A	2	3.6			1.8 等間		
SA 02	南北	C	2	3.6			1.8 等間		SB 04 と重複
SA 03	東西	B	1	2.4			2.4		SB 03 より新しい
SA 04	東西	A	2	4.2			2.1 等間		
SA 05	南北	A	2	2.4			1.2 等間		
SA 06	南北	B	5以上	12.0 以上			北から 2.4-2.4-3.0-2.1-2.1		発掘区外北に続く可能性
SA 07	東西	B	3以上	5.4 以上			1.8 等間		西端はSA 04 に接続 発掘区外東に続く可能性
SA 08	東西	A	3以上	5.7 以上			西から 1.5-2.1-2.1		発掘区外東に続く可能性
SA 09	東西	A	3	3.15			1.05 等間		
SA 10	南北	A	1	2.1			2.1		SB 43 より古い
SA 11	東西	C	4	6.6			西から 1.5-2.1-1.5-1.5		
SA 12	東西	C	2	3.9			1.95 等間		SX 03 より新しい
SA 13	東西	B	2	4.5			2.25 等間		SX 03 より新しく、SB 25 と重複
SA 14	南北	A	3以上	7.2 以上			北から 3.0-1.8-2.4		SX 03 より新しく、SB 25 と重複
SA 15	南北	B	5	11.1			北から 2.1-3.0-2.1-1.8-2.1		SD 03 より新しく、SB 26 と重複
SA 16	南北	B	2	2.4			1.2 等間		
SA 17	南北	A	3	4.2			北から 1.2-1.5-1.5		SB 26 と重複
SA 18	南北	A	1	1.8			1.8		
SA 19	東西	B	2	3.6			1.8 等間		SB 23 と重複
SA 20	南北	A	2	3.6			1.8 等間		SA 19 より古く、SB 23 と重複
SA 21	東西	A	2	3.3			1.65 等間		SD 03 より新しく、SB27 と重複
SA 22	東西	C	3	5.4			1.8 等間		SD 03 より新しく、SB27 と重複 SD 21 の北肩に沿う
SA 23	東西	A	2	3.3			1.65 等間		SB27・SD 03 と重複
SA 24	東西	C	3	6.3			北から 2.4-2.4-1.5		SB26・SD 03 と重複
SA 25	東西	C	3	4.8			西から 1.8-1.8-1.2		SD 21 より古い
SA 26	東西	C	3	7.5			西から 2.4-2.7-2.4		SB 32 と重複
SA 27	東西	A	2	4.2			2.1 等間		SB 36 と重複
SA 28	東西	B	2以上	3.9 以上			西から 1.8-2.1		発掘区外東に続く可能性
SA 29	東西	A	2以上	3.0 以上			1.5 等間		発掘区外東に続く可能性
SA 30	東西	A	3	5.7			西から 1.8-1.8-2.1		SD 02 より新しく、SB 38 と重複
SA 31	東西	A	3	6.0			西から 2.1-1.95-1.95		SK 10 より古く、SK 31 より新しい
SA 32	南北	A	4以上	8.7 以上			北から 2.4-1.8-2.1-2.4		SB 42 と重複、発掘区外南に続く可能性
SA 33	東西	A	2	4.5			2.25 等間		
SA 34	東西	B	1	3.0			3.0		
SA 35	南北	C	3	4.05			1.35 等間		
SA 36	南北	A	2	3.6 以上			1.8 等間		SA 35 と交差、発掘区外北に続く可能性
SA 37	東西	C	5	8.7			西から 2.25 － 1.5 － 1.65 － 1.65 － 1.65		SD 21 の北肩と重複

HJ第 750 次調査　奈良時代　遺構一覧表2

◆掘立柱建物（SB）①

遺構番号	棟方向		規模（間）	桁行全長（m）	梁行全長（m）	廂の出（m）	身舎柱間寸法（m）		備　考
	基本	振れ	桁行×梁行（廂）				桁行	梁行	
SB 01	南北	A	4×3（東廂1）	7.2	6.45	2.25	1.8 等間	2.1 等間	身舎の北から1間目に間仕切り
SB 02	東西	C	2×2	4.5	3.6		2.25 等間	1.8 等間	SB 01 と重複
SB 03	南北	A	3×2	6.3	4.2		2.1 等間	2.1 等間	SB 05 と重複、南から1間目に間仕切り
SB 04	南北	A	3×2	4.8	3.2		北 1.65-1.5-1.65	1.65 等間	
SB 05	東西	B	5×2	9.9	3.9		西から 1.95-1.95-2.1-1.95-1.95	1.95 等間	SB 03・SE 02 と重複
SB 06	東西	C	3×1	5.85	2.7		1.95 等間	2.7	
SB 07	東西	C	3×1	5.85	2.7		西から 2.1-1.95-1.95	2.7	
SB 08	東西	C	3×1	6.3	2.4		西から 1.95-1.95-2.4	2.4	SB 06 より新しく、ほぼ同じ位置に重複
SB 09	東西	C	3×1	5.85	2.4		1.95 等間	2.4	SB 07 より新しく、ほぼ同じ位置に重複
SB 10	東西	A	3以上×3（南1）	5.4 以上	6.3	2.4	1.8 等間	1.95 等間	
SB 11	南北	A	5×2	8.55	3.9		北から 1.5-2.1-1.8-1.65-1.5	1.95 等間	北寄りに3基の埋甕遺構を伴う
SB 12	南北	C	3×2	5.1	1.8 以上		北から 1.8-1.65-1.65	1.8	
SB 13	東西	C	3×2	6.3	3.3		西から 2.55-1.65-2.1	1.65 等間	SD 22・SX 02 より新しく、SK 01・02 より古い
SB 14	東西	A	4×3（南1）	7.5	6.0	2.4	西から 1.2-2.1-2.1-2.1	1.8 等間	
SB 15	東西	A	3×2	5.7	3.8		西から 2.1-2.1-1.5	3.8	SB 14 より古く、SB 16 と重複
SB 16	東西	A	3以上×2	5.4 以上	4.2		2.7 等間	2.1 等間	
SB 17	東西	C	3以上×2	2.7 以上	3.0		1.35 等間	1.5 等間	
SB 18	東西	A	4以上×2	6.3	3.6		西から 2.1-2.4-1.8	1.8 等間	
SB 19	東西	C	3×2	7.2	3.0		西から 1.5-2.85-2.85	1.5 等間	西から1間目に間仕切り、SB 18 より新しい
SB 20	南北	B	3×1	4.95	3.9		1.65 等間	3.9	
SB 21	南北	B	3×1	5.7	3.6		北から 1.8-1.8-2.1	3.6	SB 20 より新しく、SB 23 より古い
SB 22	南北	A	2×2	4.2	2.7		2.1 等間	1.35 等間	SB 21・23 と重複
SB 23	南北	B	3×2	5.4	3.3		1.8 等間	1.65 等間	SB 21 より新しく、SB 25 と重複
SB 24	南北	C	3×2	5.1	3.6		北から 1.8-1.5-1.8	1.8 等間	SX 03 より新しい
SB 25	南北	A	5×3（西1）	10.2	5.7	2.1	北から 2.4-2.4-1.8-1.8-1.8	1.8 等間	SX 03 より新しく、SB 24・SE 05 と重複 身舎の北から2間目に間仕切り
SB 26	南北	C	3×2	5.1	3.3		北から 1.8-1.5-1.8	1.65 等間	SD 03 より新しく、SA 15・16 及びSB 20 と重複
SB 27	南北	A	4×2	8.25	3.3		北から 2.4-1.95-1.95-1.95	1.65 等間	SD 21 より古く、SA 23・24 と重複
SB 28	南北	A	3×2	4.95	3.3		1.65 等間	1.65 等間	SK 07 より古い
SB 29	南北	A	3×2	4.95	3.6		1.65 等間	1.8 等間	SD 25 より古い
SB 30	不明	A	2以上×2以上	2.25 以上	1.8 以上		2.25	1.8	SB 29 と重複、発掘区外南・東に続く
SB 31	東西	A	3×2	4.8	3.0		西から 1.8-1.5-1.5	1.5 等間	
SB 32	東西	C	4×2	6.3	3.6		西から 1.5-1.8-1.5-1.5	1.8 等間	SB 33 ～ 35 より新しく、SA 25・SD 21 と重複
SB 33	東西	A	4×2	7.8	3.6		1.95 等間	1.8 等間	SB 32 より古く、SB 34・35 と重複
SB 34	南北か	C	3×3	5.4	5.4		1.8 等間	1.8 等間	SA 27 と重複
SB 35	南北	C	3×3	5.4	4.8		1.8 等間	西から 1.5-1.8-1.5	SB 34 と南・北側柱列の柱筋を揃える
SB 36	東西	C	3 × 2	5.4	3.6		1.8 等間	1.8 等間	SB 34・SD 24 より新しく、SA 27 と重複

HJ第 750 次調査 奈良時代 遺構一覧表3

◆掘立柱建物（SB）②

遺構番号	棟方向		規模（間）	桁行全長（m）	梁行全長（m）	廂の出（m）	身舎柱間寸法（m）		備　考
	基本	振れ	桁行×梁行（廂）				桁行	梁行	
SB 37	南北	A	3 以上× 2	4.5 以上	3.6		1.5 等間	1.8 等間	SB 36 より古い、発掘区外南に続く
SB 38	南北	A	4 × 2（南 1）	4.5	3.6	2.1	1.5 等間	1.8 等間	SK 08 より新しく、SA 30 と重複
SB 39	南北	A	4 × 2	6.3	3.3		北から 1.5-1.5-1.5-1.8	1.65 等間	SB 38・SD 02 より新しい
SB 40	東西	A	1 以上× 1 以上	東西 1.95 以上	南北 1.5 以上		東西 1.95	南北 1.5	発掘区外北・西に続く
SB 41	東西	A	2 以上× 2	2.4 以上	3.6		2.4	1.8 等間	総柱建物 SB 43 と重複、発掘区外東に続く
SB 42	東西	A	3 以上× 2	4.8 以上	3.3		西から 1.8-1.5-1.5	1.65 等間	SA 23 と重複、発掘区外東に続く
SB 43	東西	C	3 × 2	7.2	2.1		2.4 等間	2.1 等間	SA10より新しく、SA 05・06 及びSB 41・44 と重複、西から1間目に間仕切り
SB 44	東西か	A	1 以上× 1 以上	2.1 以上	2.1 以上		2.1	2.1	発掘区外北・東に続く 南西隅から北に1間目の柱穴は他より小さく、妻柱の可能性

◆溝（SD）①

遺構番号	平面形等（振れ）	平面規模（m）	検出面からの深さ（m）	時期	主な出土遺物	備　考
SD 02	南北方向（A）	幅：0.5 ～ 2.5、長さ：26 以上	0.3	8 世紀後半	土師器：杯（A・B）・椀（C）・壺（B）・甕、須恵器：杯（B）・杯蓋・鉢・甕	発掘外南北に続く SA 30・SB 39 より古い
SD 03	南北方向（A）	幅：1.0 ～ 3.0、長さ：37 以上	0.2	8 世紀後半	土師器：杯・杯蓋・皿（A・C）・椀（A・C）・高杯・盤（B）・甕・竈、須恵器：杯（A・B）・杯蓋・甕・鳥形硯、製塩土器、平瓦	南はSX 01 と接続、発掘区外北に続く可能性 SA 15・22、SB 26 より古い
SD 04	東西方向（A）	幅：0.2、長さ：3 以上	0.1	8 世紀	土師器：器種不明細片、須恵器：甕	発掘外西に続く SA 30・SB 39 より古い
SD 05	東西方向（A）	幅：0.2、長さ：6.0	0.1	8 世紀	土師器：器種不明細片	SB 01・SE 01 より古い
SD 06	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：3.3	0.1	8 世紀	土師器：器種不明細片、須恵器：甕	
SD 07	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：6.6	0.2	8 世紀	土師器：器種不明細片	SD 03 と接続
SD 08	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：8.7	0.2	8 世紀	土師器：器種不明細片	SD 03 と接続
SD 09	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：9.5	0.2	8 世紀	須恵器：杯（A・B）・杯蓋	SD 03 と接続
SD 10	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：5 以上	0.1	8 世紀	須恵器：杯蓋・甕	発掘区外東西に続く
SD 11	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：3.0	0.1	8 世紀	須恵器：杯（A）	
SD 12	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：6.0	0.1	8 世紀	土師器：甕、須恵器：杯（A・B）・甕	SD 20 より古い
SD 13	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：4.0	0.1	8 世紀	なし	SB 11 より古い
SD 14	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：14 程度	0.1	8 世紀	土師器：杯（A・B）・壺（B） 須恵器：杯（A・B）・壺蓋・甕	SB 11・SD 20 より古い 西端は鎌倉以降の改変で消失か
SD 15	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：14 程度	0.1	8 世紀	土師器：器種不明細片	西端は鎌倉以降の改変で消失
SD 16	東西方向（A）	幅：0.3、長さ：9.4	0.1	8 世紀	土師器：器種不明細片	SB 11 より古い
SD 17	東西方向（A）	幅：0.3 ～ 0.5、長さ：4.0	0.1	8 世紀後半か	土師器：甕、須恵器：杯（A）・杯蓋・甕	SB 27 の北妻側柱列の北側に沿い、SD 03 と接続
SD 18	南北方向（A）	幅：0.5、長さ：6.5 程度	0.2	8 世紀後半か	須恵器：杯（B）・甕	SB 27 の東面側柱列の東側に沿う SD 21 より古い
SD 19	L 字形（東西－南北、A）	幅：0.3 ～ 0.5、長さ：東西 3.5・南北 4.0	0.1	8 世紀後半か	須恵器：杯（A）・杯蓋・甕	SD 03 と接続する東西溝の東端で北に屈曲 SD 25 より古い
SD 20	南北方向（A）	幅：0.7、長さ：12 以上	0.2	8 世紀後半	土師器：皿（C）・高杯・壺（B）・甕 須恵器：杯（A・B）・杯蓋・壺（L）・壺蓋・甕、平瓦	南端でSD 21 と接続し、発掘区外北に続く
SD 21	東西方向（A・C）	幅：0.7（一部 2.4）、長さ：45 以上	0.2	8 世紀後半	土師器：杯（A）・皿（C）・甕 須恵器：杯（A・B）・杯蓋・高杯・鉢（D）・甕・鳥形硯、丸・平瓦	発掘区外東に続き、西端は鎌倉以降の改変で消失 SD 20 との接続部以東では東に対しやや南に振れる SD 03・18 より新しく、SE 03・SK 03 より古い

HJ第 750 次調査　奈良時代　遺構一覧表4

◆溝（SD）②

遺構番号	平面形等（振れ）	平面規模（m）	検出面からの深さ（m）	時期	主な出土遺物	備　考
SD 22	東西方向（A）	幅：1.0 ～ 1.5、長さ：13 以上	0.2	8 世紀後半	（※SX 02 と一連で取り上げ）	南に接するSX 02 と埋土は一連 西端は鎌倉以降の改変で消失 SB 21 より新しく、SB 13 とSK 01・02 より古い
SD 23	東西方向（C）	幅：1.2、長さ：4.5 以上	0.1	8 世紀後半か	土師器：杯・甕 須恵器：甕、丸瓦	発掘区外東に続く
SD 24	東西方向（C）	幅：0.4、長さ 14 以上	0.1	8 世紀後半か	土師器：皿（A）・甕 須恵器：杯（B）・杯蓋・甕、平瓦	発掘区外東に続く SB 36・SK 07 より古い
SD 25	東西方向（C）	幅：0.7、長さ 8.5 以上	0.2	8 世紀後半か	土師器：杯（B）・甕、須恵器：杯（B）・杯蓋・鉢（E）・甕、平瓦	発掘区外東に続く SB 29・SD 19 より新しい

◆井戸（SE）

遺構番号	掘方等			井戸枠			時期	主な出土遺物
	平面形態	平面規模（m）	深さ（m）	構造	内法（m）	水溜・濾過施設等		
SE 01	不整方形	東西 3.2 ×南北 2.5	1.8	方形縦板組隅柱横桟留	一辺 0.9	―	8 世紀後半	〈掘方〉 土師器：杯（A）・皿（C）・椀（A）・高杯・甕・竈、須恵器：杯（B）・杯蓋・皿（C）・鉢（D）・壺（M）・壺蓋・平瓶・甕、製塩土器、丸・平瓦 〈枠跡内〉 土師器：皿（A・C）・高杯・甕、須恵器：杯（A・B・F）・杯蓋・高杯、製塩土器、平瓦 〈枠内〉 土師器：杯（C）・甕、須恵器：杯（A・B・F）・杯蓋・壺（L）・平瓶・浄瓶・ミニチュア（横瓶）・甕、製塩土器、平瓦
SE 02	隅丸方形	一辺 2.8	2.0	方形縦板組隅柱横桟留	一辺 1.2	―	8 世紀後半～末	〈掘方〉土師器：皿（C）・高杯・甕、須恵器：杯（B）・杯蓋・ミニチュア（平瓶）・甕 〈枠跡内〉 土師器：甕、須恵器：壺（G・M）・甕、塼 〈枠内〉 土師器：杯（A・B）・皿（A・C）・椀（A・C）・壺（B）・甕・竈、須恵器：杯（A・F）・杯蓋・皿（C）・壺（M）・甕、土馬、丸・平瓦
SE 03	隅丸方形	東西 1.8 ×南北 1.5	2.6	方形縦板組横桟留	一辺 0.6	―	8 世紀後半	〈掘方〉 土師器：杯・椀（C）・高杯・壺（B）・甕・竈、須恵器：杯（A・B）・杯蓋・壺・甕・円面硯、土馬、丸瓦 〈枠抜取穴内〉 土師器：皿（C）・椀（C）・甕・竈、須恵器：杯（B）・杯蓋・甕、 〈枠内〉 土師器：杯（A）・皿（A・C）・椀（A）・高杯・壺（B）・甕、須恵器：杯（A・B）・杯蓋・皿（B・C）・壺（B・Lか）・壺蓋・甕、製塩土器、土馬、軒瓦（丸）、丸・平瓦
SE 04	不整方形	東西 3.2 ×南北 2.5	3.4	方形縦板組横桟留	一辺 0.8	―	8 世紀後半～末	〈掘方〉 土師器：皿（C）・甕、須恵器：杯（B）・杯蓋・壺（Lか・M）・甕、平瓦、塼 〈枠内〉 土師器：杯（A・B・E）・杯蓋・皿（A・C）・椀（A・C）・壺（B・E）・甕、須恵器：杯（A・B・E）・杯蓋・皿（C）・鉢（A）・壺（A・L）・甕、三彩片、製塩土器、丸・平瓦、塼、銭貨（萬年通寶）、熊手、帯金具
SE 05	隅丸方形	一辺 2.4	2.7	方形縦板組隅柱横桟留の可能性	一辺 1.1 程度	礫敷	8 世紀後半	土師器：杯（A・B）・杯蓋・皿（A・C）・壺（A・B）・甕・竈、須恵器：杯（A・B）・杯蓋・皿（B・C）・壺・壺蓋・甕、製塩土器、丸・平瓦
SE 06	隅丸方形	一辺 2.4	2.7	方形横板組	一辺 1.05	―	8 世紀後半～末	〈掘方〉 土師器：杯（E）・甕、須恵器：杯（B）・杯蓋・甕、製塩土器、平瓦 〈枠内〉 土師器：杯（A）・皿（A・C）・椀（A・C）・高杯・壺（E）・甕、須恵器：杯（A・B）・杯蓋・壺（Lか）・平瓶・横瓶・ミニチュア（壺A・平瓶）・甕、製塩土器、軒丸瓦(6225 種別不明)・軒平瓦(6663F・6714A)、平瓦

◆土坑・その他（SK・SX）①

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備　考
SK 01	不整円形	径 2.2 前後	0.4	8 世紀後半～末	土師器：杯（A・B）・皿（A・B）・椀（A）・高杯・盤・甕・竈、須恵器：杯（A・B）・杯蓋・皿（A・B・C）・甕、製塩土器、軒丸瓦(6075A)、丸・平瓦	埋土中に多量の炭粒・焼土塊を含む
SK 02	楕円形	長径 1.2 ×短径 0.6	0.2	8 世紀後半～末	土師器：高杯・甕、須恵器：杯（A・B）・杯蓋・壺・甕、平瓦	埋土中に多量の炭粒・焼土塊を含む
SK 03	不整円形	径 1.1	0.2	8 世紀後半～末	土師器：皿（Aか）・甕、須恵器：杯（A）・杯蓋・皿（A）・壺・甕、製塩土器、平瓦	埋土中に多量の炭粒・焼土塊を含む
SK 04	不整円形	長径 3.0 ×短径 1.0	0.4	8 世紀	土師器：高杯、須恵器：甕	
SK 05	隅丸方形	東西・南北とも 3.0 以上	0.5	8 世紀か	なし	SB 25・SE 06 より古い、井戸の掘方の可能性

HJ第 750 次調査　奈良時代　遺構一覧表5

◆土坑・その他（SK・SX）②

遺構番号	平面形等	平面規模（m）	深さ（m）	時期	主な出土遺物	備　考
SK 06	隅丸方形	東西 1.4 以上×南北 3.0 以上	0.7 以上	8 世紀	土師器：皿（C）・甕、須恵器：壺・甕、平瓦	SE 06 より古い、井戸の掘方の可能性
SK 07	不整円形	長径 2.5 ×短径 1.9	0.2	8 世紀	土師器:皿（A)・椀（C)・甕、須恵器:杯（A・B)・杯蓋	SB 28 より新しい
SK 08	不整方形	東西 1.2 ×南北 1.7	0.3	8 世紀	土師器：甕、須恵器：杯（A・B）・甕	SB 38 より古い
SK 09	不整方形	東西 1.7 ×南北 2.4	0.1	8 世紀か	なし	SD 21 より古い
SK 10	不整方形	東西 1.8 以上×南北 2.0 以上	0.2	8 世紀か	土師器：器種不明細片	
SX 01	隅丸方形	東西 2.8 以上×南北 3.0	0.3	8 世紀後半	土師器：杯（A）・皿（A）・椀（A）・高杯・甕、須恵器：杯（A・B）・杯蓋・壺（K）・甕・円面硯、製塩土器、丸・平瓦	北西隅で SD03 と接続、小規模な池の可能性
SX 02	不整形	東西 14 以上×南北 2.0 前後	0.2 前後	8 世紀後半	土師器：杯（A・B）・皿（A・C）・椀（A・C）・高杯・甕・竈、須恵器：杯（A・B）・杯蓋・皿（B）・高杯・壺（K）・平瓶・甕、丸・平瓦	SD 02 の南縁に沿って広がる窪みで、南辺では溝状の侵食が進む
SX 03	不整方形	東西 7.5 ×南北 4.5	0.1 ～ 0.2	8 世紀後半	土師器：杯（A・B）・杯蓋・皿（A・B・C）・椀（A･C）･高杯･甕･竈、須恵器:杯（A･B）･杯蓋・鉢（A）・壺（K）・甕、丸・平瓦	一辺 1.5 ～ 2 mの方形の土坑が 6 基以上重複して掘削か

HJ第 750 次調査　A類の区画溝・塀と建物・柱列、井戸（1/800、方眼は 30 m四方）

前者は桁行４間の南北棟ＳＢ 27 とも柱筋が揃う。

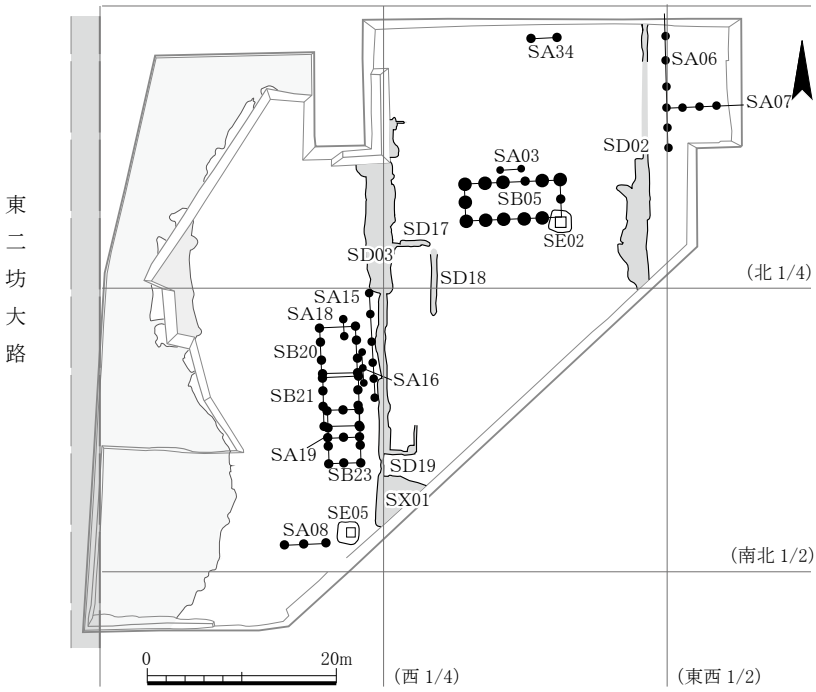
なお、ＳＢ 29 とＳＢ 30、ＳＢ 33 とＳＢ 37 は位置が重複するため、同時併存しない。

柱列のうち、ＳＢ 01 の西側に沿うＳＡ 01、ＳＢ 04 の北側に沿うＳＡ 04、ＳＢ 39 の南側に沿うＳＡ 30、ＳＢ 38 の南側に沿うＳＡ 31 は建物の目隠し塀の可能性がある。ＳＡ 04 はＳＢ 01 の北側柱列と、ＳＡ 29 はＳＢ 28 の南側柱列と、ＳＡ 31 はＳＢ 31 の南側柱列とそれぞれ柱筋を揃える。ＳＡ 30・ＳＢ 39 は区画割の溝ＳＤ 02 より新しく、ＳＡ 21･23 は同ＳＤ 03 より新しい。

◆西群：建物－ＳＢ 10・11・14 ～ 16・18・22・25
　　柱列－ＳＡ 14・17・20

建物は東西棟が５棟（ＳＢ 10・14 ～ 16・18)、南北棟が３棟（ＳＢ 11・22・25）で、三坪南辺の推定位置の 90 m北にある坪内の北 1/4 分割線付近をはさんで北（ＳＢ 10・11）と南（ＳＢ 14 ～ 16・18・22・25）の２つの小群に識別できる。

東西棟のうち、ＳＢ 10・14 は桁行４間以上の南廂付きの大型の建物である。ＳＢ 15・18 は桁行３間の小型の建物。ＳＢ 16 は柱間寸法から大型の建物とみる。南



HJ第 750 次調査　A類の区画溝・塀とB類の建物・柱列、井戸（1/800、方眼は 30 m四方）

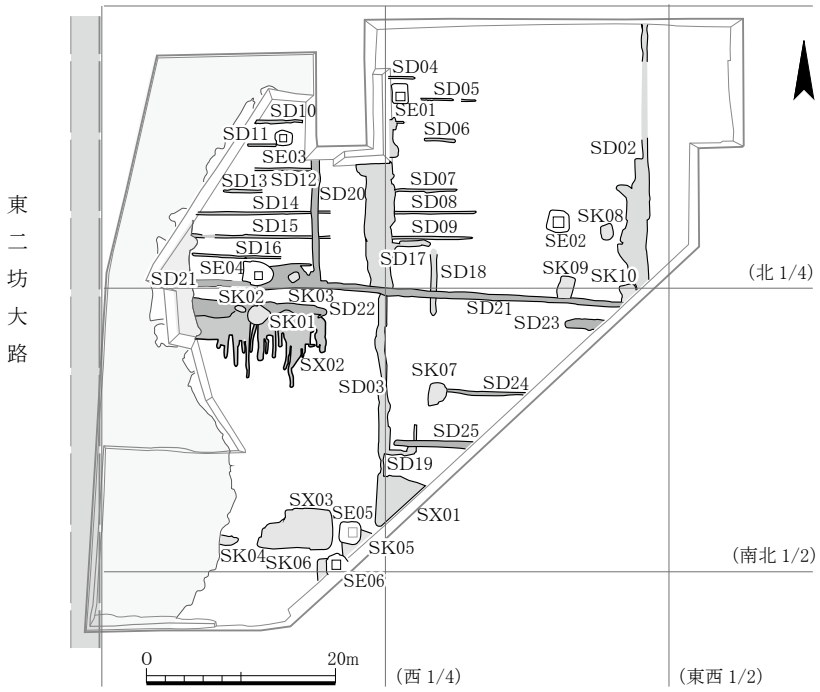
HJ第 750 次調査　C類の区画溝・塀と建物・柱列、井戸（1/800、方眼は 30 m四方）

北棟のうち、ＳＢ 11 と西廂付きのＳＢ 25 は桁行５間の大型の建物である。ＳＢ 11 は埋甕を伴う。ＳＢ 22 は東西・南北とも２間であるが、柱間寸法の小さい南・北の柱列を妻側とみる。柱穴の大きさは西隣の大型建物ＳＢ 14 と同程度である。

ＳＢ 14 はＳＢ 18 と西側柱列、ＳＢ 22 と北側柱列の柱筋を揃える。また、ＳＢ 16 の北側柱列はＳＢ 20 の南側柱列と柱筋を揃える。ＳＢ 18 の北側柱列の位置は三坪南辺の推定位置の 60 m北で、坪内の南北 1/2 分割線付近にあたる。ＳＢ 14 はＳＢ 15 より新しい。ＳＢ 16 はＳＢ 14・15 と位置が重複し、ＳＢ 25 と近接するので、これらの建物と同時併存しない。

柱列はすべて南北方向で、ＳＡ 17 はＳＢ 22 の東側柱列、ＳＡ 20 はＳＢ 25 の東側柱列と柱筋が揃う。ＳＡ 14 はすぐ東に井戸ＳＥ 05 があることから、その目隠し塀の可能性がある。

Ｂ類　建物は４棟で、内訳は東西棟１棟（ＳＢ 05）・南北棟３棟（ＳＢ 20・21・23）である。発掘区の北東



HJ第 750 次調査　A・C類の区画溝と井戸・土坑ほか（1/800、方眼は 30 m四方）

部にあるＳＢ 05 は桁行５間の大型の東西棟で、Ａ群のＳＢ 03・04 とは位置が重複・近接するため、同時併存の可能性はない。同南西部にはＢ類の区画割の塀ＳＡ 15 のすぐ西側で桁行３間の南北棟ＳＢ 20・21・23 が東側柱列の柱筋を揃えて南北に重複して建つ。ＳＢ 21 はＡ類のＳＢ 22 と位置が重複し、先後関係からＳＢ 20・23 より古い。ＳＢ 23 の南側柱列はＡ類のＳＢ 16 の南側柱列と柱筋がほぼ揃う。

柱列は５条あり、柱間１・２間の小規模なものが建物と同様に発掘区の北東部（ＳＡ 03・34）と南西部（ＳＡ 16・18・19）でみられる。ＳＢ 05 の北側柱列中央部のすぐ北にあるＳＡ 03 はその目隠し塀の可能性がある。

Ｃ類　建物は 16 棟で、内訳は東西棟 11 棟（ＳＢ 02・06 ～ 09・13・17・19・32・36・43)、南北棟及びその可能性があるものが５棟（ＳＢ 12・24・26・34・35）で、発掘区の北西部を除く範囲でみられる。

規模がわかるものは桁行３間が大半を占め、南北棟は南半部に限られる。ＳＢ 24・26 はすべての側柱列が３間で、柱間が短い南・北側柱列が妻側と考える。ＳＢ 19・32 は桁行４間で、ＳＢ 17・43 も同４間かそれ以上の可能性がある。

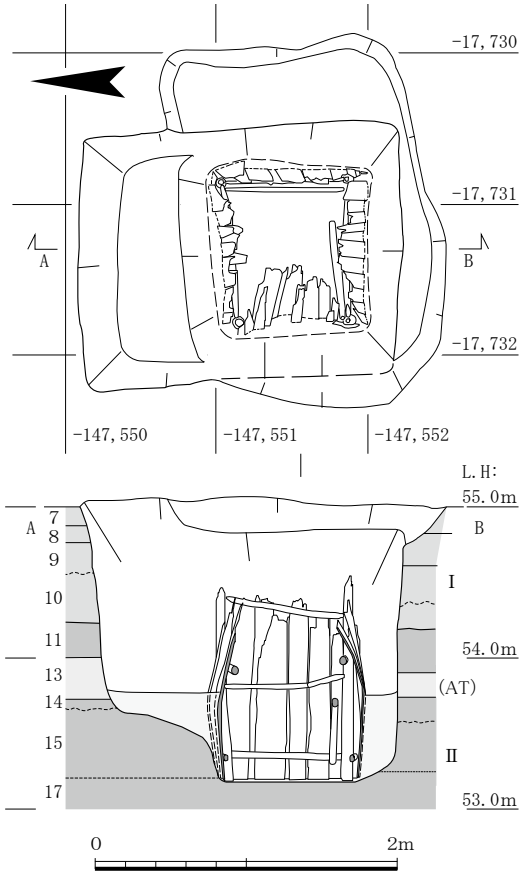
発掘区の北東部では、ほぼ同規模の２棟の東西棟ＳＢ 06・07 及びＳＢ 08・09 が柱筋を揃えて東西に並ぶ。先後及び位置関係から後２者は前２者の建替えとみる。同南東部では、ほぼ同規模の２棟の南北棟ＳＢ 34・35 が柱筋を揃えて東西に並ぶ。ＳＢ 32 は先後関係からＳＢ 34・35 より新しく、ＳＢ 36 はＳＢ 34 より新しい。

西寄りでは、区画割の溝ＳＤ 21 の南に沿う東西棟ＳＢ 13 の東隣に桁行３間の南北棟ＳＢ 26 が建ち、その約 15 m南でも東西棟ＳＢ 17 の東隣に桁行３間の南北棟ＳＢ 17 が建つ。ＳＢ 12・13 の北側柱列はＣ類の区画割の溝ＳＤ 21 の南に沿うＳＤ 22 の溝心上、ＳＢ 34・35 の北側柱列は同様の溝ＳＤ 23 の溝心の西延長上に位置する。ＳＢ 36 の南側柱列はＣ類の区画割の溝ＳＤ 24 上に位置する。いずれの柱列も先後関係から溝より新しい。

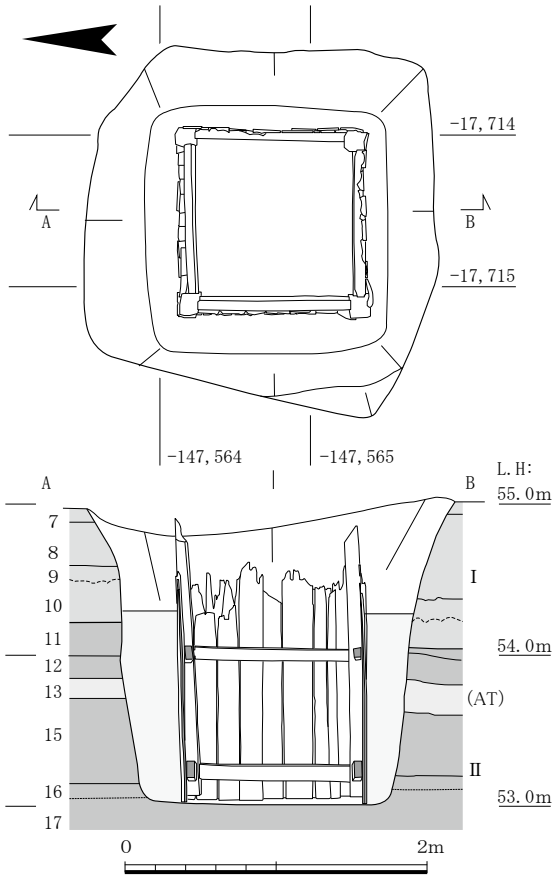
Ａ・Ｂ類の建物との先後関係は、ＳＢ 19 がＡ類のＳＢ 18 より、ＳＢ 34 がＡ類のＳＢ 33 より、ＳＢ 36 がＡ類のＳＢ 37 よりそれぞれ新しい。重複関係は発掘区の南寄りで多く認められるが、北寄りではＳＢ 02 がＡ類のＳＢ 01 と重複するのみである。

柱列は 10 条あり、その内訳は東西方向８条（ＳＡ 04・11・12・22・24 ～ 26・37)、南北方向２条（ＳＡ 02・05）である。建物と同様に発掘区の北西部を除く範囲でみられ、規模がわかるものは柱間３間が最も多い。

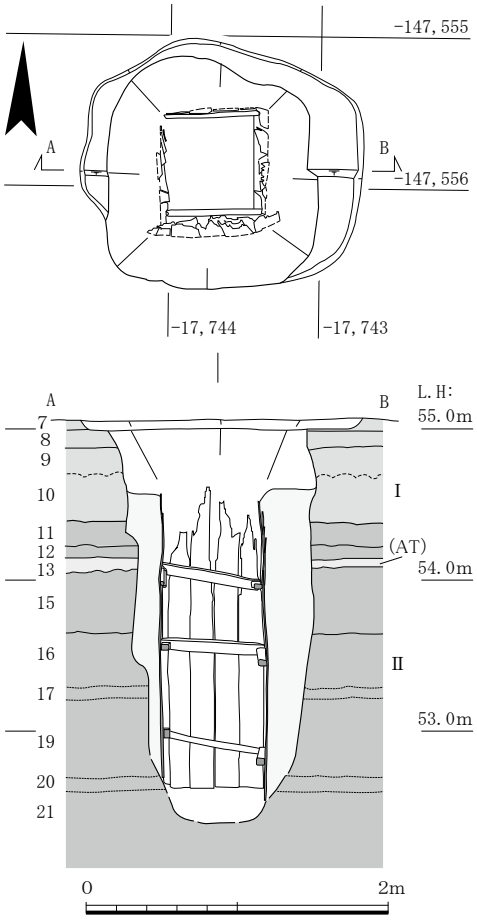
東西方向のＳＡ 11・22・25・37 はＣ類の区画割の溝ＳＤ 21 に沿う。ＳＡ 04 はＳＢ 06･07 の南側柱列と、ＳＡ 11 はＳＢ 26 の北側柱列と柱筋が揃う。ＳＡ 11 は 1.5 m南にある東西棟ＳＢ 13 の妻側柱列と両端がほぼ揃うことから、目隠し塀か縁側の柱列の可能性がある。



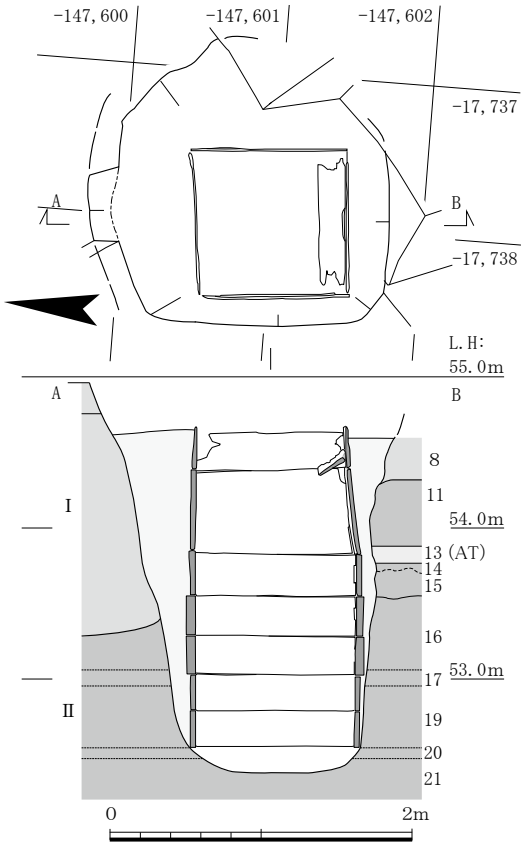
HJ第 750 次調査　SE 01　平面・立面図（1/50）



HJ第 750 次調査　SE 02　平面・立面図（1/50）

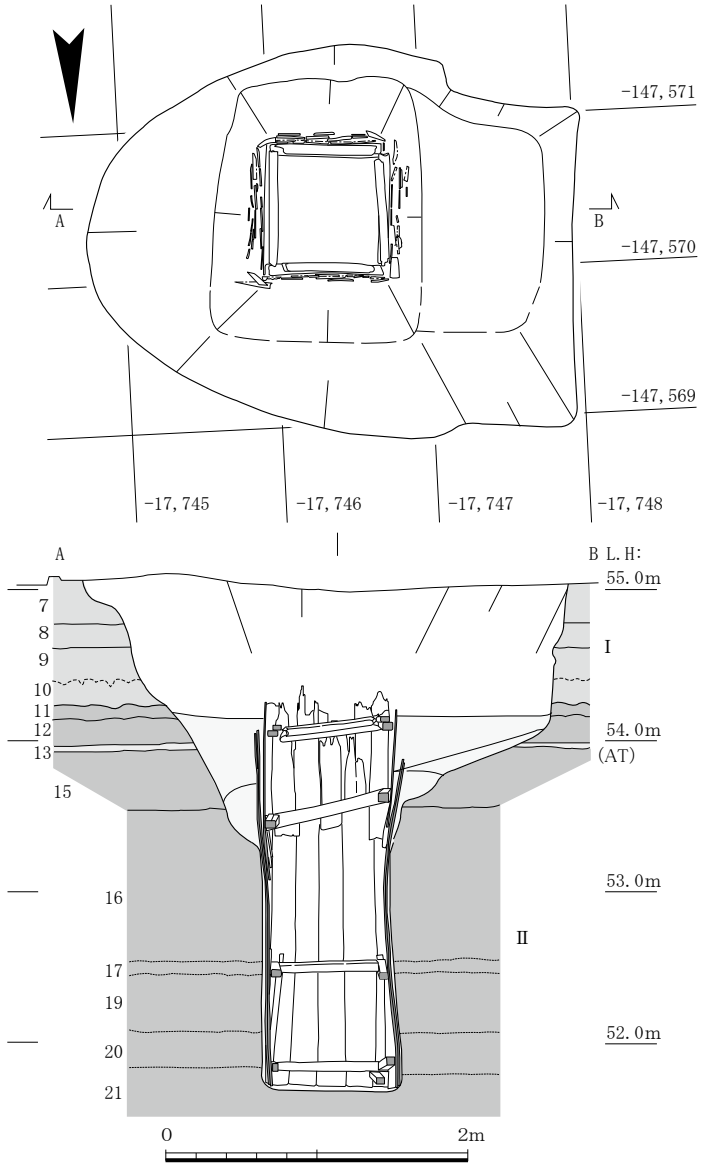


HJ第 750 次調査　SE 03　平面・立面図（1/50）



HJ第 750 次調査　SE 06　平面・立面図（1/50）

※いずれも層番号は柱状図と対応



HJ第750次調査　SE 04　平面・立面図（1/50、層番号：柱状図と対応）

b．井戸

ＳＥ01～06の６基があり、ＳＥ05を除く５基で井戸枠が残っていた。掘方の掘削床はＳＥ01・02が概ね標高53.0ｍ、ＳＥ03・05・06が概ね標高52.5ｍ、ＳＥ04が標高51.8ｍで、いずれも基盤層の砂層内である。

ＳＥ01・02　ともに井戸枠は方形縦板組隅柱横桟留で、隅柱・横桟はＳＥ01が丸太材でＳＥ02が角材。ＳＥ01の井戸枠内からは８世紀後半の土器が出土している。ＳＥ02は先後関係からＢ類の建物ＳＢ05より新しく、井戸枠内から８世紀末の土器が出土した。

ＳＥ03・04　ともに井戸枠は方形縦板組横桟留。ＳＥ03の中心はＡ類の建物ＳＢ11の棟筋の北延長上に位置する。井戸枠は本来上下２段組とみられ、残存する井戸枠上に抜取穴がある。井戸枠の抜取穴内から８世紀末の土器が出土した。ＳＥ04の井戸枠は上下２段組で、下段の内側に上段の縦板を横桟で押さえて支持する。先後関係からＣ類の区画割の溝ＳＤ21より新しく、井戸枠内から８世紀末の土器・銭貨等が出土した。

ＳＥ05　井戸枠は残存しなかったが、掘方埋土に板材や角材の細片を含み、掘方底面中央部に方形の礫敷きが残ることから、方形縦板組横桟留と想定できる。中心の位置はＡ類の建物ＳＢ22及びＢ類の建物ＳＢ23の棟筋のほぼ南延長上にあたる。先後関係からＡ類の建物ＳＢ25と後述の土坑ＳＫ05より新しく、掘方埋土から８世紀後半の土器片が出土した。

ＳＥ06　井戸枠は方形横板組で７段分が残り、上から２段目は転用材（机か）である。四隅の仕口は枘組で上下は太枘を介する。中心の位置はＣ類の建物ＳＢ24の棟筋のほぼ南延長上で、先後関係から後述の土坑ＳＫ06より新しい。井戸枠内から８世紀末の土器が出土した。

c．排水溝

ＳＤ17・18　ともにＡ類の建物ＳＢ27に伴うとみられる溝。ＳＤ17はＡ類の区画割の溝ＳＤ03から東に分岐してＳＢ27の北側に沿う。ＳＤ27は同東側に沿い、先後関係からＣ類の区画割の溝ＳＤ21より古い。本来は一連の溝で、建物の排水溝あるいは雨落ち溝の可能性がある。

ＳＤ19　Ａ類の区画割の溝ＳＤ03から東に分岐する平面Ｌ字状の溝。Ａ類の建物ＳＢ29とは位置が重複するため同時併存せず、先後関係からＣ類の区画割の溝ＳＤ25より古い。宅地や建物の排水と関わる可能性がある。

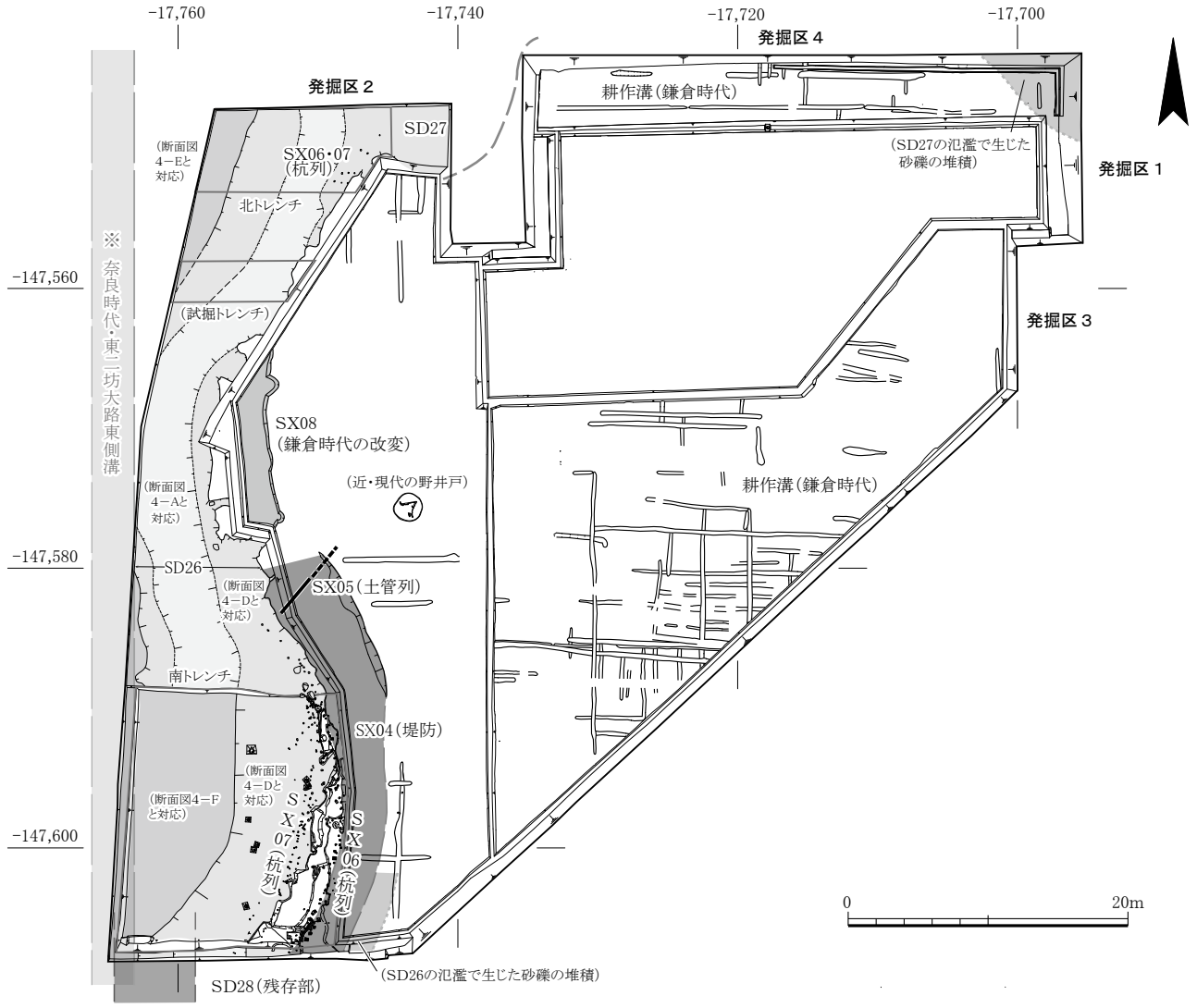
(3)　その他

a．溝群

ＳＤ04～16　発掘区北西部で検出したＡ類の東西方向の溝群で、約３ｍ間隔で掘削されている。Ａ類の区画割の溝ＳＤ03の東側でＳＤ04～09、その西側でＳＤ10～16を検出したが、位置関係から一連のものとみる。先後関係から前者はＳＤ03より古く、後者はＡ類の建物ＳＢ11やＣ類の区画割の溝ＳＤ20より古い。宅地利用前の遺構と考えられ、耕地の畝間の溝あるいは宅地開発時の排水に伴う溝の可能性がある。

b．土坑

ＳＫ01～03　ＳＫ01・02は先後関係からＣ類の建物ＳＢ13より新しく、ＳＫ03はＣ類の区画割の溝ＳＤ21より新しい。いずれも埋土に炭粒を含み、８世紀後半～末の土器が出土した。



HJ第 750 次調査　遺構平面図②―鎌倉時代以降―（1/500）

ＳＫ 04 ～ 06　ＳＫ 04 は東部分が残る。ＳＫ 05・06 は先後関係からそれぞれ井戸ＳＥ 05・06 よりも古く、形状から前身の井戸の掘方の可能性もある。

ＳＫ 07　先後関係からＡ類の建物ＳＢ 28 より新しく、Ｃ類の区画割の溝ＳＤ 24 より古い。

ＳＫ 08 ～ 10　先後関係からＳＫ 08 はＡ類の建物ＳＢ 38 より古く、ＳＫ 09 はＡ類の東西方向の柱列ＳＡ 31 より古く、ＳＫ 10 はＣ類の区画割の溝ＳＤ 21 より古い。

c. 池状遺構ほか

ＳＸ 01　Ａ類の区画割の溝ＳＤ 03 の南端に接続する池状の遺構で、ＳＤ 03 と西肩の位置が揃う。埋土は灰色のシルトで、８世紀後半の土器が出土した。

ＳＸ 02　Ｃ類の区画割の溝ＳＤ 22 の南側に広がる窪みで、南肩沿いに複数の溝状の侵食がみられる。埋土はＳＤ 22 と一連で、８世紀後半の土器が出土した。

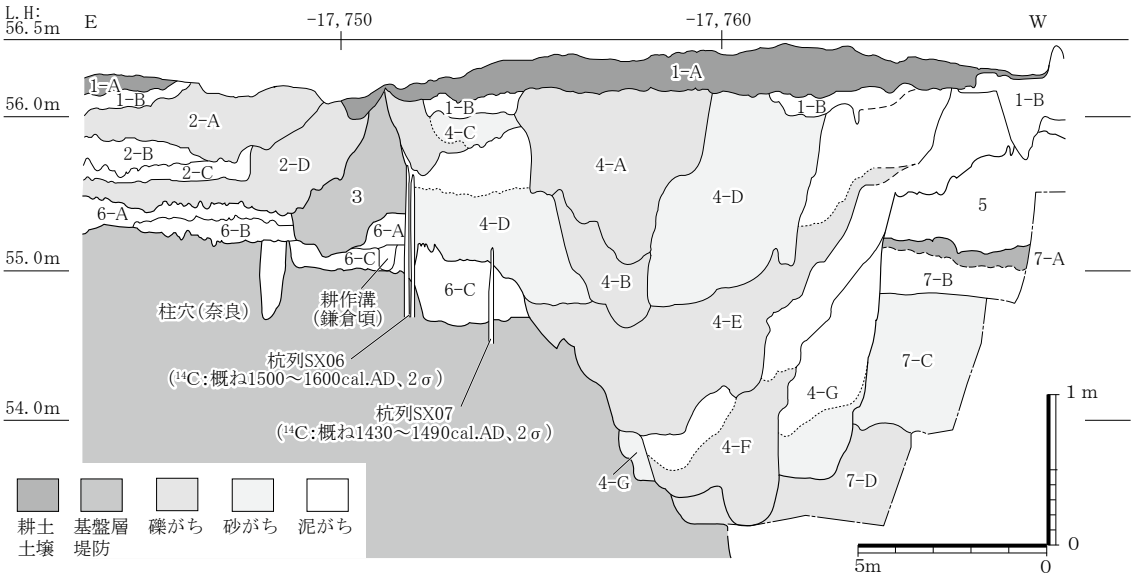
ＳＸ 03　一辺 1.5 ～ 2 mの方形の土坑が６基以上重複したもので、先後関係からＡ類の建物ＳＢ 25・柱列ＳＡ 14、Ｂ類の柱列ＳＡ 08、Ｃ類の建物ＳＢ 24・柱列ＳＡ 12 より古い。埋土から８世紀後半の土器が出土した。

３．鎌倉時代以降の遺構

鎌倉～室町時代の埋没河川３条（ＳＤ 26 ～ 28）とＳＤ 26 に伴う堤防１条（ＳＸ 04）・土管列１条（ＳＸ 05）・杭列２条（ＳＸ 06・07）、耕作溝がある。

ＳＤ 26　地割が旧河道を反映する現水田の床土直下の面で検出した埋没河川で、やや蛇行しながら南流し、北端では東岸側に後述する埋没河川ＳＤ 27 が合流する。発掘区の南・北辺にトレンチ（南・北トレンチ）を設定して掘り下げた。

河道は幅 18 m程度、深さ 2.8 mで、基盤層・後述する埋没河川ＳＤ 28 の埋土及びその上に堆積する沼沢地の様相を示すシルト・粘土層を掘り下げて形成しており、東岸沿いに後述する堤防ＳＸ 04 が構築されている。



1：水田耕土・床土
　A（耕土）黒灰色砂質シルト　　B（床土）灰色礫混り粘土
2：埋没河川SD26の氾濫堆積層
　A・D 灰色砂礫　B・C 灰色砂質シルト
3：堤防SX04
　灰色粘土ブロック・灰色砂礫（ともに厚さ0.2m前後）の互層
4：埋没河川SD26の河道内堆積層
　※ユニット（ある特定の性格で関連付けられる複数の層の一群）単位
　A（流路埋土）灰色砂礫　B（流路埋土）灰色砂礫
　C（流路埋土）上位－灰色シルト質砂・下位－灰色砂礫
　D（流路埋土）上位－青灰色粘土・下位－灰色砂・礫互層（砂がち）
　E（流路埋土）上位－青灰色粘土・下位－灰色砂礫（礫がち）
　F（流路埋土）上位－青灰色腐植混りシルト・下位－灰色砂礫（礫がち）
　G（当初の堆積層）上位－青灰色腐植混りシルト・下位－灰色砂
5：沼沢地の堆積層（遊水地か）
　青灰色砂質シルト
6：埋没河川SD28の氾濫堆積層
　A 青灰色砂質シルト　B 褐灰色砂質シルト　C 暗灰色砂質粘土
7：埋没河川SD28の河道内堆積層
　A（土壌化）暗灰色砂質シルト　B 青灰色砂質シルト
　C 青灰色シルト質砂　D 灰色砂礫（礫がち）

HJ第 750 次調査　埋没河川SD 26・28、堤防SX 04 土層断面図（横：1/200、縦：1/50）

（※杭材の ^{14}C年代測定値は、奈良文化財研究所　村田泰輔氏の提供資料による）

河道内では埋没が進む度に流路を繰り返し掘り直しており、発掘区南壁における埋土の断面観察ではＡ～Ｇの７つのユニットが識別できた（断面図参照）。河道内の当初の埋土であるＧと及び埋没後に掘り直された流路内の埋土Ｄ～Ｆは（下位）砂・砂礫→（上位）砂質シルトと埋没が進むにつれ細粒化する。埋土Ｄ～Ｆに伴う流路はほぼ河道幅で掘削されている。同Ａ～Ｃは砂礫主体で、後述する堤防ＳＸ 04 東側の堆積層の様相から、Ｂ・Ｃは一連のユニットとみなせる。伴う流路はＤ～Ｆと異なり河道の中央付近に掘削されている。

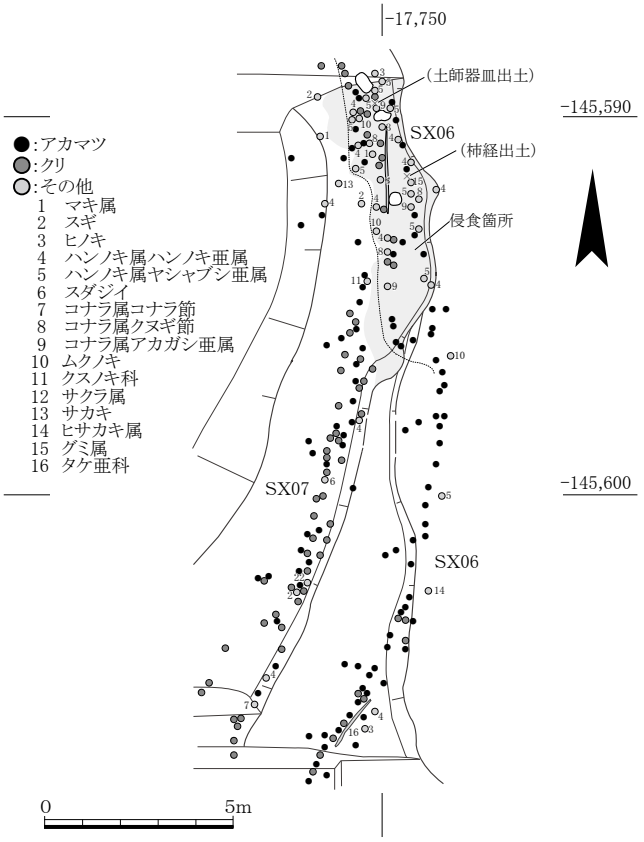
南トレンチでは、流路内の埋土Ａ～Ｄの掘り下げ時に 16 世紀～ 17 世紀初頭の土師器・瓦質土器片、堤防ＳＸ 04 沿いの同Ｄに伴う流路底から 16 世紀の土師器・瓦質土器・国産陶器片、柿経、漆器椀、北宋銭（聖栄元宝）、同Ｇの砂質シルト層から笹塔婆が出土した。北トレンチでは同Ａ～Ｄの掘り下げ時に 16 世紀～ 17 世紀初頭の土師器・瓦質土器・国産陶磁器片、土管片と石造物３点（箱仏２・五輪塔水輪１）が出土した。

ＳＤ 27　ＳＤ 26 の北端において東岸側に合流する埋没河川で、河道内の埋土は SD26 と一連である。流向が東西方向とみられ、発掘区北東隅の土層断面では氾濫で形成された可能性がある砂礫層が観察できた。

ＳＤ 28　発掘区南西隅においてＳＤ 26 の直下で検出した南北方向の埋没河川。東部分はＳＤ 26 の河道の掘削で破壊されている。河道の幅は 10m 程度、中心はＹ＝－ 17,761 付近で、東二坊大路東側溝と西肩の位置が揃う可能性がある。河道内の埋土の層位から鎌倉時代の旧耕土層上面から掘削されたと推察する。

河道内の埋土は上位が青灰色砂質シルト～シルト質砂、下位が河床礫とみられる灰色砂礫で、埋没が進むにつれ細粒化し、最上層上面付近は土壌化がみられる。時期不明の土器片が数点出土した。なお、南壁断面で後述する鎌倉時代の切土改変部ＳＸ 08 上を覆う青灰色粘土層（断面図６層）は層位的に上層と対応し、層相も似ていることからその氾濫堆積層とみる。

ＳＸ 04　ＳＤ 26 の東岸に沿う南北方向の堤防で、ＳＤ 28 の氾濫堆積層の形成後に築かれている。発掘区南壁断面において、堤体は幅約３m、高さ約１mで、地山のシルト・粘土ブロックを積み上げて構築し、基底部はＳＤ 28 の氾濫堆積層を掘り下げて形成した状態が観察できた。基底部の掘り下げに伴う窪みは、ＳＤ 14 の東岸沿いでも検出している。堤体の西側面はＳＤ 26 の水



HJ第 750 次調査　杭列SX 06・07 平面図（1/200）

（※　杭材の樹種同定は金原正明氏（奈教大)･金原正子氏･金原美奈子氏（文化財科学研究センター）の提供資料による）

流により浸食され、東側面上はＳＤ 26 の流路内埋土Ａ～Ｃの氾濫で生じた２層の砂礫層が堆積する（断面図参照)。

沼沢地の様相を示すシルト・粘土層を掘削してＳＤ 26 の河道が形成されることから、ＳＸ 04 の本来の性格は旧佐保川の遊水地の堤防であり、シルト・粘土層は遊水地内の埋土、ＳＤ 26 は埋没が進んだ遊水地の排水を確保するためにＳＸ 04 沿いに掘削された水路と考える。蛇行の要因については、ＳＤ 28 の埋没時に生じた自然流路を遊水地の排水路に活用したためと想定する。

ＳＸ 05　ＳＸ 04 に伴う暗渠の土管列で、瓦質土管を８本以上連ね、堤体基底部を横断する。堤防東側にたまった水を遊水地やＳＤ 26 へ排水する機能が推察できる。

ＳＸ 06・07　ＳＸ 06 は埋没河川ＳＤ 26 の東岸及び堤防ＳＸ 04 の西裾に沿う杭列で、南・北両トレンチで検出した。南トレンチでは基本的に１列で打設されているが、堤防側面の侵食が著しい箇所では２列あるいはランダムに打設され、２列の杭の間に人頭大の礫を並べることで土留めを強化している。１・２列の杭列にはタケを用いたしがらみが残る。北トレンチでは前述した埋没河川ＳＤ 27 の合流部を横断する。

ＳＸ 07 はＳＸ 06 の約１ｍ西側に沿う杭列で、南・北両トレンチで検出した。南トレンチでは概して２～３列で打設されるが、不規則な箇所もみられる。北トレンチではＳＤ 27 の合流部で途切れる。

両者の杭はともに一方の先端を尖らせた径 10㎝前後、長さ１～ 1.5m の樹皮付きの丸太材で、地表から 0.5 ～ 0.7 ｍ下まで打ち込んでいる。１～３列で打設された杭の大半はクリとアカマツで、ＳＸ 06 のランダムに打設されたに杭は多様な樹種の広葉樹である（平面図参照)。

なお、杭材の放射性炭素年代測定を行ったところ、ＳＸ 06 が概ね AD1500 ～ 1600 年、ＳＸ 07 が概ね AD1430 ～ 1490 年（ともに暦年較正）の結果が得られた[2)]。

堤防ＳＸ 04 の形成要因や埋没河川ＳＤ 26 の埋没過程を踏まえると、ＳＸ 16 は流路埋土Ｄに伴う流路の掘り直しに伴うＳＸ 04 の改修時の杭列、ＳＸ 17 はＳＸ 04 の堤体形成当初の杭列の可能性がある。

ＳＸ 08　ＳＤ 26 の東側で検出した平坦面とその東縁に沿う比高差 0.2 ｍの西落ちの段差からなる南北方向の切土改変部で、ＳＤ 28 の氾濫堆積層の暗灰色砂質粘土で埋まる。段差の位置はＹ＝－ 17,753 付近である。

耕作溝　鎌倉時代の旧耕土層上面から掘り込まれており、東西方向のものと南北方向のものがある。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で 100 箱分があり、土器類が大半を占める。内訳は以下の通りである。

１．土器類・土製品

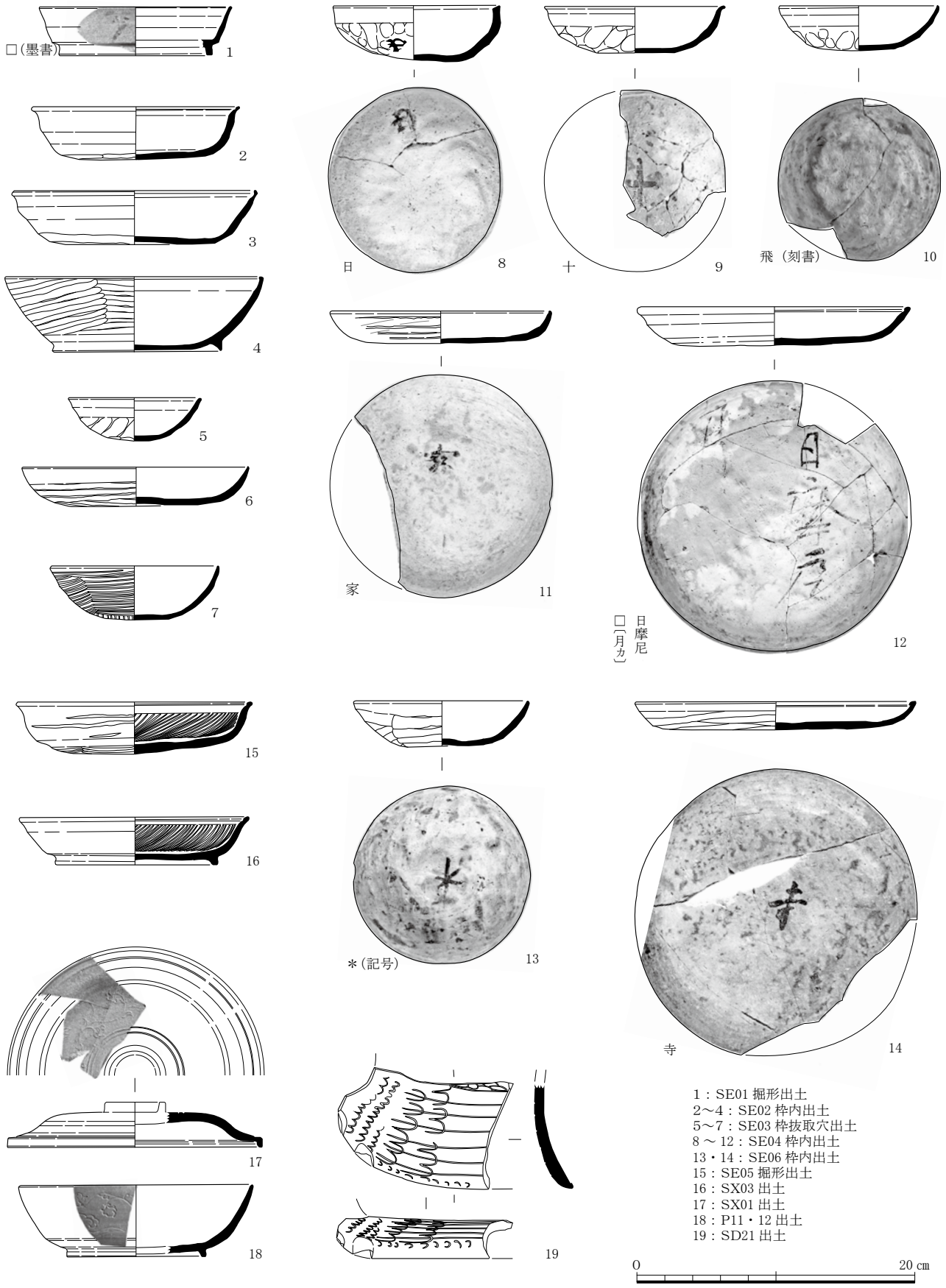
奈良時代後半～平安時代初頭のものが最も多く、他に古墳～飛鳥時代と鎌倉～江戸時代初頭のものがある。

（1）　古墳～飛鳥時代

主なものは溝ＳＤ 01 から出土した土師器甕・壺と、奈良時代の井戸ＳＥ 04 の掘方埋土等から出土した円筒埴輪片である。溝ＳＤ 01 から出土した甕は小型で肩部に把手が付き、壺は球状の肩～体部の破片で長頸壺とみる。ともに古墳時代後期～飛鳥時代の特徴がある。円筒埴輪片はすべて細・小片である。外面タテハケ調整で突帯が低く、埴輪編年Ⅴ期の特徴を示す。

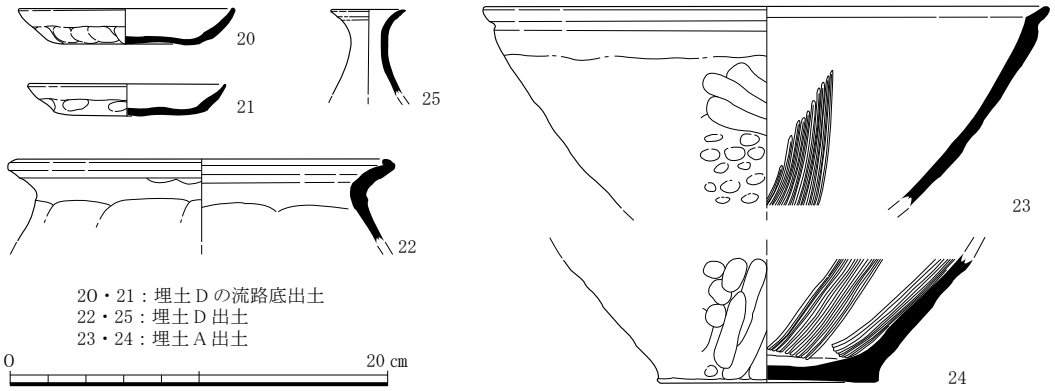
（2）　奈良時代後半～平安時代初頭

主に井戸・溝・土坑の埋土や整地土層から出土し、8 世紀後半～末のものが大半を占める。土器類の主な器種は土師器杯・杯蓋・椀・皿・高杯・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・壺・平瓶・横瓶・甕、施釉陶器杯・皿、製塩土器で、須恵器壺・平瓶・横瓶はミニチュア製品を含む。主な土製品は竈・陶硯・土馬である。一部を図示した。



HJ第 750 次調査　出土土器　①奈良～平安時代初頭（1/4）

（※図に挿入した写真は奈良文化財研究所が撮影、墨書土器は赤外線写真）



HJ第 750 次調査　出土土器　②埋没河川SD 26 出土　室町後期～江戸時代（1/4）

井戸から出土した土器の様相は、以下の通りである。

ＳＥ 01　枠内から出土した土師器は杯・皿が少なく椀はない。須恵器にはミニチュア横瓶や浄瓶があり、杯Ｂは転用硯を含む。掘方埋土から出土した須恵器杯Ｂの器表に墨書がある（１）。8 世紀後半の特徴を示す。

ＳＥ 02　枠内から出土した土師器杯Ｂ・椀Ａは c3 手法で外面を調整する。枠痕跡内や枠内から出土した土師器杯Ａ・椀Ａの一部と須恵器壺Ｇ・Ｍは完形である。8 世紀末の特徴を示す。

ＳＥ 03　枠抜取穴や枠内から出土した土師器皿Ａ・椀Ａはｃ手法で外面を調整する。壺は少ない。枠抜取穴から出土した土師器皿Ａ（６）・椀Ａ（７）・椀Ｃ（５）・甕と須恵器皿Ａはほぼ完形で、8 世紀末の特徴を示す。

ＳＥ 04　枠内から出土した土師器杯Ｂ・椀Ａの外面調整はｃ手法、同皿Ａはａ・ｃ手法。底部外面に墨書・刻書がある土師器椀Ｃ（８～ 11）・皿Ａ（12）が出土している。皿Ａの「日摩尼」は仏教用語で、千手観音の右の第 8 手が持つ太陽をかたどった玉をさす [1)]。須恵器杯蓋は転用硯を含む。土師器壺Ｅや黒色土器Ａ類杯も出土している。8 世紀末の特徴を示す。

ＳＥ 05　土師器杯Ａ（15）・皿Ａは口縁部内面に斜放射状の暗文を施すものを含み、椀はない。須恵器杯Ｂは転用硯を含む。8 世紀後半の特徴を示す。

ＳＥ 06　枠内から出土した土師器椀Ａの外面調整はｃ手法で、同皿Ａはａ・ｂ・ｃ手法がみられる。底部外面に墨書がある土師器皿Ａが２点、同椀Ｃが１点出土しており、土師器皿Ａのうち１点は「寺」と書かれている（13・14）。壺は少ない。須恵器の横瓶とミニチュアの壺Ａ・平瓶は完形。8 世紀末の特徴を示す。

池状遺構ＳＸ 01 から出土した土師器杯Ａ・皿Ａは外面をａ手法で調整し、口縁部内面に斜放射状の暗文を施す。外面に唐草文の線刻を施す須恵器蓋も出土している。ＳＸ 03 から出土した土師器杯Ｂ（16）も口縁部内面に斜放射状の暗文を施す。ともに８世紀後半の特徴を示す。

特記すべきものに。器表に唐草文の線刻を施す須恵器蓋（17）・椀Ｃ（18）と鳥形硯蓋（19）がある。

前者のうち、蓋は池状遺構ＳＸ 01、椀Ｃは区画割の溝ＳＤ 01 や同ＳＤ 02 東側で検出した小土坑Ｐ 11・12 から出土した。同様の須恵器蓋・椀Ｃは平城宮東院地区で奈良文化財研究所が実施した平城第 104 次調査（昭和 53 年度）の溝ＳＤ 8600 で８世紀前半の土器とともに出土しており、唐代の金属器を模倣した可能性がある [2)]。

後者は区画割の溝ＳＤ 21 から出土した。器表に羽毛のへら描きがある。京内において出土数の少ない陶硯で、同様のものは左京八条三坊九・十坪で奈良文化財研究所が実施した平城第 93 次調査（昭和 50 年度）の溝ＳＤ 1155（八条条間北小路南側溝）で出土している。

（3）　鎌倉～江戸時代初頭

鎌倉時代の土器には、12 ～ 13 世紀頃の瓦器椀（大和Ⅲ類）、土師器羽釜（大和Ｂ型）・皿、輸入陶磁器類（青磁・白磁）碗・皿があり、旧耕土層（柱状図６層）や室町時代の埋没河川ＳＤ 26 から出土した。

室町～江戸時代初頭の土器の大半は埋没河川ＳＤ 26 の流路埋土Ａ～Ｄ及びＤの流路底から出土した 16 世紀～ 17 世紀初頭のもので、土師器皿（20・21）・羽釜（大和Ｉ型：22）、瓦質土器摺鉢（23・24）・捏鉢・鉢、国産陶磁器（備前産－徳利：25、信楽産－摺鉢）がある。

２．瓦類

奈良時代の軒瓦、丸・平瓦・塼、室町時代の軒平瓦、瓦質土管がある。奈良時代の瓦類は主に区画溝・井戸の埋土や整地土層から出土した。大半が丸・平瓦で、軒瓦の内訳については軒丸瓦が 6075A、6225 種別不明（A か F）、6304A、6316D、型式不明が各１点ずつ、軒平瓦が 6663F、6714A、型式不明が各１点ずつである。

室町時代の軒平瓦は埋没河川ＳＤ 26 から出土し、室町時代後期の大安寺 247 型式と同范である。瓦質土管

は暗渠の土管列ＳＸ05に伴うものやＳＤ26の埋土Ａ～Ｄから出土したもので、前者はほぼ完形である。

３．木製品

主なものは、奈良時代後半～平安時代初頭の井戸枠・曲物・箸・櫛・斎串と室町時代の笹塔婆・柿経・漆椀である。奈良時代後半～平安時代初頭の櫛は井戸ＳＥ02、曲物・箸は同ＳＥ04、斎串は同ＳＥ06のいずれも井戸枠内から、室町時代の笹塔婆・柿経・漆椀は埋没河川ＳＤ26からそれぞれ出土した。笹塔婆には「アミタフツ」の線刻があり、柿経は観無量寿経の一節を墨書で記している（写真）。

４．金属製品

主なものは奈良時代後半～平安時代初頭の熊手・釘・帯金具・銭貨（万年通宝：初鋳760年）、平安時代後半の北宋銭（聖栄元宝：初鋳1101年）である。熊手は井戸ＳＥ04、釘・帯金具と万年通宝は同ＳＥ06のいずれも井戸枠内から出土した。聖栄元宝は室町時代の埋没河川ＳＤ26から出土した。

５．石器・石製品

主なものは縄文時代頃の石鏃、室町時代の石造物（箱仏２点、五輪塔水輪１点）である。石鏃は基盤層最上層の上面から出土したもので、サヌカイト製で無茎。石造物は埋没河川ＳＤ26の北トレンチの流路埋土Ａから出土したもので、箱仏は地蔵像が彫られている。

Ⅴ　調査所見

今回の調査では、左京六条三坊三坪北西部の宅地利用の様相とともに佐保川が形成した氾濫平野の基盤層及び飛鳥時代以前の遺跡の様相、鎌倉～室町時代の埋没河川・氾濫平野及び耕地の形成過程がわかった。

１．基盤層と飛鳥時代以前の旧地形・遺跡について

基盤層・旧地形　奈良時代の遺構面となる最上層上面は標高55.3mで、左京六条二坊十三・十四坪にあたる西隣接地の調査地よりも0.3～0.8m高く、すぐ南方の左京六条二・三坊及び七条二坊にあたる京奈和自動車道奈良ＩＣ計画地内の調査地よりも0.3～1.3m高いことがわかった。

深掘部における最上層上面から3.6m下までの地層観察と自然科学分析の結果からは、層序・層相が県概報（2022）で図示された奈良ＩＣ計画地内の基盤層のうち微高地の様相を示す「３区深掘Tr」とほぼ対応する。最上層上面から1.0～1.2m下までが縄文時代早期以降に形成された層、その下が後期旧石器時代に形成された層で、大局的には最終氷期の最寒冷期と縄文時代中期頃～鎌倉時代に沖積作用が沈静化することや、後者にはＡＴ火山灰の再堆積層を挟み、その直下の層に含まれる有機物の放射性炭素年代測定値が奈良ＩＣ計画地と同様にＡＴ火山灰の年代値と新旧逆転することも確認した。

縄文時代早期以降の層では最上層からの乾裂痕が顕著なのに対し、後期旧石器時代の層ではほとんど見られない点については、前者が沖積作用の変化によって乾燥と湿潤を繰り返したのに対し、後者は湿潤な沼沢地の状態を維持した堆積環境の違いを反映すると考える。縄文時代早期後葉～末の暗色の粘土層の植物微化石分析では、当時は乾燥気味でササやススキが繁茂していたことがわかった。その直上に上方が粗粒化する灰色砂～砂礫層が堆積することからは、微高地上に小流路が存在することや、長期的には沖積作用の活発化と捉えられる状況も短期的には侵食・乾燥につながる沖積作用の沈静化と堆積につながる活発化を繰り返したことが読み取れる。

飛鳥時代以前の遺跡　古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物１棟と溝１条を検出し、西隣接地の調査地を含めた範囲では飛鳥時代以前の居住関連の遺構が極めて少ないことがわかった。ＳＤ01は耕地に伴う水路の可能性がある。埴輪編年Ｖ期の円筒埴輪片が出土したことがら、周辺に後期古墳が存在することが推察できる。

２．三坪北西部の宅地利用の様相について

検出遺構や出土遺物の様相から、奈良時代後半～平安時代初頭に宅地として利用されたことがわかった。

掘立柱建物・柱列は柱筋、溝は延長方向の方位の東西・南北に対する振れにより、Ａ類：方位とほぼ合うもの、Ｂ類：方位北に対し西、または同東に対し北にやや振れるもの、Ｃ類：方位北に対し東、または同東に対し南にやや振れるものの３つに分類でき、先後関係からは、

（旧）Ａ類→Ｂ類→Ｃ類（新）

の変遷を読み取ることができる。

特に三坪北西部の宅地区分と建物配置については、

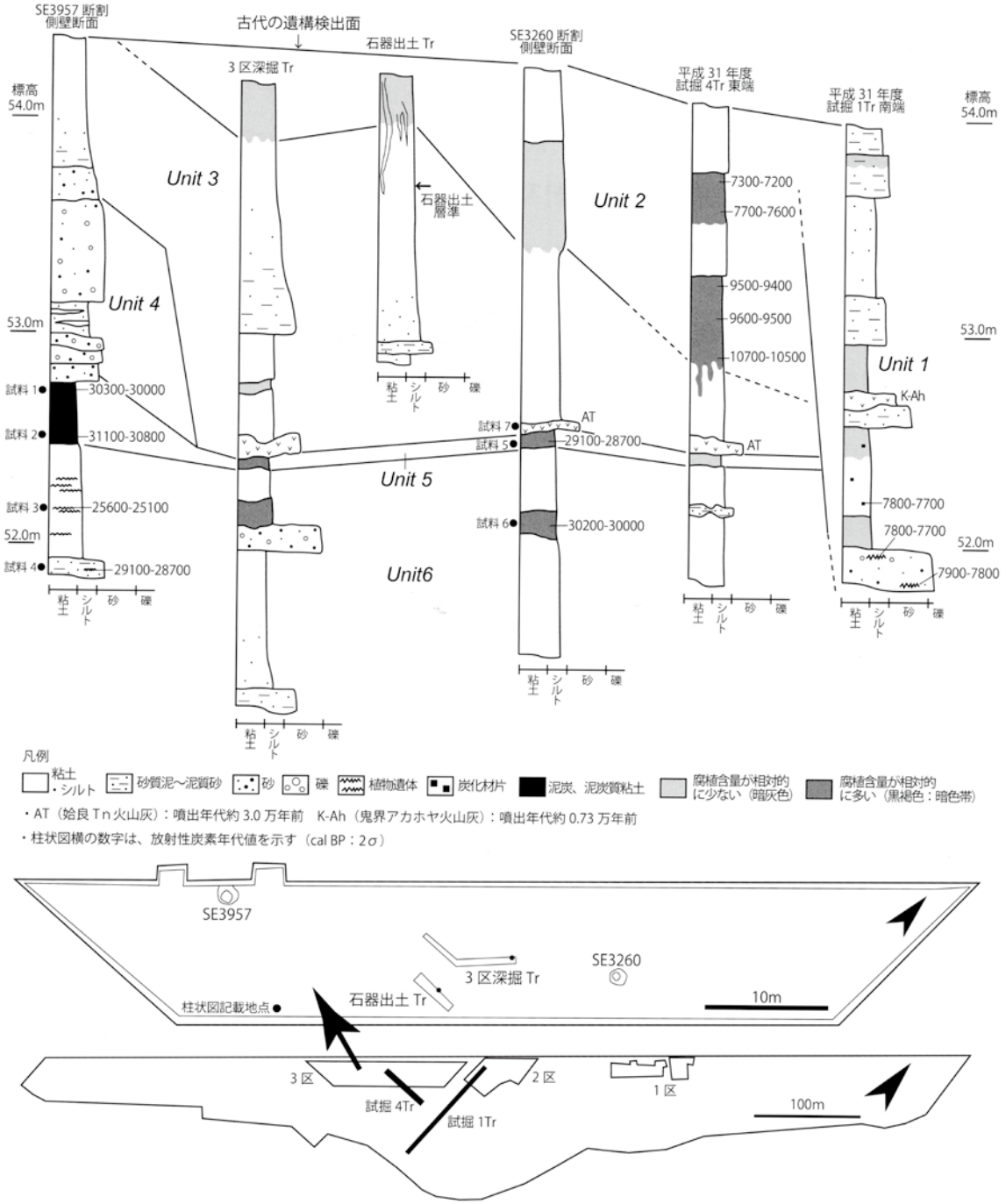
１）Ａ類の区画溝・塀の位置について、三坪東辺の推定位置からＳＤ02の溝心までの距離は63ｍ（210小尺）、ＳＡ32までが60ｍ（200小尺）、ＳＤ03の溝心までが90ｍ（300小尺）で、概ね30m間隔である。

２）Ａ類の中央群の建物ＳＢ27の中心の位置が三坪南辺の推定位置の90ｍ（300尺）北である。西群の建物もこの位置を境に南北２群に識別できる。

３）Ｃ類の区画溝ＳＤ21の溝心から三坪南辺の推定位置までの距離は90ｍ（300小尺）で、ＳＤ25はＳＤ21の溝心から15ｍ（50小尺）南に位置する。

４）Ｃ類の建物は東寄りと西寄りで建物配置が異なる。

といった点から、六条条間南小路に面する坪の南辺及び



橿考研奈良IC計画地の調査（2018 ～ 20）の基盤層柱状図　※橿考研（2020）から引用

に東三坊坊間東小路に面する同東辺を基準とした東西・南北とも 120 m（400 尺）四方の範囲を宅地利用の範囲とみなし、各辺を４分割した 30 m（100 尺）方眼の計画線を基準としたことが推測できる。

Ａ・Ｂ類の区画割の溝・塀及び建物に関連する宅地区分は、宅地の西 1/4 分割線を境に東西に２分割し、西側は同北 1/4 分割線を境にさらに南北に２分割した（1/8 坪 × １ ＋ 1/16 坪 ×2）の構成で、1/8 坪の区画は南北に長い矩形、1/16 坪の区画は正方形に近いと想定できる。Ｃ類の区画溝・塀及び建物に関連する宅地区分は、宅地の北 1/4 分割線を境に南北に２分割し、南側をさらに南北に２分割した（1/8 坪 × １ ＋ 1/16 坪 ×2）の構成で、全ての区画が東西に長い矩形と想定できる。

三坪北西部の宅地利用の変遷は、柱筋の揃う建物・塀を同時併存とみなし、遺構の先後・重複関係と上記の宅地区分の想定に基づくと、Ａ・Ｂ類の区画割の溝・塀及び建物から把握できるＡ・Ｂ期（８世紀後半）と、Ａ・Ｂ類よりも時期が下るＣ類の区画割の溝・塀及び建物から把握できるＣ期（８世紀末）の大きく３時期の変遷があり、Ａ期にはさらに２段階の推移が認められる。

HJ第 750 次調査　A期・1段階の宅地利用の様相（1/800）

HJ第 750 次調査　A期・2段階の宅地利用の様相（1/800）

A期　居住関連の遺構の先後・重複関係から、１・２段階の小変遷を捉えることができる。建物はＡ類のみである。１段階では、東半部の区画では区画割の 溝ＳＤ 02・03 に沿って 大型建物ＳＢ 01・27・38 があり、ＳＢ 01 の東隣に付属的な小型の南北棟ＳＢ 03・04 が東西に並ぶ。 西半部の区画では北側の区画に大型建物ＳＢ 11、南側の区画に大型建物ＳＢ 25 が建てられる。

２段階では、桁行４間以上の東西棟の大型建物とそれに付属的な小型建物が加わる。東半部の区画では南北棟のＳＢ 27 の東側に東西棟の建物ＳＢ 31 が建てられ、その北側にＳＢ 31、南西側にＳＢ 28・29 の３棟の小型の付属的な建物を伴う。東西棟ＳＢ 31 と南北棟ＳＢ 28・29 はＬ字状あるいはコの字状の配置と考えられる。西半部の北側の区画では南北棟のＳＢ 11 の西側に東西棟のＳＢ 10 が建てられ、南側の区画では南北棟のＳＢ 25 の代わりに小型の付属的な建物ＳＢ 22 を東隣に伴う東西棟ＳＢ 14・15 が建てられる。

B期　区画溝ＳＤ 02・03 が埋没して後者ではＢ類の区

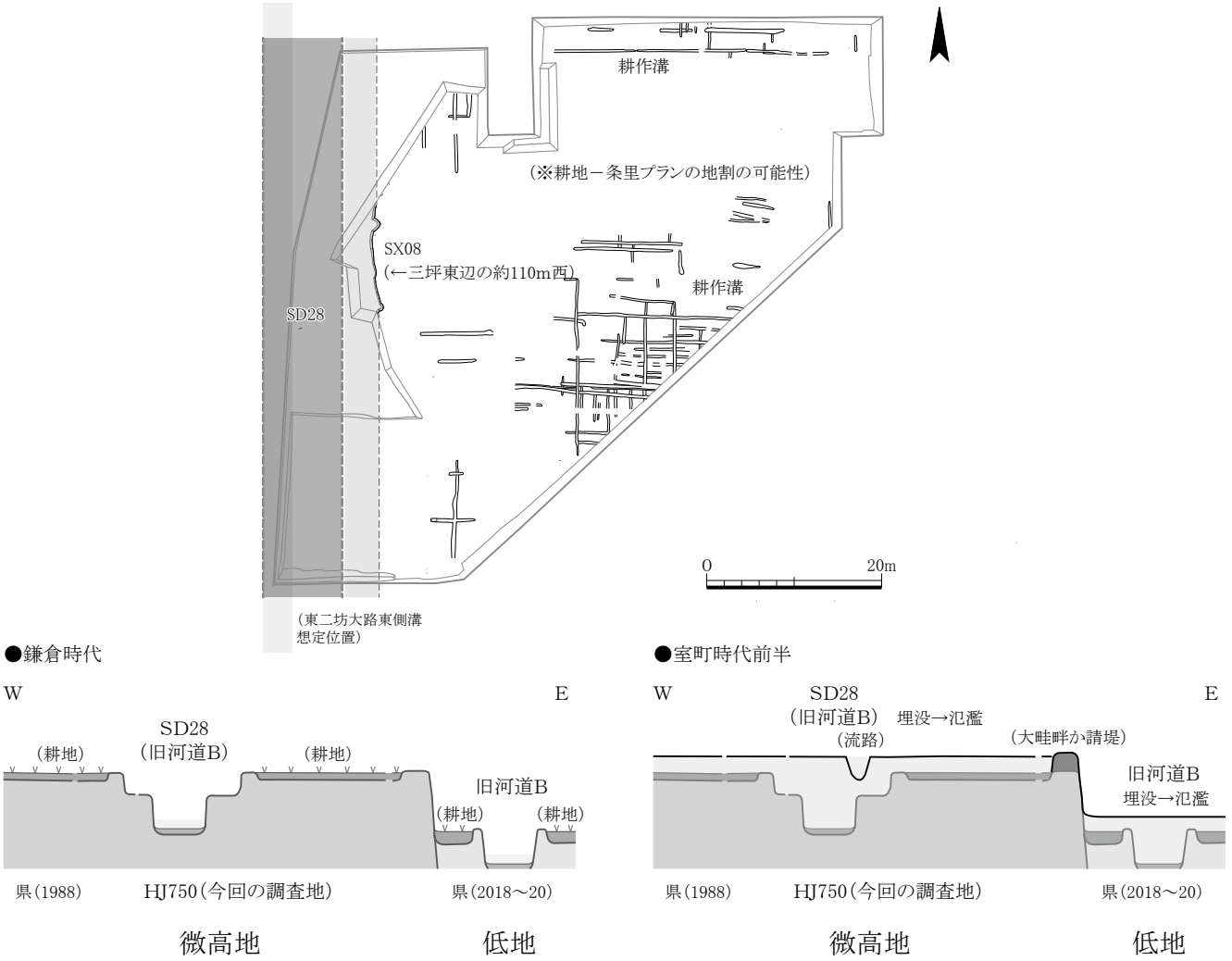
HJ第 750 次調査　B期の宅地利用の様相（1/800）

HJ第 750 次調査　C 期の宅地利用の様相（1/800）

画塀ＳＡ 15 が設置される。建物はＢ類への建替えがみられ、Ａ・Ｂ類が混在する。東半部の区画の北寄りでは、東西に並ぶ南北棟ＳＢ 01・03・04 を除却してＢ類の大型の東西棟ＳＢ 05 が建てられ、Ａ類の南北棟ＳＢ 38 が同様の南北棟ＳＢ 39 に建て替わる。西半部の南側の区画では、Ａ類の大型の東西棟ＳＢ 15 がＡ類の東西棟ＳＢ 16 に、東隣の付属的なＡ類の小型の南北棟ＳＢ 22 がＢ類の小型の南北棟ＳＢ 20・21・23 に建て替わる。

Ｃ期　建物は主にＣ類で、建物配置には各区画の東部分で同規模の建物を東西に２棟並べて配し、西部分では東から南北棟－東西棟の順で配する規則性がある。北半部の区画では、東部分の南寄りが空閑地で、西部分の建物はＡ類の大型建物ＳＢ 10・11 をＡ期から継続して使用したと考える。北半部と南半部の北側の区画では、東部分の東西に２棟並ぶ建物は建替えが行われている。

三坪の東西２分割線より東の建物・塀についても同様の時期区分による変遷が認めらえる。なお、瓦類がほと



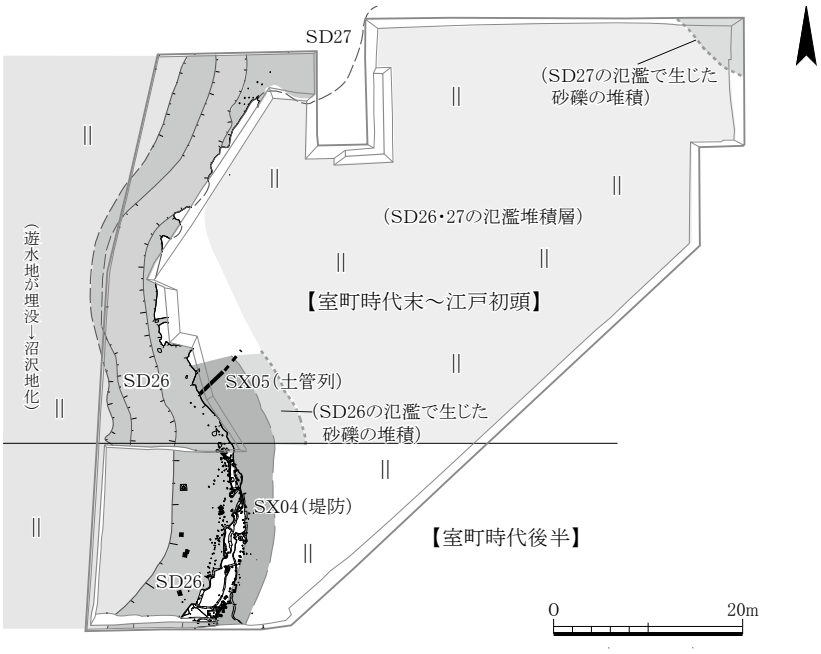
HJ第 750 次調査　鎌倉～室町時代前半の旧河道とその周辺の様相（平面図：1/800）

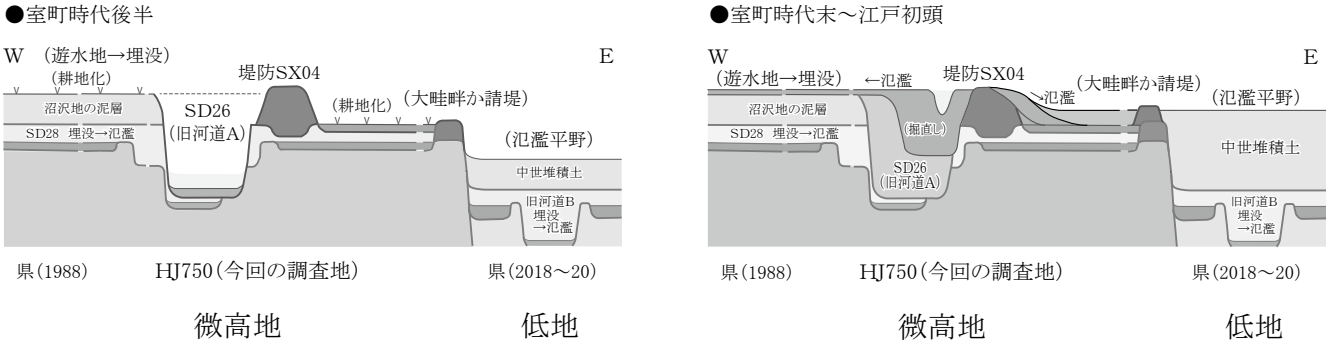
んど出土していないことから、建物が板葺き等の可能性がある。留意すべき遺物に、①「寺」や仏教用語の「日摩尼」の墨書土器、②外面に唐草文の線刻を施す須恵器椀Ｃ・蓋、③鳥形硯があり、通常の宅地ではなく寺院と関連するなどやや特殊な性格を帯びた施設の可能性も考える必要がある。

３．鎌倉時代以降の河川・氾濫平野及び耕地の形成過程について

発掘区の西寄りでは、北側延長部分が現在の佐保川と重複する旧河道を反映した地割の水田の床土直下において室町時代～江戸時代初頭の埋没河川ＳＤ 26・27、ＳＤ 26 の東岸に沿う堤防ＳＸ 04 とその護岸の杭列ＳＸ 16・17 を検出し、ＳＤ 26 の直下で鎌倉～室町時代の埋没河川ＳＤ 28 を確認した。ＳＸ 16・17 の杭材の放射性炭素年代測定の結果やＳＤ 26 の流路埋土Ａ～Ｄの出土遺物の時期から、ＳＸ 04 の構築時期が 15 世紀中頃～後半で 16 世紀に改修されたことや、ＳＤ 26 が 16 世紀に機能し 17 世紀初頭に埋没したことも把握できた。また、同中央～東寄りでは、奈良時代の遺構面である基盤層の直上に鎌倉時代の耕土層があり、上面から掘削された耕作溝を検出した。加えて、鎌倉時代は耕土層に乾裂痕がみられることから乾燥気味の土地条件であったことや、室町時代には河床が上昇して湿潤化したうえにＳＤ 26・28 を通じて後背地の山地から多量の土砂がもたらされて厚さ１m以上の氾濫堆積層が形成され、シルト・粘土層の上面に耕地利用を示す代掻きの痕跡が残ることを確認した。

鎌倉～室町時代の埋没河川ＳＤ 28 の河道は、中心の位置と想定される川幅から奈良時代の東二坊大路東側溝を東に拡幅して掘削された可能性があり、鎌倉時代の旧耕土層に乾裂痕がみられることから当初は水位が低かったことが推察できる。鎌倉時代の耕地の地割については、ＳＤ 28 東側の切土改変部ＳＸ 08 の段差が三坪東辺の想定位置の約 110 m西に位置することや耕作溝の様相から、三坪東・南辺の位置を基準に坪境の畦畔を設けた条里プランであったと推察する。





HJ第 750 次調査　室町時代後半～江戸時代初頭の旧河道とその周辺の様相（平面図：1/800）

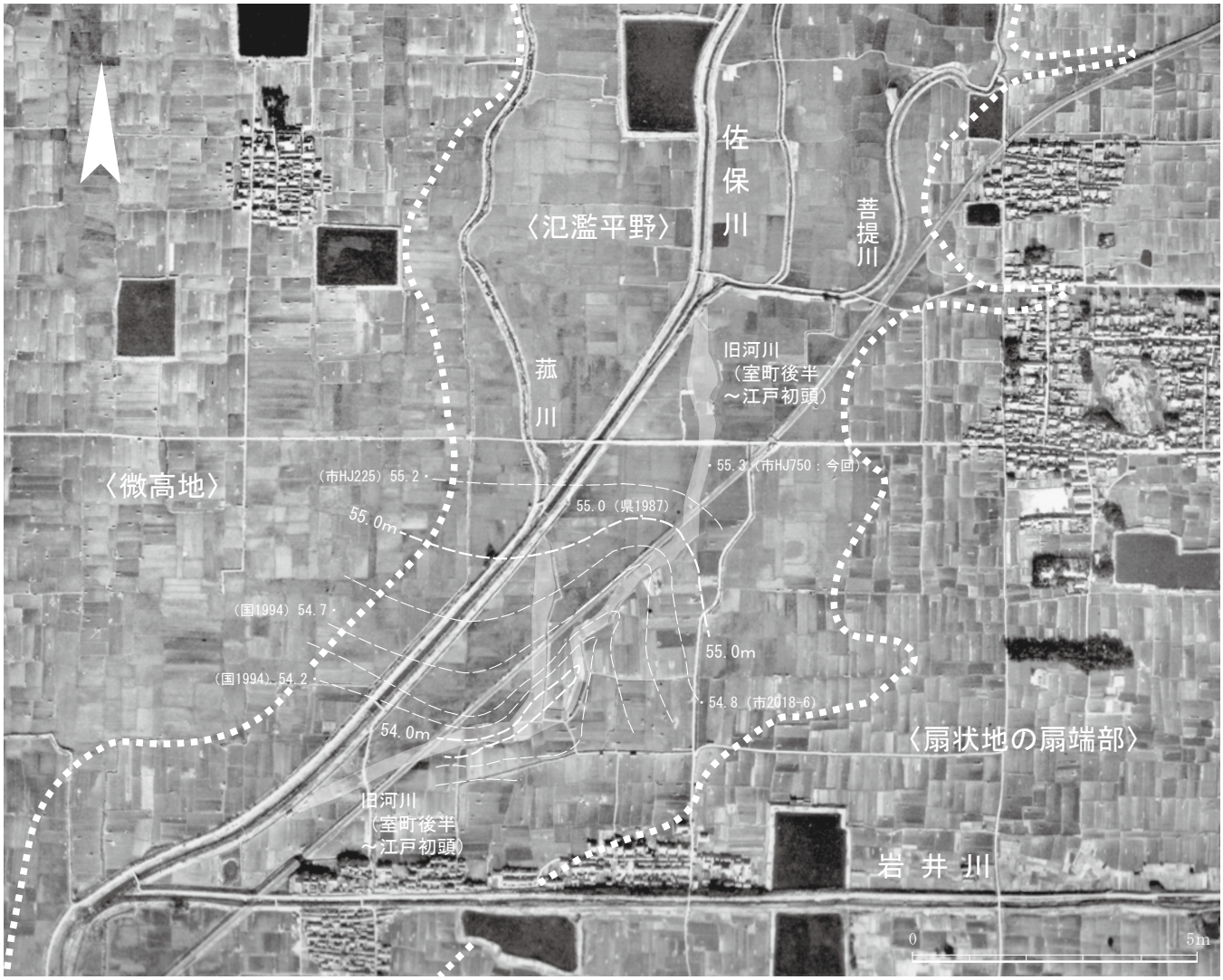
堤防ＳＸ 04 は室町時代～江戸時代初頭の埋没河川ＳＤ 26 の東岸に沿うが、河道の西岸側が沼沢地の様相を示すシルト・粘土層であることから、本来は旧佐保川の遊水地の堤防で、ＳＤ 26 は埋没が進んだ遊水地の排水路として掘削されたと考える。遊水地の形成については、ＳＸ 04 と沼沢地の様相を示すシルト・粘土層の直下がＳＤ 28 の氾濫堆積層であることから、ＳＤ 28 の埋没に伴う治水機能の低下が契機と考える。堤防の西裾に沿う杭列ＳＸ 06・07 は護岸を目的としており、ＳＤ 26 の河道内の流路との関係も踏まえると、ＳＸ 06 が侵食の進んだ堤防の改修時、ＳＸ 07 が構築時のものとみなせる。

埋没河川ＳＤ 26・28 の氾濫堆積層は厚さがほぼ一定であることから、調査地のすぐ東に氾濫した流水や土砂を受け止める大畦畔あるいは請堤の存在が想定できる。

鎌倉～室町時代の多量の土砂の流入については、この時期に広葉樹林からマツ林へと変化する奈良盆地の植生史を考慮すると、上流域の山地斜面における森林伐採に伴う土砂流出に起因する可能性が高い。

なお、橿考研の奈良ＩＣ計画地内の調査では、放射性炭素年代測定により埋没河川ＳＤ 26 に対応する河道Ａに含まれる生材で 15 世紀中頃～ 17 世紀初頭、その基盤となる中世の堆積層（報文では「中世耕作土層」）に含まれる炭化材で 15 世紀前半～ 17 世紀前半、埋没河川ＳＤ 28 に対応する河道Ｂに含まれる炭化材で 14 世紀初頭～ 15 世紀初頭の暦年代値を得ており（橿考研 2020）、今回の調査成果と整合する。

以上の点を踏まえると、鎌倉時代から江戸時代初頭までの調査地付近の土地条件の変遷を図のようにまとめることができる。治水に関連する遺構の変遷からは、鎌倉時代の「深く掘られた水路による水量調整」の限界を室町時代後半に「遊水地による貯留と通水」で克服しようとした治水の発想の変化が推察できる。埋没が進んだ遊水地を耕地拡大に利用する意図がうかがえることも考慮しておく必要がある。また、現状では一連で捉えられる調査地付近の佐保川の氾濫平野が、基盤層が形成する



HJ第 750 次調査地周辺の旧状（ほぼ 1/12,000、米軍 1949 年撮影空中写真に加筆）

（※ 等高線―基盤層上面の微地形で、橿考研の奈良IC調査地・本調査地及び周辺の調査地の成果から推定）

地形と鎌倉時代～江戸時代初頭に行われた耕地開発と治水・利水の違いから生じる異なる様相の複数の小地形の複合体であることにも留意する必要がある。河岸に高い堤防を伴う佐保川の現河道と水田から成り立つ現況の耕地景観の原形が成立するのは江戸時代初頭とみて間違いない。室町時代の埋没河川ＳＤ 26 と佐保川の現河道との関連については、水田地割に反映された菰川を含む旧河道の流形が現河道に近いことから、現河道は室町時代のＳＤ 26 の機能を踏襲したうえで合流点を上流側へ移設し、高い堤防による水制と遊水地の機能強化により氾濫の抑制を図ったものといえる。上流側へ移す理由には、堤防構築に適した微高地の安定した地盤との関連が考えられる。「治山治水」の発想が鎌倉・室町時代と江戸時代で大きく異なることがわかる。

現在の水利慣行は江戸時代に成立したと考えられるが、旧河川の形成と耕地化の経緯を考慮すれば室町時代後半頃にその祖型が存在した可能性がある。（安井宣也）

註

１）奈良文化財研究所　垣中健志氏のご教示による

２）奈良文化財研究所　神野恵氏のご教示による

参考・引用文献

「奈良市平城京左京六条二坊十二・十三坪発掘調査概報」
県概報 1991 年度（第１分冊）　奈良県立橿原考古学研究所編　1992

「平城京左京六条二・三坊、七条二坊」
県概報 2018 年度（第２分冊）　奈良県立橿原考古学研究所編　2020

「平城京左京六条二・三坊、七条二坊」
県概報 2019 年度（第２分冊）　奈良県立橿原考古学研究所編　2021

「平城京左京六条二坊、七条二坊」
県概報　2020 年度（第２分冊）　奈良県立橿原考古学研究所編　2022

「平城京左京六条二・三坊、七条二坊、八条一坊」『大和を掘る 38』
奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　2023

河角龍典「佐保川流域平野における先史時代の地形変化－平城京左京五条二坊十五・十六坪の調査より－」『平城京左京五条二坊十五・十六坪』奈良県立橿原考古学研究所　2006

『昭和 53 年度平城宮跡発掘調査概報』　奈良国立文化財研究所　1978

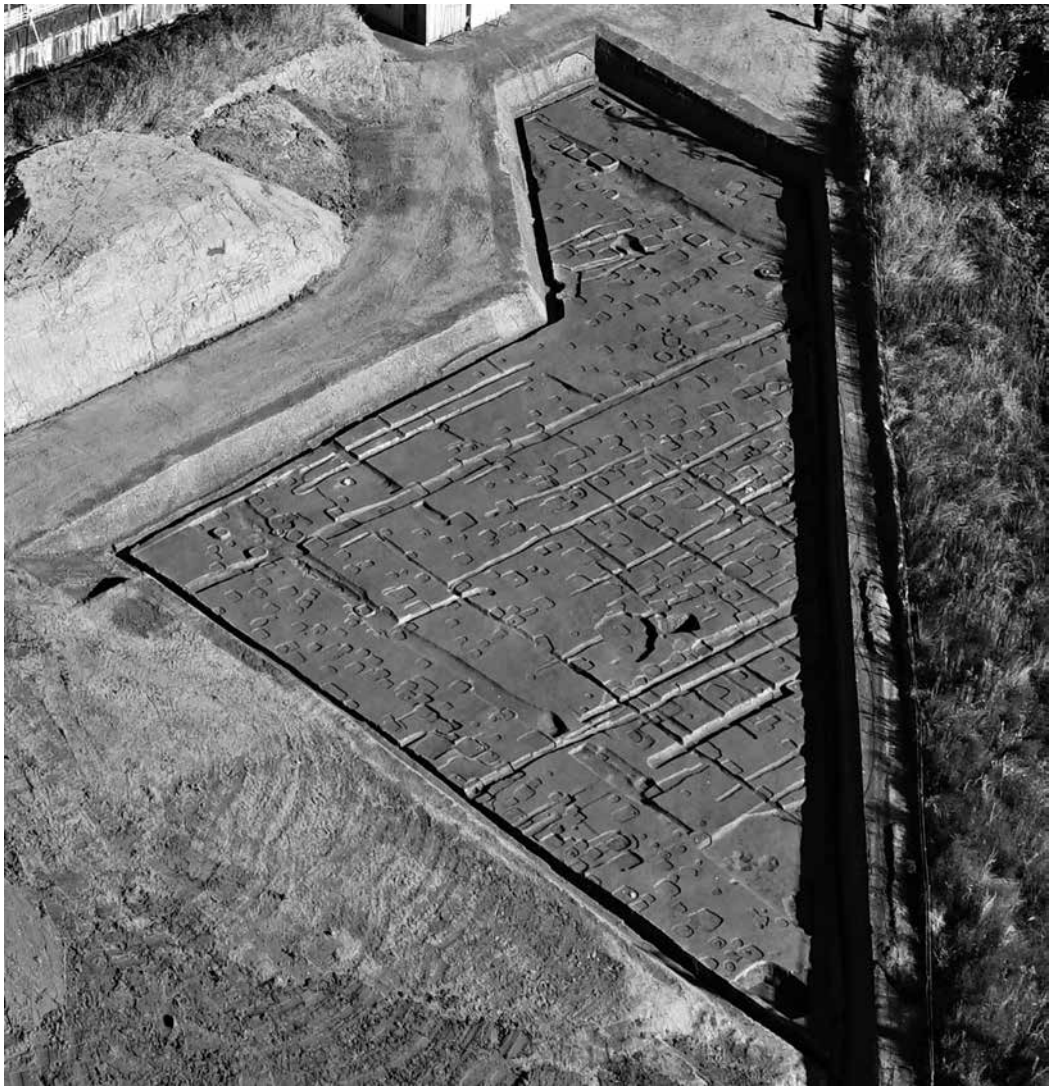
『平城京左京八条三坊発掘調査報告』　奈良県　1976

HJ第 750 次調査　調査地全景（左：西から、右：北東から）

HJ第 750 次調査
発掘区1（北東部）
（南西から）

HJ第 750 次調査
発掘区4（北東部北端）
（東南東から）

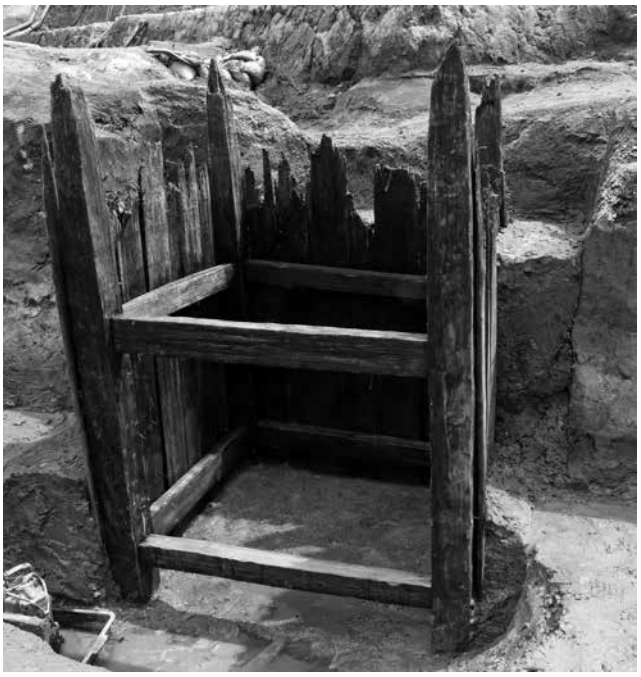
HJ第 750 次調査
発掘区2（西部分）
（南西から）



HJ第 750 次調査
発掘区3（南東部）
（南西から）

HJ第 750 次調査　発掘区土層断面　左上：SD 26 堤防東側（北から）、左下：西部分東壁（北西から）、右：北東部基盤層深掘部北壁（南から）

HJ第 750 次調査　井戸SE 01（東から）



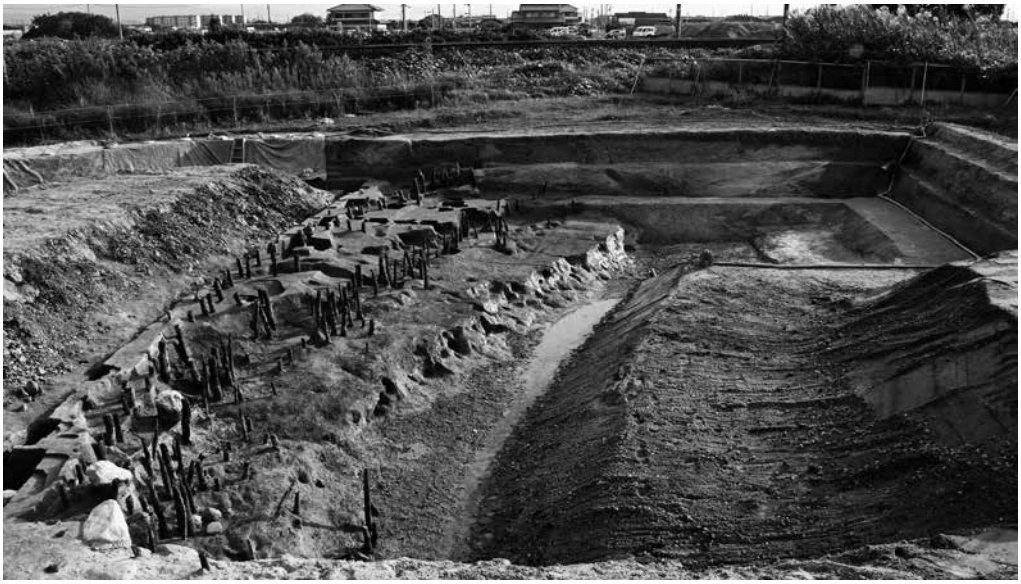
HJ第 750 次調査　井戸SE 02（西から）

HJ第 750 次調査　井戸SE 03
上：枠抜取穴内（南西から）、下：井戸枠（南から）

HJ第 750 次調査　井戸SE 04　左：断割状態（北から）、右：井戸枠内（北から）

HJ第 750 次調査　井戸SE 06　左：検出時（西から）、右：井戸枠北側板（南から）

HJ第 750 次調査　埋没河川SD 26 南トレンチ　当初掘り下げ停止面（左：北西から　右：垂直写真（上が北））



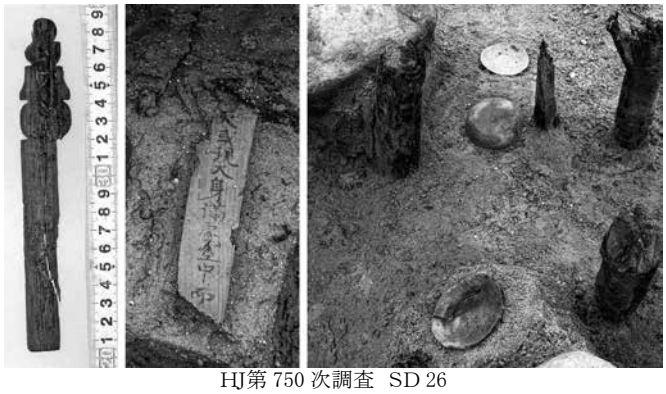
HJ第 750 次調査
埋没河川SD 26　南トレンチ
（北から）

HJ第 750 次調査
埋没河川SD 26・28　断面
（北から）

HJ第 750 次調査　堤防SX 14 と氾濫堆積物　断面（北から）

HJ第 750 次調査　埋没河川SD 26　北トレンチ（南西から）

HJ第 750 次調査　杭列SX 06 とそれに伴う石列・しがらみ（南西から）



HJ第 750 次調査　SD 26
（左から出土笹塔婆・柿経、土師器皿出土状態（北から））

2．平城京跡（左京二条四坊九坪）の調査　ＨＪ第 751 次

事 業 名	有料老人ホーム新築	調査期間	令和３年５月 10 日～５月 25 日
届出者名	株式会社　八重桜	調査面積	89㎡
調 査 地	法蓮町 410-7、410-10	調査担当者	久保邦江

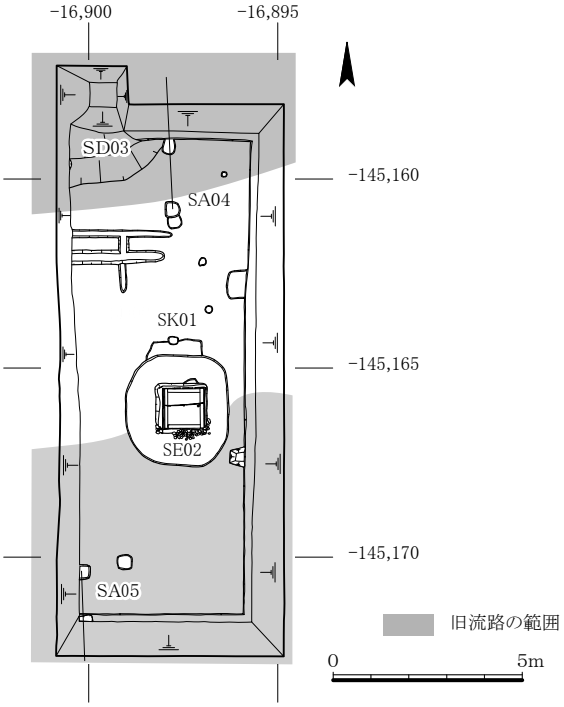
Ⅰ　はじめに

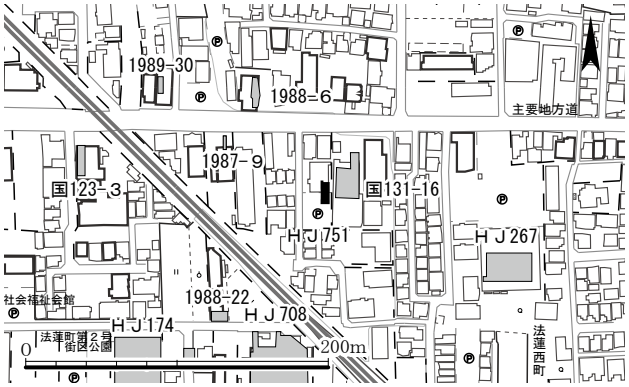
調査地は、平城京の条坊復元では左京二条四坊九坪の中央やや西よりの部分にあたる。同坪内では東隣で昭和 56 年に国 131-16 次調査が行われており、 平城京造営以前の溝・掘立柱塀・土坑、奈良時代の一条大路南側溝・掘立柱建物・塀・井戸・土坑を検出している。この調査では古墳時代の旧流路が広範囲に広がっており、軟弱地盤を避けた建物配置となっている。

発掘調査は建物建設予定部分に南北 14.5 m、東西６mの発掘区を設定し、九坪の宅地内の様相を確認する目的で調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、厚さ 0.7 mの造成土以下、耕作土（0.1 m）、淡灰色土・明黄灰色土の床土（各 0.1 m）と続き、奈良時代の遺物包含層である茶褐色粘質土（0.15 m）となる。包含層以下については、調査区北端部と南端部が奈良時代以前の旧流路埋土である灰色砂、発掘区中央部では明黄褐色土の地山となる。遺構の検出は旧流路埋土及び地山上面で行った。遺構検出面の標高は 67.0 mである。





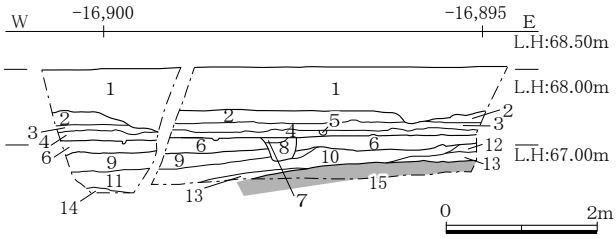
HJ第 751 次調査　調査地位置図（1/5,000）

Ⅲ　検出遺構

奈良時代の土坑１基、奈良時代末から平安時代の井戸１基、時期不明の溝１条、柱列２条である。

ＳＫ01　発掘区中央部で検出した土坑。南半は井戸ＳＥ 03 によって壊されている。東西 1.5 m、南北 0.4 m 以上、検出面からの深さは 0.35 mである。埋土から奈良時代の土師器皿・杯・甕、須恵器甕の破片が出土した。

ＳＥ 02　発掘区中央部で確認した井戸。井戸掘方は東西 2.75 m、南北 3.05 mの隅丸方形である。枠材の南辺外側には直径 0.1 ～ 0.2 mの円礫が部分的に敷かれている。枠構造は方形縦板組横桟留で、内法は 1.1 m四方、検出面からの深さは 1.7 mである。枠材の縦板は幅 27㎝、厚さ５㎝で各面に４枚ずつ使用している。縦板材は上下２か所で太枘留をしている。板材の中には筏穴を残すものや、床材を転用したと思われる加工が施されているものがある。横桟は一段分を確認した。隅柱は



1　淡黄褐色土・灰色土混（造成土）
2　暗灰色土（耕土）
3　淡灰色土
4　明黄灰色土（3・4：床土）
5　淡灰色土・黄灰色粘土混
6　茶褐色粘質土
7　灰色粗砂・灰色粘土混（柱穴埋土）
8　淡茶褐色土・灰色土混（柱穴埋土）
9　灰色粘土・灰色砂
10 灰色砂・青灰色粘土混
11 灰色砂　（9～ 11：SD 01 埋土）
12 淡黄褐色土・茶褐色粘土混
13 青灰色細砂
14 黒色砂　（12 ～ 14：旧流路埋土）
15 明黄褐色土（地山）

HJ第 751 次調査　発掘区平面図（1/200）・断面図（1/100）

ないが、四隅の外側に幅 10㎝程度の縦板があてがわれている。幅９㎝程度の板材の末端を加工し、三枚枘差の仕口を施している。

井戸は深さ 0.55 ｍまで埋め立てられた後、枠内を仕切るように東西方向に並べ、両脇から直径３㎝程の細い棒状の部材を打ち込んで固定している。横板は湧水層より高い位置まで埋め立てた後で、その段階では井戸として機能していたとは考え難い。

井戸枠内からは奈良時代末から平安時代初頭の土師器の食器類や、須恵器甕の破片、灰釉陶器、瓦当欠損の軒平瓦が出土した。

ＳＤ 03　東で北に約 27° 振れる素掘りの溝で、発掘区北端で南岸を検出した。北肩を検出するために、北西部を一部拡張したが検出できなかった。幅 2.5 ｍ以上、埋土は灰色粘土・灰色砂が混合したものである。深さは 0.15 ｍで、埋土から熨斗瓦片１点が出土した。

ＳＡ 04　発掘区北端部で検出した南北方向の柱列である。柱穴２基分で柱間は 1.8 ｍ。柱穴は一辺 0.4 ｍ四方、検出面からの深さは 0.2 ｍである。南側の底面には塼が礎盤として置かれていた。

ＳＡ 05　発掘区南端部で検出した南北方向の柱列である。南側の柱穴が南壁にかかり柱間は不明。柱穴は一辺 0.4 ｍ四方、検出面からの深さは 0.4 ｍである。

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は土器類が遺物整理箱３箱分、瓦類が遺物整理箱１箱分出土した。

土器類は土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器等がある。多くが奈良時代末から平安時代初頭の土器である。柱穴から出土した土器は小片で時期は不明である。瓦類には軒平瓦（瓦当欠損）１点、塼１点、丸瓦、平瓦がある。

Ⅴ　調査所見

調査の結果、奈良時代末から平安時代初頭の井戸を検出したが、それ以外は柱列、土坑があるのみで非常に遺構密度が希薄であった。調査面積が狭小であることに起因するのか、宅地利用上の空閑地であったのか、今後の周辺の調査に期待したい。　（久保邦江）

HJ第 751 次調査　SE 02（西から）

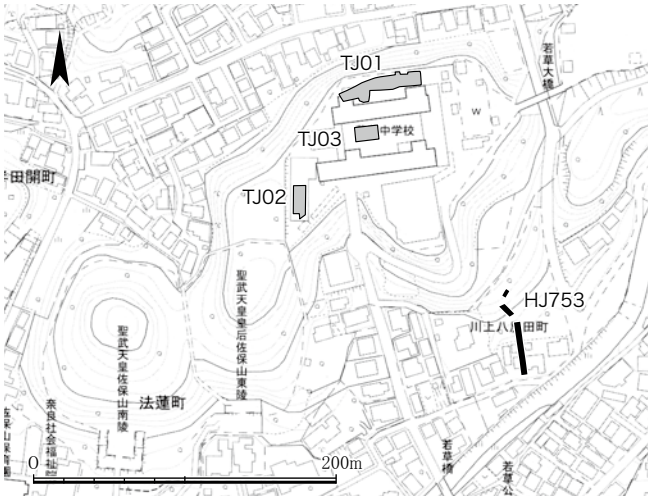
HJ第 751 次調査　発掘区全景（南から）

3．平城京跡(左京一条七坊五坪)・奈良町遺跡・多聞城跡隣接地の調査　第 753 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　令和３年５月 28 日～令和３年６月７日
届出者名　株式会社　Dear	調 査 面 積　186.25㎡
調 査 地　川上町 563 番３他	調査担当者　中島和彦　久保邦江

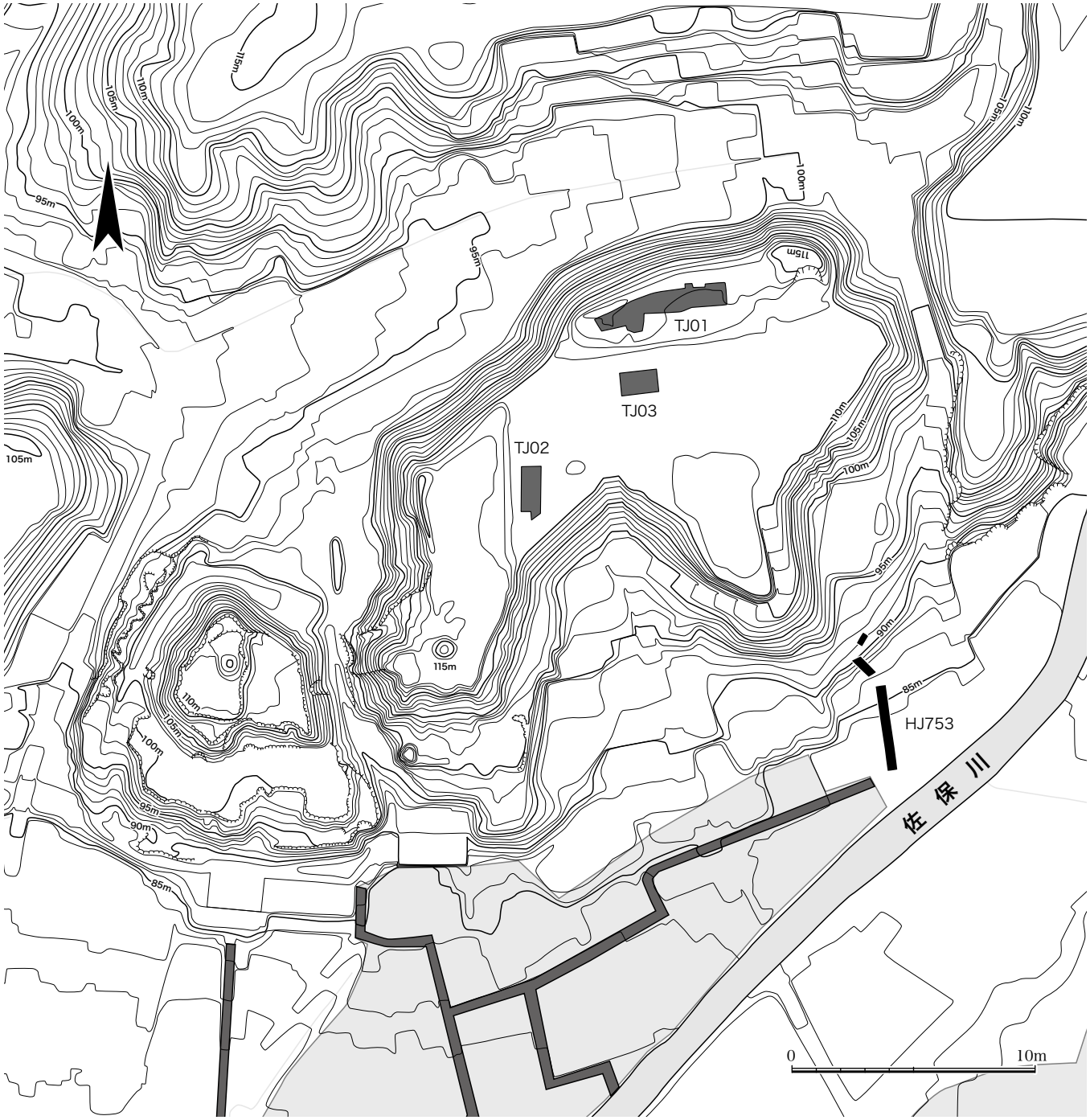
Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京一条七坊五坪の北辺と北一条条間路にあたるが、現状は東西方向の丘陵南面の裾部分であり条坊の施工は疑わしい。一方この丘陵上には、永禄３（1560）年から天正４（1576）年まで松永久秀によって築かれた多聞城跡があるが、昭和23（1948）年に行われた若草中学校建設工事によって、遺跡は大部分が削平された。その後奈良市による発掘調査が３回おこなわれ、第１次調査からは多数の瓦が出土し、多聞城使用の瓦の一端が明らかになっている。また多聞城の南側は、江戸時代には奈良奉行所の同心屋敷で、奈良町遺跡の一画となっている。



HJ第 753 次調査　調査地位置図（S=1/5,000）

HJ第 753 次調査　第１発掘区全景（北から）



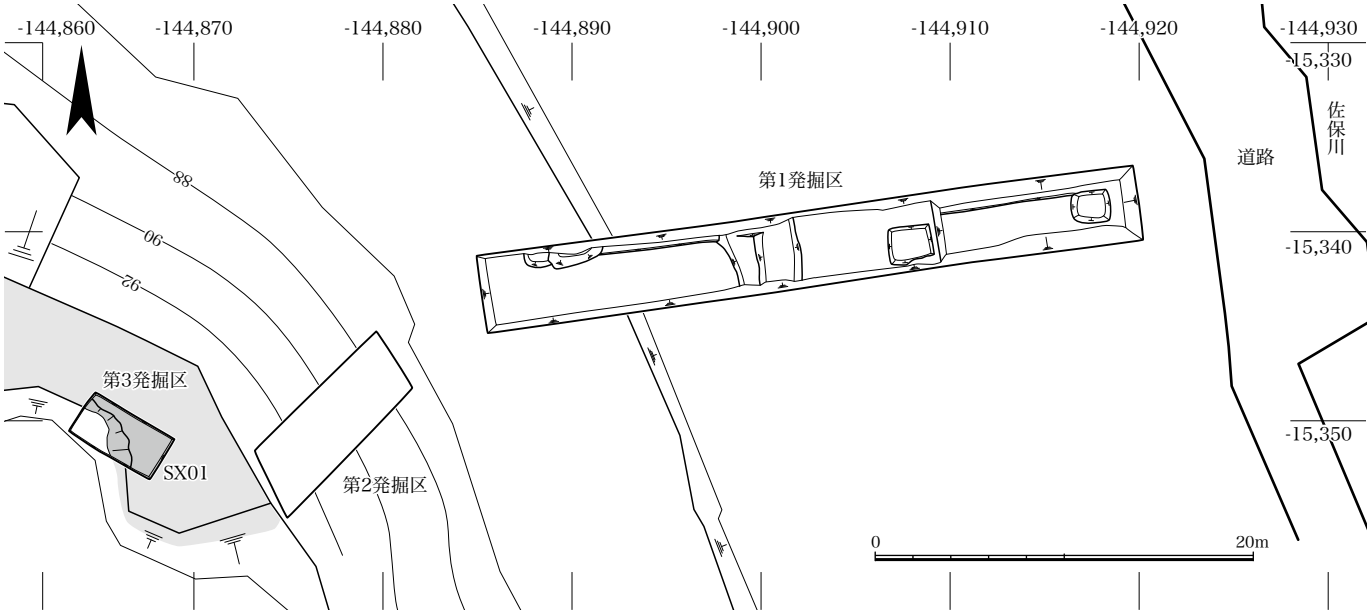
HJ第 753 次調査　多聞城跡周辺地形図（1/2,500）

今回の調査地は、多聞城の位置する丘陵南裾と丘陵南側法面の一部にあたることから、奈良時代の条坊の確認、多聞城の城郭関連遺構の確認、江戸時代の町家の広がりの確認を目的として調査を実施した。

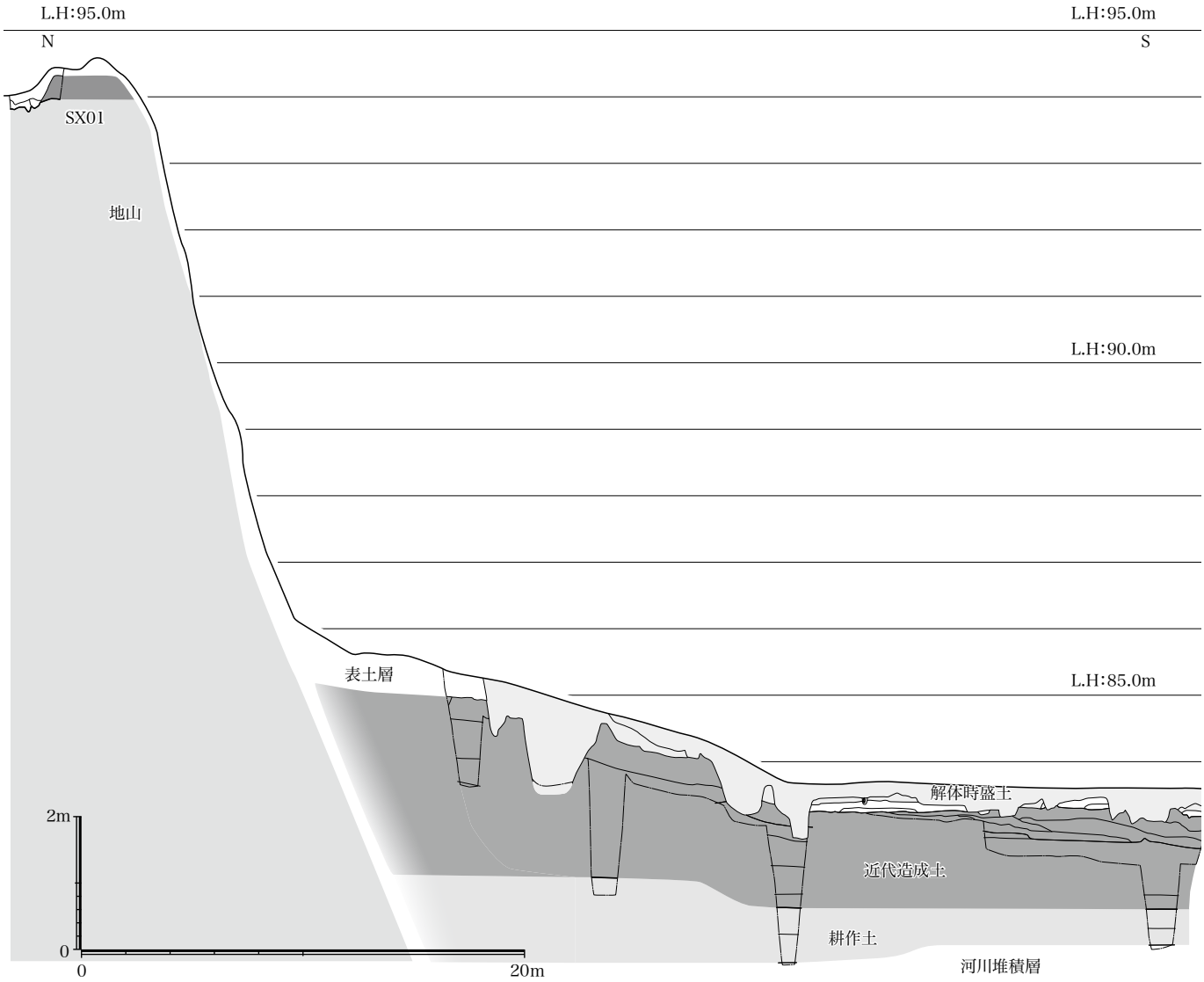
調査地の現状は、佐保川北岸の土手から北へ長さ約 60 mの平坦地があり、さらにその北の丘陵裾との間に長さ約 20 mの緩斜面地がある。この北側は高さ約 9.0 mの崖面で、崖上には南北約 5 m、東西約 17 mの細長い平坦地がある。平坦地北にはさらに学校テニスコートの長方形の平坦地があるが、これらが城郭に伴うものかは不明。

上図は奈良文化財研究所作成平城京地形図（1/1000）を元に多聞城跡部分の地形のみを描き出したたもので、昭和 37（1962）年の多聞城跡の地形を示している。若草中学校部分は大きく削平されており、奈良市多聞城跡第 1 次調査地で僅かに旧状が残ること分かる。また今回の発掘調査地が多聞城跡の丘陵南東隅部分にあたることも見てとれる。

発掘区は、道路設置箇所（第 1 発掘区）と、工事で削られる南側崖面（第 2 発掘区）とその上の平坦面先



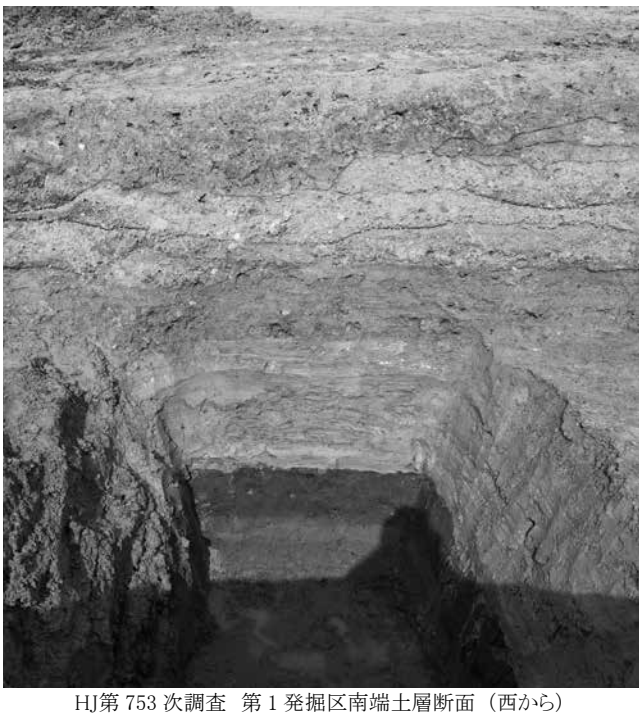
HJ第 753 次調査　発掘区平面図（1/400）



HJ第 753 次調査　発掘区土層図（縦 1/100、横 1/300）

HJ第 753 次調査　第 1 発掘区全景（南から）

HJ第 753 次調査　第 3 発掘区全景（西から）



HJ第 753 次調査　第 1 発掘区南端土層断面（西から）

端（第 3 発掘区）に設定した。また平坦面北側の暗渠排水溝の掘削工事に際して立会調査を実施し土層を確認した。

II　基本層序

第 1 発掘区は、近現代の造成土が厚さ 1.8 ～ 2.5 m あり、その下に厚さ 0.5 ～ 0.8 mの耕作土がある。耕作土下は河川堆積層の暗灰色砂礫である。現地表下 2.5 ～ 2.8 mまで掘削したが、湧水が激しくそれ以下は確認出来なかった。第 2・3 発掘区と平坦面北側の立会調査では厚さ 0.15 mの表土層直下で地山の黄褐色土等となる。

III　検出遺構

第 1 発掘区では先述のとおり河川堆積層を確認し、この層が南北約 20 mにわたり存在することが判明した。耕作土からは江戸時代以降の遺物が出土しているが、河川の詳細な時期は不明。なお堆積層の上面の標高は 81.0 ～ 81.2 mで、南側の佐保川の河原上面が標高約 80 mであることから、第 1 発掘区は佐保川北岸の河原と考えられる。

第 3 発掘区では、平坦面南辺に沿って、高さ約 0.7 m、幅約 4.5 mの土手状の高まり SX01 がある。SX01 は地山の上に淡茶灰色土（小礫含む）を積んで築かれているが、堅固に築かれた様子が無く土塁と認識できるかは不明。周辺にはこの他の遺構は無く、時期を示す遺物も出土していない。

第 2 発掘区は崖の法面で、地山を確認したのみである。

IV　出土遺物

土器類・瓦類が遺物整理箱 1 箱分出土した。多くは表土等からの出土で遺構に伴うものは無い。土器類には須恵器甕、土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢・鉢、国産陶器椀（肥前産）・擂鉢（信楽産）等があり、大半が江戸時代以降のもので、一部中世後期に遡るものもある。

V　調査所見

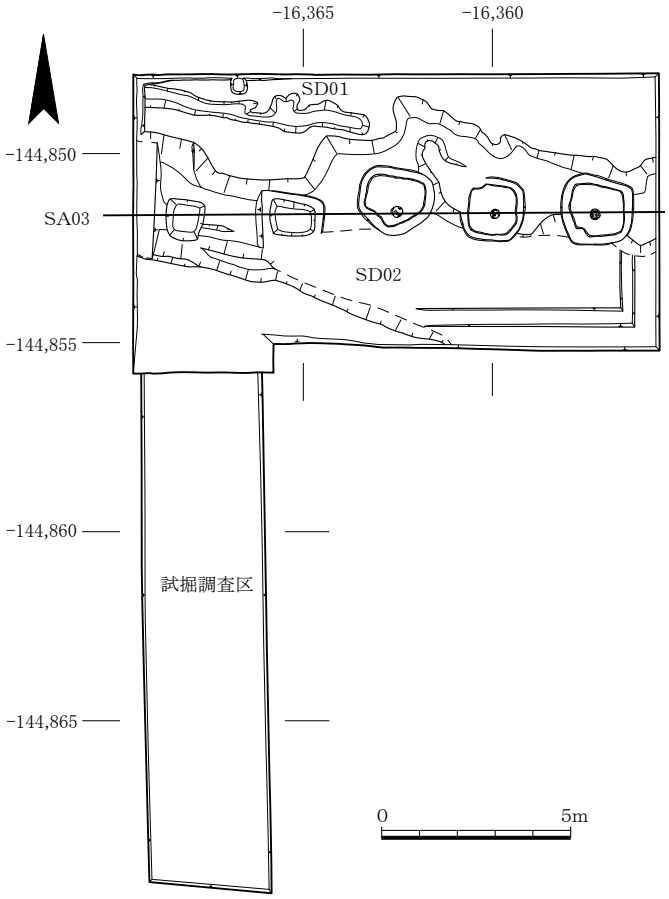
調査の結果、多聞城の南裾で河川堆積層を確認し、一帯が佐保川の河川北岸であることが判明した。河川の時期は不明で、多聞城の時期まで遡りえるかは今後の課題である。また丘陵部分はおおよそ地山を削り出しており、大規模な造成等は確認出来なかった。多聞城に伴う遺構・遺物は発見できず、曲輪等の城郭関連遺構が存在するかは不明である。　（中島和彦）

4．平城京跡（一条条間路（東五坊））の調査　ＨＪ第 754 次

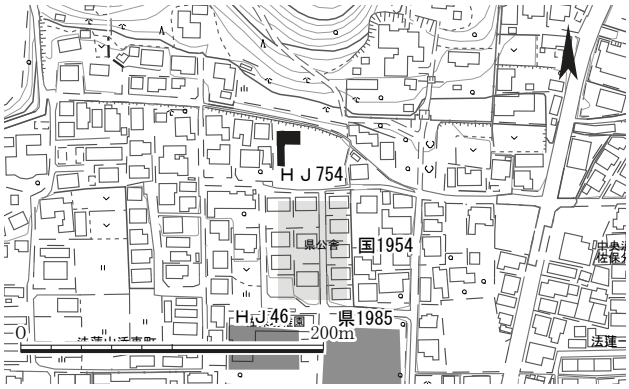
事 業 名　個人住宅新築	調 査 期 間　令和３年７月 26 日～７月 30 日
届出者名　東郷（香港）實業有限公司	調 査 面 積　106㎡
調 査 地　法蓮町 775 番、786 番他	調査担当者　久保邦江

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京二条五坊北郊十一坪北側の一条条間路にあたり、敷地北端部に北側溝が想定される位置にあたる。調査地南側にはかつて奈良中学（奈良高校）があり、昭和 29 年の校庭拡張に伴う調査で奈良時代の掘立柱建物・井戸を検出している。この調査では「小治田寺」の墨書がある土器が出土している（国 1954）[1] ことから、当該地周辺に飛鳥から小治田寺が移転してきたと考えられている[2]。また、小治田寺は「大后寺」の法号を有しており、平安時代の『小右記』の記述の位置関係に矛盾がないことなどが指摘されている。奈良高校が移転した後は昭和 58 年に佐保幼稚園建築に伴う調査、昭和 59・60 年には宿泊施設増築工事及び駐車場整備に伴う調査を実施し、奈良時代の掘立柱建物・塀や、溝、平安時代初頭に廃絶する円形井戸を検出している（ＨＪ第 46 次調査、県 1985）。



HJ第 754 次調査　発掘区平面図（1/200）



ＨＪ第 754 次調査　調査地位置図（1/5,000）

調査に先立って、令和５年６月 27 ～ 29 日に試掘調査 2022-2 次調査を敷地西端で実施した。東西３m、南北 21.5 mの調査区を設定したところ、調査区北端部で東西方向の溝２条を検出した。埋土から奈良時代の須恵器・土師器片が出土したことから、これらの溝が奈良時代の条坊遺構に係るものである可能性が考えられた。そのため、溝の続きを東側へ追求して、平城京北端部の様相を明らかにし、小治田寺（大后寺）に関わる遺構を確認する目的で、試掘部分を含め東西 14 m、南北７（一部８）mの発掘区を設定し本調査を実施した。

Ⅱ　基本層序

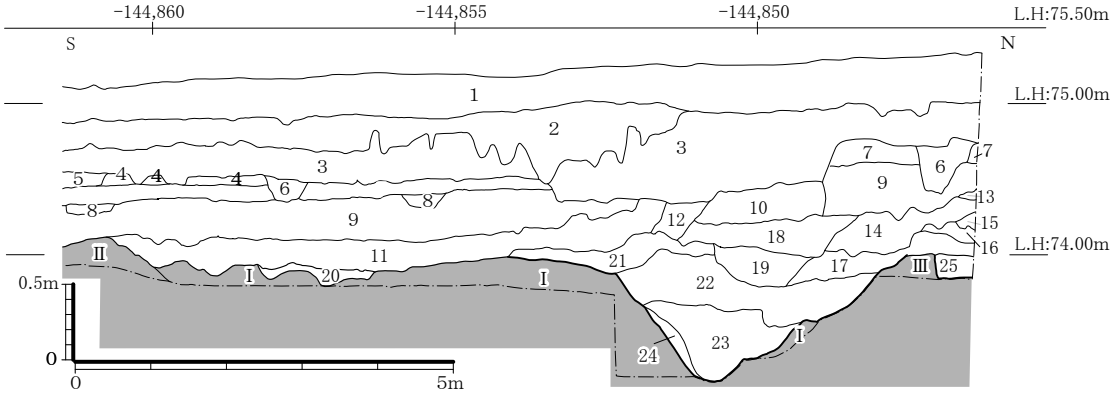
調査地の北側には小河川が西流しており、さらに北側には平城山丘陵から派生する台地が迫っている。

発掘区内の基本的な層序は、上から現代の盛土（0.3 m）、褐灰色土・黒灰色土（ともに耕土 0.2 m）、黄灰色砂質土（床土：0.3 m）、灰色粘砂（床土 :0.2 m）と続き、現地表下約 1.2 mで黄灰色粘質土（地山）若しくは灰色粗砂（旧流路）となる。遺構検出は黄灰色粘質土上面・灰色粗砂上面で行った。検出面の標高は西端が 74.0 mで南北方向はほぼ水平、東端は 74.2 mで西に向かって緩やかに下降している。

Ⅲ　検出遺構

奈良時代の溝２条と、掘立柱塀１条を検出した。

ＳＤ01　発掘区北端で検出した東西方向の溝で、東で南に約 9° 傾く。発掘区外西側に続く。検出長 6.1 m、幅 0.3 ～ 1.0 m、検出面からの深さは 0.2 mである。埋土は灰色砂礫で奈良時代の須恵器甕・土師器甕の破片が出土した。



1 淡灰色礫混土（造成土）
2 褐灰色土（耕土）
3 黒灰色土（耕土）
4 灰色土（床土）
5 灰褐色土（素掘溝埋土）
6 黒灰色砂質土（素掘溝埋土）
7 暗灰色砂質土（床土）
8 灰色砂質土（素掘溝埋土）
9 黄灰色砂質土（床土）
10 灰色砂質土
11 黄灰色砂質土（床土）
12 暗褐色砂質土
13 淡灰色粗砂
14 淡灰色粘質土
15 黄灰色粘質土
16 黒灰色粘質土
17 淡灰色細砂
18 褐灰色砂質土
19 淡灰色細砂
20 暗灰色粘質土
21 褐色粘質砂
22 黒色粘土
23 淡灰色粗砂
24 青灰色細砂（21 ～ 24 :SD02 埋土）
25 灰色砂礫（SD01 埋土）
Ⅰ 黄灰色粘質土（基盤層）
Ⅱ 灰色粗砂（旧流路埋土）
Ⅲ 暗灰色粗砂（旧流路埋土）

ＨＪ第 754 次調査　断面図（横：1/100　縦：1/50）

ＳＤ 02　発掘区北端部で検出した東西方向の溝で、両端は発掘区外に続く。ＳＤ 01 と同様、東で南に約 9°傾く。検出長 15.5 m、幅 2.6 ～ 5.7 m、検出面からの深さは 0.9 m。埋土は上から褐色粘砂、黒色粘土、淡灰色粗砂である。遺物は黒色粘土から土師器の甕の破片が、淡灰色粗砂から土師器の高杯・甕の破片が出土した。

ＳＡ 03　ＳＤ 02 上面で検出した柱間 6 間以上の東西方向の柱列である。東側の柱穴 3 基は長径 1.3 ～ 1.6 m と比較的大型のもので柱根が残存している。西側の 2 基は長径 1.0 ～ 1.2 m と一回り小さく柱根も残存しない。別の建物とも考えられるが、柱間が 2.7 m（9 尺）等間であるため一体の遺構とした。柱根は直径 0.3 ～ 0.4 m の丸太材を 8 角形もしくは 10 角形に面取りしている。地形的にみて北側に柱列の存在を想定できず、試掘の範囲でも南側で柱列を確認していないため単独の柱列としたが、掘立柱建物と想定すると南北 18 m以上の大型建物になる。

Ⅳ　出土遺物

土器類が遺物整理箱 1 箱分出土した。ほとんどが奈良時代のもので、須恵器甕・杯蓋・杯・皿、土師器甕・高杯・皿・炊飯具の把手が出土している。

Ⅴ　調査所見

今回の調査では、小治田寺（大后寺）に係る遺構・遺物は出土しなかったが、一条条間路の北側溝想定位置で東西方向の溝を確認した。ただし正方位に対し約 9°傾くため条坊側溝とは考え難い。一方、同位置では東西方向の柱列を検出することができた。柱列以南には遺構がなく空閑地であるため、この範囲が一条条間路の路面であるとすれば検出した柱列は外京域の北端部を限る施設である可能性がある。　（久保邦江）

註
1）公立学校共済組合　奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条五坊北郊の調査』1970　この報告で　鈴木嘉吉「奈良高等学校々庭における掘立柱建物遺跡」『大和文化研究 2-5』1954 年を再録
2）吉川真司「小治田寺・大后寺の基礎的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 179 集　2013

試掘 2021- 2 調査区全景（北から）

HJ第 754 次調査　発掘区全景（西から）

5．平城京跡（右京北辺三坊三坪）の調査　ＨＪ第755次

事 業 名　保育園新築	調 査 期 間　令和３年９月６日～９月14日
届出者名　株式会社 nexus	調 査 面 積　102㎡
調 査 地　西大寺本町264－９	調査担当者　中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京北辺三坊三坪の中央南端部にあたり、一条北大路に北接する。調査地の西側隣接地では、平成18年度に奈良文化財研究所による発掘調査が行われ、一条北大路を検出し、二坪内では奈良・平安時代の掘立柱塀を２条確認したものの、顕著な遺構は未確認で宅地の様相は不明である。

発掘調査は、建物予定箇所に幅６ｍ、長さ17ｍの南北方向の発掘区を設定し、古代の遺構の確認を目的に調査を実施した。

HJ第755次調査　調査地位置図（1/5,000）

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、上から現代の盛土（アスファルトを含め約0.7ｍ）、耕作土（約0.25ｍ）、灰色砂質土（約0.05ｍ）、奈良時代の遺物包含層の茶灰色砂質土（約0.1ｍ）と続き、現地表下約1.1ｍで灰色砂または青灰色粘土の地山となる。地山面の標高は約74.3ｍで、遺構検出は地山上面で行った。

Ⅲ　検出遺構

掘立柱建物２棟と、建物としてまとまらない柱穴35基、素掘小溝６条を確認した。柱穴は奈良時代以降、素掘小溝の多くは中世以降のものと考えられる。

掘立柱建物ＳＢ01は、南北３間（約9.6ｍ）、東西１間以上の南廂付東西棟建物の西側妻柱列と考えられ、発掘区外東側に続く。身舎部分の柱間は約3.0ｍ等間、廂の出約3.6mで、柱穴の掘方規模も一辺約1.0ｍあり大型の掘立柱建物と想定できる。身舎の柱はすべて抜き取られており、南端の柱抜き取り坑は瓦で埋まり、遺物整理箱６箱分の瓦が出土した。

掘立柱建物ＳＢ02は、南北１間、東西１間以上で発掘区外に続き全容は不明である。柱間は南北約2.4ｍ、東西約2.4ｍである。

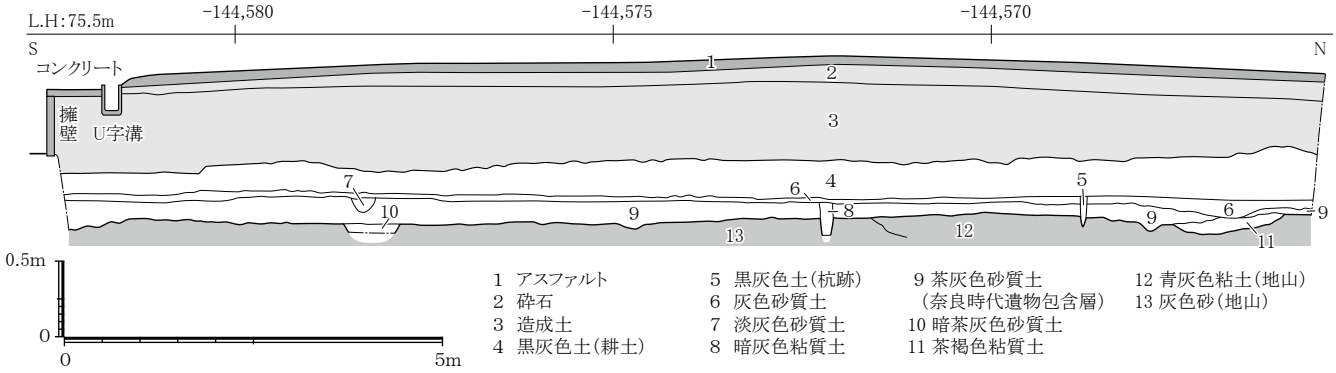
Ⅳ　出土遺物

出土遺物は、土器類が遺物整理箱１箱分、瓦類が遺物整理箱８箱分ある。

土器類には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器等があり、奈良時代から平安時代前半にかけてのものである。瓦類には軒丸瓦（型式不明）１点、軒平瓦（瓦当欠損）１点、磚１点、丸瓦336点（40.540kg）、平瓦217点（30.256kg）がある。

Ⅴ　調査所見

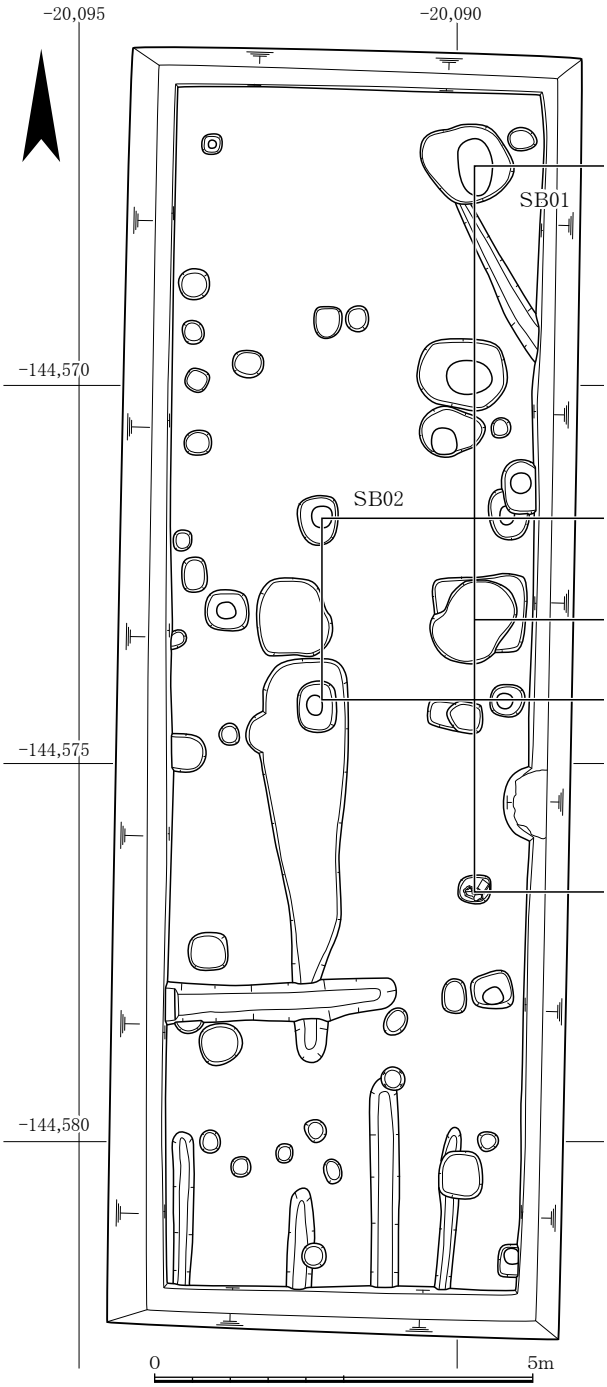
調査の結果、掘立柱建物が２棟検出され、三坪内は奈良時代には宅地として利用されていることが明らかになった。北辺坊は設置の時期を含め土地利用が不明な点が多く、今後の調査の蓄積が望まれる。　（中島和彦）



HJ第755次調査　西壁土層図（横1/100・縦1/50）

HJ第 755 次調査　発掘区全景（北から）

HJ第 755 次調査　発掘区全景（南から）



HJ第 755 次調査　発掘区平面図（1/100）

6．平城京跡（右京六条三坊十六坪）の調査　ＨＪ第 756 次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　令和３年９月 13 日
届出者名　個人	調 査 面 積　80㎡
調 査 地　六条一丁目 801－１、803	調査担当者　中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京六条三坊十六坪の南東隅にあたり、薬師寺西方の丘陵上ある。この丘陵上には条坊の遺存地割が確認できず、発掘調査事例も少なく、奈良時代の様相については不明な点が多い。

調査地は南北に延びる丘陵頂部の平坦地にあたり、東西側に向かって下降している。道路予定部分に幅４ｍ、長さ 20 ｍの東西方向の発掘区を設定し、古代の遺構の確認を目的に調査を実施した。

調査地内は事前の準備工によって表土を除去しており、調査地内の表土直下には所々地山が確認できた。

HJ第 756 次調査　調査地位置図（1/5,000）

HJ第 756 次調査　発掘区全景（南西から）

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、厚さ約 0.1 ｍの表土直下で明黄褐色粘土または明灰色粘土の地山となる。地山面の標高は、発掘区西端で約 78.9 ｍ、東端で約 78.6 ｍとなる。

Ⅲ　検出遺構

時期不明の土坑１基と小土坑数基を確認した。

土坑ＳＫ 01 は、径約 1.2 ｍの平面円形で、深さ約 0.4 ｍまで確認した。掘方は垂直に掘られており埋土は淡橙褐色土（灰白色粘土ブロック含む）で、出土遺物はない。時期・性格とも不明。

発掘区中央にある小土坑群はいずれも深さ約 0.1 ｍで、出土遺物はないが、耕作土で埋まることから近現代のものと考えられる。

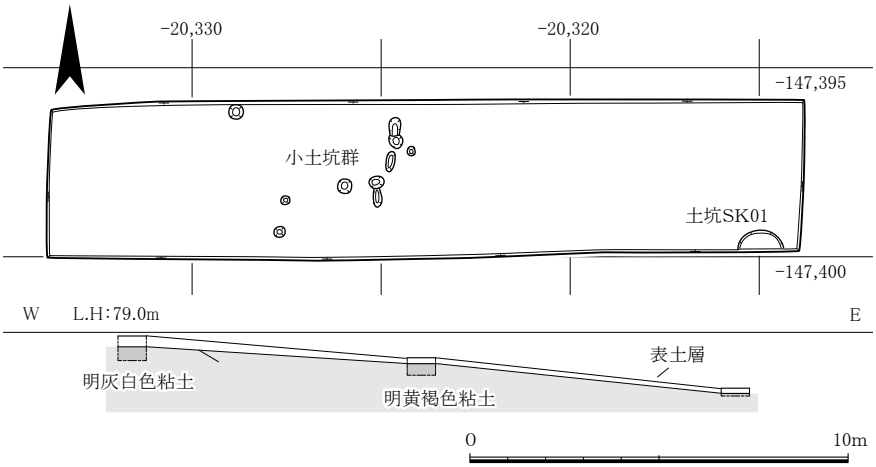
Ⅳ　出土遺物

遺物は出土しなかった。

Ⅴ　調査所見

調査の結果、古代の遺構は確認できなかった。古代当初から土地利用がなかったのか、後世の削平により失われたのかは不明である。今後の周辺の調査に期待される。

（中島和彦）



HJ 第 756 次調査　発掘区平面図（1/200）・土層概念図（1/50）

7．平城京跡（左京四条五坊十一坪）の調査　ＨＪ第757次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	令和３年10月18日～11月11日
届出者名	個人	調 査 面 積	156㎡
調 査 地	杉ヶ町40番１	調査担当者	秋山成人

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京左京四条五坊十一坪にあたり、坪の南半中央西よりに位置する。当該地は周辺で弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物が見つかっている（杉ヶ町遺跡）。これまでの周辺調査にはＨＪ第144次・第360次・第388次・第423次・第721次調査がある。ＨＪ第144次・第721次調査では弥生時代後期の方形竪穴建物を、ＨＪ第360次・第388次・第423次調査では主軸が大きく振れる掘立柱列・建物、小柱穴、弥生時代後期から古墳時代前期の溝を検出している。また平城京の条坊遺構は確認されていない。その他に室町・江戸時代の土坑が見つかっている。以上の調査成果を踏まえ弥生から古墳時代の遺構、平城京に関する遺構、さらに室町・江戸時代の遺構を確認し、宅地の性格を明らかにする目的で実施した。

Ⅱ　基本層序

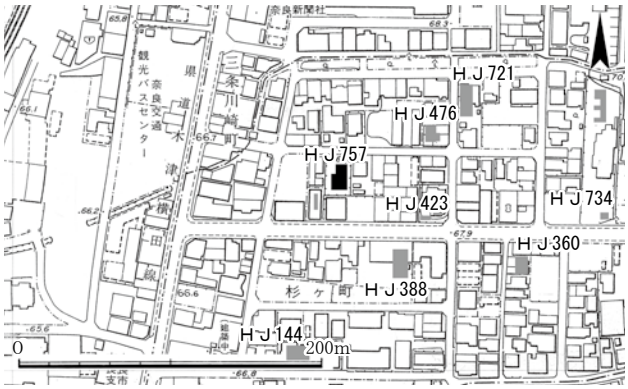
発掘区内の基本層序は上から造成土、黒灰色土（耕作土）、灰色砂質土、褐灰色砂質土、淡褐色砂質土、以下黄灰色粘質土（地山）が堆積する。遺構面は淡褐色砂質土上面と黄灰色粘質土上面で、標高は淡褐色砂質土上面が67.0ｍ、地山上面が66.7ｍである。

Ⅲ　検出遺構

黄灰色粘質土上面で弥生時代の溝ＳＤ01、奈良・平安時代の掘立柱列ＳＡ02・03、淡褐色砂質土上面で時期不明の土坑ＳＫ04～07、黒灰色土（耕作土）直下で江戸時代の粘土採掘坑ＳＫ08を検出した。また、旧河川が発掘区の北東から南西方向に流れており、弥生時代のＳＤ01、奈良時代のＳＡ03を壊している。

ＳＤ01　発掘区北東側で検出した、北西から南東に延びる溝である。規模は長さ3.5ｍ以上、幅0.42ｍ、深さ0.18ｍ。断面Ｕ字形である。埋土は弥生時代後期土器小片を含む暗黄灰色砂質土。重複関係から旧河川より古い。

ＳＡ02・03　発掘区北東側で検出した、南北１間以上の掘立柱列である。ＳＡ02は柱間寸法が2.1ｍ、ＳＡ03は柱間寸法が1.8ｍである。埋土に奈良・平安時代の土師器片を含む。重複関係からＳＡ03はＳＫ06より古い。



HJ第757次調査　調査地位置図（1/5,000）

ＳＫ04～07　発掘区北東側で検出した平面隅丸方形掘方の土坑である。規模は一辺１～1.4ｍ、深さ0.14～0.65ｍで、埋土は灰色粘土である。

ＳＫ08　発掘区南側で検出した、発掘区外西と南に広がる平面不整形掘方の粘土採掘坑である。規模は東西9.5ｍ以上、南北5.6ｍ以上。埋土は暗灰色粘質土（黄灰色粘土含む）で、江戸時代の陶磁器碗・瓦質土器鉢が含まれていた。重複関係から旧河川より新しい。

旧河川　発掘区の中央で北東から南西方向に延びる河川で、２時期の河川が上下に重複する。下層河川は黄灰色粘質土上面で検出し、最大幅6.5ｍ、深さ0.75ｍである。埋土は灰色の粘土と砂で、弥生時代後期の甕・壺・器台が含まれていた。上層河川は淡褐色砂質土上面で検出し、最大幅4.0ｍ、深さ0.4～0.5ｍである。埋土は灰色の砂で、遺物は含まれていなかった。

Ⅳ　出土遺物

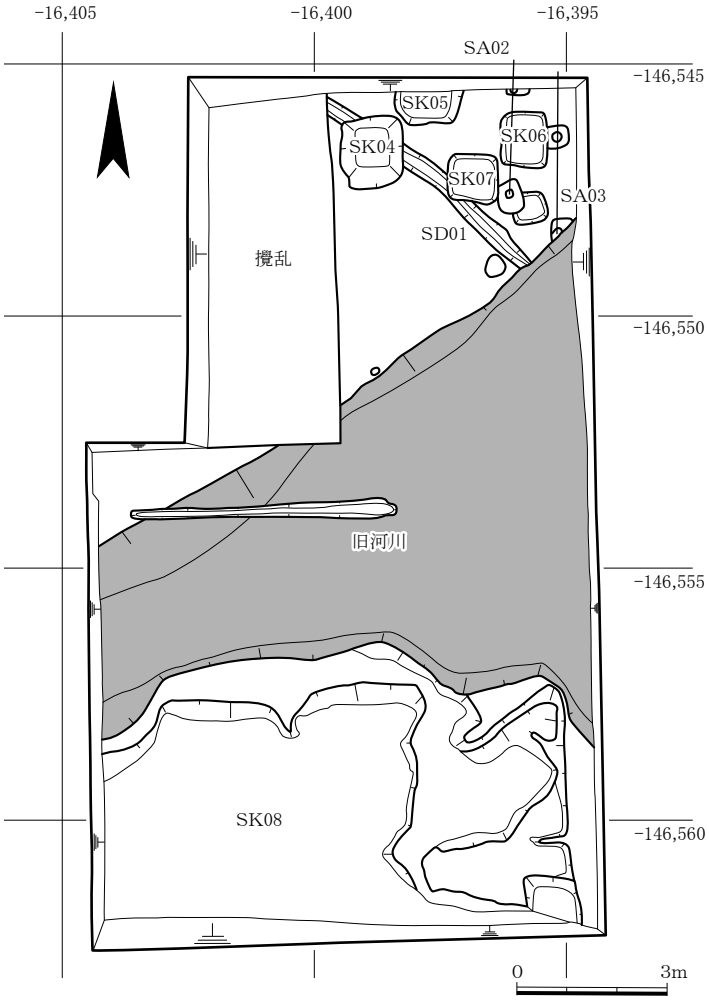
遺物整理箱で９箱分あり、弥生時代後期の壺・甕・鉢・高杯・器台、８・９世紀の土師器椀、須恵器杯、丸瓦・平瓦、17・18世紀の陶磁器がある。

Ⅴ　調査所見

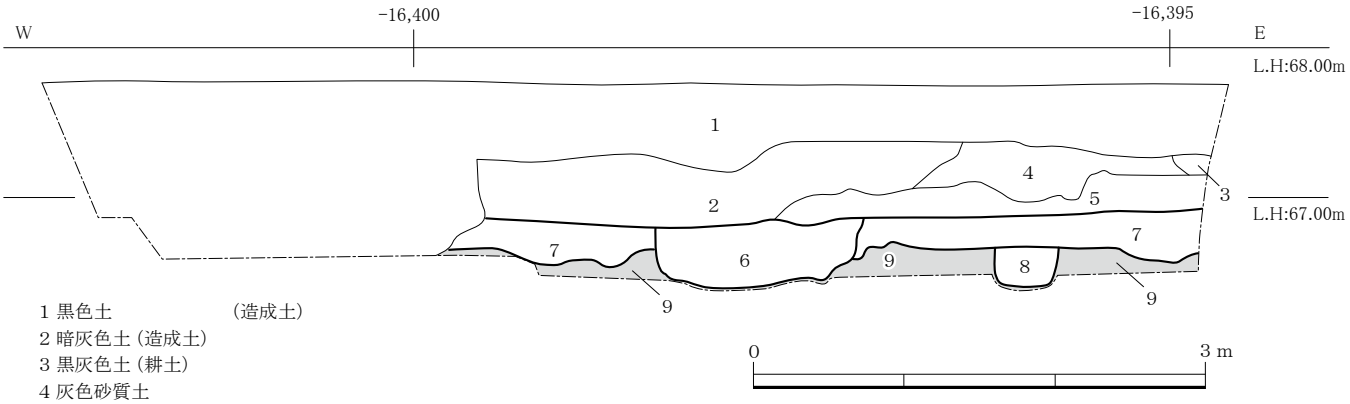
今回確認した弥生時代後期の溝は周辺で検出した遺構の時期と符合するもので、杉ヶ町周辺に広がる弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡の一部と考えられる。そして、奈良時代の柱列が見つかったことにより平城京関連の遺構が残っていることが明らかとなった。また、江戸時代の粘土採掘坑が広がることから、調査地周辺にも粘土採掘が及んでいたことがわかる。　（秋山成人）

HJ第 757 次調査　発掘区南半全景（南西から）

HJ第 757 次調査　発掘区北半全景（東から）



HJ第 757 次調査　発掘区平面図（1/150）



1 黒色土　（造成土）
2 暗灰色土（造成土）
3 黒灰色土（耕土）
4 灰色砂質土
5 褐灰色砂質土
6 灰色粘土（SK 05）
7 淡褐色砂質土
8 暗黄褐色砂質土　（SA 02）
9 黄灰色粘質土　（地山）

HJ第 757 次調査　発掘区北壁土層図（1/50）

８．平城京跡（左京六条三坊十五坪・六条条間北小路）の調査　ＨＪ第758次

事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　令和３年11月８日～令和３年11月11日
届出者名　大和ハウス工業株式会社　奈良支店	調 査 面 積　62㎡
調 査 地　大安寺三丁目85番２、85番５、86番	調査担当者　中島和彦

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では左京六条三坊十五坪の北辺にあたり、敷地北側には六条条間北小路が想定される。十五坪内では過去７回の発掘調査が行われている。奈良時代の掘立柱建物群（HJ第91次調査）、10世紀前半の井戸（HJ第62次調査）、11世紀末の土坑（HJ第74次調査）など特筆する調査成果があるが、いずれも小規模な調査のため坪内の様相は不明である。

発掘調査は十五坪北側の六条条間路北小路の確認を目的とし、開発道路部分に南北方向の発掘区を設定した。

なお、調査地内は事前の準備工により表土を除去しており、調査地内の表土直下には所々地山が確認できた。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の層序は、厚さ約0.3ｍの表土直下で淡茶灰色粘土の地山となる。地山面の標高は、発掘区北端で約58.7ｍ、南端で約58.6ｍである。

Ⅲ　検出遺構

奈良時代の井戸１基、江戸時代の土坑４基、時期不明の溝１条を確認した。

井戸ＳＥ01　東西約1.2ｍ、南北約0.9ｍの平面楕円形掘方の素掘り井戸で、深さ約1.9ｍある。井戸底からは土師器甕、須恵器平瓶・壺が完形でまとまって出土した。

土坑ＳＫ02　平面不整方形の土坑で、東西2.3ｍ以上、南北約2.2ｍ、深さ約0.8ｍある。奈良時代の遺物とともに17世紀後半の肥前産磁器が出土した。

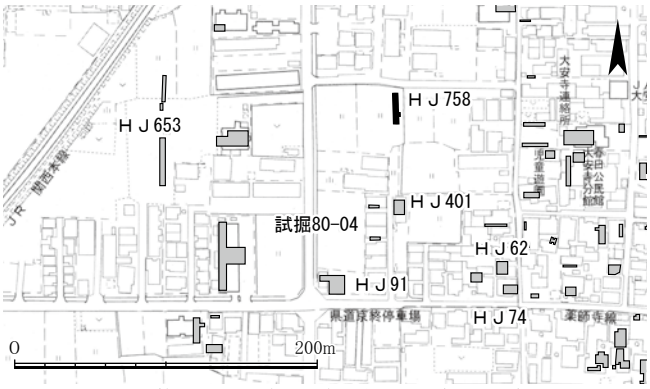
土坑ＳＫ03　平面不整形の土坑で、東西2.7ｍ以上、南北約4.3ｍ、深さ約0.3ｍある。重複関係から土坑ＳＫ02より新しい。

土坑ＳＫ04　平面長方形の土坑で、東西約0.7ｍ以上、南北約1.8ｍ、深さ約0.4ｍある。

土坑ＳＫ05　平面不整方形の土坑で、東西約2.0ｍ、南北1.8ｍ以上、深さ約0.2ｍある。18世紀後半以降の国産陶磁器が出土した。

Ⅳ　出土遺物

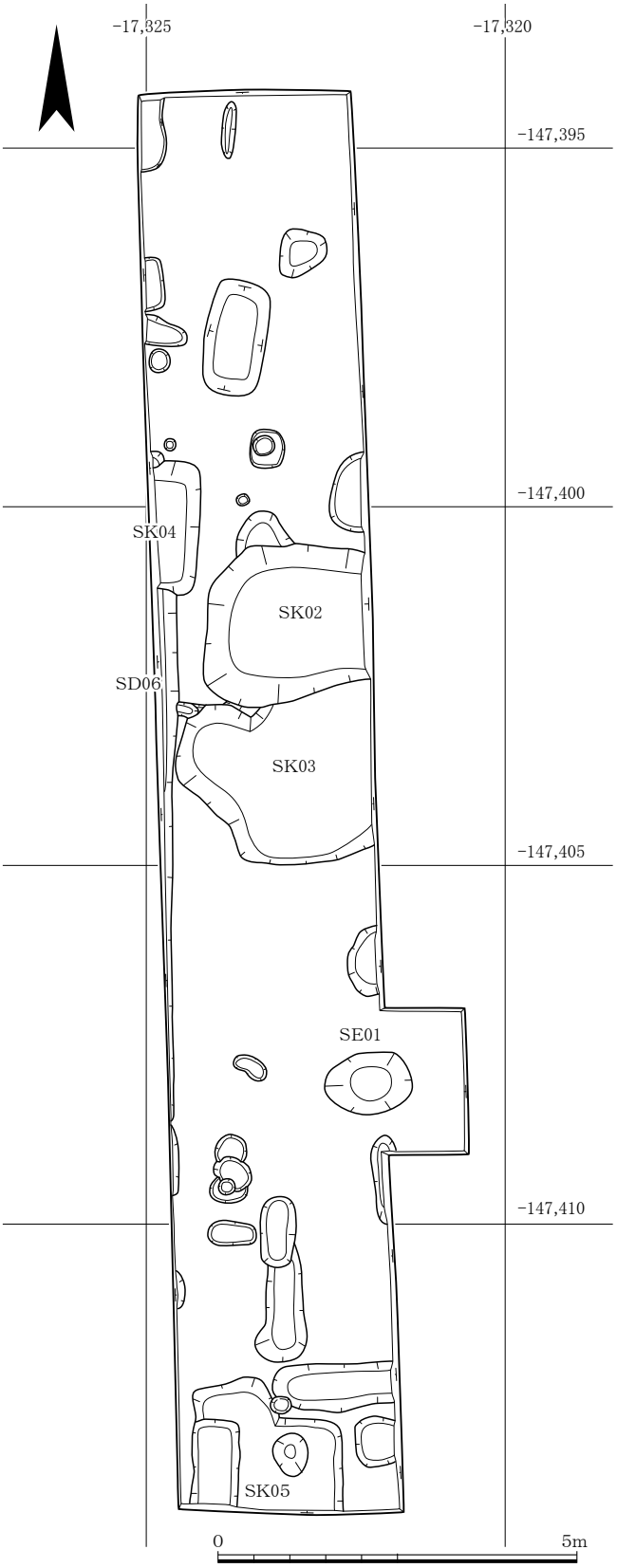
土器類・瓦類が遺物整理箱７箱分、斎串１点、サヌカイト石核１点が出土した。多くは奈良時代の井戸出土のものである。



HJ第758次調査　調査地位置図（1/5,000）

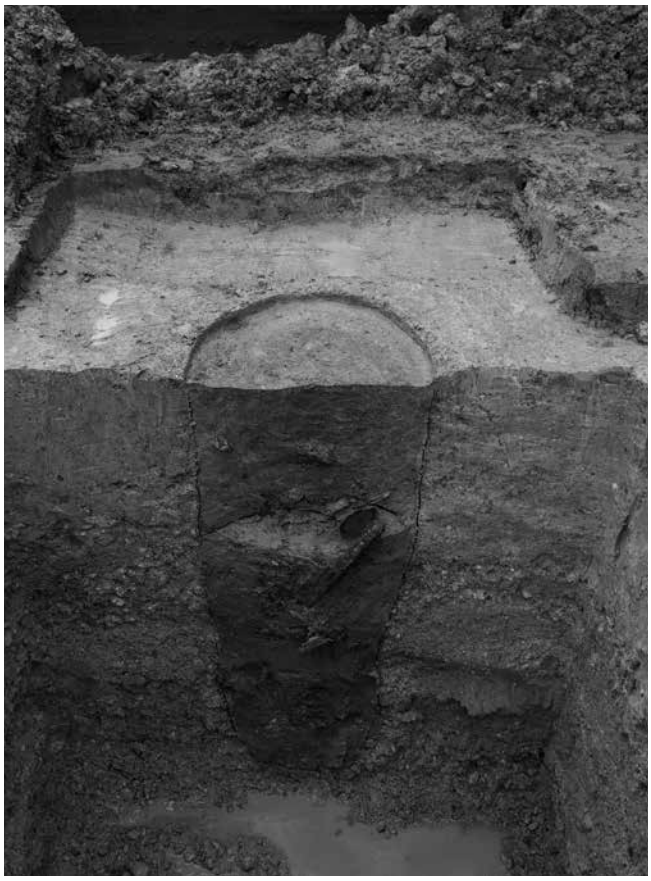
井戸ＳＥ01からは、土器類・瓦類が遺物整理箱５箱分と製塩土器４点、斎串が１点、桃核１点が出土した。土器類には、土師器杯（1)・皿（2･3)・甕、須恵器杯（７～10)・杯蓋（４～６)・平瓶（12)・壺（11)・甕がある。土師器杯・皿は内面に放射状の暗文を施し、３はさらに見込みに螺旋状の暗文を施す。須恵器平瓶の中には、中央部分に紐が巻かれた木棒が残存していた。木棒は長さ約15.2㎝、一辺約1.5㎝の角棒状である。木枝を利用し、２面を割裂き、残りの２面は樹皮を残したままで、丁寧な加工等は施さない。紐の輪を木棒に回し、紐のもう一

HJ第758次調査　発掘区全景（北東から）



HJ第 758 次調査　発掘区平面図（1/100）

HJ第 758 次調査　発掘区全景（南から）



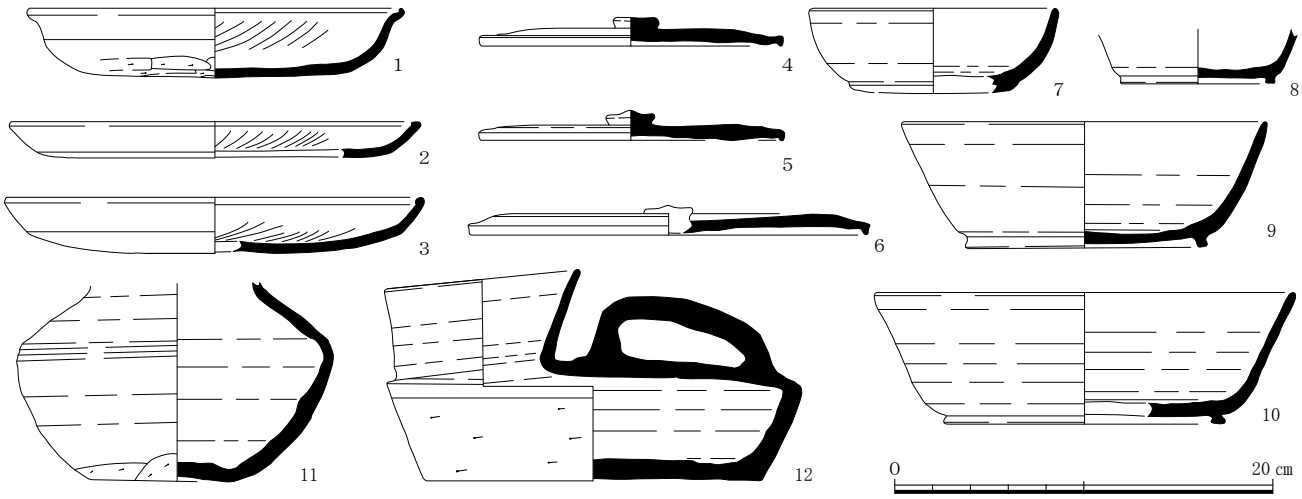
HJ第 758 次調査　井戸 SE01（西から）

HJ第 758 次調査　井戸 SE01 出土平瓶

HJ第 758 次調査　平瓶内紐付き木棒出土状況

HJ第 758 次調査　井戸 SE01 出土紐付き木棒（1/２）

HJ第 758 次調査　井戸 SE01 出土紐付き木棒細部



HJ第 758 次調査　井戸　SE01 出土土器（1/４）

端を輪に通す「ひばり結び」で結ばれる。木棒の長さは平瓶の口縁を上まわり、この平瓶は釣瓶として利用されていたと考えられる。奈良時代の釣瓶の使用方法が判明する貴重な類例である。

Ⅴ　調査所見

調査の結果、六条条間路北小路は確認できなかった。西約 150 m地点の HJ 第 653 次調査では、北側溝が X=−147,393.10 の位置で確認され、条間北小路の幅が 20 大尺または 20 小尺とすれば発掘区内に南側溝が想定されるが、検出できなかった。また奈良時代の遺構も井戸１基の他は検出できず、中世以降に削平されて遺構面が残存していない可能性も考えられる。今後の周辺の調査に期待される。

（中島和彦）

9．平城京跡（左京八条三坊十四坪・東三坊大路）の調査　ＨＪ第759次

事 業 名	宅地造成	調 査 期 間	令和３年12月１日～12月17日
届出者名	株式会社　ハウスプロジェクト	調 査 面 積	176㎡
調 査 地	東九条町498番１、499番、502番	調査担当者	秋山成人

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京東市推定地の東側に隣接する左京八条三坊十四坪にあたり、坪の東辺中央北寄りに位置する。周辺の調査にはＴＩ第３次・第５次、ＨＪ第613次・648次調査がある。ＴＩ第３次・第５調査では八条条間路北側溝・八条三坊十一坪と十四坪を画する東三坊坊間東小路と東西両側溝を検出している。ＨＪ第613次調査では奈良時代に４回の建替えが行われ、宅地内は東西に分割利用されていたと考えられている。ＨＪ第648次調査では奈良から鎌倉時代の遺構と弥生から古墳時代の遺構を確認している。今回の調査は条坊(東三坊大路)関連遺構と宅地利用、下層遺構の確認を目的として、東西２つの発掘区に分けて調査を行った。

Ⅱ　基本層序

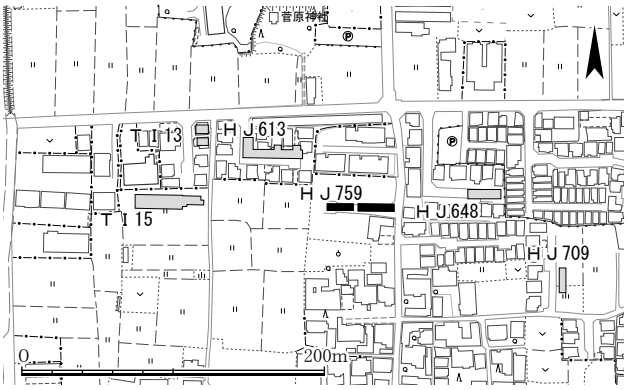
発掘区内の基本層序は上から黒灰色土(耕土)、褐色土、旧河川堆積の褐色粗砂・灰色シルト・淡褐色粗砂、以下地山の黄灰色粘土である。遺構は東発掘区東端から約2/3の旧河川堆積層上面と、それより西の黄灰色粘土（地山）上面で検出した。遺構面の深さは東発掘区東端で現地表面から0.34ｍ（標高57.92ｍ）、西発掘区西端で現地表面から0.33ｍ（標高58.0ｍ）である。

Ⅲ　検出遺構

遺構には奈良時代の東三坊大路西側溝ＳＤ01、井戸ＳＥ02、溝ＳＤ03・04、鎌倉・室町時代の溝ＳＤ05、井戸ＳＥ06、近現代の土坑又は井戸ＳＸ07、時期不明の土坑ＳＫ08・09がある。

ＳＤ01　東発掘区東端で検出した南北に延びる溝である。幅2.8ｍ以上、長さ3.8ｍ以上、深さ0.43ｍ、断面皿状である。溝東肩は発掘区外のため溝心は求められなかったが、検出した溝西肩の座標はＸ：-148,648.3 Ｙ：-17,245.5である。東三坊坊間東小路との位置関係から、SD01は東三坊大路西側溝に相当することがわかる。埋土は上から灰色土、暗灰色土が堆積し、灰色土から12・13世紀の瓦器片・土師器皿、暗灰色土から８・９世紀の土師器片が出土した。奈良時代の東三坊大路西側溝を踏襲し、中世に埋没した可能性がある。

ＳＥ02　西発掘区西側で検出した平面隅丸長方形掘方の井戸である。内側に枠抜取と考えられる痕跡が見られる。掘方は東西2.13ｍ、南北2.2ｍ以上、深さ1.08ｍ以上、埋土は掘方が黄灰色砂質土、抜取が暗褐色土で８世紀の土師器高杯・壺、須恵器甕、製塩土器が出土した。なお、工事に影響を及ぼすために、掘削はGL-約1.3ｍ以上行わなかった。



HJ第759次調査　調査地位置図（1/5,000）

ＳＤ03・04　西発掘区の北辺東で検出した発掘区外北へ延びる溝である。長さ1.7ｍ以上、幅0.7～0.9ｍ、深さ0.13～0.20ｍである。埋土は暗褐色土で、ＳＤ03から奈良・平安時代の土師器甕が出土した。

ＳＤ05　東発掘区南辺に沿って検出した東西に延びる溝である。長さ8.92ｍ以上、幅0.55ｍ、深さ0.25ｍである。埋土は暗灰色粘質土で12・13世紀の瓦器椀、14・15世紀の土師器羽釜、瓦質土器が出土した。

ＳＥ06　東発掘区中央で検出した平面不整円形掘方の井戸である。内側には枠又は枠抜取痕跡がみられる。掘方は東西1.87ｍ、南北1.95ｍ、深さ1.0ｍ以上である。埋土は掘方が暗灰色土で13世紀の土師器羽釜、枠又は枠抜取痕跡は暗灰色土で14・15世紀の瓦質土器鉢・13世紀の土師器羽釜・瓦器皿が出土した。

ＳＸ07　西発掘区東側で検出した平面不整円形掘方の土坑又は井戸である。上段は東西3.13ｍ、南北2.8ｍ、深さ0.37ｍで、黒灰色土（耕作土）から掘られている。この下面北西隅において、東西1.4ｍ、南北1.5ｍの下段掘方があり、深さ0.27ｍまで確認した。埋土は暗灰色土で近現代の陶磁器が出土した。

ＳＫ08・09　東発掘区の西側で検出した平面不整形掘方の土坑である。東西1.2～1.4ｍ、深さ0.13～

0.2 mで、発掘区外北にひろがる。埋土は暗灰色土で、遺物が出土せず時期不明である。

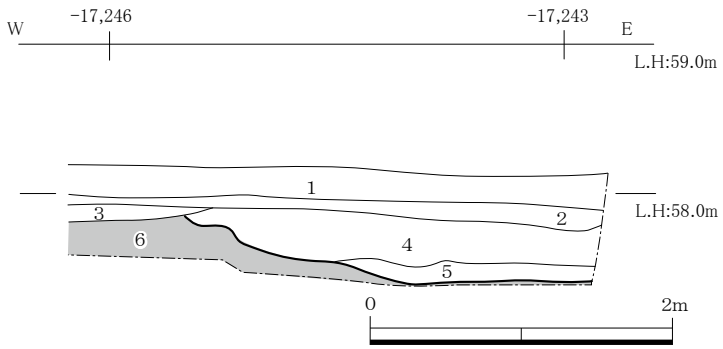
Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で３箱分があり、8・9 世紀の土師器椀･壺･高杯、須恵器甕、製塩土器、軒平瓦、丸瓦、平瓦、９世紀の緑釉陶器、12・13 世紀の土師器羽釜、瓦器皿・椀、14 ～ 16 世紀の瓦質土器鉢、土師器羽釜、近現代の陶磁器がある。

Ⅴ　調査所見

今回の調査で、周辺に鎌倉～室町時代の遺構が広がることが判明した。また、東三坊大路西側溝を検出したことにより平城京条坊復元のための新たな資料を得た。

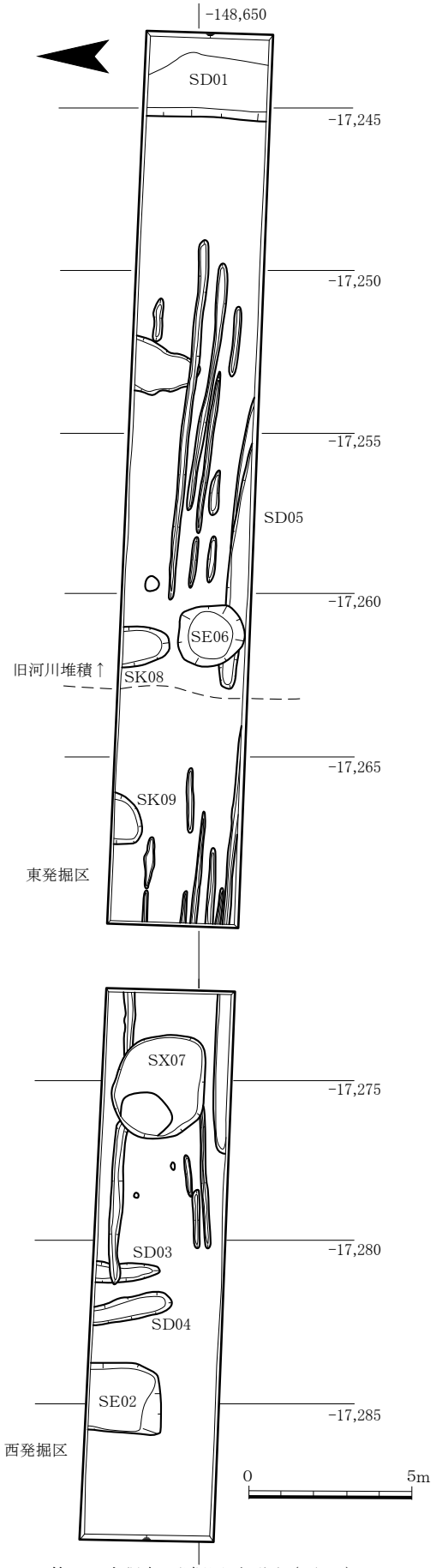
（秋山成人）



1 黒灰色土　（耕土）
2 褐色砂
3 暗褐色砂
4 灰色土　（SD 01）
5 暗灰色土　（SD 01）
6 淡褐色粗砂　（旧河川）

SD01 土層図（1/50）

HJ第 759 次調査　発掘区全景（西から）



HJ第 759 次調査　発掘区平面図（1/200）

10. 平城京跡（左京四条五坊十三坪）の調査　ＨＪ第762次

事 業 名	共同住宅新築	調 査 期 間	令和４年２月28日～３月25日
届出者名	檜尾建設株式会社	調 査 面 積	200.75㎡
調 査 地	杉ヶ町８番１	調査担当者	秋山成人

Ⅰ　はじめに

調査地は平城京左京四条五坊十三坪の北端部に位置する。杉ヶ町周辺では平城京関連遺構が少なく、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構が多く見つかっている。ＨＪ第144次調査では弥生時代後期の方形竪穴建物・土坑、ＨＪ第360次調査では古墳時代以前の掘立柱建物・土器埋納遺構・溝・杭跡、ＨＪ第388次調査では弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱塀・溝、ＨＪ第423次調査では弥生時代後期後半から古墳時代前期の溝･土坑･杭跡、ＨＪ第721次調査では弥生時代末の方形竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑、古墳時代前期の溝、ＨＪ第757次調査では弥生時代後期の溝、奈良時代の掘立柱列を検出している。

以上の成果に基づき、平城京関連遺構と杉ヶ町周辺に広がる弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を確認する目的で調査を行った。

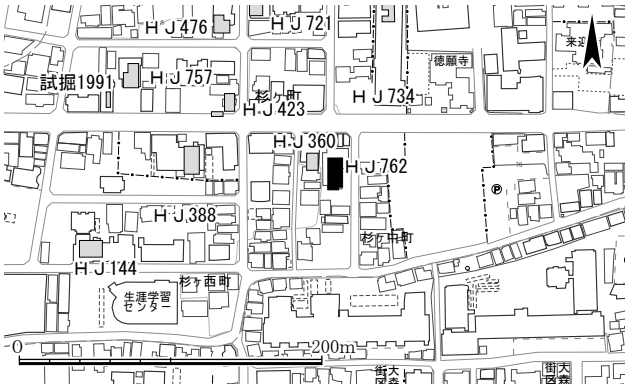
Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は上から造成土、黒灰色土（耕作土)、褐灰色土、淡褐色土、暗黄褐色土（地山）である。遺構は地山上面で検出した。地山までの深さはGL-0.5～0.6ｍで、その標高は概ね68.0ｍである。

Ⅲ　検出遺構

検出遺構には弥生時代後期の方形周溝墓状の遺構１基（ＳＴ01）とその周溝３条（ＳＤ02・03・04)、弥生時代後期末～古墳時代前期初めの溝３条（ＳＤ05・06・07)、掘立柱列５条（ＳＡ08・10・11・12・14)、掘立柱建物３棟（ＳＢ09･13･15)､杭跡ＳＸ16がある。

ＳＴ01（ＳＤ02・ＳＤ03・ＳＤ04）　ＳＴ01は周溝に囲まれ、その内側が南北6.9ｍ、東西6.9ｍ以上の方形となる遺構である｡周溝の内側は削平されたらしく、地山のみが見られ、盛土及び墓壙は確認出来なかった。周溝は北辺にＳＤ02・西辺にＳＤ03・南辺にＳＤ04が廻り、東辺は発掘区外である。北西・南西・南東隅で途切れ､ＳＤ03の北側で1.4ｍ､ＳＤ04の西側で1.8ｍ、ＳＤ04東側で2.3ｍ以上間隔が空く。ＳＤ02は長さ6.2ｍ以上、幅1.2ｍ、深さ0.15ｍ。ＳＤ03は長さ6.5ｍ、幅0.65～0.95ｍ、深さ0.12ｍ。ＳＤ04は長さ1.75ｍ、幅0.75ｍ、深さ0.24ｍ。いずれの溝も



HJ第762次調査　調査地位置図（1/5,000）

断面は逆台形である。埋土は上から暗褐色砂質土、黄褐色砂質土で、弥生時代後期後半の壺・甕・鉢・高杯が出土している。

ＳＤ05　主軸が西で北に20°振れ、発掘区外西へ延びる溝。長さ6.2ｍ以上、幅0.8～1.2ｍ、深さ0.24ｍ。断面は逆台形である。埋土は上から暗褐色砂質土、暗灰色砂質土で、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の壺・高杯・ミニチュア土器が出土している。

ＳＤ06・07　ＳＤ05から２条に分岐し0.65ｍの間隔をあけて並行する溝で、主軸が北で東へ30°振れる。両溝とも､長さ４ｍ､幅0.2～0.3ｍ､深さ0.1～0.2ｍ。断面は逆台型である。埋土は暗灰色砂質土である。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の壺・甕・鉢が出土。

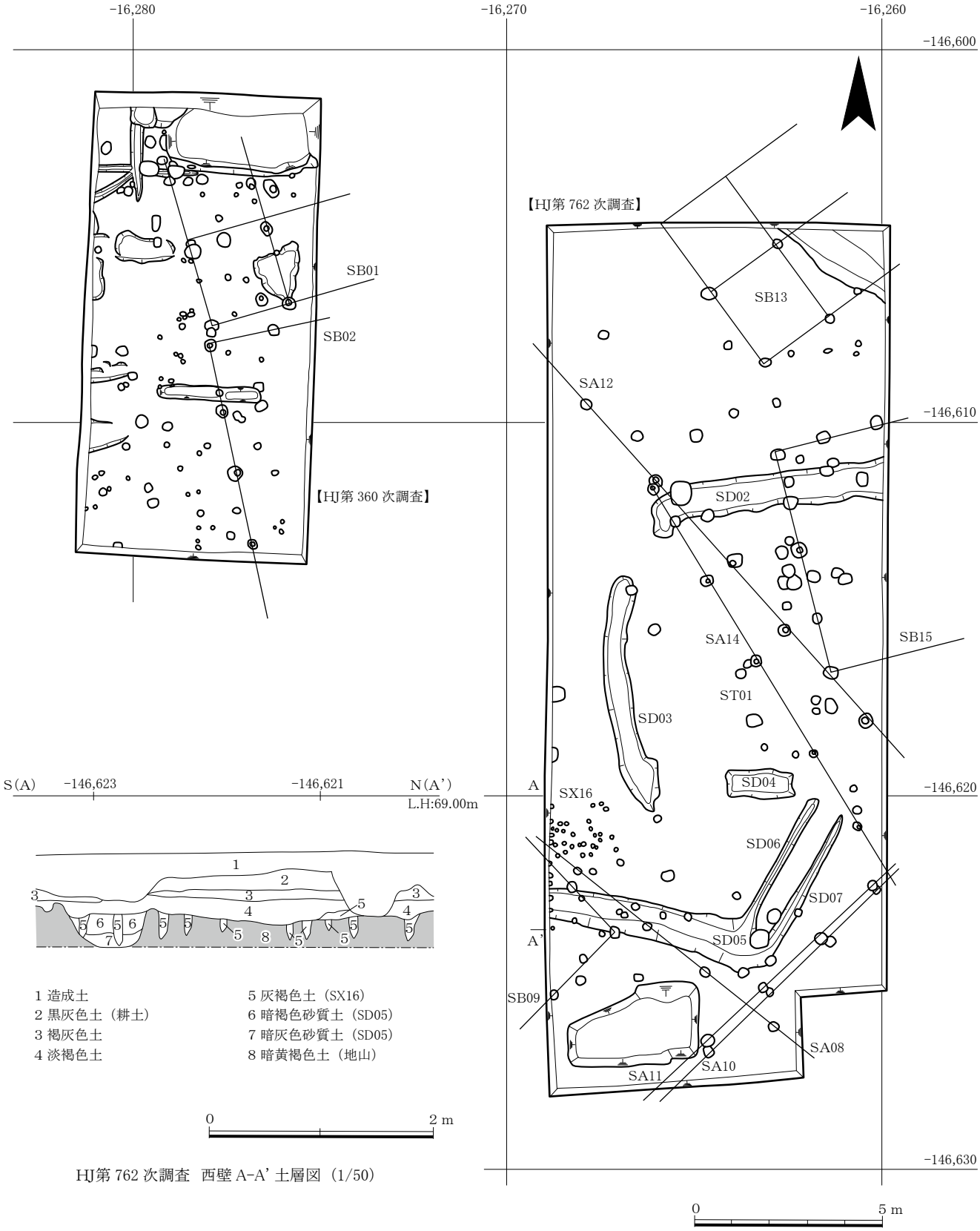
ＳＡ08　主軸が西で北に38°振れる掘立柱列である。柱間は３間（6.6ｍ）以上、柱間寸法は2.4-1.8-2.4ｍである。

ＳＢ09　北で東に45°振れる掘立柱建物と考えられるが主軸は不明である。北西側の柱列は１間(1.8ｍ)以上、南西側の柱列は２間（2.4ｍ）以上で柱間寸法は1.2ｍである。

ＳＡ10　主軸が北で東に45°振れる掘立柱塀で、柱間は３間（6.3ｍ）以上、柱間寸法は2.1ｍ等間である。重複関係からＳＡ11より古い。ＳＢ09と振れが共通する。

ＳＡ11　主軸が東で北に42°振れる掘立柱列である。柱間は３間(6.3ｍ)以上､柱間寸法は2.1ｍ等間である。

ＳＡ12　主軸が北で西に42°振れる掘立柱列である。柱間は４間（11.1ｍ）以上、柱間寸法は北から2.7-



HJ第 762 次調査　西壁 A-A' 土層図（1/50）

HJ第 762 次調査　遺構平面図（1/150）

3.0-2.25-3.15 mである。重複関係からＳＡ14より古い。

ＳＢ13　主軸が北で東に45°振れる掘立柱建物である。柱間は桁行梁間とも１間（2.4 m）以上となる。

ＳＡ14　主軸が北で西に30°振れる掘立柱塀である。柱間は４間（10.35 m）以上、柱間寸法は北から2.85-2.4-2.85-2.25 mである。

ＳＢ15　主軸が北で西に15°振れる掘立柱建物である。柱間は桁行４間（6 m）、梁間２間（2.85 m）以上、桁行柱間寸法は北から1.35-1.35-1.8-1.5 m、梁行柱間寸法は西から1.35-1.5 mである。桁行の北から２間目の柱穴に柱根が残り、放射性炭素年代測定の結果ＡＤ128－AD246の値を得た。

ＳＸ16　ＳＡ08の北西に接し、不規則に分布する杭跡の一群を検出した。径0.06～0.09 m、深さ0.15～0.25 mで、重複関係からＳＤ05より新しい。同様の杭跡はＨＪ第360次・第423次でも検出されているが、今回の調査では隣接する河川跡も見られないことから、堰とも考えられず、詳細不明である。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で４箱分あり、土器類は弥生時代後期後半の弥生土器壺・甕・鉢・高杯・ミニチュア土器、古墳時代前期初頭の土師器壺・甕・高杯がある。

Ⅴ　調査所見

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代の遺構を検出した。西隣のＨＪ第360次調査では主軸が北で西に振れる建物ＳＢ01・02を検出。ＳＢ01は主軸が北で西に15°振れ、ＳＢ02は主軸が北で西に12°振れる。ＳＢ01の振れ幅は今回のＳＢ15と共通し同時期のものと考えられる。

また、今回の発掘区では奈良時代の遺構については検出されず、これまで同様、希薄であることが追認された。

これまでの調査から、杉ヶ町に所在する弥生時代～古墳時代の遺構検出範囲は径約230 mに広がる。奈良県遺跡地図にはＨＪ第144次調査成果を基に「杉ヶ町遺跡」の範囲が記載されているが、1991年度試掘調査成果からその南側にも別に「遺物散布地」が記載されている。これまでの杉ヶ町周辺での調査成果をまとめ、地形などを考慮し、遺跡の範囲を検討していく必要がある。

（秋山成人）

HJ第762次調査　発掘区全景（北東から）

HJ第762次調査　発掘区全景（南から）

HJ第762次調査　杭跡SX16（東から）

HJ 第762次調査 SB15　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C補正あり	
					Libby Age （yrBP）	pMC（%）
IAAA-220057	遺構№38柱根	木片	AAA	-23.74 ± 0.26	1,840 ± 20	79.54 ± 0.23

HJ 第762次調査 SB15　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-220057	1,820 ± 20	79.75 ± 0.22	1,838 ± 22	169calAD － 185calAD (10.2%) 203calAD － 242calAD (58.1%)	128calAD－ 246calAD (95.4%)

11．平城京跡（右京五条四坊二坪）の調査　ＨＪ第765次

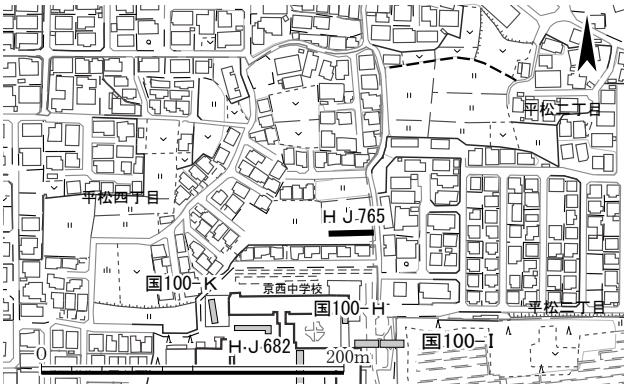
事 業 名　宅地造成	調 査 期 間　令和４年３月７日～３月15日
届出者名　株式会社　八州エイジェント	調 査 面 積　120㎡
調 査 地　平松四丁目360番１他	調査担当者　久保邦江

Ⅰ　はじめに

調査地は、平城京の条坊復元では右京五条四坊二坪の中央西寄り部分にあたり、敷地西端部分で西三坊大路西側溝が想定される位置になる。

現状は水田で、西ノ京丘陵から派生する段丘の一角にある。南側の京西中学校建設に伴い、昭和51年に国立奈良文化財研究所によって第100次調査が実施されている。この調査では主に三坪を調査しているが、北端部のＨ・Ｋトレンチが二坪と三坪を画す五条条間南小路の想定位置に設定されている。東側のＨトレンチでは五条条間南側溝とその両側溝を検出したが、西側のＫトレンチでは遺構が削平されていた。また、同調査のＩトレンチとＪトレンチで西三坊大路とその両側溝を検出した。

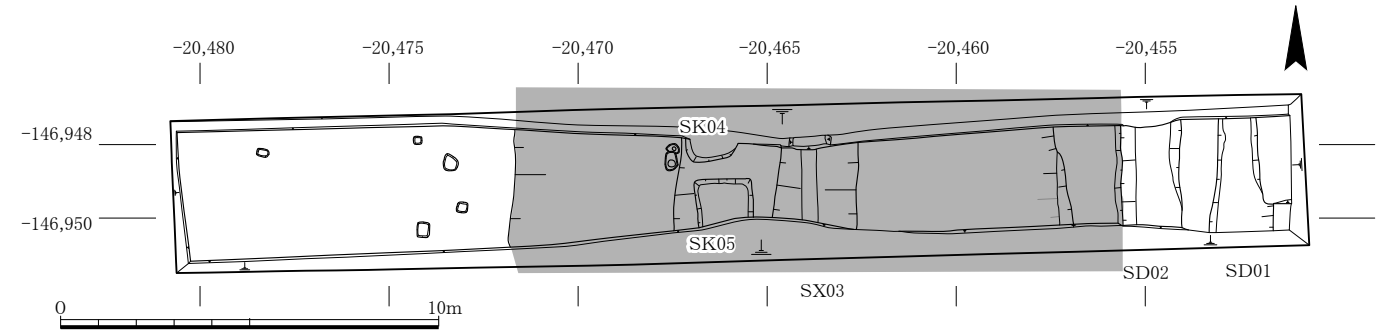
今回の調査地はこの北側延長上にあたることから、西三坊大路の西側溝を検出し、二坪の宅地内の様相を確認することを目的として調査を実施した。

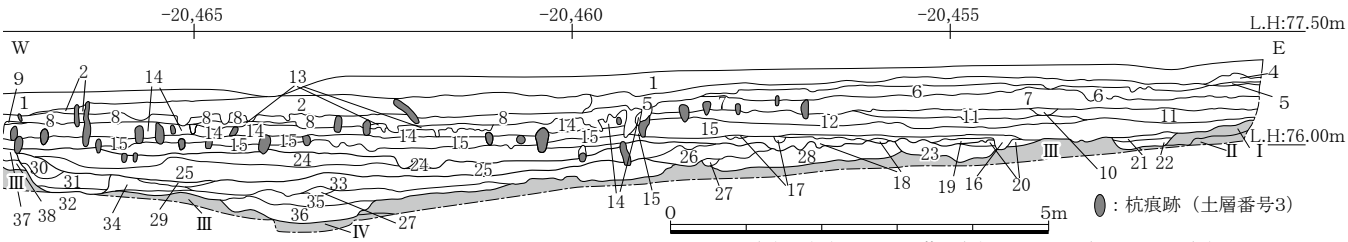


HJ第765次調査　調査地位置図（1/5,000）

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本的な層序は、上から黄灰色中～粗粒砂、黄灰色中粒砂・にぶい黄橙色細粒砂混土（以上耕作土）0.35 m、にぶい黄褐色中粒砂、褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂混土（床土）0.65 mで、東側では現地表面から約1.0 mで明黄褐色シルト～細粒砂の地山と





1　黄灰色中～粗粒砂
2　黄灰色中粒砂・にぶい黄橙色細粒砂（上部に明黄褐色土が混じる）
3　黄灰色中～粗粒砂（杭痕跡）
4　黄灰色中粒砂・にぶい黄橙色細粒砂
5　黄灰色中粒砂・にぶい黄橙色細粒砂
6　にぶい黄褐色中粒砂
7　褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂
8　灰色シルト
9　灰色中粒砂
10 褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂
11 褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂
12 褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂
13 灰色中粒砂
14 明黄褐色シルト・褐色シルト
15 褐灰色中粒砂・にぶい黄褐色中粒砂
16 灰色シルト～中粒砂
17 黄灰色極細～細粒砂
18 にぶい黄褐色中粒砂・褐灰色シルト
19 にぶい黄褐色中粒砂・褐灰色シルト
20 灰黄褐色中粒砂
21 明褐色細～極細粒砂
22 明褐色細～極細粒砂・明黄褐色粗粒砂
23 黄灰色シルト～中粒砂
24 灰黄褐色中粒砂
25 褐灰色シルト
26 灰色シルト～中粒砂
27 褐色シルト・明黄褐色シルト
28 黄灰色極細粒砂・黄灰色細粒砂
29 灰色中～粗粒砂　炭化物混
30 明黄褐色シルト～中粒砂
31 褐灰色中粒砂・にぶい黄色中粒砂
32 黄灰色シルト
33 褐色シルト・灰色細～中粒砂
34 灰色細～中粒砂・褐色シルト
35 黄灰色極細粒砂
36 灰白色極細粒砂～細粒砂
37 明黄褐色シルト～中粒砂
38 黄褐色極細～中粒砂
Ⅰ 灰黄色粗粒砂
Ⅱ 明黄褐色粗粒砂
Ⅲ 明るい黄褐色シルト～細粒砂
Ⅳ 黄褐色粗粒砂（Ⅰ～Ⅳ：地山）

（1・2・4・5：耕土　3：杭痕跡　6～19：床土　21・22：SD01埋土　23：SD02埋土　24～29、33～36：SX03埋土　30～32：SK04埋土）

HJ第765次調査　遺構平面図（1/200）・北壁土層図（1/100）

なる。遺構検出は地山面で行った。遺構検出面の標高は、概ね 76.3 mである。

Ⅲ　検出遺構

奈良時代の溝１条、土坑２基、浅い谷状の落ち込み、時期不明の溝１条、小柱穴７基を確認した。

ＳＤ01　発掘区東端で検出した素掘溝である。幅 1.1 ～ 1.7 m、深さ 0.2 m、長さ３m分を検出した。埋土は上下２層に分かれ、上下層の境目に炭化物が集中する。出土遺物はなかったが、検出位置から、西三坊大路西側溝であると考えられる。

ＳＤ02　ＳＤ01 の西に１mの位置で検出した素掘溝である。幅 1.65 m、深さ 0.3 m、長さ３m分を検出した。出土遺物はなかった。

ＳＸ03　発掘区中央部で検出した南北方向の浅い谷状の落ち込みである。幅 16 m、検出面からの深さは 1.15 mである。0.1 ～ 0.2 m単位で埋め立てられているが、およそ半分埋めた段階でＳＫ04・05 を掘削している。ＳＫ04・05 が埋没後、炭化物の混じる土で再び埋めたてられている。後半に埋めた層から、奈良時代後半の土器が出土している。東肩はＳＤ02 によって壊されていることからＳＤ02 より古いことがわかる。

ＳＫ04・05　ＳＸ03 内で検出された土坑である。南北方向に並んで検出した。ＳＫ04 は不整円形の土坑で、南半を検出した。直径 1.3 m、検出面からの深さは 0.5 m、埋土から埴輪片、奈良時代の土器・瓦が出土した。ＳＫ05 は隅丸方形の土坑で北半を検出した。東西 1．5 m、南北 1．2 m以上、検出面からの深さは 0.6 m。埋土から奈良時代の土器が出土した。

他に発掘区西半で小柱穴を７基検出したが、建物としてはまとまらなかった。

Ⅳ　出土遺物

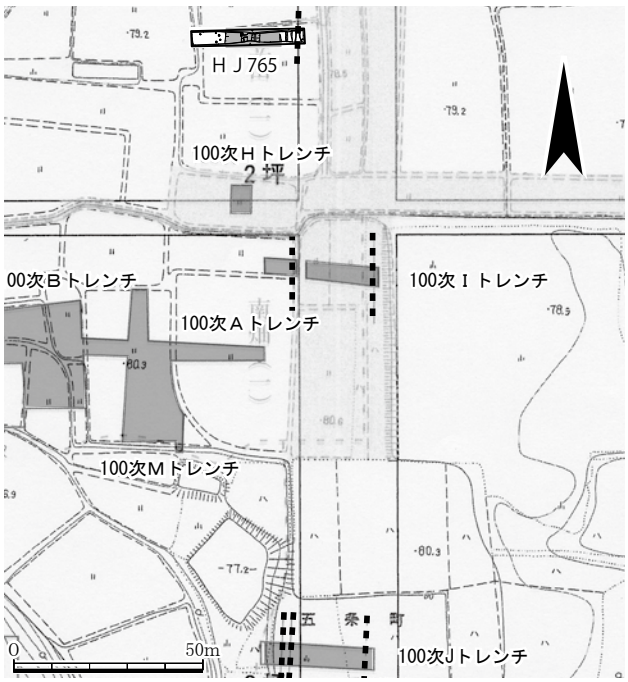
出土遺物は遺物整理箱３箱分ある。土器類には土師器、須恵器があり、奈良時代後半のものである。瓦類は平瓦・丸瓦片が若干出土している。そのほか、円筒埴輪・盾形埴輪、石硯等が出土している。

Ⅴ　調査所見

調査の結果、西三坊大路の西側溝を検出することができた。二坪・三坪間に関しては、西側溝が北で東に 0°38′16″ 傾いていることがわかった。発掘区西半は後世の削平を受けており、宅地内の様相を明らかにすることができなかった。　（久保邦江）

西三坊坊大路側溝座標値一覧表

地点名	Ｘ座標	Ｙ座標
ＳＤ01（今回の調査）	-146,950.000	-20452.350
国 100 次調査Ｉトレンチ	-147,024.100	-20453.175
国 101 次調査Ｊトレンチ	-147,124.400	-20454.750



HJ第 765 次調査　周辺の調査（1/2,000）

HJ 第 765 次調査　発掘区全景（東から）

HJ第 765 次調査　発掘区全景（南西から）

12. 赤田横穴墓群の調査　ＡＤ第６次

事 業 名	大和中央道街路整備社会資本交付金事業	調 査 期 間	令和３年３月８日～令和３年８月 31 日
届出者名	奈良市長	調 査 面 積	757㎡
調 査 地	西大寺赤田町一丁目 556-35 他	調査担当者	吉田朋史・鈴木桃子・三澤朋未

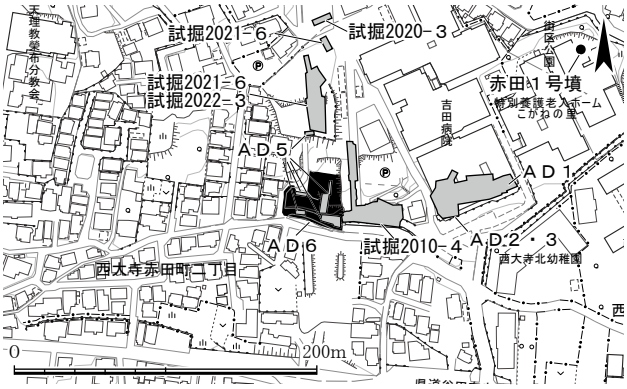
Ⅰ　はじめに

調査地は、西ノ京丘陵北東部の東西に延びる丘陵上に位置し、この東側の南斜面では病院建設に伴って昭和 58 年・平成 22・23 年度に試掘・発掘調査（AD1 ～３次調査）が実施され、16 基の横穴墓が東西に並ぶ赤田横穴墓群を確認した。うち９基を発掘調査し、横穴墓の詳細が明らかになっている。また、谷を挟んだ調査地北側の丘陵南斜面では、令和元年度の大和中央道街路事業に伴う調査で新たに秋篠阿弥陀谷横穴墓群が確認され、横穴墓４基を発見している。

今回の調査地は、赤田横穴墓群の西側隣接地にあたり、事前に横穴墓の有無を確認するための試掘調査を行った（ＡＤ第５次調査）。その結果、丘陵南斜面の中腹から南裾において４～５基の横穴墓があることが明らかになり、令和２～３年度に丘陵南斜面を対象に発掘調査を実施した（ＡＤ第６次調査）。

Ⅱ　基本層序

調査地は丘陵南斜面を雛壇上に造成された宅地である。発掘区の東側壁面の層序は、上段から中段部で上から表土（厚さ 0.1 ～ 0.3 m）、造成土（0.1 ～ 0.5 m）、



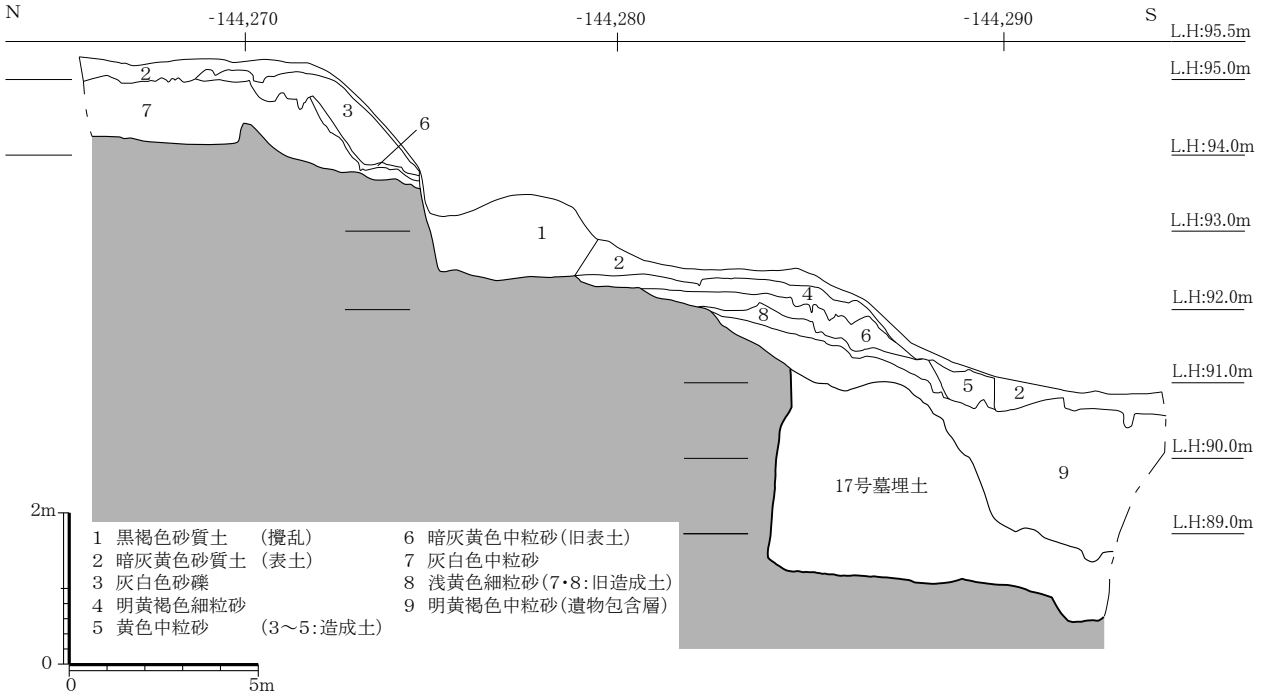
AD 第６次調査　調査地位置図（1/5,000）

旧表土（厚さ 0.1 ～ 0.4 m）、旧造成土（厚さ 0.1 ～ 0.9 m）と続き、茶褐色砂質土・淡黄色中粒砂の地山となる。一方、中段から下段部では、明黄褐色中粒砂の遺物包含層（厚さ 0.1 ～ 2.0 m）が堆積している。

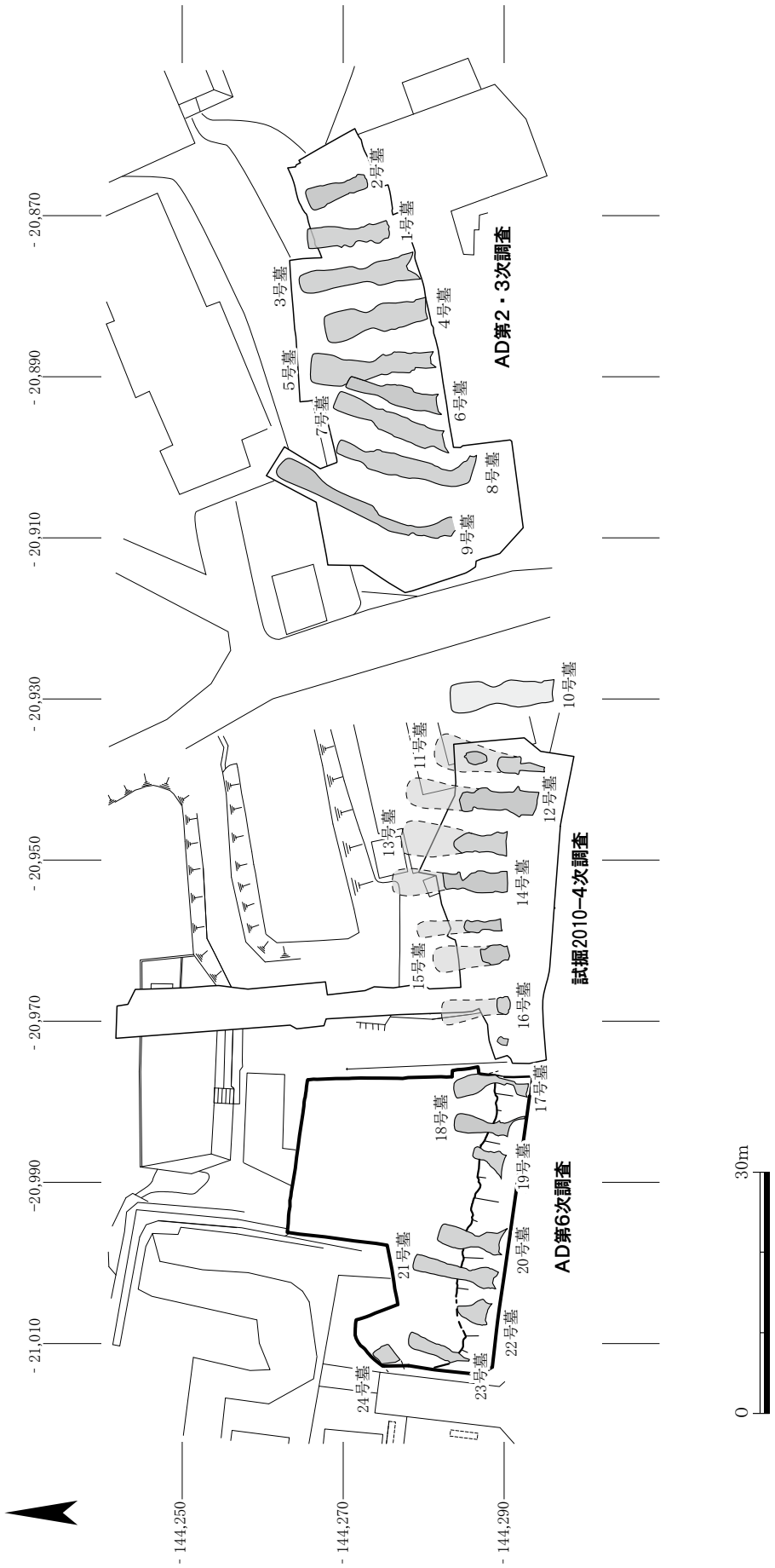
発掘調査地内の地山面の標高は上段部の最高所で約 94.4 m、19 号墓の墓道部分で約 87.7 m と最も低い。

Ⅲ　検出遺構

丘陵南側裾部分で、古墳時代後期から飛鳥時代の横穴墓を８基検出した。これまで確認されている 16 基の通



AD第6次調査　発掘区東壁土層図（縦 1/100・横 1/200）



AD第6次調査　赤田横穴墓群遺構分布図（1/800）

AD第6次調査　遺構平面図（1/200）

AD第6次調査　発掘区全景（南から）

AD第6次調査　発掘区全景（北西から）

AD第６次調査　東壁（南西から）

し番号に続けて東から順に 17 ～ 24 号墓とした。

横穴墓はいずれも丘陵南斜面に築造され、南側に向かって開口する。横穴墓は、棺を納める玄室と丘陵斜面を溝状に切り通して築いた墓道、その間のやや幅の狭まった通路上の羨道から構成されている。17 ～ 21・23 号墓については玄室・羨道・墓道を確認できたが、24 号墓は大半が発掘区外西側に延びており玄室のみの確認となった。玄室内には土師質亀甲形陶棺・土師質円筒形陶棺と木棺などが置かれていたと推定でき、出土遺物から６世紀後半～７世紀中頃にかけてのものと考えられる。

以下にその概要を記述し、規模等は一覧表にまとめた。また、遺構平面図に付す遺物番号はＴが鉄器、Ｄが土器でそれぞれの番号は遺物実測図の遺物番号と対応する。

17 号墓　全長 9.3 m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。中規模の玄室を有する横穴墓である。床面は初葬と追葬の上下２面があり、羨道部では各面に閉塞土が確認できる。

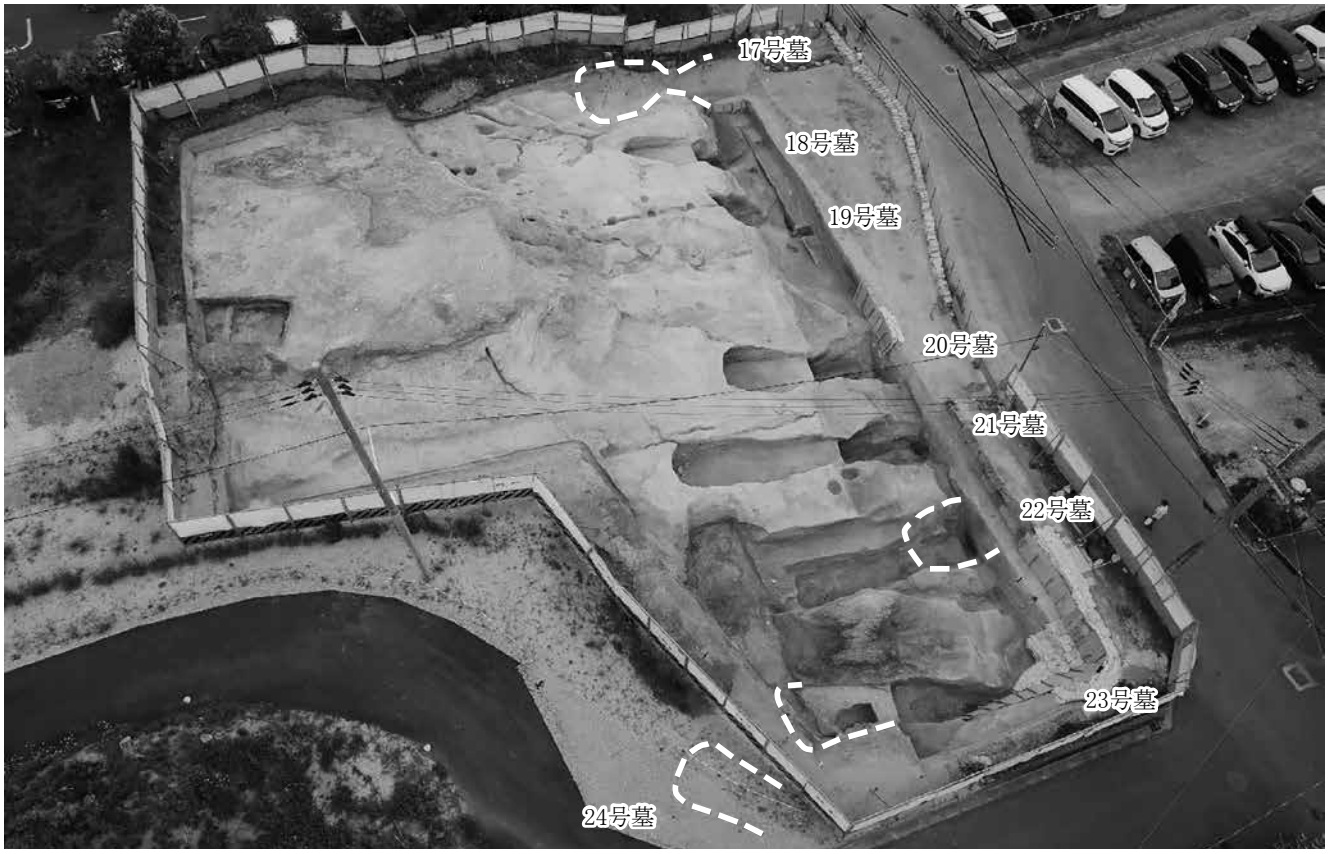
初葬時床面の棺と副葬品

玄室の東側に土師質亀甲形陶棺が玄室主軸方向に沿って置かれ、棺蓋は棺身の上に崩れ落ちた状態で、ほぼ埋葬当時のまま残存していた。陶棺の全長は 2.1 m・幅 0.8 mで、棺の脚部は３行 10 列である。陶棺内から鉄刀子１点出土。

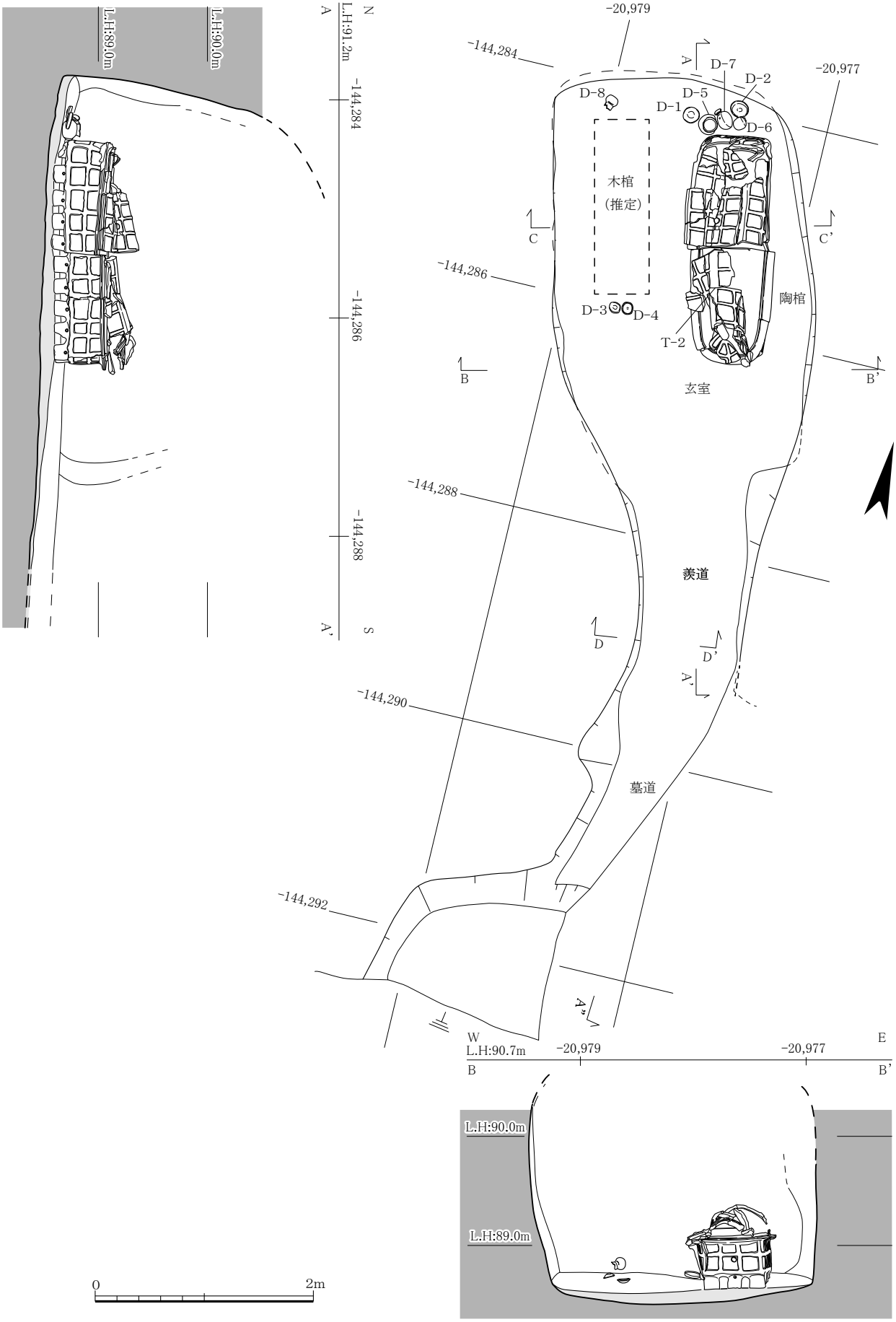
追葬時の棺と副葬品

閉塞土の堆積状態から追葬が行われたと推察される。玄室西側に空閑地があり、奥壁側で土師器丸底壺１点、そこから南へ 1.9 mの位置で須恵器杯身２点が出土した。これらの土器が木棺の両小口に置かれていたと想定すれば、ここに南北方向の木棺が追葬された可能性が考

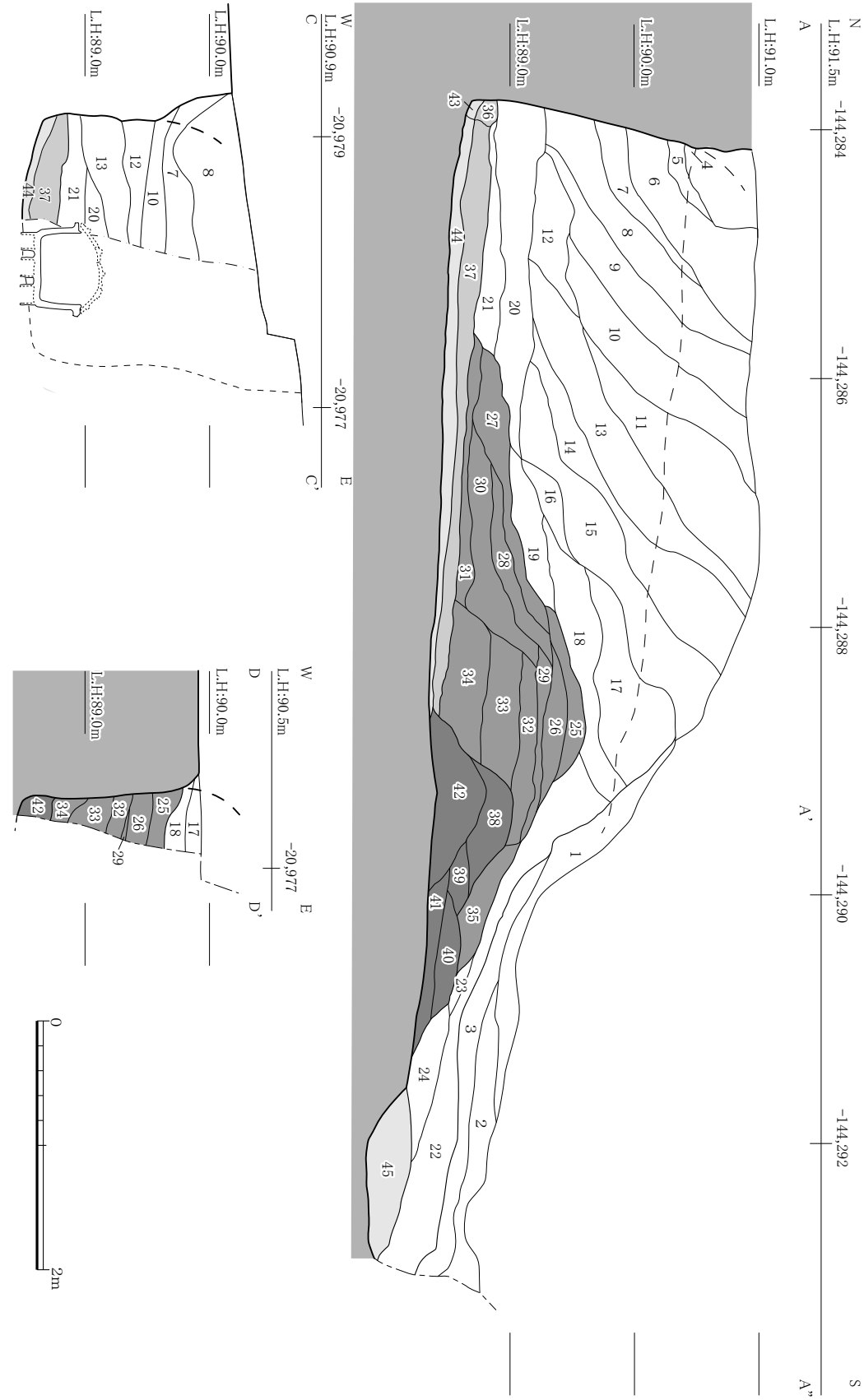
AD第6次調査　17 号墓　亀甲形陶棺出土状態（南西から）



AD第6次調査　発掘区全景（北西から）

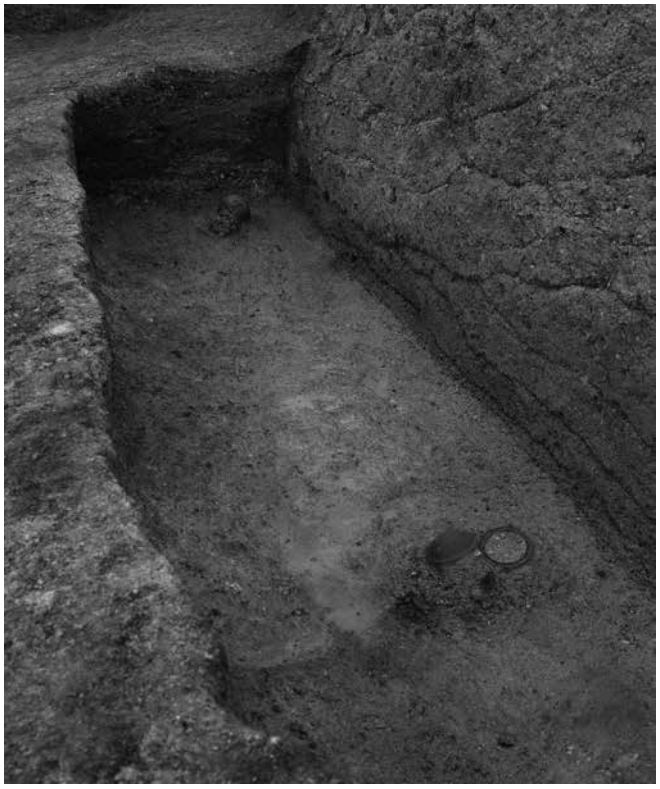


AD第6次調査　17 号墓　平面・立面図（1/50）



1 黄褐色中粒砂
2 淡黄色砂礫
3 灰白色砂礫
4 灰白色細粒砂
5 明黄褐色極細粒砂
6 灰白色砂礫
7 明黄褐色極細粒砂
8 灰白色砂礫
9 灰白色砂礫
10 灰白色極粗粒砂
11 明黄褐色粗粒砂
12 淺黄色砂礫
13 黄褐色中粒砂
14 褐灰色粗粒砂
15 灰白色中粒砂
16 淺黄色砂礫
17 灰白色粗粒砂
18 灰黄色中粒砂
19 灰白色砂礫
20 灰色粗粒砂
21 淺黄色粗粒砂（4～21 玄室崩落土）
22 明黄褐色中粒砂
23 淺黄色中粒砂
24 にぶい黄色砂礫（22～24 墓道埋土）
25 白色細粒砂
26 淡黄色中粒砂
27 黄褐色細粒砂
28 灰白色中粒砂
29 淡黄色細粒砂
30 灰白色砂礫（地山ブロック土混じる）
31 淺黄色粗粒砂
32 灰白色砂礫（地山ブロック土混じる）
33 褐灰色粗粒砂
34 淺黄色中粒砂（25～35 追葬時閉塞土）
35 灰白色中粒砂
36 灰黄色粗粒砂
37 淡黄色中粒砂（36・37 追葬時床面整地土）
38 黄灰色中粒砂
39 明黄褐色粗粒砂
40 黄褐色粗粒砂
41 灰黄色中粒砂
42 暗褐色極細粒砂（38～42 初葬時閉塞土）
43 黄灰色粗粒砂
44 明黄褐色粗粒砂
45 淺黄色極粗粒砂（43～45 初葬時整地土）

AD第6次調査 17 号墓 平面・断面図（1/50）



AD第6次調査　17 号墓玄室　西側土器出土状態（南から）

AD第6次調査　18 号墓　遺物出土状態（南から）

えられるが、木質が腐朽して痕跡を留めていない。

18 号墓　全長 8.6 m以上で、墓道の大半が後世の削平を受けているが、その南端は発掘区外続く。中規模の玄室を有する横穴墓である。床面は初葬と追葬の上下２面があり、羨道部ではそれぞれの面で閉塞土が確認できる。

初葬時の棺と副葬品

玄室の東半部に寄せて合口の土師質円筒形陶棺１基を東側、木棺（推定）１基を西側に玄室主軸と並行して配置する。

円筒形陶棺は棺蓋・棺身とも完存しており、横置きの状態で出土し、全長 0.9 m・幅 0.23 mである。

円筒形陶棺内の北側から鹿角柄刀子１点・南側から鉄鏃１点が出土した。木棺（推定）は腐朽し残存していないが、拳大の円礫を四隅に配置した棺台の上に安置されていたと推察できる。

西側に近接する棺台付近から鉄鏃１点、玄室奥壁西側から鉄鏃１点が出土した。

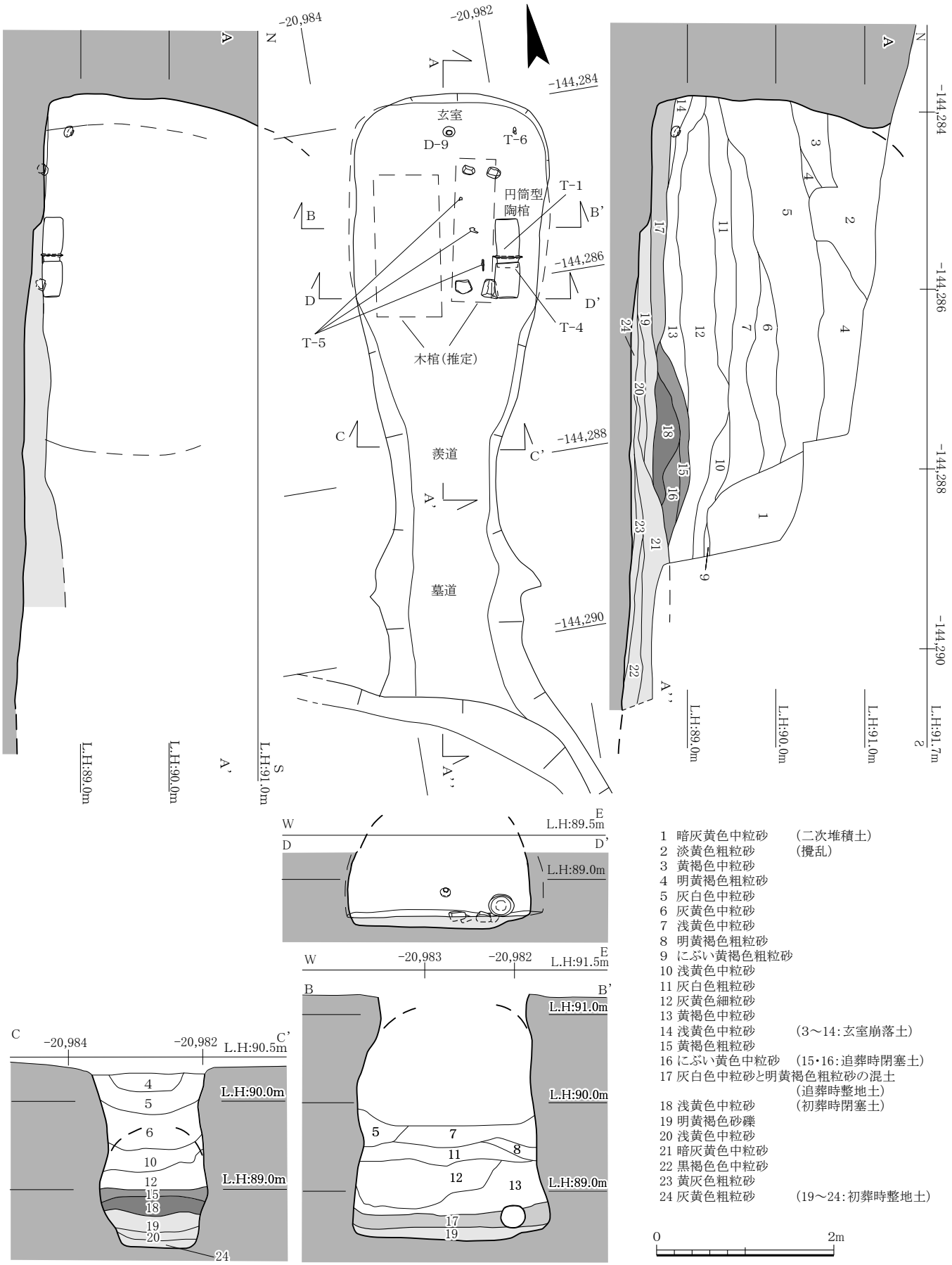
追葬時の棺と副葬品

棺の明確な痕跡を確認できなかったが、閉塞土の堆積状態や初葬床面の上に 0.2 mの整地層があり、副葬品が出土したことから追葬が行われたと推察される。

玄室西側に空閑地があり、ここに南北方向の木棺が追葬された可能性が考えられるが、木質が腐朽して痕跡を留めていない。玄室奥壁北側中央付近で須恵器短頸壺１点（D-9）が出土した。

AD第6次調査　18 号墓　円筒形陶棺内遺物出土状態（南から）

19 号墓　全長 5.2 m以上で、羨道の一部及び墓道は後世の削平を受けている。今回確認した横穴墓の中で、玄



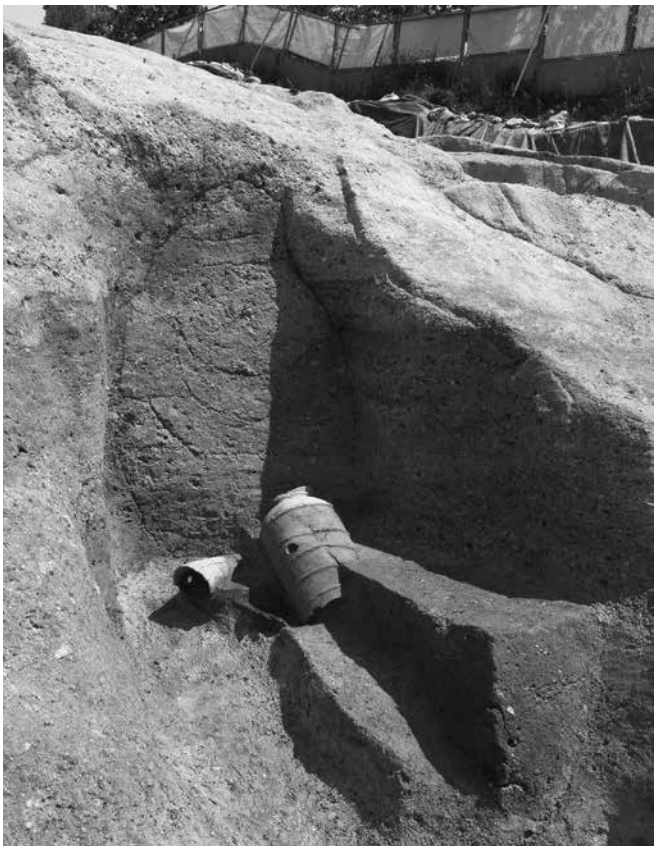
AD第6次調査　18 号墓　平面・断面・立面図（1/60）

室の規模が最も小さい。床面は１面で、羨道部では閉塞土が確認できる。玄室の規模が他の横穴墓と比べ小型であることから横穴墓の最終段階（７世紀中頃）に埋葬されたと考えられる。

玄室中央部の床面に木板が玄室主軸方向に沿って残存していた。板は腐食が進み原形をとどめないが、残存状況から長さ 1.67 m、幅 0.6 m程度に復元でき、木棺の底板と考えられる。底板の南端では主軸方向に直交する桟木を確認した。板はスギ材で、裏面に植物のクズの蔓が付着していたことから、棺をクズの蔓で縛っていた可能性がある。木棺に伴う副葬品は確認できなかった。

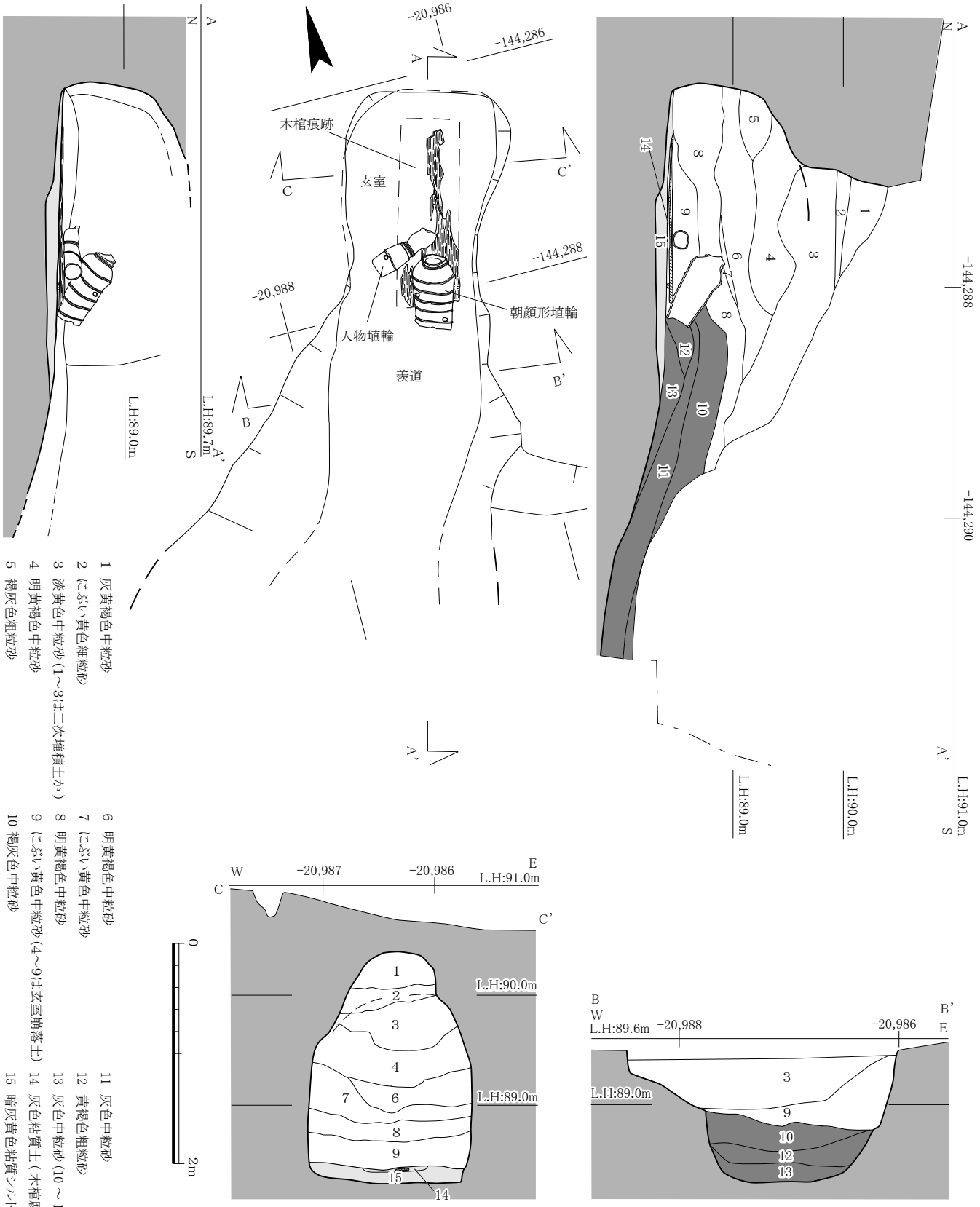
なお、玄門付近において頭部および両腕部が欠損した人物埴輪と朝顔形埴輪が玄室側に倒れた状態で閉塞土の下から出土した。出土した埴輪は、19 号墓の築造時期より古く、６世紀前半から中頃のもので、近隣の古墳から運び込んで転用された可能性が高い。出土状態から埋葬時には樹立されていたが、閉塞土を積み上げた際に玄室側へ倒れたと推察される。

20 号墓　全長 7.7 m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。比較的大型の玄室を有する横穴墓で、羨道が短く、



AD第6次調査　19 号墓　埴輪出土状態（南西から）

AD第6次調査　19 号墓　出土埴輪の樹立状態（復元）（南西から）



AD第6次調査　19 号墓　平面・断面・立面図（1/50）

玄室の全長は奥壁幅の２倍以上である。床面は１面で、羨道部では閉塞土が確認でき、玄門付近の高さは横断面より 1.2 ｍと推定できる。

棺の明確な痕跡を確認できなかったが、閉塞土の存在から埋葬が行われたと推察される。木棺が腐朽して痕跡を留めておらず、埋葬位置は確定できない。

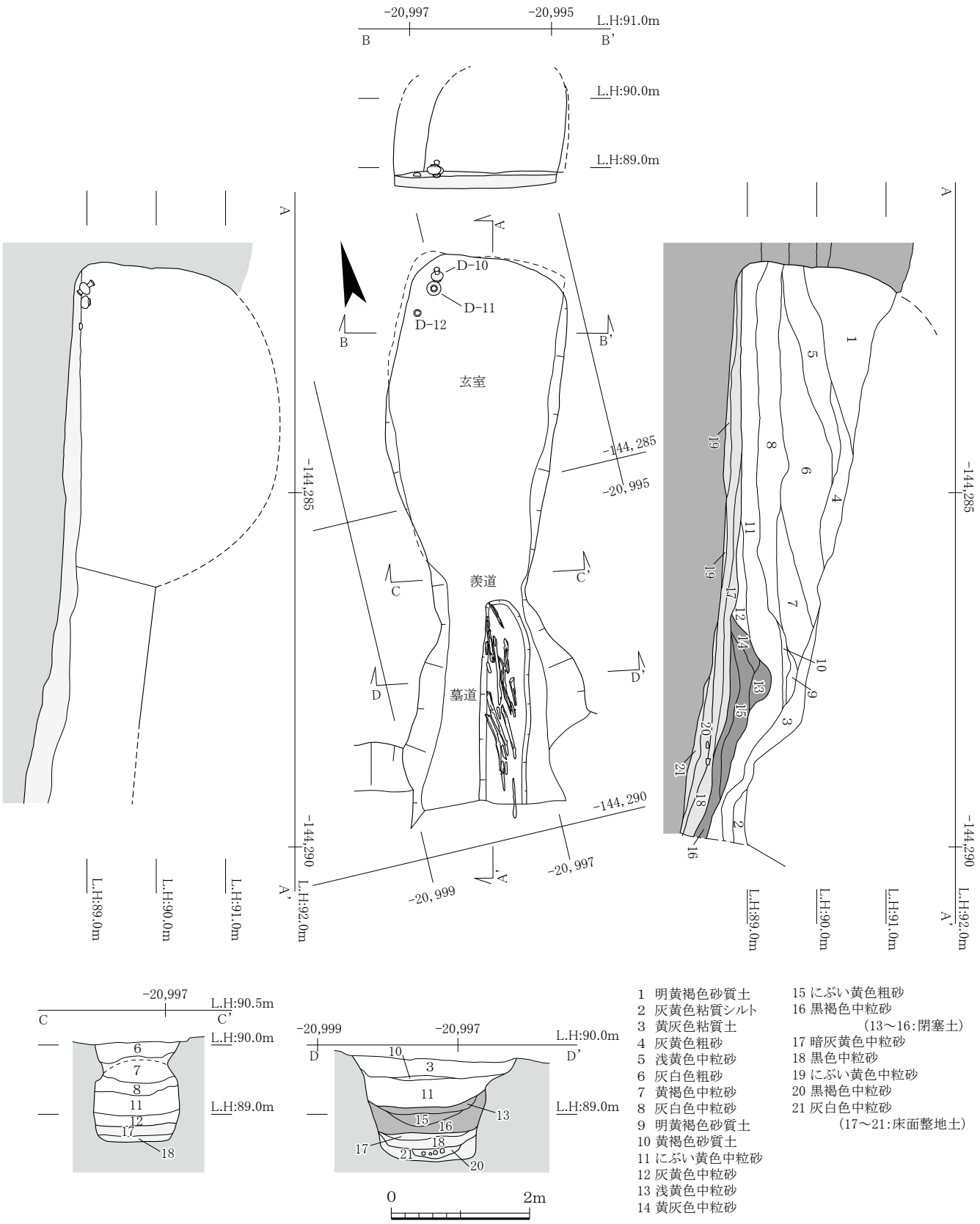
玄室北西側の奥壁付近で須恵器台付長頸壺１点・短頸壺１点、土師器椀１点が出土した。

なお、墓道の整地土下から南北方向の溝を確認した。溝の中からマツ材の枝木が出土しており、この部分で湧

AD第6次調査　20 号墓　羨道部閉塞土（南西から）

AD第6次調査　20 号墓　玄室北西側　遺物出土状態（南から）

AD第6次調査　20 号墓　全景（南西から）



AD第6次調査 20 号墓 平面・断面・立面図（1/80）

水が認められるため構築時の排水溝である可能性が考えられる。

21 号墓　全長 10.1 m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。大型の玄室を有する横穴墓で、羨道が短く、玄室の全長は奥壁幅の２倍以上である。床面は１面で、羨道部では閉塞土が確認できる。玄室中央部分は、後世に攪乱されている。

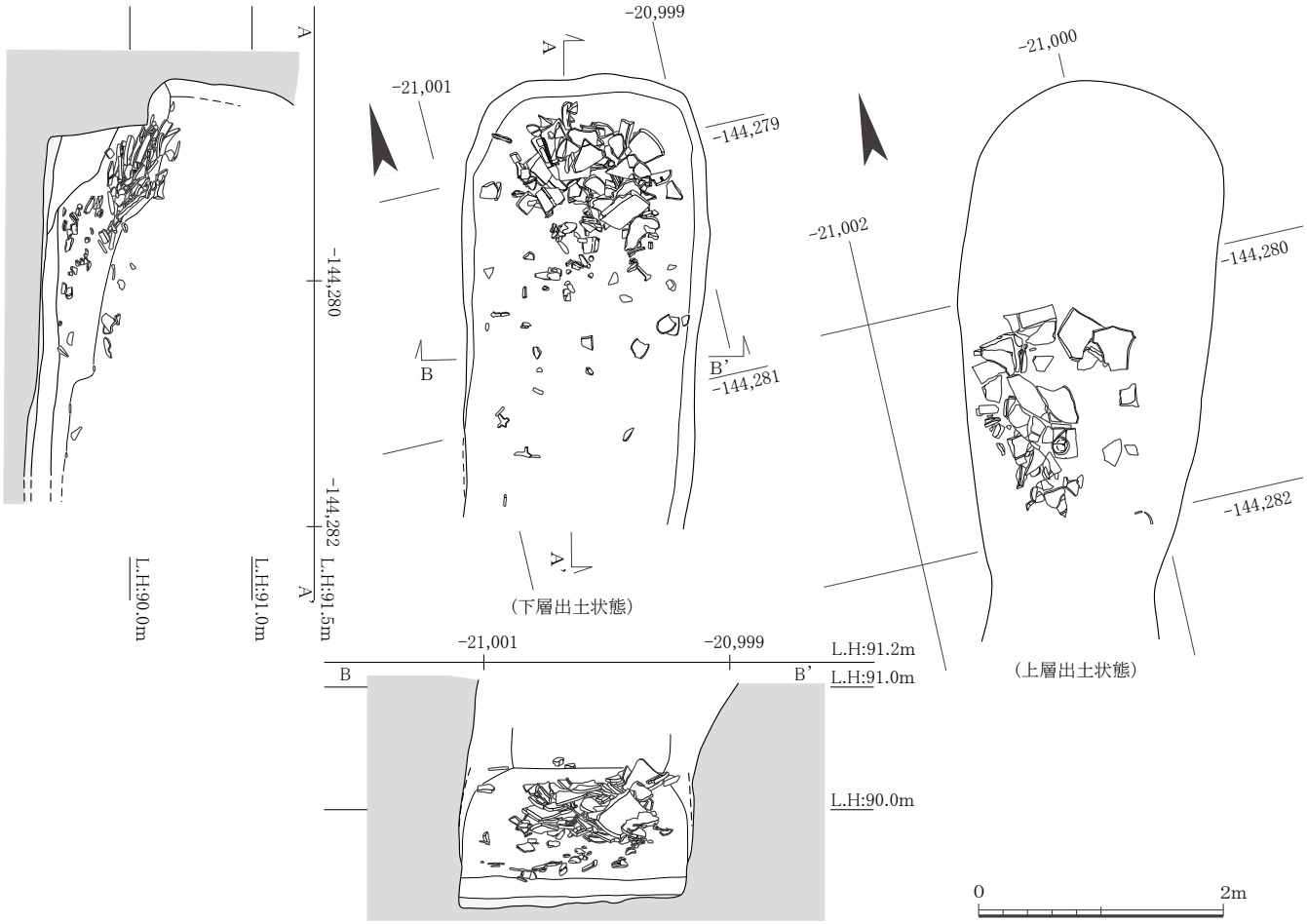
玄室の西側から主軸方向に沿って土師質亀甲形陶棺の脚部痕跡、玄室床面東側から木棺を置いた棺台と考えられる横長の円礫を２か所で確認した。陶棺は壊され奥壁側に寄せられていたが、３行８列の脚部の痕跡から３陶棺が置かれていた位置が明らかになった。

さらに、玄室の奥壁北東側で土師器長胴甕を用いた蔵骨器１基が東側に倒れた状態で出土した。

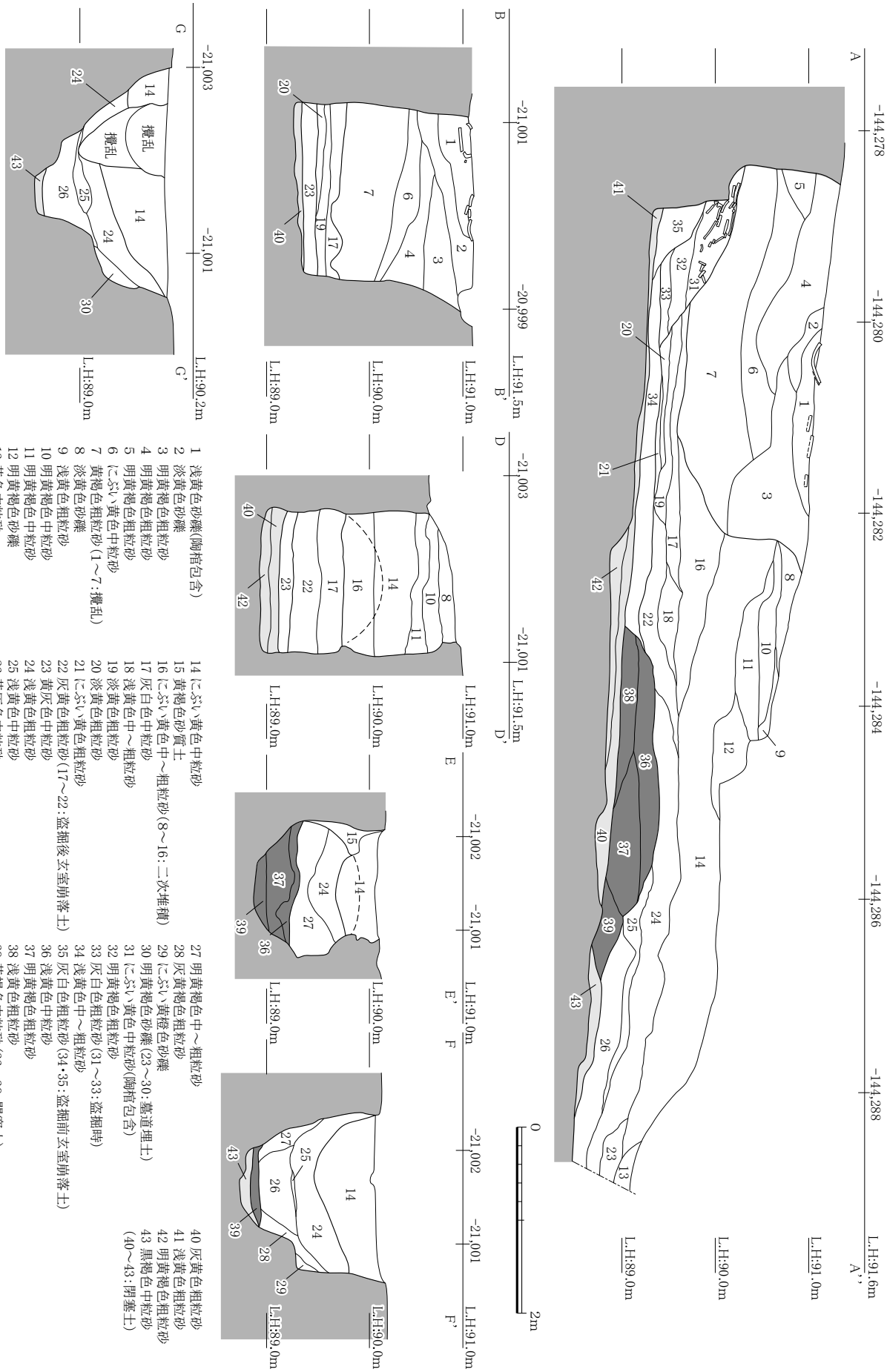
木棺・蔵骨器の存在から追葬が少なくとも１回以上行われていると推察される。また、奥壁に寄せられていた

AD第6次調査 21 号墓 最上層 陶棺出土状態（南西から）

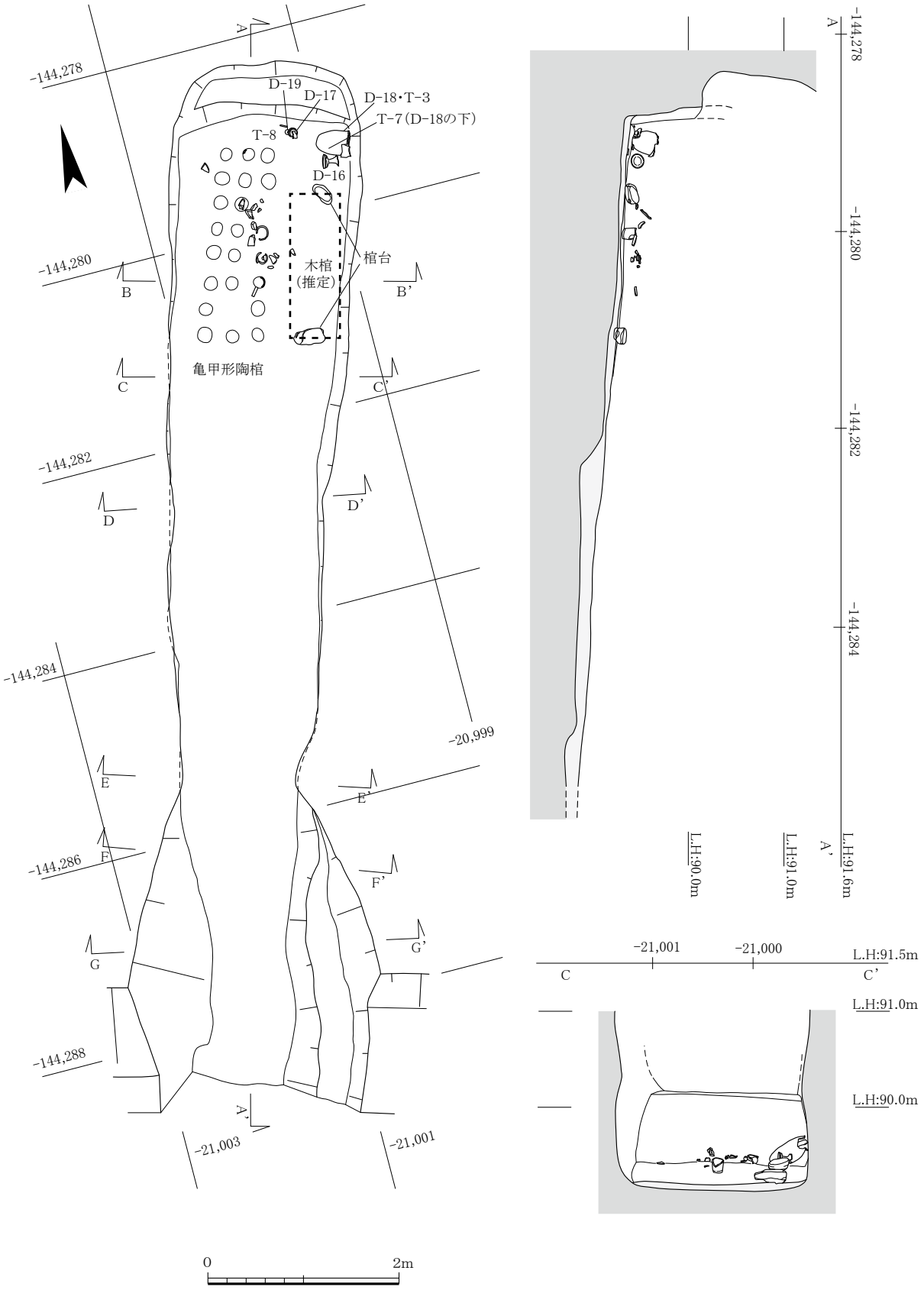
AD第6次調査 21 号墓 玄室 陶棺出土状態（南西から）



AD第6次調査 21 号墓 陶棺出土状態 平面・断面・立面図（1/60）



AD第6次調査　21 号墓　断面図（1/60）



AD第6次調査 21 号墓 平面・立面図（1/60）

AD第6次調査 21 号墓 全景（南西から）

AD第6次調査 21 号墓 玄室 棺配置状態（南西から）

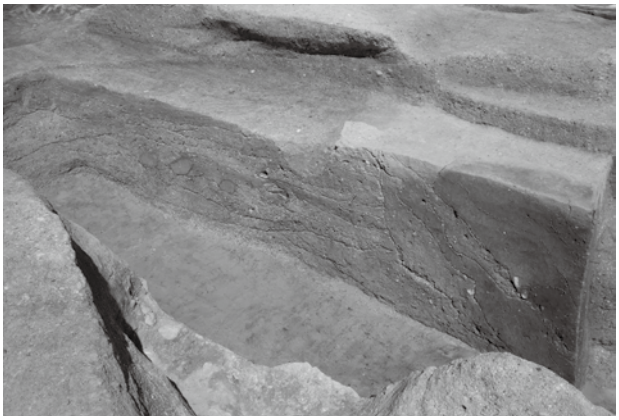
AD第6次調査 21 号墓 玄室奥壁 長胴甕・副葬品出土状態（西から）

亀甲形陶棺については、羨道部が崩落していて盗掘坑を確認できなかったが、奥壁の崩落土上に寄せられていることから、盗掘を受け破壊された可能性が高い。奥壁側に寄せられている陶棺は、攪乱土最上層（1 層）から出土した陶棺と接合すること明らかになった。

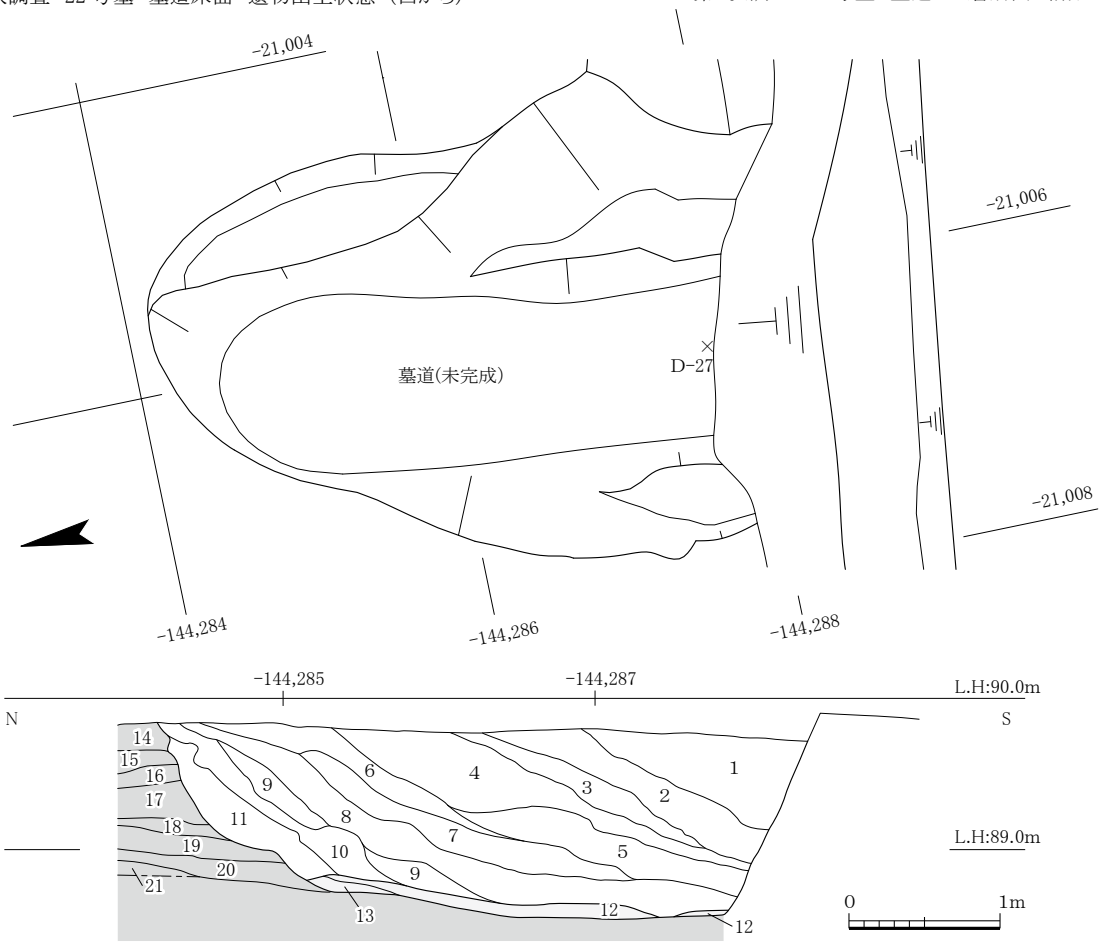
奥壁側に寄せられた亀甲形陶棺の下から須恵器高坏１点、鉄鏃２点、土師器小型丸底壺１点、土製紡錘車１点が出土した。また、蔵骨器と推定する土師器長胴甕の中に鹿角柄刀子１点が納入されていた。

22 号墓　全長 3.7 m以上で墓道南端は発掘区外に続く。玄室が築造されていないため、墓道のみを掘削して床面を整地した後、造墓途中で放棄したと考えられる。墓道

AD第6次調査　22 号墓　墓道床面　遺物出土状態（西から）



AD第6次調査　22 号墓　墓道　土層断面（南西から）



1　黄褐色砂質土　　(1:谷の埋土)
2　明黄褐色粘質土
3　にぶい黄色粘質土
4　暗灰黄色中粒砂
5　黒色中粒砂
6　浅黄色砂質土
7　黄灰色中粒砂
8　黄灰色粗砂
9　明黄褐色シルト
10　黄灰色砂質シルト
11　浅黄色中粒砂　(2～11:二次堆積土)
12　浅黄色粗砂
13　灰黄色粗砂　　(12･13:床面整地土)
14　明黄褐色中粒砂
15　明黄褐色粗砂
16　明黄褐色粗砂
17　浅黄色粗砂
18　明黄褐色砂礫
19　灰白色中粒砂
20　やや細かい灰白色中粒砂
21　灰白色砂礫　　(14～21:地山)

AD第6次調査　22 号墓　平面・立面図（1/60）

床面からは８世紀の土師器壺Ｂが１点、墓道埋土中層（5 層）から須恵器甕口縁部片が１点出土した出土した。埋葬はされていないものの８世紀以降に墓前祭祀が行われていた可能性がある。

23 号墓　全長 8.0 m以上で、墓道南端は発掘区外に続く。比較的大型の玄室を有する横穴墓で、羨道が短く玄室の全長は奥壁幅の２倍以上である。床面は１面で、羨道部では閉塞土を確認できる。

棺の明確な痕跡を確認できなかったが、閉塞土の存在から埋葬が行われたと推察される。木棺が腐朽して痕跡を留めていない可能性が高く、埋葬位置は確定できない。

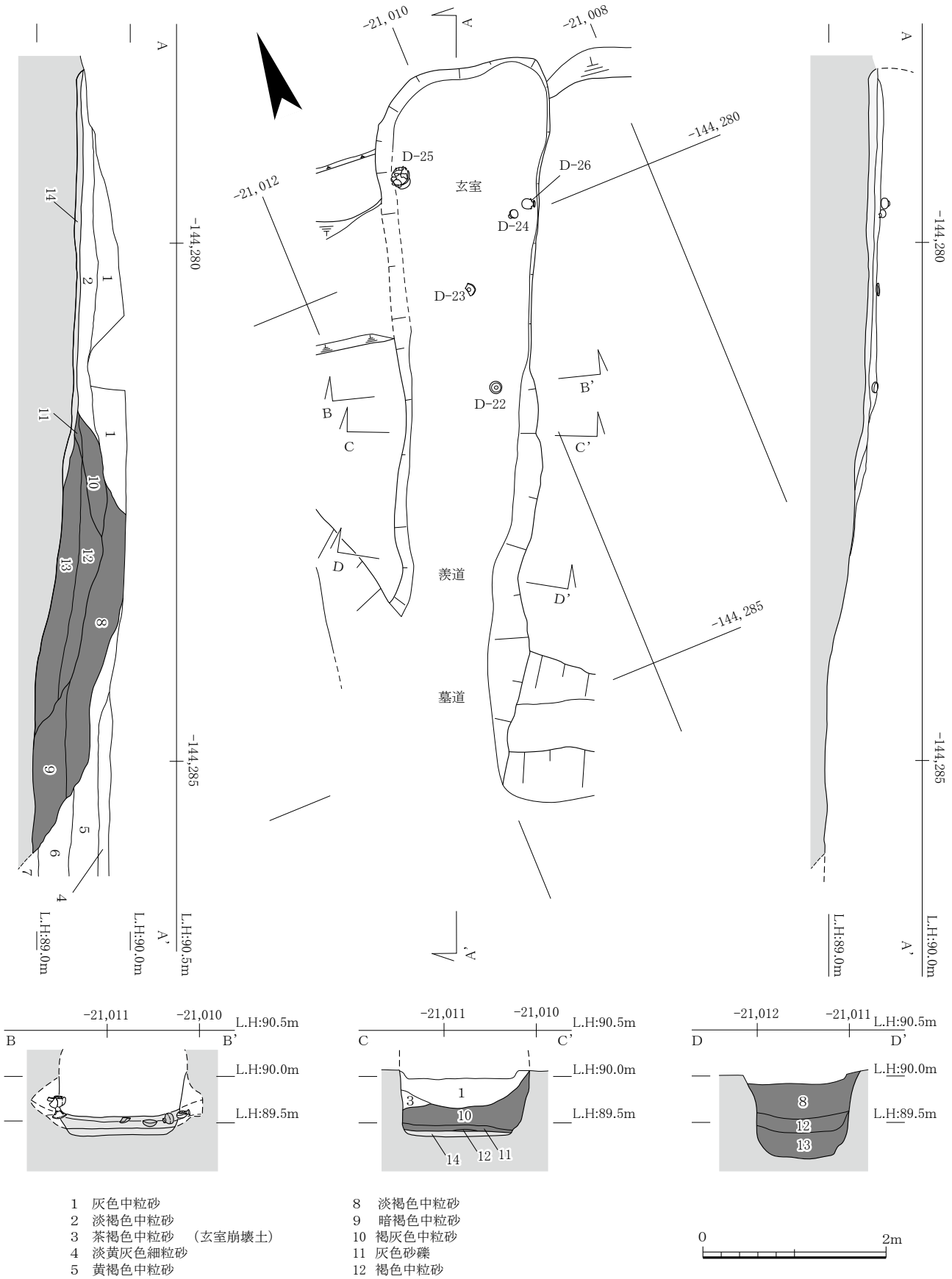
玄室奥壁西側付近で須恵器台付長頸壺１点、玄室東側で須恵器提瓶１点・直口壺１点、玄室中央で須恵器杯蓋１点、玄門付近で須恵器杯蓋１点が出土した。

24 号墓　発掘区北西端で確認した他と主軸方向の異なる横穴墓である。全長 2.4 m以上で、玄室の一部と羨道・

AD第6次調査　23 号墓　玄室西側　遺物出土状態（南西から）

AD第6次調査　23 号墓　玄室東側　遺物出土状態（西から）

AD第6次調査　23 号墓　全景（南西から）



1　灰色中粒砂
2　淡褐色中粒砂
3　茶褐色中粒砂　（玄室崩壊土）
4　淡黄灰色細粒砂
5　黄褐色中粒砂
6　褐色中粒砂
7　暗褐色中粒砂　（4～7:墓道埋土）
8　淡褐色中粒砂
9　暗褐色中粒砂
10　褐灰色中粒砂
11　灰色砂礫
12　褐色中粒砂
13　灰褐色中粒砂　（8～13:閉塞土）
14　灰白色中粒砂　（整地土）

AD第6次調査　23 号墓　平面・断面・立面図（1/60）

墓道は発掘区外に続く。玄室の一部のみの確認にとどまるが、床面は２面である。

初葬時の棺と副葬品

棺は確認できなかったが、玄室南側で棺台の可能性のある石を確認しており、木棺が置かれていたと推察される。なお、奥壁及び玄門側で陶棺突帯片が少量出土しており、陶棺が持ち出されている可能性もある。

玄室奥壁付近で土師器甕１点・椀１点、須恵器杯身４点・杯蓋２点・台付長頸壺１点・壺蓋１点・壺３点、鉄鏃８点がまとまって出土した。また、玄室北側では須恵器台付長頸壺１点（D-40）、玄室南側で須恵器杯身１点（D-44）が出土した。

追葬時の棺と副葬品

棺の明確な痕跡は確認できなかったが、初葬面より0.2 m上層で須恵器短頸壺１点（D-35）が出土しており、追葬が行われた可能性がある。

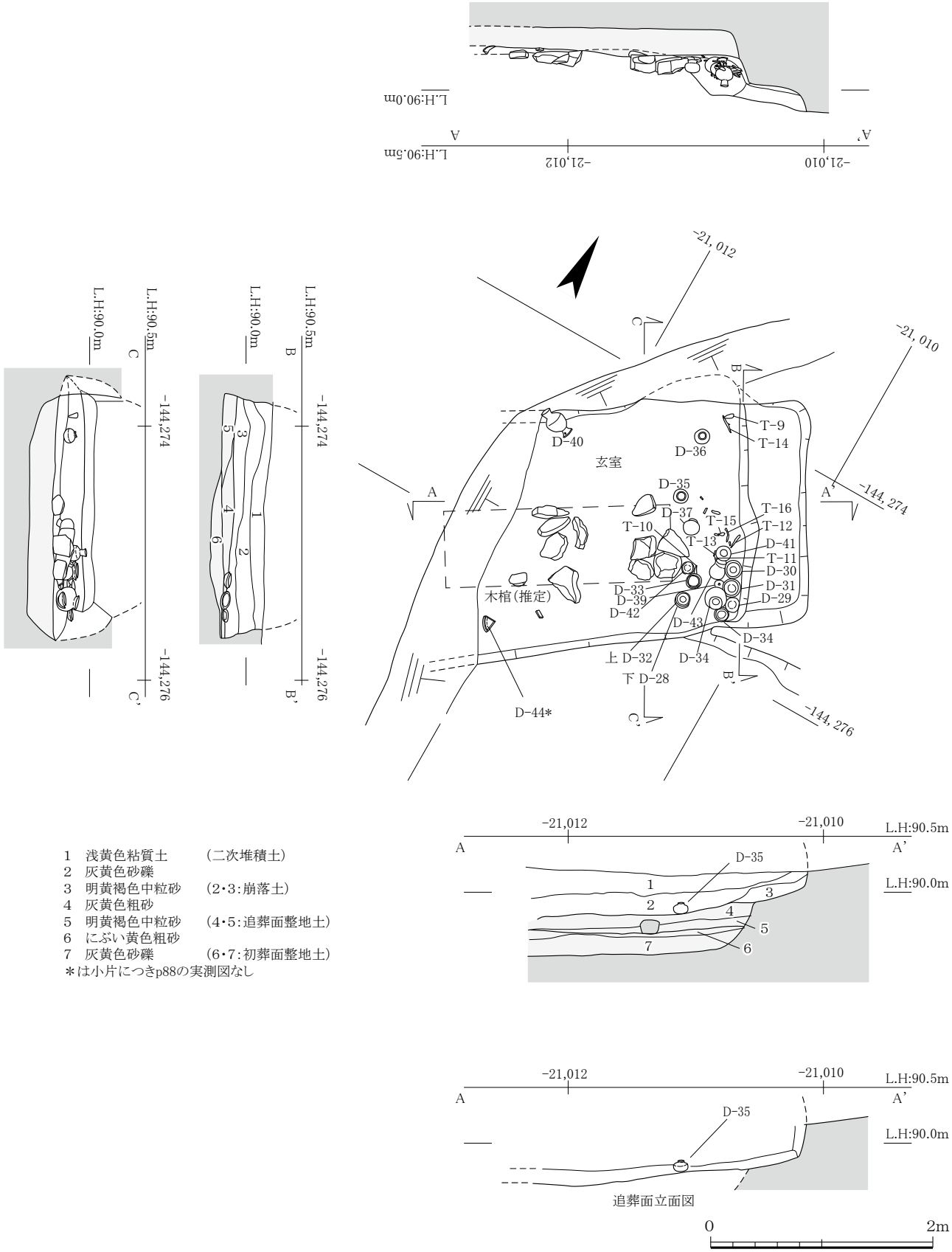
Ⅳ　出土遺物

古墳時代後期の朝顔形埴輪１点・人物埴輪１点、古墳時代後期から飛鳥時代の土師質亀甲形陶棺２基・土師質

AD第6次調査　24 号墓　遺物出土状態（南から）

AD第6次調査　24 号墓　玄室奥壁　遺物出土状態（北東から）

AD第6次調査　24 号墓　玄室　初葬時　遺物出土状態（南から）



1　浅黄色粘質土　　（二次堆積土）
2　灰黄色砂礫
3　明黄褐色中粒砂　　（2･3:崩落土）
4　灰黄色粗砂
5　明黄褐色中粒砂　　（4･5:追葬面整地土）
6　にぶい黄色粗砂
7　灰黄色砂礫　　（6･7:初葬面整地土）
＊は小片につきp88の実測図なし

AD第6次調査 24 号墓 遺構平面・断面・立面図（1/50）

円筒形陶棺１基・木棺底板１枚・須恵器・土師器・鉄鏃・鉄刀子・鹿角柄刀子などが、遺物整理箱79箱分出土した。

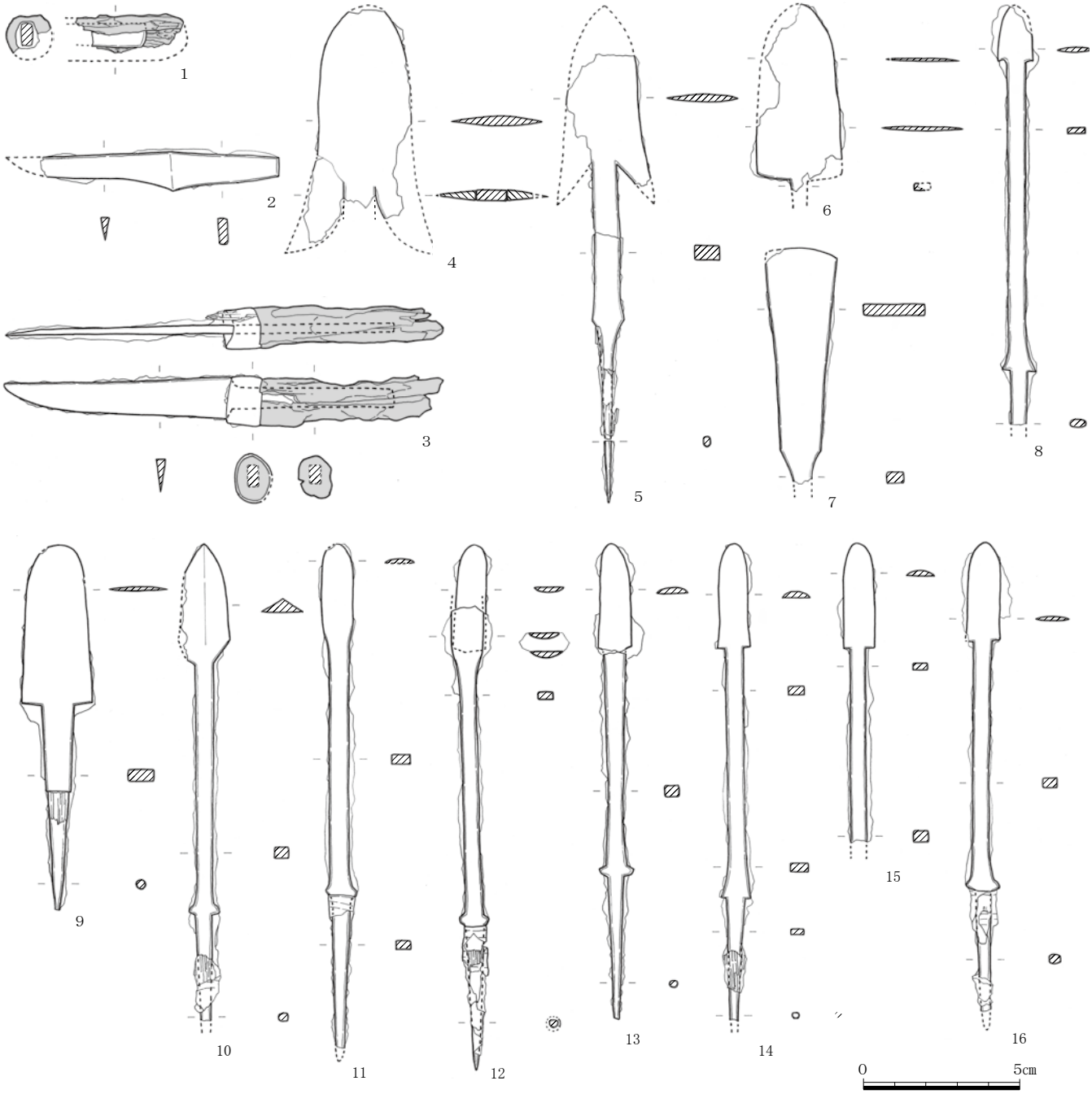
以下主要な遺物について記す。　（吉田朋史）

（１）鉄製品

鉄刀子３点と鉄鏃13点が出土している。

鉄刀子（１～３）１は18号墓円筒形陶棺内から出土した鹿角柄刀子で、刀子の茎部と鹿角柄の一部が残るのみである。残存長は3.5㎝。２は17号墓陶棺内から出土した木柄刀子で、刃先を欠失する。刃部最大幅1.25㎝・茎部長3.45㎝。両関につくるものの屈曲が弱く、茎部の一部に木質が付着する。残存長は7.7㎝。３は21号墓土師器長胴甕内から出土したほぼ完形の鹿角柄刀子である。鉄刀子本体は全長12.65㎝・刃部長7.4㎝・刃部最大幅1.35㎝で、両関につくる。鹿角柄は全長6.85㎝・最大幅1.55㎝で、いくつかの亀裂が開いている。茎口に鉄製鏍が遺存する。

鉄鏃（４～16）４は18号墓円筒形陶棺内から出土した腸抉長三角形鏃で、直接接合しない２片を復元実測して図示した。他例と比べて大きく、頸部以下を欠失する。復元残存長7.5㎝・鏃身部最大幅3.0㎝。５・６は18

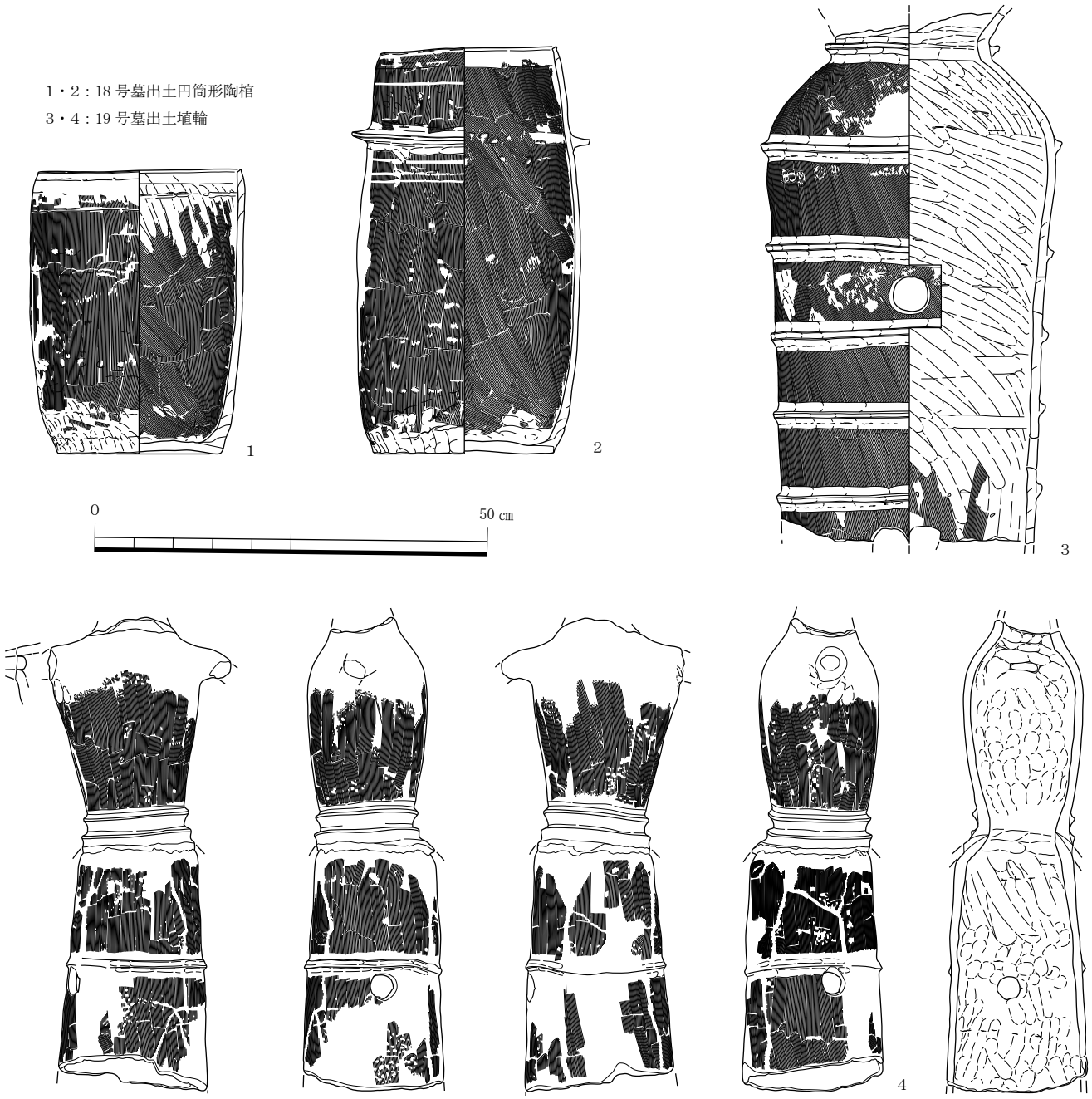


AD第6次調査　出土鉄製品（1/２）

号墓玄室から出土した。５は腸抉長三角形鏃で、頸部で割れた直接接合しない２片を復元実測して図示した。復元残存長 14.5㎝・復元頸部長 5.15㎝。６は角関長三角形鏃で、頸部以下を欠失する。鏃身部が薄くて頸部が細いのが特徴的で、残存長 6.1㎝。

７・８は 21 号墓玄室から出土した。７は方頭形鏃で茎部を欠失する。残存長 7.6㎝。８は長頸鏃で、鏃身部と茎部の一部を欠失する。残存長 13.5㎝・頸部長 10.0㎝で、茎部との境を台形関につくる。

９～ 16 は 24 号墓玄室内から出土した。９は角関長三角形鏃で、全長 11.85㎝・鏃身部長 5.2㎝・鏃身部最大幅 2.3㎝・頸部長 2.8㎝で、茎部との境を角関につくる。10 ～ 16 は長頸鏃である。10 は鏃身部が柳葉形片鎬造で、残存長 15.4㎝・鏃身部長 3.4㎝・頸部長 8.0㎝。茎部との境を棘関につくる。11 ～ 16 は鏃身部が柳葉形で共通するが、断面は 11 ～ 15 が片丸造で 16 のみ平造、関の形状は 11・12 がなで関で 13 ～ 16 が角関と差異がある。12 の鏃身部上半は欠失し、そこに 13 の鏃身部が銹着するため、13 は鏃身部と頸部以下が直接接合せず復元図化である。頸部の関形状は、11 ～ 13・



AD第6次調査　出土円筒形陶棺・埴輪（1/ 8）

16 が棘関、14 が台形関となる。すべて一部を欠失しており全長が判明する例はないが、長頸鏃の全長は概ね 15.5 ～ 16.5㎝に収まると考えられる。

（2）埴輪

19 号墓の墓室入口の左右に立てられていた朝顔形埴輪（３）と人物埴輪（４）である。３は残存高 67㎝・最大径 39㎝で、底部と口縁部を欠失する。６条突帯以上の朝顔形埴輪とみられ、外面タテハケ調整で、２孔１対の円形透孔が認められる。４は残存高 60㎝で、底部と頭部・腕部を欠失する。円筒形の基部を製作して倒立し、上衣の裾を表現するための粘土をその外周に貼り付けてから、その上に胴部をつくる。腰の位置に突帯を２条貼り付けて帯を表現している。肩に開けた孔に棒状粘土を挿入して腕部を製作した痕跡が観察できる。外面全体がタテハケ調整で、基部に２孔１対の円形透孔が認められる。両者ともに底部と口縁部あるいは頭部を欠失するという特徴が一致するため、近在の古墳に樹立されていた埴輪を抜き取って２次利用されたものと推定される。

（3）円筒形陶棺

18 号墓の墓室東側に蓋と身の口を合わせて横たえ、合口式の陶棺として使用されていた。蓋の内径が身の口径より少し小さく、蓋が少し楕円形に歪んでいることもあって、蓋口縁端部は蓋受けまで達しない。蓋身ともに製作方法は同じであり、器高の高低と蓋受けの有無が異なるに過ぎない。

蓋（１）は口径 24.5 ～ 27.5㎝・高さ 36.3㎝で、逆位で使用するために製作時の平底が平天井となる。製作工程が身と同様であるため､図は製作時の天地で示した。

身（２）は底径 22.3 ～ 23.0㎝･口径 21.5 ～ 22.0㎝･高さ 51.0 ～ 52.0㎝で、口縁端部から下へ約 11㎝の位置に蓋受けを貼り付ける。蓋受けの幅は２～３㎝で、穿孔は認められない。厚さ 0.8㎝の粘土円板をつくって平底の底部とし、その外周に粘土紐を積み上げて内外面をタテハケ調整するが、底部外面には粘土積み上げ時のタテナデが残る。

（4）土師質亀甲形陶棺

17 号墓出土陶棺（５）と 21 号墓出土陶棺（６）がある。前者はほぼ完形に復元できたが、後者は盗掘時に砕かれ細片化して出土したため、欠損部分が多い。

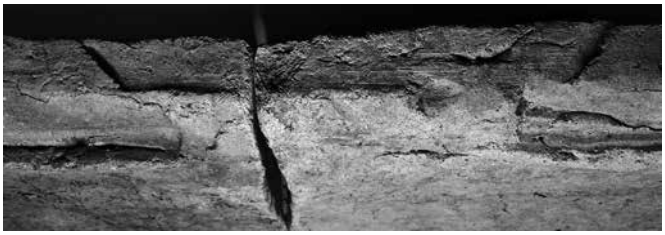
17 号墓出土陶棺

蓋　全長 208.4㎝・最大幅 70.6㎝・高さ 49.4㎝で、横断面の形状は概ね屋根形を呈する。糸切りで２分割されている。片側の長側面中央上寄りに穿孔しここから糸を通して切断するが、口縁部付近はヘラ切りする。天井部は鍵形を意図して切断するが、ヘラ切りに比べて屈曲が弱く緩やかな形状となる。外面全体に朱塗りが認められる。

突帯の全体的な構成をみると、稜線突帯・横位突帯２条・口縁部突帯を貼付けて外面全体を上中下３段に区画し、長側面の両側に 13 条ずつの縦位突帯を貼付けている。しかし、突帯の貼付順序は①天井部の稜線突帯・口縁部突帯・下方１条の横位突帯、②上中段一連の縦位突帯・下段の縦位突帯、③上方１条の横位突帯である。そのため、上中段の縦位突帯と下段の縦位突帯の位置が揃わない箇所がみられる。天井部の稜線突帯だけ８～９㎝で幅広く、上面には３～４㎝前後の平坦面をつくる。それから続く短側面の稜線突帯は中段で途切れ、下段にのみ短側面縦位突帯２条を貼付ける。突帯のほとんどは板押さえで調整を終えており、扁平な形状を呈する。透孔は円形で中段にあり、長側面に４孔ずつ、短側面に１孔ずつあける。

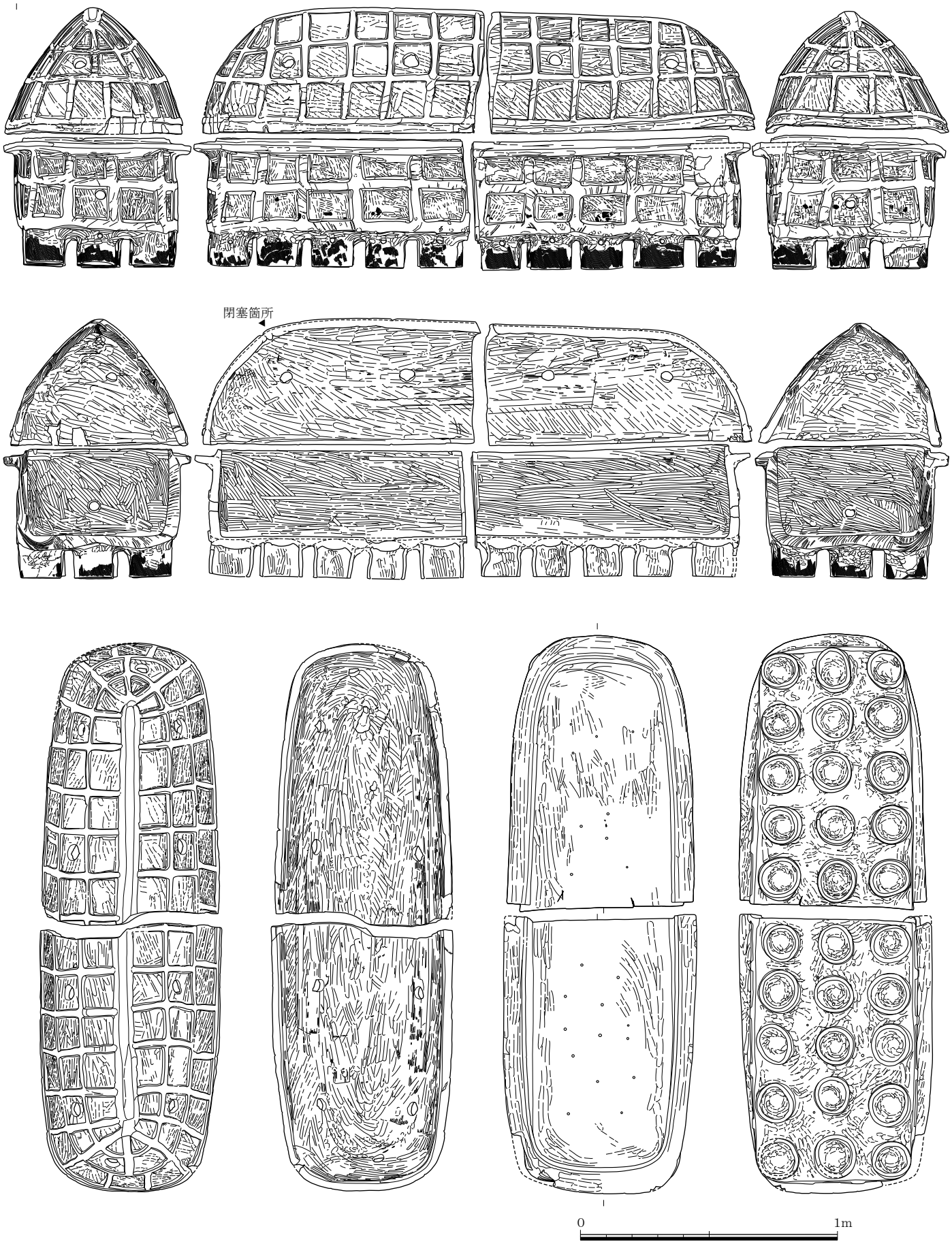
内面には、長側面に沿って板の圧痕が残っており、乾燥時の形持たせの痕跡とみられる。片側の短側内面上端には製作最終時の閉塞痕跡が認められる。

蓋の製作方法を考えるうえで興味深い痕跡が口縁部で観察できた。両側の長側面中央の口縁部端面に台形状の板痕跡があり、柾目が残る 0.2 ～ 0.3㎝の段差となって凹む。そして、この両端から口縁端部内面に沿って幅 1.3㎝前後の凹みがめぐり、その形状から割裂き材の細木が付いていた痕跡と推測できる。これらの痕跡は最初の粘土帯積み上げ前に置かれていた工具の痕跡とみら



17 号墓出土陶棺　蓋口縁部長側面中央の台形状板と細木圧痕

17 号墓出土陶棺　身底部と脚の接合状態


閉塞箇所
0
1m

れ、湾曲させた細木を左右に一つずつ配置し、それを台形状の板２枚の両端に反発力を利用し結合させて留めるような構造であったと思われる。蓋の口径を身の口径と合致させるための設定工具が存在したことを示す重要な痕跡と考えられる。この工具の外周に沿って高さ５㎝前後･幅 2.5 ～３㎝の粘土帯を数枚接合し口縁部をつくる。その上に粘土帯をさらに積み上げていくとともに、内面側には工具上に被るように補充粘土を貼付けて口縁部の厚みを増している。口縁部端面は平坦で木目がつくものの木葉の圧痕は認められない。

身　全長 212.4㎝・最大幅 75.1㎝・高さ 50.6㎝で、糸切りによって２分割されている。脚部を除く外面全体と内側面の一部に朱塗りが認められる。

突帯の全体的な構成をみると、周底突帯と横位突帯１条を貼付けて外面全体を上下２段に区画し、長側面の両側に 11 条ずつ、短側面の両側に２条ずつの縦位突帯を貼付けている。突帯の貼付順序は横先縦後で、板押さえだけで調整を終えており、扁平な形状を呈する。短側面下段中央の区画内に１孔ずつ円形透孔があく。また、外面下段の区画内や突帯の所々に布目痕跡を確認できる。

蓋受けは身側面から一連で製作されており、その内周に沿って２次的に短い口縁部を付加している。長側面の口縁部内面下方には長軸方向に延びる板状圧痕が認められ、内側に板を当てた形持たせの痕跡とみられる。

脚部には 10 行３列の脚が取り付く。脚径 14 ～ 16㎝･脚高 11㎝前後である。脚は外面タテハケ調整、内面タテナデ調整で、接合痕やタテハケの方向、脚端部のヨコナデ調整からみて成形後に倒立されている。倒立した脚の上にレンズ状の粘土円板を載せて閉塞し、これを等間隔に接合して棺底を成形する。棺底面には不規則な小穿孔が複数あり、内側から外側へ貫通している。外周に配置された脚にだけ外面側から円形透孔を１孔ずつ穿孔するが、穿孔位置は長側面を優先させているので、短側面では中央列の脚一つだけに穿孔が認められる。

蓋身を合わせた時の総高は、97.2㎝前後である。

21 号墓出土陶棺

蓋　復元全長 204.2㎝・復元最大幅 73.0㎝・高さ 52.3㎝で、横断面の形状は半円筒形を呈する。ヘラ切りによって２分割されており､天井部は鍵形に切断する。内外面全体に朱塗りが認められる。

突帯の全体的な構成をみると、稜線突帯・横位突帯・口縁部突帯を１条ずつ貼付けて外面全体を上下２段に区画し、長側面の両側に８条ずつの縦位突帯を貼付けている。突帯の貼付順序は横先縦後で、突帯上面の一部に板押さえの痕跡がみられるものの突出する形状を維持している。透孔は方形で、長側面下段に４孔ずつあける。

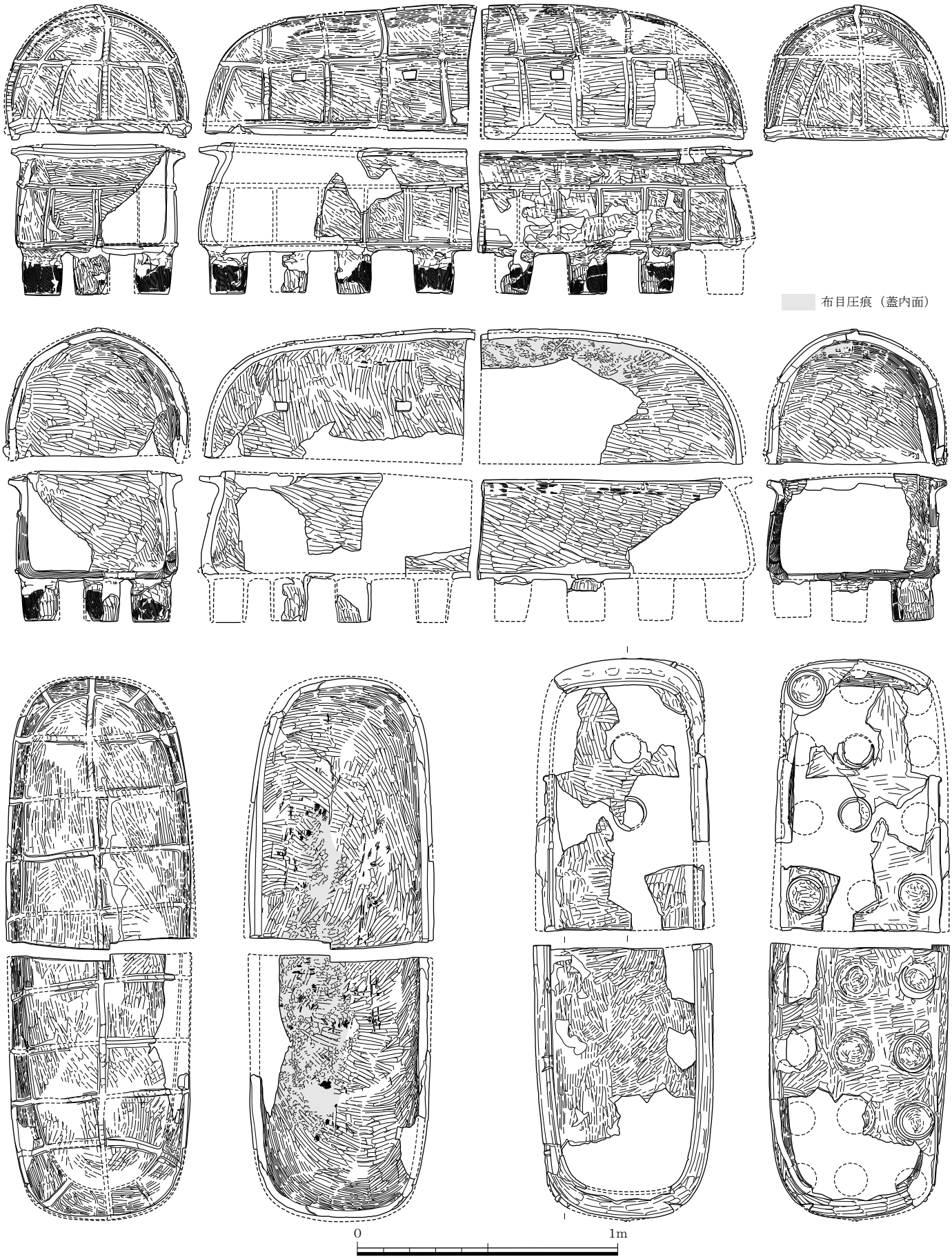
内面には、藁縄状圧痕や板圧痕が不明瞭ながら認められ、天井部付近に布目圧痕が残るなど乾燥時の形持たせの痕跡がみられる。なお、残存部分では製作最終時の閉塞痕跡を確認できない。

高さ６㎝前後の粘土帯を数枚横に接合して口縁部をつ

21 号墓出土陶棺　蓋内面の布目圧痕

21 号墓出土陶棺　蓋内面の布目と板の圧痕

21 号墓出土陶棺　身口縁部～蓋受けの断面



AD第6次調査 21 号墓出土陶棺（1/20）

くるが、その上面には指頭圧痕が残る。口縁部端面は平坦で木目がつくものの木葉の圧痕は認められない。

身　復元全長 208.4㎝・復元最大幅 34.5㎝・高さ 58.0㎝で、糸切りによって２分割されている。脚部を除く外面全体と内側の側面及び床面の一部に朱塗りが認められる。

突帯の構成が特徴的で、周底突帯と横位突帯１条を貼付けた後、縦位突帯はその間に貼付けられて横位突帯より上へ伸びない。縦位突帯は、長側面の両側に12条ずつ、短側面の両側に３条ずつ貼付けると推定される。突帯は、ヨコナデ調整により突出する形状を呈する。

蓋受けは身側面から一連で製作されており、その内周に沿って２次的に短い口縁部を付加している。長側面の口縁部内面下方には長軸方向に延びる板状圧痕が認められ、内側に板を当てた形持たせの痕跡とみられる。

脚部には８行３列の脚が取り付く。脚径 13 ～ 14㎝・脚高 16㎝前後である。17 号墓陶棺と比べて、脚は細身で高く、透孔がない。脚は外面タテハケ調整、内面タテナデ調整で、接合痕やタテハケの方向、脚端部のヨコナデ調整からみて成形後に倒立されている。棺底面中央に小穿孔が１つだけ確認でき、内側から外側へ貫通している。

蓋身を合わせた時の総高は、106.0㎝である。

（鐘方正樹）

（５）土器・土製品

17 号墓出土土器（１～８）　１～７が須恵器、８が土師器である。蓋は１が口径 14.8㎝、器高 5.1㎝、２が口径 15.1㎝、器高 5.3㎝である。いずれもやや扁平なつまみが付き、外面上半をロクロケズリ、下半および内面をロクロナデ。いずれも有蓋高杯の蓋であるが、高杯は共伴していない。杯身は３が口径 8.8㎝、器高 3.1㎝、４が口径 8.8㎝、器高 3.3㎝である。いずれも受部より口縁端部がわずかに高い。３は下半をロクロケズリするが、４はロクロケズリを省略しロクロナデのみである。５は広口壺で口径 14.2㎝、器高 17.0㎝であり平底を呈する。外面はカキメで下半はロクロケズリ、内面はロクロナデ。底面は未調整で、内面に円盤状粘土板の痕跡を観察できる。６は砲弾状を呈し口縁部が欠損する壺で、残高 12.8㎝である。灰白色で土師器のような色調である。外面はハケ調整とみられるが摩滅し不明瞭で、タタキのような工具痕跡も認められ、底部は板ナデである。７は提瓶で口径 6.9㎝、器高 20.1㎝、肩部の両側に把手がつく。体部は片面のみ丸みをおびない平坦な形状を呈し、丸みのあるほうの内面には粘土で塞いだ痕跡が認められるため、平坦面を底として粘土紐を積み上げたことがわかる。口縁端部はやや垂下する。体部全体にカキメを施すが平坦面の部分には及ばない。８は丸底壺で口径 10.6㎝、器高 13.3㎝で外面肩部に１条の沈線がある。調整はナデだが、体部は摩滅し不明瞭で指オサエの圧痕が明瞭である。　（村瀬　陸・森田将圭）

18 号墓出土土器（９）　９は須恵器短頸壺で口径 7.5㎝、器高 9.2㎝で口縁部はやや内傾する。底部外面下半をロクロケズリ、それ以外をロクロナデ。肩部には１条の沈線がめぐる。口縁部～肩部付近の焼成が甘く、蓋を被せて焼成したとみられるが蓋は共伴していない。

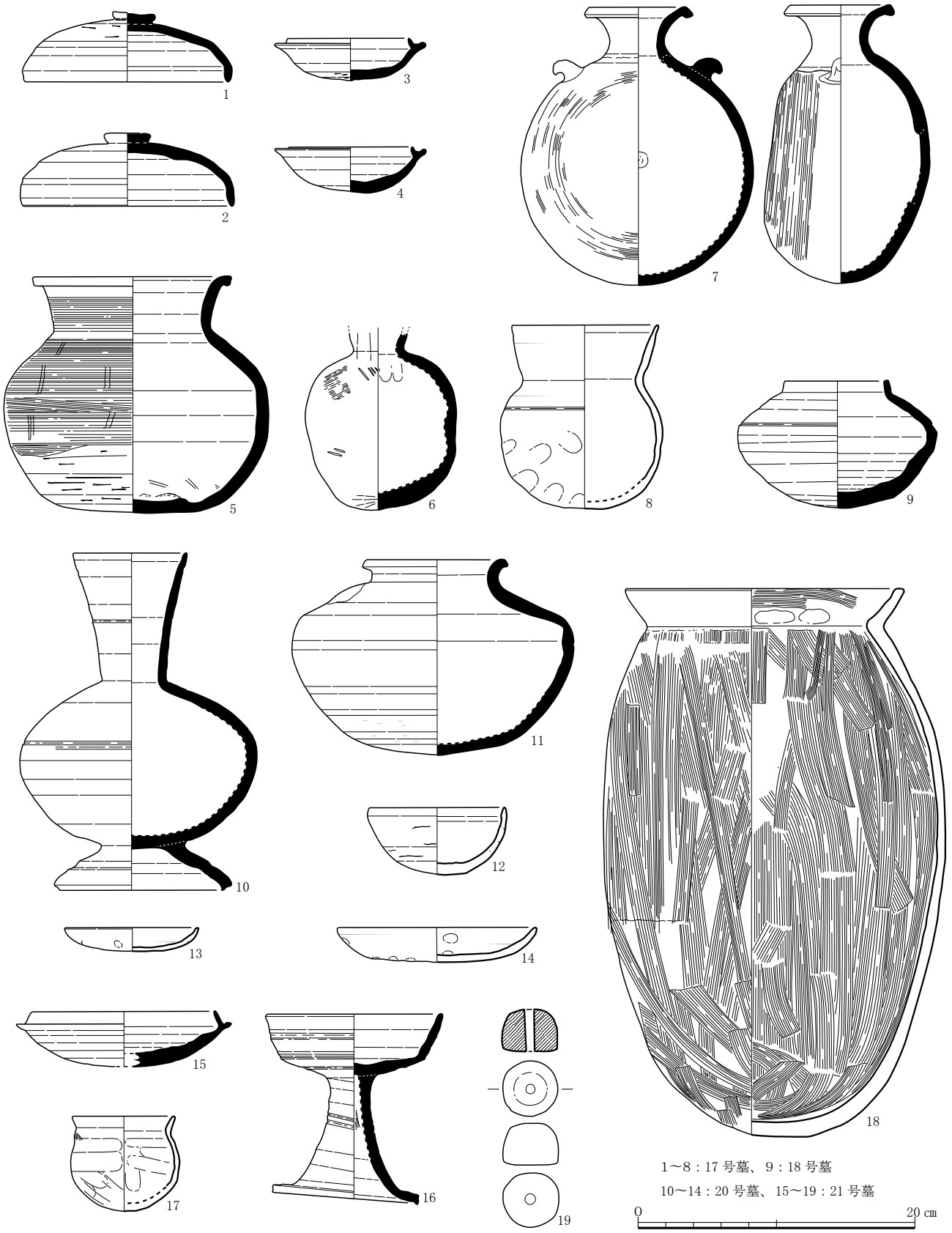
（山口等悟）

20 号墓出土土器（10 ～ 14）　10・11 が須恵器、12 ～ 14 が土師器である。10 は台付長頸壺で、口径 8.1㎝、器高 23.3㎝、口縁部高 9.2㎝である。体部に明確な稜はなく丸みを帯びる。口縁部中央付近に１条、肩部に２条の沈線があり、内外面ともにロクロナデ。11 は短頸壺で口径 9.6㎝、器高 14.1㎝である。口縁部は緩やかに湾曲し、肩部に張りをもつ形状を呈する。肩部付近で部分的に沈線のようにみえる窪みがあるが不明瞭。外面の下半はロクロケズリで、それ以外はロクロナデ。12 は椀で口径 9.6㎝、器高 4.9㎝である。口縁端部はやや肥厚する。内外面ともにヨコナデだが、とくに外面に粘土紐接合痕が目立ち、内面のほうが丁寧に調整されている。皿は 13 が口径 9.6㎝、器高 2.7㎝、14 が口径 14.2㎝、器高 2.5㎝である。13・14 は崩落土からの出土で埋葬時に伴うものではない。　（村瀬　陸）

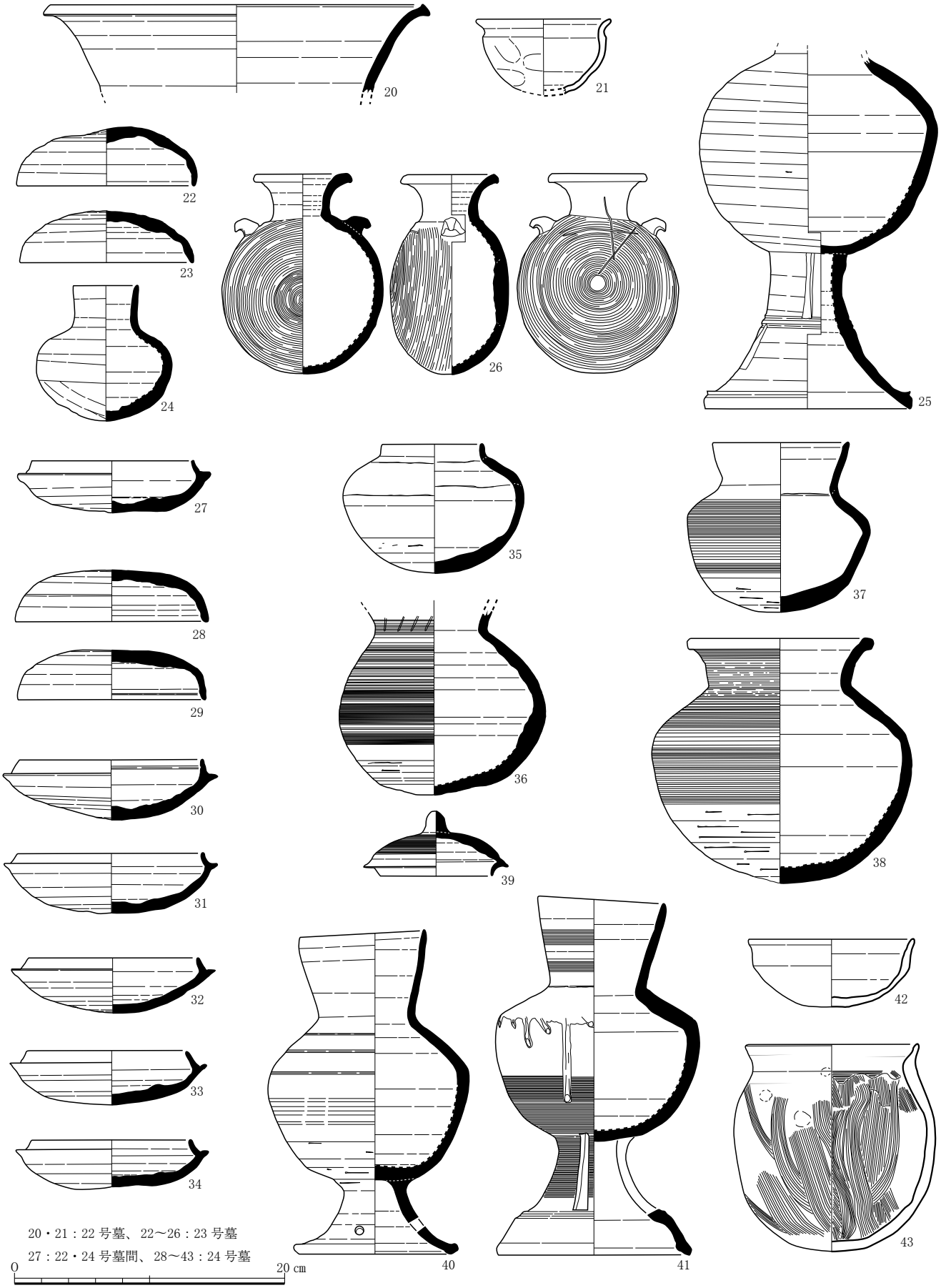
21 号墓出土土器（15 ～ 18）・土製品（19）　15・16 が須恵器、17・18 が土師器、19 が土製紡錘車である。15 は杯身で口径 13.2㎝、残高 4.0㎝、立ち上がりは内傾する。外面下半をロクロケズリ、その他はロクロナデ。底部外面には直線状のヘラ描きがある。16 は高杯で口径 12.6㎝、器高 13.3㎝である。杯部外面下半をロクロケズリ、その他はロクロナデ。脚部内面上半は未調整でしぼり痕が認められる。杯部外面に３条、脚部外面中央に２条の沈線がめぐる。脚部に透孔は認められない。17 は小型丸底壺で復元口径 7.4㎝、器高 6.9㎝である。外面上半はヨコナデ、外面下半はケズリ調整後、不定方向のナデ。頸部付近ではハケメ状の工具痕が認められる。内面はヨコナデで、下半の一部はヨコナデ後にタテナデする。18 は蔵骨器として使用されたと想定する長胴甕で復元口径約 20㎝、器高 39.6㎝である。口縁部はやや内湾する。内外面ともにタテハケで、底部から頸部に向けてストロークの長いハケ調整であるが、底部付近は短

い単位で丁寧に調整されている。口縁部内面はヨコハケ調整。19 は平面円形、断面蒲鉾形の紡錘車である。底部径 4.0㎝、高さ 3.0㎝である。中央に径 0.7㎝の円孔が穿孔されている。表面はナデ調整であるが摩滅し不明瞭。　（望月拓海・村瀬　陸）

22 号墓出土土器（20・21）　20 は須恵器甕の口縁部片



AD第6次調査　横穴墓出土土器1（1/ 4）



AD第6次調査　横穴墓出土土器2（1/ 4）

で、口径 27.6㎝、残高 6.5㎝である。口縁部は緩やかに外反し、内外面ロクロナデ。21 は土師器壺で、口径 9.6㎝、残高 5.5㎝である。頸部のヨコナデが強く、８世紀の人面墨書土器等に多い形態の壺Ｂである。床面直上出土のため、８世紀代に追祭祀等の儀礼が行われたことを示すものである。　（村瀬　陸・望月拓海）

23 号墓出土土器（22 ～ 26）　いずれも須恵器である。杯蓋は 22 が口径 13.2㎝、器高 4.3㎝、23 が口径 12.8㎝、器高 3.8㎝である。いずれも外面頂部付近はロクロケズリ、その他はロクロナデだが、22 は頂部にロクロケズリがおよばない。24 は直口壺で口径 4.8㎝、器高 10.0㎝である。底部外面は不定方向にナデ、底部内面は棒状の圧痕が段状に観察できる。外面にはわずかに自然釉が付着し、内面には光沢をもつ物質が沈着する。25 は頸部以上が欠損する台付長頸壺で、残存高 27.0㎝、底部径 16.0㎝である。体部は肩部にやや張りをもつ球形で、丁寧なロクロケズリが施される。脚部はハの字に広がり、中央に２条の沈線を施す。その上下にそれぞれ３方向の透孔を段違いに穿つ。上段は長方形、下段は台形を呈する。26 は提瓶で口径 6.8㎝、器高 14.8㎝である。体部は両側ともに丸みをもつ。外面はロクロケズリのちカキメが施され、片面には３本のヘラ描きがある。内面の片側に粘土で塞いだ痕跡が確認でき、ヘラ描きのある面を上として粘土紐積み上げを行ったことがわかる。また、両面で色調が異なり、ヘラ描きのある面のほうがよく焼けていることから、製作時と焼成時の天地が共通する。

（水川慶紀）

23・24 号墓間出土土器（27）　27 は須恵器杯身で口径 11.9㎝、器高 3.8㎝である。底部外面をロクロケズリ、それ以外はロクロナデで、底部外面に直線状のヘラ描きがある。　（山口等悟）

24 号墓出土土器（28 ～ 43）　28 ～ 41 が須恵器、42・43 が土師器である。杯蓋は 28 が口径 14.2㎝、器高 3.8㎝、29 が口径 13.9㎝、器高 3.6㎝である。28 は形骸化した段がわずかに認められるが 29 にはない。いずれも天井部をロクロケズリ、その他をロクロナデ。29 は口縁部内面に沈線がめぐる。28 の天井部外面には直線状のヘラ描きがある。杯身は 30 が口径 13.6㎝、器高 4.4㎝、31 が口径 13.6 ～ 14.9㎝（歪み大）、器高 4.3㎝、32 が口径 12.5㎝、器高 4.1㎝、33 が口径 11.5㎝、器高 4.0㎝、34 が口径 11.3㎝、器高 3.7㎝である。30 は立ち上がり部内面に沈線がめぐる。32・33 は底部外面に直線上のヘラ描きがある。35 は短頸壺で口径 7.3㎝、器高 9.5㎝で、外面下半をロクロケズリ、その他はロクロナデだが内外面ともに接合痕が目立つ。その他の壺は 36 が残高 13.6㎝、37 が口径 9.9㎝、器高 12.5㎝、38 が口径 13.2㎝、器高 18.1㎝であり、いずれも外面にカキメを施し下半をロクロケズリする。内面はいずれもロクロナデ。36 は頸部を絞り込んだような痕跡が認められる。39 は壺蓋で、口径 8.3㎝、器高 4.7㎝である。外面頂部はカキメ、その他はロクロナデ。つまみは径 1.8㎝、高さ 1.6㎝で丸みがある。外面には一部ガラス質化した自然釉が付着する。台付長頸壺は、40 が口径 9.2㎝、器高 13.9㎝、口縁部高 6.1㎝である。肩部にやや張りをもち、３条の沈線がめぐる。体部外面には布のようなもので密にナデ調整した痕跡がみられ、下半はロクロケズリ。脚部はハの字に広がり、端部はやや立ち上がる。直径１㎝程度の円形透孔が３方向に穿孔される。また、体部と脚部の接合部分内面は未調整である。色調は土師質のような灰赤色を呈する。41 は口径 9.3㎝、器高 26.6㎝、口縁部高 6.2㎝である。肩部に張りをもつ。口縁部および体部下半～脚部にかけてカキメを施す。脚部は屈曲して台座状を呈し、長方形透孔を３方向に穿つが間隔はやや不均等である。肩部付近にはガラス質化した自然釉が付着する。39 と径や自然釉の状態が一致し出土状態も近いことからセット関係とみられる。42 は椀で口径 12.2㎝、器高 5.0㎝である。内外面ともに摩滅するが横方向のナデ調整とみられる。器壁は口縁部付近、底部が厚手、体部が薄手となる。43 は甕で口径 12.6㎝、器高 15.3㎝である。器壁は頸部までやや厚く、そこから短く屈曲し肥厚した口縁部が特徴的な形態である。内外面ともに縦方向を基調とするハケ調整を施す。

（望月拓海・森田将圭）

Ⅴ　調査所見

調査の結果、横穴墓を新たに８基確認し赤田横穴墓群の範囲が東西約 150 ｍにわたって広がっていることが判明した。今回の調査で南西方向に墓道を向ける 24 号墓を確認したことから、横穴墓はさらに西に続く可能性が考えられる。今回確認した横穴墓は、配置形態から 17 ～ 19 号墓（東群）・20 ～ 22 号墓（中群）・23 ～ 24 号墓（西群）の３群に分かれて築造された可能性がある。平面形態と出土遺物から、大きく３時期の変遷が伺える。大型の陶棺が埋葬される 17 号墓（初葬）・21 号墓（初葬）や 23・24 号墓（初葬）が６世紀後半（赤田１～２期）、17 号墓（追葬）・20 号墓が７世紀前半（赤田３期）、小型の玄室で円筒形陶棺や長胴甕の蔵骨器が埋葬される 18 号墓（初葬・追葬）・19 号墓・21 号墓（追葬）が７世紀中頃（赤田４期）と考えられる。また、22 号墓では、

玄室が構築されず、墓道だけ掘削して埋葬は行われていないが、８世紀の土師器壺Ｂが出土している。これまでの調査でも、玄室や墓道から８～９世紀の土器・土製品が出土しており、この時期まで何らかの祭祀行為が行われていたことが指摘できる。

赤田横穴墓群は、これまでの調査で陶棺を埋葬する横穴墓群として強い地域的特色が指摘されてきた。これらの造墓主体としては、土師氏が想定されており、奈良市北西部の古代を考える上で貴重な成果である。18 号墓出土の円筒形陶棺は９号墓出土の円筒形陶棺と比べ小型化し、さらに横に寝かせて出土している点が特徴で、円筒形陶棺と砲弾形陶棺の関係を考える上で新たな資料となる。また、21 号墓の土師器長胴甕から鹿角柄刀子が出土しており、土師器長胴甕が蔵骨器として利用されることが新たに判明した。

これらは、古墳時代後期から飛鳥時代の奈良市北西部における埋葬形態を考える上で重要である。（吉田朋史）

AD第6次調査　横穴墓一覧表

遺構番号	玄室		羨道			墓道		棺	出土遺物	
	長さ（m）	奥壁幅（m）	長さ（m）	玄門幅（m）	羨門幅（m）	長さ（m）	幅（m）		棺内	棺外
17 号墓	3.7	2.1	1.9	1.1	0.9	3.7 以上	1.7 以上	【初葬】土師質亀甲形陶棺1	鉄刀子1	須恵器有蓋高坏蓋2・壺1・提瓶1、広口壺1
								【追葬】木棺（推定）1	－	須恵器杯身2、土師器丸底壺1
18 号墓	3.9	2.2	1.1	0.9	0.9	3.6 以上	2.3	【初葬】土師質円筒形陶棺1、木棺（推定）1	鹿角柄刀子1・鉄鏃3	
								【追葬】木棺（推定）1	鉄鏃1	須恵器短頸壺1
19 号墓	2.9	1.5	2.3 以上	1.4	－	－	－	木棺1	－	朝顔形埴輪1・人物埴輪1
20 号墓	4.6	2.3	1	1.1	1	2.1 以上	3.3	木棺（推定）1	－	須恵器台付長頸壺1・短頸壺1・土師器椀1
21 号墓	5.9	2	1.3	1.4	1.2	2.9 以上	2.7	土師質亀甲形陶棺1、木棺（推定）1、土師器長胴甕1	鹿角柄刀子1	須恵器杯身1・高坏1、土師器小型丸底壺1、土製紡錘車1、鉄鏃２
22 号墓	－	－	－	－	－	3.7 以上	.3.2	－	－	土師器壺Ｂ１
23 号墓	5.1	－	0.6	0.9	1	2.3 以上	1.4	木棺（推定）1	－	須恵器杯蓋2・台付長頸壺1・提瓶1・直口壺1
24 号墓	2.4 以上	2.3	－	－	－	－	－	【初葬】木棺（推定）1	－	陶棺片、須恵器杯身5・杯蓋2・台付長頸壺2・壺蓋１・壺3、土師器椀１・甕１、鉄鏃８
								【追葬】木棺（推定）1	－	短頸壺1

赤田横穴墓の変遷

須恵器形式	時期	期	墓室	陶棺	副葬土器	造墓順	横穴墓の特徴
MT 85 TK 43	6世紀	赤田1期	1期	第1期	5・17・21・23 号墓	5・17・21・23 号墓	羨道が長い。墓室（玄室＋羨道）全長は奥壁幅の2倍以上。 初葬時、羨門を板で閉塞する。 陶棺埋葬と木棺埋葬が当初から併存した可能性。
TK 209		赤田2期	2期	第2期	3・4号墓	3・4号墓	羨道が短い。墓室全長は奥壁の2倍以上。 初葬時、羨門を板で閉塞する。 初葬は陶棺、追葬は木棺。陶棺の向きは横向きと縦向きが併存。
					1号墳	1号墳	
TK 217	7世紀	赤田3期	3期	第3期	1・20 号墓	20 号墓 1・2号墓	短い羨道と玄室で構成するものと羨道を省略したものが併存。 墓室全長はⅡ期より短く、玄室規模も縮小。 陶棺の向きは縦向き。
						6・7・8号墓	
		赤田4期		第4期	7・9号墓	9・18・19 号墓	19 号墓を最後に横穴墓が造られなくなり、既存の横穴墓に追葬。円筒形陶棺が使用される。 棺を入れるだけの小さい墓室が出現（槨墓化）。

13. 史跡大安寺旧境内の調査

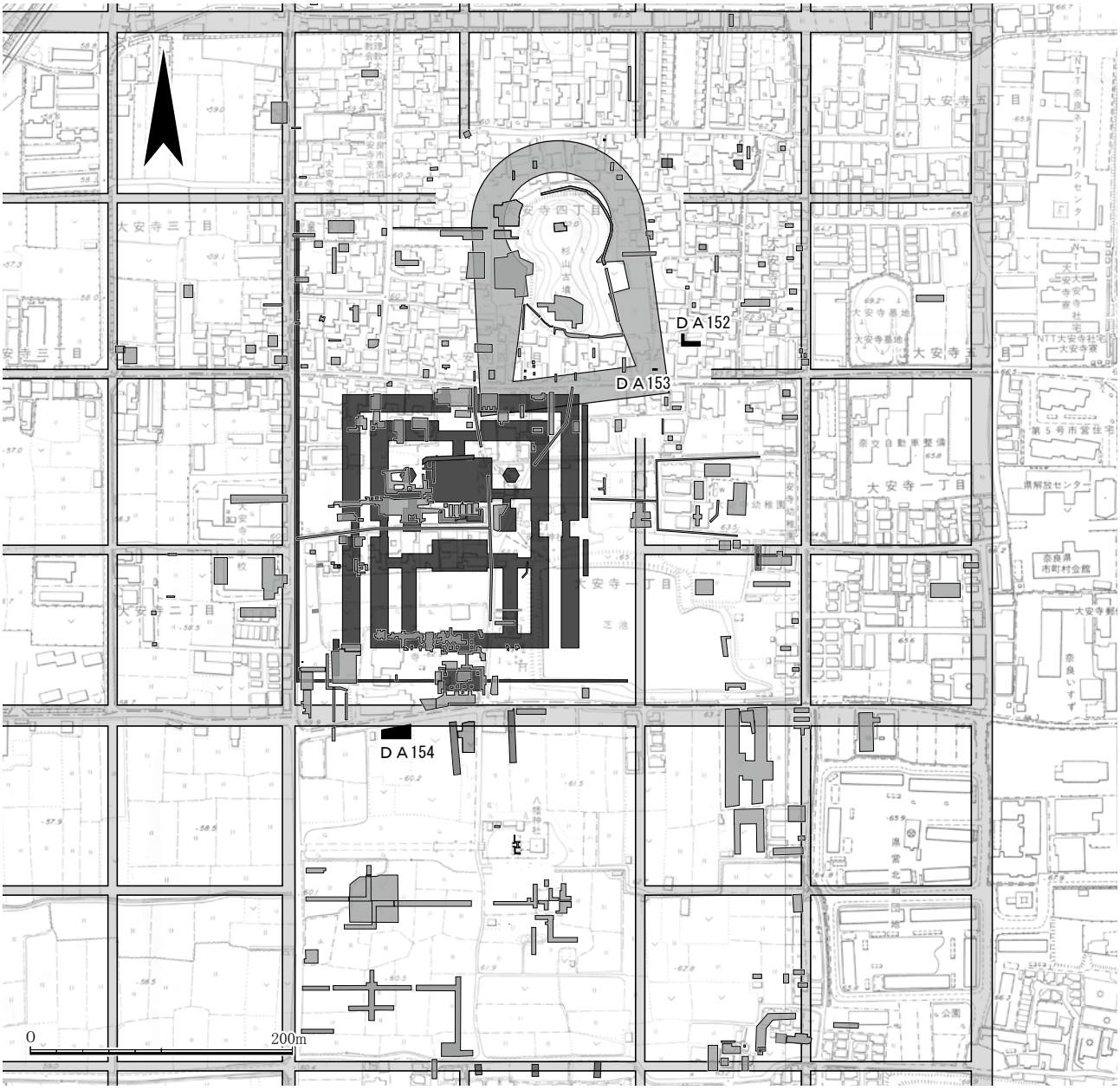
奈良市教育委員会では、令和３年度に史跡大安寺旧境内において３件の発掘調査を実施した。

ＤＡ第 152・153 次調査は住宅建築に伴い、「池并岳」または「賤院」に想定される大安寺旧境内の北東部の様相の確認、及び杉山古墳の周濠の堆積状況を確認することを目的として実施した。また、ＤＡ第 154 次調査は六条大路の検出を目的とした範囲確認調査である。

ＤＡ第 154 次調査の調査成果については、令和６年度発行予定の『史跡大安寺旧境内Ⅱ』で報告する。

史跡大安寺旧境内　発掘調査一覧表（令和3年度実施）

調査次数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA第 152 次調査	個人住宅建築	大安寺四丁目 1105 番1、1105 番2の各一部	2021. 4.12 ～4.22	51 ㎡	秋山成人
DA第 153 次調査	個人住宅建築	大安寺四丁目 1112 番	2021. 7. 9	3 ㎡	秋山成人
DA第 154 次調査	範囲確認調査	東九条町 1291-２、1292-１、1292-３	2021.10. 4～ 10.27	180 ㎡	原田憲二郎



史跡大安寺旧境内　発掘調査位置図（1/5,000）

（1）池并岳または賤院の調査　ＤＡ第 152 次

Ⅰ　はじめに

調査地は史跡大安寺旧境内の北東に位置し、杉山古墳外堤東側に位置する。『資財帳』によるところの左京六条四坊十坪が「池并岳」または「賤院」と記された地区に相当すると考えられている。これまでに、調査地北側のＤＡ第 36 次調査（昭和 63 年度）では室町時代の土坑･江戸時代の土坑、さらに北側のＤＡ第 20 次調査（昭和 59 年度）では江戸時代の土坑、調査地北東側の市ＤＡ第 22 次調査（昭和 60 年度）では奈良時代中頃の井戸を検出している。今回の調査は『資財帳』に記された大安寺寺域内の敷地利用を知るため調査を行った。なお、検出遺構の掘削は発掘区壁面沿いで深さの確認を目的として一部掘削するにとどめた。

Ⅱ　基本層序

発掘区内の基本層序は上から造成土､黒灰色土(表土)、暗褐色土、淡褐灰色砂質土、整地土（奈良時代）の黄灰褐色砂質土、地山の黄灰色粘土の順で堆積する。 遺構は整地土上面（GL － 0.6 m）で確認した。整地土上面の標高は 62.7 m、整地土の深さは 0.1 ～ 0.5 m、地山の標高は 62.5 mである。

Ⅲ　検出遺構

奈良時代の掘立柱列ＳＡ 01、土坑ＳＫ 02、室町時代の粘土採掘坑ＳＫ 03 ～ 06、溝ＳＤ 07・10、土坑ＳＫ 08・09、江戸時代の井戸ＳＥ 11・12、時期不明の土坑ＳＫ 13、掘立柱列ＳＡ 14 を検出した。

ＳＡ 01　発掘区東半で検出した南北１間以上の掘立柱列で、柱間寸法は 2.7 mである。抜取埋土から８～９世紀の土師器小片が出土した。

ＳＫ 02　発掘区西半南辺で検出した発掘区外南へ広がる掘形平面隅丸方形と考えられる土坑又は井戸である。規模は東西 2.2 m、南北 0.4 m以上、深さ 0.4 m以上。埋土は灰褐色土が堆積する。８世紀の須恵器杯蓋・土師器小片・平瓦が出土した。

ＳＫ 03 ～ 06　発掘区西半で検出した平面不整形、断面逆台形の土坑である。 規模は東西 1.1 ～ 1.3 m以上、南北 0.9 ～ 1.7 m以上、深さ 0.5 m。埋土は褐灰色粘質土である。重複関係から整地土の黄灰褐色砂質土上面より掘削され、土坑ＳＫ 06 は溝ＳＤ 07 より古い。ＳＫ 03 埋土から 14 世紀初頭の羽釜小片が出土した。

ＳＤ 07　発掘区中央西で検出した南北方向に延びる溝で断面逆台形である。規模は長さ 2.55 m以上、幅 0.75 m、深さ 0.25 mである。埋土から 15 世紀後半の土師器羽釜が出土した。

ＳＫ 08・09　発掘区北西で検出した平面不整円形、断面逆台形の土坑である。規模はＳＫ 08 が東西 0.6 m以上、南北 1.2 m、深さ 0.7 m以上。ＳＫ 09 が東西 0.8 m以上、南北 2.3 m、深さ 0.7 m以上。埋土は暗灰色土で、14 ～ 15 世紀の土師器羽釜が出土した。

ＳＤ 10　発掘区中央東で検出した南北方向に延びる溝で、断面皿状である。規模は南北 2.8 m以上、幅 0.7 m、深さ 0.15 mである。埋土から 18 ～ 19 世紀の信楽陶器小片が出土した。

ＳＥ 11･12　発掘区中央で検出した掘方平面隅丸方形の井戸である。規模はＳＥ 11 が東西 2.5 m、南北 0.85 m以上、深さ 0.4 m以上、ＳＥ 12 が東西 2.2 m、南北 2.0 m以上、深さ 0.7 m以上である。いずれも井戸枠抜取り痕跡から 18 世紀の肥前産陶磁器碗、土師器炮烙が出土した。重複関係からＳＥ 11 はＳＥ 12 より古いことがわかる。

ＳＫ 13　発掘区の東半で検出した発掘区外へ広がる平面不整形の粘土採掘坑とみられる土坑である。底は西から南東方向に下降し、凸凹している。規模は東西 3.5 m以上、南北３m以上、深さは南東隅で 0.5 mである。埋土は褐灰色粘質土で､遺物が出土せず時期は不明である。重複関係から柱列ＳＡ 01 より新しいことがわかる。

ＳＡ 14　発掘区東半で検出した東西１間以上の掘立柱列である。柱間は 2.1 m。柱穴掘方は径 0.3 m。重複関係から土坑ＳＫ 13 より新しいことがわかる。

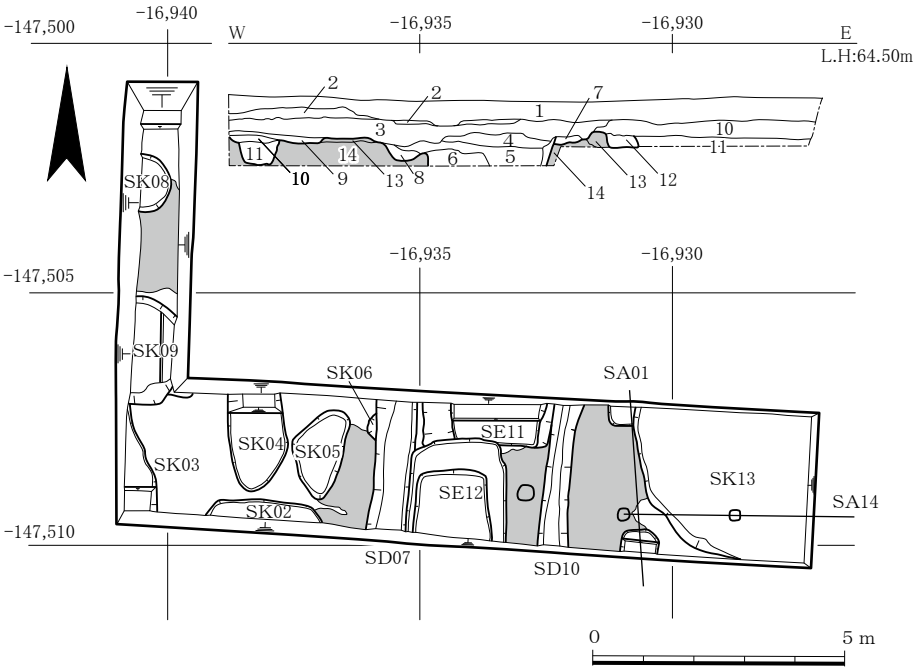
Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱で７箱分出土した。土器類には奈良・平安時代の土師器・須恵器、室町時代の土師器・瓦質土器、江戸時代の陶磁器、瓦類には奈良時代の軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。その他、古墳時代の埴輪、室町・江戸時代の土人形がある。

土人形　包含層から土製の合掌形坐像が出土した。頭部は欠損､腕は合掌して脚を組む。像高 6.8㎝､腹厚 2.3㎝、底部幅 8.5㎝。底部に径 0.8㎝、奥行 5.7㎝の孔を穿つ。室町～江戸期の作と考えられる。

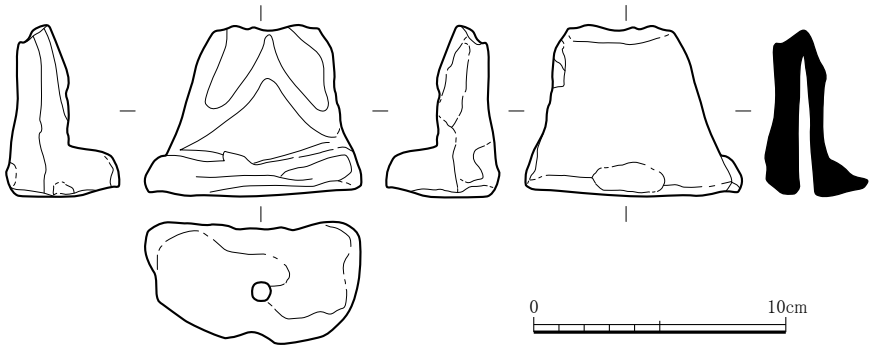
Ⅴ　調査所見

今回、奈良時代の掘立柱列・土坑を検出した。また 14 ～ 15 世紀になると新たな土地利用が見られ、周辺環境が改変されていくようである。　（秋山成人）



1 造成土
2 黒灰色土　（表土）
3 暗褐色土
4 灰色土
5 暗灰色土　（SE 11 抜取）
6 黄褐灰色粘質土　（SE 11 堀方）
7 暗灰色粘質土　（SD 10）
8 暗灰色粘質土　（SD 07）
9 淡褐灰色砂質土
10 淡褐色土　（SK 04）
11 褐灰色砂質土　（SK 04・13）
12 暗黄灰色土　（SA 01）
13 黄灰褐色砂質土　（整地土）
14 黄灰色粘土　（地山）

DA 第 152 次調査　発掘区平面図・北壁土層図（1/150）



DA 第 152 次調査　土人形（1/3）

DA 第 152 次調査　発掘区全景（西から）

DA 第 152 次調査　発掘区全景（南から）

（2）池并岳または賤院の調査　ＤＡ第 153 次

Ⅰ　はじめに

調査地は史跡大安寺旧境内の北東に位置し、杉山古墳前方部周濠の復元位置に相当する。 また、『資財帳』によるところの「池并岳」または「賤院」と記された地区に相当すると考えられている。これまでに、調査地南東側ＤＡ第７・８次調査（昭和 57 年度）では地表下約１ｍで地山を確認、土坑を検出している。調査地西隣接地ＤＡ第 67 次調査（平成６年度）では古墳前方部墳端葺石と周濠を確認している。調査地北東側ＤＡ第 152 次調査（令和３年度）では奈良・室町・江戸時代の各遺構を確認している。今回の調査は杉山古墳前方部周濠南東部分の確認を目的に行い、調査は東西３ｍ、南北１ｍの発掘区を設けた。検出遺構の掘削は地表下約１ｍ迄の掘削にとどめた。

Ⅱ　基本層序

基本層序は上から黒褐色土・暗褐色土（造成土）、暗灰色粘質土、暗灰色砂質土（周濠埋土）、茶褐色砂質土（周濠埋土）の順である。遺構は周濠埋土上面（GL-0.7 ｍ）で確認した。周濠埋土上面の標高は 62.26 ｍである。

Ⅲ　検出遺構

遺構には杉山古墳周濠、井戸ＳＥ 01 がある。

周濠　発掘区外へ広がる周濠を検出した。調査地全体が周濠内にあたる。古墳時代の埴輪片、奈良時代の土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・製塩土器片が出土している。

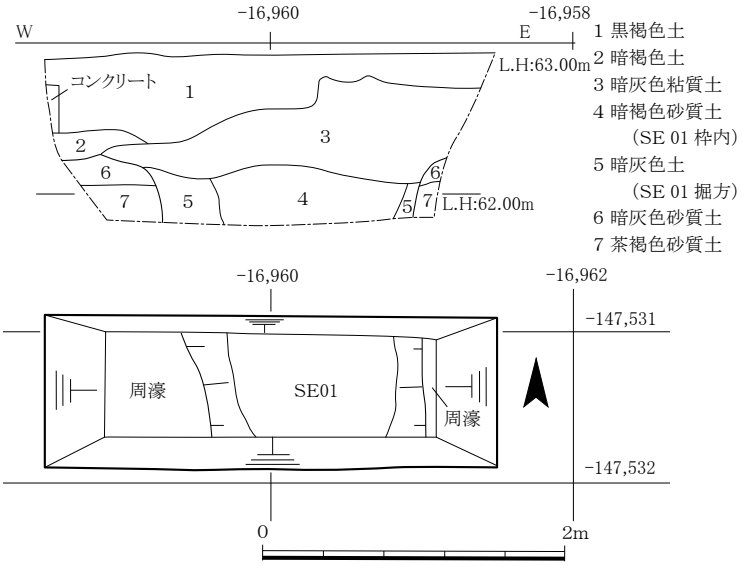
ＳＥ 01　発掘区外南北に広がる井戸を検出した。規模は南北 0.7m 以上、東西 1.84 ｍ、深さ 0.36 ｍ以上、内側に枠内埋土がみられ、南北0.7ｍ以上、東西1.4ｍ以上、深さ 0.3 ｍ以上堆積する。枠内東辺と西辺に直径約 3㎝の枠材とみられる木材を確認した。遺物は時期不明の土師器小片のみである。周濠埋没後に掘削されたものである。

Ⅳ　出土遺物

遺物整理箱１箱分が出土した。土器類には奈良時代の土師器・須恵器、製塩土器、瓦類には奈良時代の丸瓦・平瓦があり、その他に古墳時代の円筒埴輪がある。

Ⅴ　調査所見

今回の調査地は全体が杉山古墳前方部周濠南東部分に相当することが確認された。これは周濠上面の高さが調査地西隣接地であるＤＡ第 67 次調査の周濠上面の高さ 62.26 ｍと同じであることから分かる。また、ＤＡ第 67 次調査の周濠埋土から杉山瓦窯（平安時代）の窯体片が出土しており、同様に平安時代以降に埋まったと考えられる。　（秋山成人）



DA 第 153 次調査　発掘区平面図・北壁土層図（1/50）

DA 第 153 次調査　発掘区全景（西から）

DA 第 153 次調査　発掘区全景（南から）

14. 令和３年度実施　遺跡有無確認踏査一覧

令和３年度の遺跡有無確認踏査は２件実施した。

№.	受理番号	調査地	踏査日	事業面積（㎡）	事業者	事業内容	調査所見
1	R2.4004	月ヶ瀬長引 1246 番ほか7筆	R3.11.18	28,409	個人	土砂の採取	踏査の結果、近現代とみられる炭窯1基を確認したが、近世以前の遺物・遺構は確認できなかった。
2	R3.4003	桂木町、南京終町二丁目・三丁目・四丁目地内	R4. 2.22	12,500	奈良市長	街路改良工事	野神古墳については、墳丘および周濠がかかる可能性が高く、施工前に発掘調査が必要。 旧陸運局敷地南西部分の高まりについては、形状が大きく改変されているものの、古墳などの遺跡であるかを確認する試掘調査が必要。 →令和5年度に試掘調査を実施

15. 令和３年度実施　工事立会一覧

令和３年度に土木工事に関わって延べ 140 件の立会を実施した。

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
1	R 2.3390	左京二条三坊一坪	奈良市法華寺町 362 番の一部	モラル（有）	宅地造成	宅地	R 3. 4. 6	GL-1.2 m アスファルト 0.05 m、盛土 0.4 m、黒灰色土（耕作土）0.3 m、灰色土 0.45 m以上
2	R 2.3293	右京二条四坊十六坪	奈良市若葉台四丁目 291- 6、315-20、315-78	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 4. 7	GL-1.7 m 盛土 1.7 m以上
3	R 2.3397	古城古墳（安康陵）宝来城跡隣接地	奈良市宝来四丁目 511 番1	秋田工務店（株）	分譲住宅新築	宅地	R 3. 4. 8	Gl-0.2 m 黒褐色土（表土）0.15 m、黄褐色土（地山）0.05 m以上
4	R 2.3404	右京二条四坊十四坪	奈良市疋田町一丁目 28 番1の一部	（株）弘陽	個人住宅新築	宅地	R 3. 4. 9	GL-0.9 m 造成土 0.5 m、黄灰色砂質土（地山）0.4 m以上
5	R 2.3386	五条大路（東六坊）奈良町遺跡	奈良市京終地方西側 11 番3、12 番3、京終地方東側町 18 番2	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 4. 9	GL-0.1 m 造成土 0.1 m以上
6	R 2.3142	西四坊大路（五条）	奈良市六条西一丁目 981- 1、4、5、6	かさね（株）	老人福祉施設新築	宅地	R 3. 4.13	GL-1.0 m 造成土 0.7 m以上
7	R 2.3348	東二坊大路（一条）	法華寺町 1152- 2地先	関西電力送配電（株）	電柱撤去・新設	宅地	R 3. 4.13	GL-1.5 m 黒褐色シルト質砂（表土）0.3 m、橙路粘土･灰色シルト（地山）1.2 m以上
8	R 2.3289	興福寺跡 奈良町遺跡	高畑町 1116- 6	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	R 3. 4.18	GL-0.75 m 道路舗装・造成土 0.75 m以上
9	R 2.3384	右京八条四坊九坪	七条西町一丁目 609 番 28 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 4.19	GL-0.3 m 造成土 0.3 m以上
10	R 2.3392	左京一条四坊十一坪	法蓮町 597- 1	一建設（株）	分譲住宅新築	宅地	R 3. 4.19	GL-0.2 ～ 0.6 m 0.2 ～ 0.6 mで明黄褐色粘土（地山）
11	R 2.3319	遺物散布地（06C-0007）	須山町 475	関西電力送配電（株）	本柱・支線建替	道路	R 3. 4.20	GL-2.5 m 暗黄褐色シルト質砂（表土）0.3 m、灰オリーブ色シルト質砂 2.2 m以上
12	R 2.3393	奈良山第 44 号窯	中山町 1534- 1、1534- 2、1535、1537- 1、1537- 2、1537- 3、1536	積水ハウス不動産関西（株）	宅地造成	宅地	R 3. 4.26	GL-1.2 m 黒褐色土（表土）0.4 m、褐色土 0.3 m、黄灰色粘質土（地山）0.5 m以上
13	R 2.3394	窯（04B-0006）	三松ヶ丘 500 番 110	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 4.27	GL-0.2 m 造成土 0.2 m以上
14	R 3.3002	右京北辺四坊二坪	西大寺野神町一丁目 657 番1、659 番1、659 番 11、659 番 15	個人	共同住宅新築	宅地	R 3. 5. 7	GL-1.5 m 造成土 0.1 m、黄灰色粘土（地山）0.5 m以上

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
15	R 3.3162	四条大路 西二坊大路	五条一丁目1-32 ～3-2	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	R 3. 5.10	GL-1.1 m アスファルト 0.05 m、砕石 0.05 m、造成土 1.0 m以上
							R 3. 5.13	GL-1.46 m アスファルト 0.05 m、造成土 0.5 m、配管掘形埋土が 0.85 ～ 0.91 m以上
							R 3. 5.24	GL-1.4 m アスファルト 0.05 m、砕石 0.05、造成土 0.4 m、淡灰色粘砂（地山）0.9 m以上
							R 3. 5.28	GL-1.1 m アスファルト 0.05 m、造成土 0.6 m、淡灰色粘砂（地山）0.45 m以上
							R 3. 5.31	GL-1.0 m アスファルト 0.05 m、砕石 0.1 m、造成土 0.5 m、淡灰色粘砂（地山）0.35 m以上
16	R 2.3385	左京三条六坊七坪 奈良町遺跡	高天市町 65 番1	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 5.11	GL-0.4 ～ 0.5 m 黒褐色土（表土）0.4 ～ 0.5 m以上
17	R 3.3009	左京五条二坊二坪	大安寺町 506 番1外	（株）いそかわ	店舗新築	宅地	R 3. 5.12	GL-1.35 m アスファルト 0.05、造成土 1.3 m以上
							R 3.12.13	GL-4.14 m GL-2 m迄土留板、以下灰色粘質土（耕作土）・淡灰色シルト・黄灰色シルト 0.8 m、灰色・黄褐色シルト遺物包含（遺構面）0.2 m、黄灰色シルト 0.12 m、灰色粘土 0.18 m、灰色粗砂・青灰色粘土 0.2 m、以下灰色粗砂・暗灰色粘土
18	R 2.3416	右京五条三坊九坪	平松二丁目 250 番 19	（株）ユニハウス	分譲住宅新築	宅地	R 3. 5.24	GL-0.1 ～ 0.4 m 造成土 0.1 ～ 0.4 m以上
19	R 3.3066	左京一条六坊四坪	法蓮町 1265 番1、1265 番2	（株）アル―デ	分譲住宅新築	宅地	R 3. 5.28	GL-0.25 m 黒灰色土（耕作土）0.2 m、淡褐色砂質土 0.05 m
20	R 2.3353	左京二条四坊一坪	法蓮町 395- 1	（福）奈良社会福祉院	障碍者支援施設・事務所新築	宅地	R 3. 6. 7	GL-1.3 m 造成土 1.0 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m、灰色粘土 0.1 m以上
21	R 3.3053	左京一条五坊五・八坪	法蓮町 793- 3	大阪ガス（株）	ガス管埋設・撤去	宅地	R 3. 6. 8	GL-0.6 m 造成土 0.5 m、灰色粗砂 0.1 m以上
22	R 2.3389	左京六条四坊十五・十六坪	大安寺五丁目2-10 ～五丁目9-18	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	R 3. 6.10	A 地点 :GL-0.8 m アスファルト 0.1 m、造成土 0.7 m B 地点 :GL-1.15 m アスファルト 0.05 m、砕石 0.25 m、造成土 0.85 m以上 C 地点 :GL-1.05 m アスファルト 0.05 m、砕石 0.1 m、造成土 0.9 m以上 D 地点 :Gl-1.5 m アスファルト 0.05 m、砕石 0.1 m、黒灰色土（耕作土）0.1 m、灰色土 0.4 m、黄灰色粘土（地山）0.5 m、黄褐色砂礫 0.35 m以上
23	R 1.3417	左京二条七坊三・四坪	半田横町 14	（大）奈良女子大学長	長屋新築	宅地	R 3. 6.14	GL-0.3 m 造成土 0.3 m、以下地盤改良土
24	R 2.3391	右京七条一坊八坪	六条町 24 番1	楽天モバイル（株）	携帯基地局建設	駐車場	R 3. 6.15	GL-3.0 m 造成土 0.7 m、黒灰色土（耕作土）0.3 m、灰色粗砂（河川堆積層）、灰色粘土 1.2 m以上
25	R 2.3028	右京八条三坊八坪	七条一丁目 544 番5、545 番5	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 6. 17.	GL-3.5 m 造成土 0.1 m、赤灰色粘質土 0.2 m以上
26	R 2.3401	右京四条四坊二坪	平松二丁目 797 番8	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	R 3. 6.21	GL-0.1 m 造成土 0.1 m以上

令和３年度実施　立会工事

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
27	R 3.3096	右京七条四坊十四坪	七条西町一丁目 25-18	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 6.23	GL-0.9 m　造成土 0.9 m以上
28	R 2.3383	右京二条三坊二坪	西大寺南仮換地 17- 5・17- 6	関西電力送配電（株）	電柱・支線新設	宅地	R 3. 6.29	GL-2.6 m　土層確認できず
29	R 3.3018	左京二条三坊一坪	法華寺町 362	関西電力送配電（株）	電柱新設建替・支線新設	宅地	R3.6.30	GL-0.8 ～ 0.9 m　造成土 0.8 ～ 0.9 m以上
30	R 1.3448	左京五条六坊十一坪	西木辻町 88 番地 他 14 筆	小山（株）	工場新築（水槽）	工場用地	R 3. 7. 2	GL-1.2 m　造成土 0.2 m、黒灰色土 0.2 m、灰褐色土 0.1 m、褐灰色土 0.1 m、灰色砂質土 0.2 m、褐色土 0.15 m、黄褐色土 0.25 m、黄灰色粘土（地山）　素掘りの溝・小柱穴確認
31	R 3.1004	特別史跡平城宮跡	佐紀町 271 番1、472 番地先	西日本電信電話（株）	電柱の経年劣化による建替え	道路	R 3. 7. 2	GL-1.15 m　アスファルト 0.05 m、造成土 0.65 m　以下シルト層
32	R 3.3119	右京三条四坊五坪	宝来三丁目 732- 3、732- 4の一部、735- 1の一部、735- 2	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 7. 5	GL-0.2 m　黒灰色土（耕作土）0.2 m以上
33	R 2.1152	大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 1105- 1、1105- 2	関西電力送配電（株）	電柱・支線新設	宅地	R 3. 7. 5	GL-1.2 ～ 1.3 m　№.22N1W1：暗褐色土 0.8 m　暗灰粗砂 0.6 m以上　№.22N1W2：暗褐色土 0.8 m、黄褐色土（地山）
34	R 2.3213	北村城跡	北村町 876、877- 1、878、892	農事組合法人奈良の郷	林内作業道の開設	山林	R 3. 7. 6	造成土確認
35	R 2.3183	右京五条四坊六坪	平松四丁目 354 番3、354 番1の一部（3号地）	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	R 3. 7. 7	GL-0.15 m　盛土 0.15 m以上
36	R 3.3184	五条条間路・西四坊坊間東小路	平松四丁目 354 番1の一部（4号地）	ファースト住建（株）	分譲住宅新築	宅地	R 3. 7. 7	GL-0.15 m　盛土 0.15 m以上
37	R 3.3430	左京八条四坊十坪	東九条町 815 番1	個人	共同住宅新築	水田	R 3. 7. 8	A 地点 :GL-0.8 m　アスファルト 0.1 m、造成土 0.7 m B 地点 :GL-1.15 m　アスファルト 0.05 m、砕石 0.25 m、造成土 0.85 m以上 C 地点 :GL-1.05 m　アスファルト 0.05 m、砕石 0.1 m、造成土 0.9 m以上 D 地点 :Gl-1.5 m　アスファルト 0.05 m、砕石 0.1 m、黒灰色土（耕作土）0.1 m、灰色土 0.4 m、以下黄灰色粘土（地山）0.5 m、黄褐色砂礫 0.35 m
38	R 2.3261	西大寺跡	西大寺南町2～3	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	R 3. 7.12	GL-0.9 m　東端地点：コンクリート平板 0.1 m、造成土 0.6 m、黄灰色粘質土 0.1 m、褐灰色粘質土 0.1 m以上 西端地点：コンクリート平板 0.1 m、造成土 0.5 m、黒灰色土（耕作土）0.1 m、黄灰色粘質土 0.3 m以上
39	R 3.3075	左京五条六坊三坪	西木辻町 105 番 25、112 番5	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 7.15	GL-0.2 ～ 0.4 m　造成土 0.2 ～ 0.4 m以上
40	R 3.3074	左京二条七坊十二坪	南半田東町 16- 1、16- 2	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 7.19	GL-0.2 m　黒褐色土（表土）0.2 m以上
41	R 3.3030	三条大路（東六坊）	上三条町 29- 1	大阪ガス（株）	ガス管埋設・撤去	道路	R 3. 7.20	GL-0.5 ～ 1.1 m　造成土 0.8 m、以下灰白色砂礫（地山）
42	R 3.3050	東三坊大路（五条）	大安寺町七丁目 174- 6、大森町 686- 5	関西電力送配電（株）	電柱建替	宅地	R 3. 7.26	GL-0.9 m　造成土 0.9 m以上
43	R 3.3137	左京二条四坊十二坪	芝辻町三丁目 107 番8	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 7.26	GL-0.3 ～ 0.5 m　造成土 0.3 ～ 0.5 m以上

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
44	R 3.3117	広大寺池遺跡	今市町 279- 1、279- 2、279- 3、279- 4、281- 2、281- 3	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 7.30	GL-0.7 m 黒褐色土（表土）0.2 m、淡褐色土 0.3 m、黄褐色砂質土（地山）0.2 m以上
45	R 2.3368	右京六条四坊十一・十二坪	六条二丁目 1121 番、1131 番 6、1294 番	（株）HSG	老人ディサービス施設新築（施工時立会）	宅地	R3.7.30	GL-0.5 ～ 0.7 m 造成土 0.4 ～ 0.5 m、黄褐色砂質土（地山）0.3 m以上
46	R 2.3278	左京五条四坊十坪五条条間路	大森町 97 番1、102 番 1、大森西町 170 番2	（株）ベストライフ西日本、（合）フルート	有料老人ホーム新築	水田	R 3. 7.30	GL-2.3 ～ 2.8 m 造成土 1.55 m、黒褐色土（表土）0.2 m、灰褐色砂質土 0.2 m、灰色砂礫（地山）0.35 ～ 0.85 m以上
47	R 2.3123	左京二条七坊十一坪奈良町遺跡	川久保町 10 番6	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 8. 2	GL-0.2 m 造成土 0.2 m以上
48	R 3.3115	左京一条四坊三坪一条条間南小路	法蓮町 453- 1、454、456- 1、456- 4、457- 1、457- 3、463- 3	（株）ネクステージ	店舗新築	駐車場	R 3. 8. 3	GL-0.5 ～ 0.6 m 造成土 0.5 ～ 0.6 m以上
							R 3. 9.10	GL-2.2 m 造成土 1.0 m、黒色粘質土（耕作土）0.3 m、灰黄色粘質土（地山）0.9 m以上
49	R 3.3224	左京五条四坊七坪	大安寺七丁目 674- 1、- 3、- 4、- 7、- 8 の各一部	（株）フロンティアホーム	分譲住宅新築	宅地	R 5. 8. 4	GL-0.2 ～ 0.3 m 造成土 0.2 ～ 0.3 m以上
50	R 3.3225	左京五条四坊七坪	大安寺七丁目 674- 1、- 4～ - 6、- 8、～ -10 の各一部	（株）フロンティアホーム	分譲住宅新築	宅地	R 3. 8. 4	GL-0.2 ～ 0.3 m 造成土 0.2 ～ 0.3 m以上
51	R 3.3104	左京四条五坊七坪	三条本町	関西電力送配電（株）	電線共同溝の増築	道路	R 3. 8. 4	GL-1.2 m コンクリート 0.1 m、造成土 0.4 m、黒灰色土 0.6 m、灰色土 0.1 m以上
52	R 3.3077	右京二条四坊四坪	菅原町 376-10、377-7	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 8. 4	GL-0.5 m 造成土 0.3 m、黒灰色土（耕作土）0.2 m以上
53	R 3.3054	左京二条六坊十五坪六坊坊間東小路	法蓮町 1186 番、1187 番1	恒和（株）	個人住宅新築	宅地	R 3. 8.10	GL-0.2 ～ 0.4 m 造成土 0.2 ～ 0.4 m以上
54	R 3.3111	西二坊坊間路（四条）	尼辻中町 403 番の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 8.10	GL-0.5 m 造成土 0.1 m、黒褐色土（表土）0.2 ～ 0.4 m、黄褐色砂質土（地山）0.2 m以上
55	R 2.3223	左京二条六坊十五坪、七坊二・七・十一坪、二条条間路、奈良町遺跡	北袋町 32- 3地先～川久保町 10- 1地先	奈良市企業局	浸水対策工事	宅地・道路	R 3. 8.10	GL-6 m 掘削済空洞部 2 m、淡黄褐色砂（旧河川堆積）1.6 m、青灰色粘質土 1 m以上
56	R 2.3146	左京二条七坊八坪、十六坪、奈良町遺跡	東笹鉾町 30 番、31 番、32 番	個人	共同住宅新築	宅地	R 3. 8.11	GL-0.5 m 砕石 0.05 m、暗褐色土 0.45 m以上
57	R 3.3151	西四坊大路（七条）	六条西四丁目 1492-63、1492-65	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 8.16	GL-0.1 ～ 0.3 m 造成土 0.1 ～ 0.3 m以上
58	R 3.3201	東四坊大路（一条）	法蓮町 710 番3	（株）ヒラサワ住宅	宅地造成	宅地	R 3. 8. 17.	GL-0.8 m 造成土 0.8 m以上
59	R 3.3091	右京五条三坊四坪	五条二丁目 571- 1・572	関西電力送配電（株）	電柱・支線新設、撤去	宅地	R 3. 8.18	GL-1.5 m 黒褐色土（表土）0.8 m、黄灰色砂質土（地山）1.2 m以上
60	R 3.3094	左京二条六坊三坪奈良町遺跡	西新在家町 14・15- 6・15- 8	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 8.20	GL-0.3 ～ 0.4 m 黒褐色土（表土）0.3 ～ 0.4 m以上
61	R 3.3177	右京北辺三坊	西大寺本町 264 番1の一部、西大寺新町一丁目 185 番7及び 185 番8	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 8.24	GL-0.5 m 造成土 0.3 m、黒灰色土（耕作土）0.1 m、灰色砂質土 0.1 m、以下黄灰色粗砂
62	R 3.3162	奈良町遺跡	高畑町 1380 番地3	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 8.26	GL-0.3 ～ 0.5 m 黒褐色土（表土）0.3 m、黄褐色土（地山）0.3 m以上

令和３年度実施　立会工事

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
63	R 3.3068	右京二条三坊一・八坪 三坊坊間東小路	菅原東一丁目 56 街区1画地他	奈良市長	地区集会所新築	宅地	R 3. 8.26	GL-1.2 m　造成土 0.35 m、黒灰色土(耕作土)0.2 m、灰色砂質土0.1 m、以下灰褐色砂質土（地山）
64	R 3.3203	東一坊坊間路（九条）	西九条町五丁目2-9番地、2-3番地	アサノ不動産（株）	門新築	宅地	R 3. 8.31	GL-0.7 m　造成土 0.7 m以上
65	R 3.3080	右京三条三坊十五坪 菅原寺跡（喜光寺跡） 菅原東遺跡	菅原町 506 番2の一部	個人	共同住宅新築	駐車場 青空	R 3. 9. 3	GL-0.3 m　造成土 0.3 m以上
66	R 3.3150	右京二条二坊十六坪	西大寺国見町一丁目 2137-64	エスリード（株）	共同住宅新築	宅地	R 3. 9. 6	GL-1.5 m　撹乱土 1.5 m
67	R 3.3256	左京二条七坊三坪	北魚谷東町	（大）奈良女子大学	電気・排水管・ガス管設備工事	宅地	R 3. 9. 1	GL-1.4 m　暗褐色土（表土）0.1 m、黒褐色土 0.6 m、以下黄灰色粘土(地山)
68	R 3.3103	矢田原遺跡 (09A-0068)	矢田原町 1643	関西電力送配電（株）	電柱建替	宅地	R 3. 9. 7	GL-2.3 m　コンクリート 0.1 m、以下黄褐色砂礫（地山）
69	R 3.3402	左京七条四坊十一・十二坪 東四坊坊間東小路	東九条町 1095-１・２、1106-４	（株）エスエムシイ	駐車場造成	水田	R 3. 9.10	GL-0.7 ～ 0.8 m　黒褐色土（耕土）0.2 ～ 0.45 m、灰黄色粘質シルト 0.1 m、褐灰色粘質土 0.11 ～ 0.25、灰褐色粘質シルト 015 ～ 0.18 m
70	R 3.3011	新薬師寺	高畑町	（大）奈良教育大学	プレハブ建物新築	学校用地	R 3. 9.15	GL-05 ～ 0.75 m　黒褐色土（表土）0.3 m、赤色煉瓦積基礎 0.45 m、以下黄灰色粗砂（地山）
71	R 3.3302	右京七条三坊四坪	七条一丁目 390 番 15(1号地)	ファースト住建（株）	個人住宅新築	宅地	R 3. 9.24	GL-0.1 ～ 0.15 m　黒灰色土（耕土）0.1 ～ 0.15 m以上
72	R 3.3303		七条一丁目 390 番 17(2号地)					GL-0.1 ～ 0.15 m　黒灰色土（耕土）0.1 ～ 0.15 m以上
73	R 3.3304		七条一丁目 390 番 14(3号地)					GL-0.1 ～ 0.15 m　黒灰色土（耕土）0.1 ～ 0.15 m以上
74	R 3.3305		七条一丁目 390 番 13(4号地)					GL-0.1 ～ 0.15 m　黒灰色土（耕土）0.1 ～ 0.15 m以上
75	R 3.3024	右京一条二坊十五坪 西隆寺跡	西大寺本町 217・215-3・218-４、西大寺東町 61-４地先	関西電力送配電（株）	電柱新設・撤去・建替・支線新設	道路	R 3. 9.28	16W4W1：GL-2.7 m　アスファルト 0.1 m、造成土 0.6 m、以下地山の黄灰色粘質土 1.6 m、灰色粘土 0.4 m以上 16W5W1：GL-2.8 m　アスファルト 0.2 m、砕石 0.2 m、黄色灰色砂質土(耕土)0.2 m、黒褐色砂質土0.3 m、褐灰色砂質シルト 0.5 m、以下地山の黄灰色粘質土 0.5 m、灰色粘土 0.9 m以上
76	R 3.3187	新薬師寺	高畑町	（大）奈良教育大学	排水管・電線管敷設	学校用地	R 3. 9.28	GL-0.5 m　黄色土（表土）0.4 m、黄灰色土（造成土）0.1 m以上
							R 3. 9.30	GL-0.5 ～ 0.7 m　造成土 0.5 ～ 0.7 m
							R 3.10.13	GL-0.4 ～ 1.3 m　造成土 0.4 m、以下板石（花崗岩）
							R 3.12.20	GL-1.0 m　GL-0.6 mで奈良連隊東西棟建物（兵舎）
							R 4. 1.14	GL-0.8 m　造成土 0.4 ～ 0.6 m、以下奈良連隊南北棟建物（便所）確認
77	R 3.3292	左京五条六坊三坪 五条条間南小路	西木辻町 110-６の一部	（株）F&S	店舗新築	駐車場	R 3. 9.29	GL-1.0 m　造成土 1.0 m以上

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
78	R 2.3352	左京四条六坊十二坪 奈良町遺跡	南城戸町65番､66番2、66番3	個人	個人住宅新築	宅地	R 3. 9.30	GL-0.5 ～ 0.7 m　黒褐色土（表土）0.5 ～ 0.7 m以上
79	R 3.3278	東三坊大路（八条）	東九条町 504 番1・504 番2・505 番・507 番の一部（1・2号棟）	（株）アーネストワン	分譲住宅新築	宅地	R 3. 9.30	1 号棟:GL-0.5 m　黒褐色土（表土）0.35 m、褐灰色土 0.15 m以上 2 号棟:GL-0.1 m　黒褐色土（表土）0.1 m以上
80	R 2.3294	左京七条三坊十三坪	東九条町 1003-7、1003-6	個人	個人住宅増築	宅地	R3.10.1	GL-0.23 m　コンクリート 0.06 m、造成土 0.17 m、以下暗灰色土（表土）
81	R 3.3247	古市遺跡	古市町 1191 番7	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.10. 4	GL-0.45 m　造成土 0.45 m以上
82	R 3.3306	右京一条三坊十一坪	西大寺芝町一丁目 2537- 1	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.10. 4	GL-0.35 m　砕石 0.1 m､黒褐色土(表土）0.25 m以上
85	R 3.3355	右京三条四坊十六坪	宝来四丁目 688 番2、689 番各一部	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.10.21	GL-0.5 m　造成土 0.4 m、灰白色粘質シルト（地山）0.1 m以上
86	R 3.3174	右京五条三坊十坪	平松二丁目 264 番 60	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.10.26	GL-0.6 m　造成土 0.5 m、黄灰色粘土（地山）0.1 m以上
87	R 3.3213	西四坊坊間路（七条）	七条西町一丁目 627-41	一建設（株）	個人住宅新築	宅地	R 3.10.28	GL-0.5 ～ 1.4 m　黄褐色粘質土（造成土）0.8 m、黄灰色粘土（地山）0.2 m、浅黄色粘土 0.2 m、明黄褐色シルト 0.1 m、黄色粘土 0.1 m以上
88	R 3.3240	右京七条四坊十六坪	六条西四丁目 1492-12	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11. 1	GL-0.7 m 明黄褐色砂質土（造成土）0.4 ～ 0.5 m､明黄褐色粘質土(地山）0.3 m以上
89	R 3.3277	左京二条七坊北郊多聞城跡隣接地	川上町 563-14 ～ 562	大阪ガス（株）	ガス管埋設	道路	R 3.11. 1	GL-0.8 ～ 1.0 m　A 地点：アスファルト 0.03 m、造成土 0.6 m、灰色土 0.17 m以上 B 地点：アスファルト 0.03 m、造成土 0.97 m以上
							R 3.11. 2	C 地点：GL-0.9 m　アスファルト 0.03 m、造成土 0.6 m、灰色土 0.15 m、黄褐色土 0.2 m、明黄褐色粘質土 0.1 m以上
90	R 3.3323	右京二条四坊十五坪	宝来四丁目 216 番1の一部、216- 2	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11. 2	GL-0.2 ～ 0.3 m　造成土 0.2 ～ 0.3 m以上
91	R 3.3287	二条条間路（西四坊）	疋田町一丁目 28- 1	関西電力送配電（株）	電柱・支線新設	宅地	R 3.11. 5	GL-2.6 m　造成土 0.5 m、灰色粘質土（耕土）0.1 m、黄灰色粘質シルト（旧耕土）0.2 m、灰黄褐色中粒砂（地山）0.2 m､灰色シルト 0.4 m、灰色粘土 1.35 m以上
92	R 3.3270	右京一条四坊六坪	西大寺野神町二丁目 1748 番6	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11. 5	GL-0.5 ～ 0.7 m　造成土 0.2 m、褐灰色砂質土（耕土）0.1 m、灰白色砂質土 0.1 m、黄褐色砂質土 0.1 m、浅黄色砂質土 0.1、明黄褐色砂質土（地山）0.1 m以上
93	R 3.3190	森本窪之庄遺跡	窪之庄地内	奈良市企業局	下水道工事	道路	R 3.11. 9	GL-1.5 m　アスファルト 0.2 m、土壌改良 0.2 m、造成土 0.4、耕土 0.8 m以上

令和３年度実施　立会工事

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
94	R 3.3293	東七坊坊間東小路（二条）・奈良町遺跡	南半田東町9番、10番2	（株）車屋 代表取締役 正木麻文	共同住宅新築	宅地	R 3.11. 3	GL-1.8（X1・Y1） ～ 2.0 m（X3・Y3） 黒褐色土（造成土）0.5 ～ 0.8 m
							R 3.11.10	GL-1.7 m（X3・Y1）黒褐色土（造成土）0.5 m、灰黄褐色砂質土（焼土）0.2 m、灰褐色砂質土（焼土）0.2 m、黄灰色粘質土 0.2 m、明黄褐色砂礫（地山）0.6 m以上
							R 3.11.11	GL-1.4（X5・Y3） ～ 1.5 m（X6・Y3） 造成土 0.2 m、灰黄色砂質土 0.2 ～ 0.3 m、灰褐色砂質土 0.4 m、黄灰色粘質土 0.1 ～ 0.3 m、暗黄灰色粘質土 0.2 ～ 0.5 m
95	R 3.3310	右京六条四坊十一坪	六条二丁目 1055 番4、1135 番、1136 番の一部	個人	共同住宅新築	宅地	R 3.11.12	GL-0.6 ～ 0.8 m 淡黄灰色砂質土（地山）0.6 ～ 0.8 m以上
96	R 3.3248	左京五条七坊四坪	中辻町 72-４、74-３	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11.15	GL-0.25 m 造成土 0.1 m、黒褐色土（表土）0.15 m以上
97	R 3.3246	七条条間路（東三坊）	東九条町～八条一丁目	奈良市企業局	水道既設管の入替工事	道路	R 3.11.17	GL-1.55 m アスファルト 0.05 m、造成土 0.8 m、黒灰色土（耕土）0.3 m、暗灰色土 0.4 m以上
							R 3.11.29	GL-1.3 m アスファルト 0.05 m、造成土 0.3 m、黒褐色土（表土）0.25 m、灰色土 0.3、灰色砂（河川堆積）0.4 m以上
98	R 3.3268	右京二条四坊二坪	若葉台四丁目 286 番9・286 番 10	一建設（株）	分譲住宅新築	宅地	R 3.11.19	GL-0.5 m 造成土 0.2 m以上
99	R 3.3155	鹿野園石器散布地石淵寺跡	鹿野園町 地先	奈良市企業局	下水道築造工事	道路	R 3.11.24	GL-1.1 m アスファルト 0.2 m、砕石 0.1 m、造成土 0.8 m以上
							R 3.12. 1	GL-2.1 m アスファルト 0.2 m、砕石 0.1 m、造成土 1.5 m、黄褐色粘質土 0.1 m、褐灰色粘質土 0.1 m
							R 3.12. 3	GL-1.75 m アスファルト 0.1 m、砕石 0.1 ～ 0.25 m、造成土 0.7 ～ 0.95 m、以下青灰色シルト（地山）
100	R 3.3375	左京五条七坊八坪 奈良町遺跡	川之上突抜南方町 9番、10 番、11 番1	（株）車屋	共同住宅新築	宅地	R 3.11.25	GL-1.35 m 黒褐色土（表土）0.7 m、黄灰色粘土（地山）0.65 m以上
101	R 3.3386	遺物散布地隣接地	古市町 272 番2	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.11.25	GL-0.15 m 造成土 0.15 m以上
102	R 3.3279	左京六条二坊一坪	八条町 369 番 1、369 番2、372 番1、375 番1、376 番1、379 番4	（株）モンベルホールディングス	店舗新築	宅地	R 3.11.26	GL-1.3 m 造成土 0.9 m、灰色粘土 0.4 m
							R 3.11.30	GL-1.6 m 造成土 0.9 m、灰色粘土 0.4 m、灰褐色砂質土（包含層）0.2 m、黄灰色粘土（地山）0.1 m以上
							R 4. 1.26	GL-1.45 m 造成土 1.45 m
103	R 3.3207	西一坊坊間東小路（六条）	六条町 209-１	関西電力送配電（株）	電柱・地支線新設	宅地	R 3.11.30	GL-2.7 m 黒灰色土（耕土）0.05 m、造成土 0.7 m、以下黄灰色土（地山）
104	R 3.3363	右京一条四坊十四坪	西大寺新池町 1837 番 20	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.12. 1	GL-0.25 m 造成土 0.25 m以上
105	R 3.3230	左京二条六坊一坪	法蓮町 1000	（学）奈良育英学園	保育室増築・大規模改修工事	宅地	R 3.12. 2	GL-1.1 m 造成土 0.2 m、橙褐色土 0.26 m、灰色粘質土 0.26 m、灰色粘質土 0.14 m、灰色粘質土礫含 0.5 m、以下灰色砂礫（地山）

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
106	R 3.3373	左京一条三坊七坪	法華寺町 1305 番1	個人	宅地・青空駐車場造成	青空駐車場	R 3.12. 3	GL-0.9 ～ 1.0 m　黒褐色土（耕土）0.5 m、黄褐色土 0.2 m、以下明黄褐色土（地山）0.2 m
107	R 3.3235	左京二条七坊北郊	手貝町 20 番地5	個人	個人住宅新築	宅地	R 3.12. 6	GL-0.7 ～ 0.9 m　造成土 0.5 ～ 0.9 m、耕土 0.2 m以上
108	R 3.3255	左京二条六坊十一坪	北魚屋西町	（大）奈良女子大学	作業場増築	宅地	R 3.12. 6	GL-0.7 m　造成土 0.7 m以上
109	R 3.3141	右京三条四坊二坪	菅原町 地先	奈良市企業局	下水道築造工事	道路	R 3.12. 6	GL-2.1 m　砕石 0.55 m、造成土 1.15 m、灰色砂礫（地山）0.25 m以上
							R 3.12. 9	GL-1.9 m　造成土 1.4 m、旧耕土 0.25 m、灰色土 0.15 m、淡青灰色粘質シルト（地山）0.1 m以上
110	R 2.3399	菅原遺跡隣接地	疋田町三丁目3-11 ～ 五丁目 465	大阪ガス（株）	ガス管埋設工事	道路	R 3.12.14	GL-0.8 m　アスファルト 0.05 m、砕石 0.1 m、灰色礫土（造成土）0.25 ～ 0.35 m、黄褐色粘質土・粗砂・礫混じり（造成土）0.3 ～ 0.4 m
111	R 2.3290	右京四条一坊十五坪	四条大路五丁目 134 番の一部	個人	宅地造成・共同住宅新築	水田	R 3.12.13	GL-0.5 m　耕作土 0.3 m、灰色砂質土 0.5 m
112	R 2.3423	一条北辺条間小路	西大寺赤田町一丁目 659-12	関西電力送配電（株）	電柱・支線建替	宅地	R 3.12.14	GL-2.85 m　造成土 0.65 m、耕作土 0.1 m、灰色砂質土 0.3 m、以下黄褐色粘質土（地山）1.8 m
113	R 3.1106	史跡大安寺旧境内石橋瓦窯跡	大安寺二丁目 18- 1	（宗）南都大安寺	既存塀の建替え	寺院	R 3.12.14	竹垣撤去、掘削は行われず
							R 3.12.20	0.6 m　淡黒灰色土（表土）0.2 m、灰色土 0.3 m、灰褐色土 0.3 m、淡灰褐色土（盛土）0.25 m
114	R 3.1086	史跡大安寺旧境内石橋瓦窯跡	東九条町 1353 番 1、1353 番2	国土交通省	地質調査・地下水位観測	史跡整備地	R 4. 1.11	GL-0.5m　盛土0.25m、黒灰色土（耕作土）0.25 m
115	R 3.3212	新薬師寺	高畑町	（大）奈良教育大学長	門設置工事	学校用地	R 4. 1.12	GL-0.6 m　A・B 地点：黒褐色土 0.6 m以上　c地点：コンクリート平板 0.08 ～ 0.1 m、黄灰色砂 0.15 m、砕石 0.15 m、黄褐色土（造成土）0.2 m以上
					電気錠用配管工事		R 4. 2.7	GL-0.3 m　コンクリート平板 0.08 ～ 0. 1m、黒褐色粗砂（盛土）0.07 m、コンクリート 0.05 m、灰色粗砂（盛土）0.1 m以上
					門設置工事		R 4. 2.8	GL-0.8 m　№②と№③の門支柱掘形:GL-0.45 mで小学校敷地東面にて奈良連隊時の南北道路西縁石と考えられる花崗岩製縁石列（4 個）を確認、石材は教育大収蔵庫西側へ移動
116	R 3.3212	新薬師寺	高畑町	（大）奈良教育大学長	電気錠用配管工事	学校用地	R 4. 2.15	GL-0.4 ～ 0.8 m　黒褐色土 0.7 m、黒灰色土（耕作土）0.1 m以上　奈良連隊時の南北道路西縁石と考えられる花崗岩製縁石（8 個）及び板石（3 個）確認、石材は教育大収蔵庫西側へ移動
117	R 3.3297	左京二条五坊一坪	法蓮町 316 番 15、316 番 16	個人	個人住宅新築	宅地	R 4. 1.15	GL-0.3 m　造成土 0.1 m、黒褐色土（表土）0.2 m、以下淡茶褐色土
118	R 3.3346	左京三条四坊十坪	大宮町五丁目2-18	大阪ガス（株）	ガス管敷設	道路	R 4. 1.17	GL-1.2 m　造成土 0.5 m、灰色土 0.4 m、灰色粗砂 0.3 m以上
119	R 3.3378	鞆田城	都祁友田町 1450 番	個人	個人住宅新築	宅地	R 4. 1.27	GL-0.3　造成土 0.3 m

令和３年度実施　立会工事

No.	受理番号	遺跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現状	工事立会	
							日付	結果
120	R 3.3299	野神古墳	桂木町 295 番 2	関西電力送配電（株）	電柱・支線建替	宅地	R 4. 1.31	GL-2.8 m 黒褐色土（表土）0.2 m、黒灰色砂礫土（地盤改良土）0.5 m、淡黄灰色土（造成土）0.7 m、以下灰色粘土
121	R 3.3359	平城京南方遺跡	北之庄町 658 番 1 の一部	（特非）みつわ会	生活介護施設新築	水田	R 4. 2. 2	GL-0.85 m 黒灰色土（耕作土）0.25 m、灰色土 0.1 ～ 0.26 m、褐灰色土 0.16 ～ 0.2 m、茶褐色土 0.13 m、以下地山の褐灰色粘土 0.2 m、黄灰色土 0.2 m、灰色粘砂 0.07 m、黄褐色土
122	R 3.3236	遺物散布地（水越神社）	邑地町 3168	（宗）水越神社	文化財防災工事	境内地	R 4. 2. 4	GL-4.15 m 黒褐色土 0.2 m、淡褐色砂質土 3.95 m以上
123	R 3.3532	左京四条七坊一坪 奈良町遺跡	元林院町 5	（株）中川政七商店	店舗新築	宅地	R 4. 2. 9	工事先行：顛末書提出　GL-0.4 m 黒色土 0.1 m、漆喰 0.05 m、黒褐色土（焼土混）
124	R 3.3461	新薬師寺　奈良連隊跡	高畑町	（大）奈良教育大学	高畑団地校内（管路）改修	学校用地	R 4. 2.15	GL-0.4 m 造成土 0.4 m以上
125	R 3.3511	左京二条六坊北郊	法蓮町 1702-16	（株）サンドラッグ	看板設置	宅地	R 4. 2.17	GL-1.5 m アスファルト 0.1 m、造成土 0.1 m、以下地山の黄褐色砂質土 0.4 m以上
126	R 3.3457	左京二条七坊北郊	川上町 593-14	（株）日本中央住販	分譲住宅設置	宅地	R 4. 2.17	GL-0.3 m 盛土 0.15 m、黒褐色土（表土）0.15 m以上
127	R 3.3500	右京二条四坊一坪	西大寺 2061 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	R 4. 2.21	GL-0.25 ～ 0.35 m 造成土 0.25 ～ 0.35 m
128	R 3.3422	右京五条四坊九坪	平松三丁目 529 番 24	個人	個人住宅新築	宅地	R 4. 2.22	GL-0.8 m 造成土 0.25 m 黄白色粘質土 0.55 m以上
129	R 3.3431	ゼニヤクボ遺跡	蘭生町 1864-2 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	R 4. 2.26	基礎掘削なし
130	R 3.3283	古市城跡	古市町 1846-47	個人	事務所付個人住宅新築	宅地	R 4. 3. 8	GL-0.9 m 造成土 0.9 m以上
132	R 3.3536	一条北辺京極路	西大寺北町四丁目 415-2	個人	個人住宅新築	宅地	R 4. 3.10	GL ー 0.3 m 造成土 0.1 m、明黄褐色土粘質土 0.3 ～ 0.5 m
133	R 3.1146	史跡大安寺旧境内石橋瓦窯跡	東九条町 1302-2 他	奈良市教育委員会	案内版、解説板の設置	市有地	R 4. 3.11	GL-0.6 m 盛土 0.5 ～ 0.6 m
134	R 3.3518	右京七条三坊三坪	七条一丁目 390 番 16	個人	個人住宅新築	宅地	R 4. 3.16	GL-0.3 ～ 1.0 m 黒褐色砂質粘土（表土）0.1 ～ 0.2 m 以下黄色灰色砂質粘土、青灰色粘土
135	R 3.3408	南紀寺遺跡　石淵寺	白毫寺町	（大）奈良教育大学長	電線管・給水管の敷設	学校用地	R 4. 3.17	GL-0.3 ～ 0.5 m 暗灰色砂質粘土（耕土）0.15 ～ 0.2 m、灰色粘土 0.15 ～ 0.3 m
136	R 3.1118	史跡大安寺旧境内・石橋瓦窯跡	大安寺四丁目 3 番 19 号	個人	住宅（ガレージ）の除去及び新築	宅地	R 4. 3.17	GL-0.1 m 暗灰黄色砂質粘土 0.1 m、以下黄褐色砂質粘土（地山）
137	R 3.1186	史跡大安寺旧境内石橋瓦窯跡	東九条町 1342（西塔跡）	奈良市教育委員会	解説板の設置	市有地	R 4. 3.18	GL-0.5 m 盛土 0.5 m
138	R 3.3576	左京四条六坊一坪	北向町 29- 1、29- 2	個人	店舗付住宅新築	宅地	R 4. 3.18	GL-0.3 m 暗灰黄色礫混砂質シルト 0.3 m
139	R 3.3492	右京七条四坊四坪	七条西町一丁目 627 番 133	個人	個人住宅新築	宅地	R 4. 3.28	GL-0.5 m 暗黄灰色礫混砂質粘土 0.2 ～ 0.3 m、以下青灰色粘土（地山）
140	R 3.3041	左京二条七坊十三坪	南半田東町3番地	個人	個人住宅新築	宅地	R 4. 3.31	GL-0.15 m 黒褐色土 0.15 m以上

なお、表中の遺跡名のうち、平城京跡については名称を略し、○京○条○坊、もしくは○条大路、○坊大路等で示した。

第２章　令和 3(2021) 年度　埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

令和３（2021）年度　埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

１．展示

Ａ　常設展示

対　象：一般

会　期：令和３年４月１日（木）～４月30日（金）
　　６月１日（火）～８月24日（火）
　　令和３年11月15日（月）～12月25日（金）
　　令和４年１月４日（月）～３月31日（水）
　　（148日間、５月１日（土）～５月31日（月）は、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、閉室）

場　所：埋蔵文化財調査センター展示室

趣　旨：埋蔵文化財の展示を通じ奈良市の歴史を紹介。旧石器～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を遺跡ごとに展示。

Ｂ　奈良市教育委員会秋季特別展

「帯解の古墳時代とワニ氏」

対　象：一般

会　期：令和３年９月６日（月）～11月５日（金）
　　（60日間）

場　所：埋蔵文化財調査センター展示室および同室前ロビー

趣　旨：奈良市街地南東部に位置する帯解地域には、多くの古墳や遺跡がある。これらは古代氏族ワニ氏にかかわるものとして、古くから関心を集めてきたが、この地域の調査研究をまとめたものは少なく、その実態は不明な点が多い。そこで、今回の展示では「帯解」地域に注目し、ワニ氏が成立するための基盤がどのようなものであったかを展示を通して説明した。
　　なお、今回の展示では市指定文化財であるベンショ塚古墳出土品を初めて一挙公開した。

観覧者数: 1,345名

その他：・案内を「しみんだより」９月号と奈良市役所のホームページに掲載。
　　・宣伝用のチラシの作成・配布。
　　・展示パンフレット・リーフレットの作成。

Ｃ　春季発掘調査速報展

「秋篠阿弥陀谷横穴墓群と平城京跡（左京七条一坊七坪）と藤澤瓦屋の調査」

対　象：一般

会　期：令和４年３月１日（火）～３月31日（木）
　　（26日間）

場　所：埋蔵文化財調査センター展示室前ロビー

趣　旨：発掘調査の最新成果について展示紹介。本年度は令和元年度に秋篠町で新たに発見された飛鳥時代の秋篠阿弥陀谷横穴墓群の調査、令和２年度に柏木町で実施した平城京左京七条一坊七坪の調査、平成30年度に平松一丁目で試掘調査を、翌令和元年度に発掘調査を実施し、近世から近代にかけての達磨窯を確認した藤澤瓦屋の調査の、３箇所の発掘調査成果についてパネルや遺物の展示をして紹介した。なお、藤澤瓦屋については、ご子孫からの寄贈資料も展示・紹介した。

観覧者数: 375名

その他：・案内を「しみんだより」２月号と奈良市役所のホームページに掲載。

秋季特別展「帯解の古墳時代とワニ氏」

春季発掘調査速報展

表1　月別観覧者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11 月	12 月	1月	2月	3月
81	0	109	105	87	476	615	333	110	71	174	375

D　年間観覧者数　2,536 名（208 日間）。　月平均　211 名。

2．施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

（1）対　象:奈良市立辰市小学校生徒　43 名　　期　日：令和 3 年 6 月 18 日（金）
（2）対　象:奈良市立帯解小学校生徒　60 名　　期　日：令和 3 年 10 月 14 日（木）・25 日（月）
（3）対　象:天理市山の辺の道ボランティアガイドの会　19 名　　期　日：令和 3 年 10 月 27 日（水）
（4）対　象:奈良大学学生　60 名　　期　日：令和 3 年 11 月 22 日・29 日、12 月 6 日・13 日（すべて月曜日、各回 15 名）

3．講演会　教室の開催

A　埋蔵文化財講演会

対　象：一般
期　日：令和 3 年 11 月 3 日（水・祝）13:30 ～ 16:30
内　容：特別展のテーマである古墳時代の帯解について理解を深めてもらうために、ベンショ塚古墳の発掘担当者と古墳時代研究者を講師に迎え、専門的な講演会を開催した。
参加者：23 名
会　場：奈良市埋蔵文化財調査センター講座室
・木村 理（奈良文化財研究所アソシエイトフェロー）「ベンショ塚古墳とその時代」
・森下 浩行（埋蔵文化財調査センター　再任用職員）「ベンショ塚古墳の発掘秘話」
その他：募集案内を市役所ホームページに掲載。

B　親子考古学教室

対　象：奈良市内の小学 4 ～ 6 年生の児童とその保護者
期　日：令和 3 年 1 月 29 日（土）
内　容：富雄丸山古墳で現地学習ののち、埋葬施設の発掘体験をおこなった。
参加者：11 名
会　場：富雄丸山古墳発掘調査現場
その他：募集案内を「しみんだより」1 月号と奈良市役所のホームページに掲載。

埋蔵文化財講演会

親子考古学教室

4．市民考古学講座

対　　象:一般

開催期間:令和３年８月４日(水)～令和４年３月２日(水)
全 11 回（表２）

内　　容:市民考古学サポーター協力のもと、埋蔵文化財調査センター職員が講師を務める講座。生涯学習の一環として体系的に考古学を学び、文化財ボランティア活動を実践する際に必要な基本的知識と技能を身につけ、地域における歴史文化遺産の保護活用のリーダーとして活躍できる人材の育成が目的。

受講者数: 16 名

そ の 他:案内を「しみんだより」７月号と奈良市役所のホームページに掲載。

	日時	講座名
第1回	8月4日	開講式・オリエンテーション 考古学って何？・旧石器・縄文時代の基礎知識
第2回	8月 18 日	弥生時代の基礎知識
第3回	9月1日	古墳時代の基礎知識
第4回	10 月6日	遺物整理（洗浄と拓本実習）
第5回	10 月 20 日	古代の土器
第6回	11 月 10 日	奈良の都　平城京
第7回	11 月 24 日	古代の瓦
第8回	12 月 8 日	発掘調査体験（屋外実習）
第9回	1月 12 日	奈良町と中近世の土器・陶磁器
第 10 回	2月 22 日	発掘調査と遺物整理
第 11 回	3月2日	土器類の分類整理（実習）・閉講式

5．市民考古サポーターの活動支援

市民考古サポーター事業

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

登録総人数：103 名

活動開始：令和３年７月～
(新型コロナウイルス感染拡大防止のため、一部活動中止)
活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、展示解説、体験学習の補助などに参画。
月平均活動人数：97 名

6．体験学習・実習の受け入れ

富雄丸山古墳現地学習

対　象：地元・一般

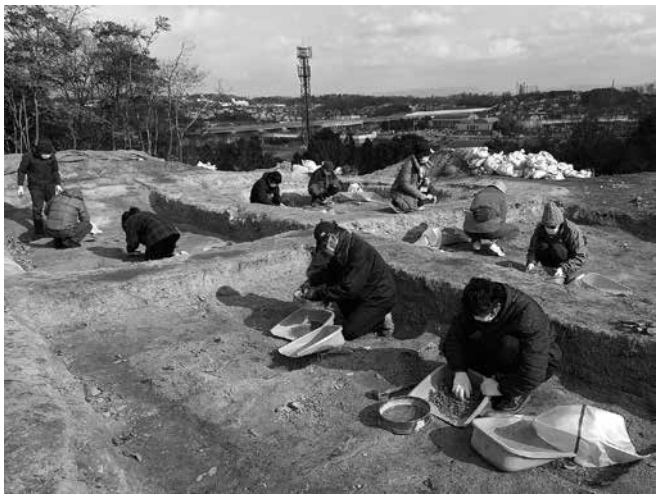
期　日：地元　令和3年 12 月25日（土）
一般　令和4年1月8日（土）～10日（月)､13日（木）～17日（月)、20日（木）～24日（月）の14日間

場　所：富雄丸山古墳発掘調査現場

内　容：発掘調査の方法や安全のための講習を受講後に、発掘体験を実施。調査を始める前には必ず現況説明と、仕事の内容を説明し、終了時には出土遺物の解説・遺構の説明をおこなった。

その他：・地元参加者の募集は自治連合会長が協力。
・一般参加者の募集・宣伝・中止連絡等は奈良市観光協会に委託。
・奈良市役所のホームページに掲載。

参加者数: 260 名



富雄丸山古墳現地学習

7．文化財学習キットの貸出し

市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦等の実物資料の貸出しキットで解説書付き。小・中学校の社会科学習・郷土学習の補助教材に利用でき、埋蔵文化財調査センターを見学する小・中学生にも「触れることのできる文化財」として使用する。

対　象：奈良市内の小・中学校

内　容：①～⑥の６キット

①縄文土器と弥生土器

②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁

③古墳時代の埴輪と須恵器

④奈良時代の土器（A・B の２セットあり）

⑤奈良時代の瓦ー軒丸瓦・軒平瓦

⑥奈良時代の硯と墨書土器・和同開珎

貸出・利用

（1）大安寺西小学校　社会科の歴史学習

期日：令和３年６月８日～ 16 日

キット：①・②

（2）育英中学校　学校の歴史学習

期日：令和３年 10 月 19 日～ 10 月 26 日

キット：①・②

（3）平城小学校　社会科授業

期日：令和３年 12 月７日～ 23 日

キット：⑤

8．職員の派遣（講師など）

奈良市生涯学習財団主催　奈良ひとまち大学授業

期　日：令和４年１月 28 日（金）

場　所：奈良市西部生涯学習スポーツセンター

派遣人数：１名

演　題　：「富雄丸山古墳の調査」

9．出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している木製品遺物の化学的保存処理を計画的におこない恒久的な保存をおこなった。

（保存処理資料）平城京跡出土木製品 26 点（斎串６点、笹塔婆２点、檜扇２点、人形６点、刷毛１点、紡織具１点、漆器皿１点、漆器椀１点、しゃもじ１点、独楽１点、杓子形木製品１点、木偶１点、板状木製品１点、棒状木製品１点）。

10．保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可をおこなった。また、学術研究等に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A　遺物などの貸出９件（表３）

B　写真などの貸出・提供・掲載許可 32 件（表４）

C　学術研究等に関わる資料閲覧８件（表５）

表3　遺物などの貸出

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	R 3. 4. 1～ R 4. 3.31	平城京跡出土木簡（模造品）10 点（礫進上木簡1点、月借銭進上木簡1点、豹皮分銭付札1点、渋皮御田侍奴画指木簡1点、北宮封緘木簡1点、衛府進塩付札1点、禄布付札1点、槐花進上木簡1点、造酒司符1点、瓦進上木簡1点）、分銅（模造品）1点（平城京跡 167 次調査出土）
2	国土交通省近畿地方整備局 国営飛鳥歴史公園事務所	平城宮いざない館に展示	R 3. 4. 1～ R 4. 3.31	元興寺旧境内第7次出土軒丸瓦1点、軒平瓦1点
3	大和ハウス工業株式会社 本店長	大和ハウスグループみらい共創センターで展示	R 3. 4. 1～ R 4. 3.31	平城京 727 次調査出土井戸SE 294 井戸枠 25 点

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
4	斎宮歴史博物館	斎宮歴史博物館の三重とこわか国体・三重とこわか大会記念特別展「斎宮平安五種競技―弓・馬・鞠・鷹・相撲―」に展示	R 3. 7.13 ～ R 3.12.10	平城京左京二条二坊十二坪出土墨書土器須恵器杯 A「左相撲」（平城京跡第 28 次）1点、須恵器杯 A「相撲所」（平城京跡第 28 次）1点、須恵器杯 A「相撲」（平城京跡第 73 次）1点、須恵器杯 or 皿「相撲所」（平城京跡第 73 次）1点、須恵器杯 B「相撲所」（平城京跡第 28 次）1点、須恵器杯 B「左相□／助」（平城京跡第 28 次）1点
5	大和ハウス工業株式会社	仮称大和ハウスグループ研修棟（令和3年9月開館予定）において展示公開	R 3. 7. 8～ R 4. 3.31	平城京跡第 727 次（左京九条三坊六坪）出土土師器甕1点・椀 A 1点・壺 B 1点・壺 E 1点・皿 C 1点、須恵器杯 B 1点・壺 M 1点・壺 L 2点・平瓶1点、黒色土器杯 A 1点、緑釉陶器皿1点、土馬1点
6	四条畷市教育委員会教育長	特別展「「天下の支配者」三好殿―考古学からみた天下人三好長慶の軌跡と飯盛城―」へ展示	R 3. 9. 7～ R 3.12.24	多聞城出土美濃焼小皿1点・白磁皿1点・青磁碗1点・銭貨3点・土師器皿2点・擂鉢2点・瓦質土器1点・軒丸瓦2点・軒平瓦3点、新薬師寺出土台付皿1点、HJ 第 531 次調査出土台付皿1点、HJ 第 559 次調査出土台付皿1点
7	大阪歴史博物館	大阪歴史博物館の特別展『難波をうたう―万葉集と考古学―』に展示	R 3. 9.21 ～ R 3.12.10	平城京跡第 93 次出土唐三彩輪花杯1点、平城京跡第 127 次出土唐三彩杯2点、平城京跡第 578 次出土唐三彩三足 1 点、西大寺跡第 25 次出土イスラム陶器1点・墨書須恵器杯「皇甫東朝」1点、史跡大安寺旧境内第 133 次出土唐三彩陶枕 25 点
8	山口市教育委員会教育長	鋳銭司・陶地区文化財総合調査事業特別企画展「周防鋳銭司と古代の鋳銭」において展示	R 3.10.21 ～ R 4. 2. 4	市指定文化財平城京左京六条一坊十六坪出土神功開寳鋳銭遺物 20 点、平城京左京三条四坊十二坪出土和同開寳鋳放し銭1点、平城京右京二条三坊四坪出土無文銀銭1点
9	奈良国立博物館長、日本経済新聞社文化事業局長、NHK エンタープライズ近畿総支社長	奈良国立博物館 東新館・西新館で開催する特別展「大安寺のすべて―天平のみほとけと祈り―」で展示	R 4. 2.15 ～ R 4. 7.15	「奈良市指定文化財 杉山古墳出土家形埴輪附埴輪残欠一括」のうち1点、大安寺西塔出土風鐸（相輪用）2点、大安寺西塔出土風鐸片（隅棟用）5点、大安寺西塔出土水煙片1点、大安寺西塔出土露盤片2点、大安寺金堂・講堂付近出土螺髪 15 点、大安寺南大門出土塑像片2点、大安寺西塔出土塑像片2点、大安寺出土大官大寺式軒瓦（6231 A -6661 B）各1点計2点、大安寺出土凸面布目平瓦1点、大安寺出土平城宮系軒瓦（6304 D -6664 A）各1点計2点、大安寺出土大安寺式軒瓦（6138 Ca -6712 A）各1点計2点、大安寺西塔主要軒瓦（大安寺 51 Aa -6712 B）各1点計2点、大安寺出土金堂北側出土施釉垂木先瓦6点、大安寺南大門出土超大型軒平瓦（6716 G）1点、大安寺講堂出土隅木蓋瓦2点、大安寺杉山瓦窯出土窯体片（軒平瓦 6712 A）1点、大安寺杉山瓦窯灰原出土溶着瓦1点、大安寺出土奈良三彩7点、大安寺杉山古墳周濠出土須恵器浄瓶・水瓶6点、大安寺出土墨書土器（「大安寺」・「大寺」・「大安寺左右酒」・「東院」・「大家」・「大二三井」・「大二」）各1点計7点、大安寺出土木簡（付札・題箋）各1点計2点、大安寺杉山古墳周濠出土円盤状土製品1点、大安寺南大門出土台座形土製品2点、大安寺出土半球状土製品 15 点、大安寺金堂・講堂付近出土ガラス製品6点、大安寺金堂・講堂付近出土金糸2点、大安寺金堂・講堂付近出土水晶製品 13 点、大安寺金堂・講堂付近出土壁画片 53 点、大安寺金堂・講堂付近出土唐三彩陶枕6点、大安寺金堂・講堂付近出土奈良三彩陶枕1点、大安寺経楼出土平安時代後期の軒丸瓦（大安寺 60 A・77 A）各1点計2点、大安寺出土鎌倉時代後期の軒瓦（大安寺 173 A・174 A・274 A・274 B）2組各1点計4点、大安寺出土奈良時代末の緑釉陶器（椀・羽釜）各1点計2点、大安寺出土平安時代初頭の陶磁器（中国産白磁椀1点、緑釉陶器椀1点・皿1点・蓋1点・香炉1点、灰釉陶器皿2点）計7点

表4　写真などの貸出・提供・掲載許可

	申請日	申請機関（申請者）	目的	内容	その他
1	R 3. 4. 1	奈良大学	奈良大学広報誌への掲載および奈良大学ホームページでの広報誌公開	航空レーザーで計測した富雄丸山古墳の赤色立体地図1枚	貸出・掲載許可
2	R 3. 4. 8	産経新聞奈良支局	ウワナベ古墳の調査成果を記事で紹介	ウワナベ古墳葺石の隙間の灰釉陶器出土状況写真1枚	貸出・掲載許可
3	R 3. 4.20	光村推古書院株式会社社長	中日新聞と東京新聞に連載していた「かわいい古代」を書籍にまとめ掲載	赤田9号墓円筒形陶棺A写真、赤田9号墓円筒形陶棺A（蓋なし）写真、赤田9号墓亀甲形陶棺写真各1枚	貸出・掲載許可
4	R 3. 5. 1	周留城出版社社員	『季刊 韓国の考古学』52 号に掲載	富雄丸山古墳の発掘調査－第3次調査－写真1枚	貸出・掲載許可
5	R 3. 5.10	宮内庁書陵部陵墓課長	『書陵部紀要』第 73 号に掲載	奈良市のウワナベ古墳トレンチ平面図・断面図1枚	貸出・掲載許可
6	R 3. 5.12	公益財団法人元興寺文化財研究所理事長	奈良町の歴史とゆかりの文化財を紹介するための印刷物（『（仮）奈良町の南玄関』）へ掲載	元興寺旧境内第 47 次調査礎石出土状況写真1枚	掲載許可
7	R 3. 5.20	鈴鹿市教育長	鈴鹿市考古博物館夏季企画展『TEN-PYO collection ～天平衣装の再現～』パネル等に掲載	史跡大安寺旧境内第 57 次調査出土漆紗冠写真、漆紗冠復元イメージ写真、平城京内出土横櫛と竪櫛写真各1枚	貸出・掲載許可
8	R 3. 5.25	大阪歴史博物館館長	大阪歴史博物館特別展『難波をうたう―万葉集と考古学―』の広報・展示パネル及び関連図書への掲載	平城京跡出土唐三彩、西大寺跡出土イスラム陶器、西大寺跡出土墨書須恵器杯「皇甫東朝」、史跡大安寺旧境内出土唐三彩陶枕、史跡大安寺旧境内出土唐三彩陶枕細部模様写真各1枚	貸出・掲載許可
9	R 3. 6. 4	（株）スタジオタッククリエイティブ	児童書『マンガで楽しむ歴史図鑑「はにわ」』へ掲載	杉山古墳出土家形埴輪写真1枚、菅原東遺跡埴輪窯跡群写真1枚	貸出・掲載許可
10	R 3. 6. 8	奈良文化財研究所員	報告書『平城宮第一次大極殿院の復原 研究』（仮）へ掲載	史跡大安寺旧境内第 110 次遺構平面図1枚	貸出・掲載許可
11	R 3. 8. 6	山口市教育委員会教育長	鋳銭司・陶地区文化財総合調査事業特別企画展「周防鋳銭司と古代の鋳銭」のリーフレット・パンフレットに掲載	平城京右京二条三坊四坪出土無文銀銭写真1枚、平城京左京三条四坊十二坪出土和同開珎鋳放し銭写真1枚、奈良市指定文化財 平城京左京六条一坊十六坪出土神功開宝鋳銭遺物写真1枚	貸出・掲載許可
12	R 3. 8.16	四条畷市教育委員会教育長	特別展「「天下の支配者」三好殿―考古学からみた天下人三好長慶の軌跡と飯盛城―」のパネル展示および図録への掲載	多聞城跡発掘調査地全景（西から）1枚・出土土器1枚・創建軒瓦1枚・創建軒平瓦1枚、平城京跡・新薬師寺出土 台付皿集合写真1枚	貸出・掲載許可
13	R 3. 8.30	大和ハウス工業株式会社みらい価値共創センター理事	みらい価値共創センター建設地の調査で確認された遺構をホームページ・web サイトで公開	『平城京左京九条三坊五六坪 発掘調査概要報告』裏表紙、3頁図3・図4各1枚	貸出・掲載許可
14	R 3. 9. 9	株式会社　八木書店出版部　代表取締役	鈴木靖民監修『古代日本対外交流史事典』に掲載	西大寺跡出土墨書須恵器杯「皇甫東朝」写真1枚	貸出・掲載許可
15	R 3. 9.10	株式会社　ジャパン通信情報センター　代表取締役	『文化財発掘出土情報』に掲載	現地説明会資料『富雄丸山古墳の発掘調査－第4次調査－』掲載の文章および写真図版7点	貸出・掲載許可

	申請日	申請機関 （申請者）	目的	内容	その他
16	R 3. 9.16	産経新聞奈良支局記者	新聞記事・ネット記事に掲載	宝来山古墳と菅原東遺跡の航空写真1枚、菅原東遺跡出土Ⅱ期の円筒・形象埴輪写真1枚	貸出・掲載許可
17	R 3. 9.24	株式会社ミネルヴァ書房 東京 代表取締役社長	山本孝文・青木敬・城倉正祥・寺前直人・浜田晋介著『考古学概論―初学者のための基礎理論』に掲載	史跡大安寺旧境内出土「東院器」墨書須恵器杯の実測図1枚	掲載許可
18	R 3. 9.30	寧楽考古楽倶楽部会長	寧楽考古楽倶楽部会報「寧楽考古情報」へ掲載	平城京跡第 750 次調査の空中写真（北東から）と調査位置図、平城京跡第 752 次調査空中写真（南西から）と調査位置図各1枚	貸出・掲載許可
19	R 3.10.13	株式会社アッシュ社員	「必殺シリーズ DVD コレクション第 41 号」に掲載	平城京跡第 513 次調査出土漆紙文書の写真1	貸出・掲載許可
20	R 3.10.29	山口市教育委員会教育長	鋳銭司・陶地区文化財総合調査事業特別企画展「周防鋳銭司と古代の鋳銭」のパンフレット・パネルに掲載	『平城京左京九条三坊五六坪 _ 発掘調査概要報告』図4平城京の条坊と発掘調査地1枚	貸出・掲載許可
21	R 3.11.11	奈良県知事公室国際課長	奈良県・中国陝西省友好提携 10 周年記念イベントで実施する基調講演の際に使用する PowerPoint のスライドで使用し、後日その様子をアーカイブ配信	西大寺跡第 25 次調査出土墨書須恵器「皇甫東朝」写真1点	掲載許可
22	R 3.11.22	奈良国立博物館長	奈良国立博物館特別展「大安寺のすべて―天平のみほとけと祈り―」の出陳にあわせ、チラシ・図録へ掲載、パネル等の作成、会場周辺の看板や交通広告へ使用	奈良市指定文化財 杉山古墳出土家形埴輪附埴輪残欠一括、大安寺西塔出土風鐸・風招（相輪用）、大安寺西塔出土風鐸（相輪用）、大安寺西塔出土風鐸（隅棟用）、大安寺西塔出土水煙片、大安寺西塔出土露盤（板材）片、大安寺西塔出土露盤（帯材）片、大安寺出土円盤状土製品、大安寺金堂・講堂付近出土鉛ガラス玉、大安寺金堂・講堂付近出土アルカリ石灰ガラス玉、大安寺金堂・講堂付近出土色ガラス、大安寺金堂・講堂付近出土水晶製品、大安寺金堂・講堂付近出土金糸、大安寺金堂・講堂付近出土壁画片、大安寺出土大官大寺式軒瓦（6231 A −6661 B）、大安寺出土平城宮系軒瓦（6304 D −6664 A）、大安寺出土大安寺式軒瓦（6138 C a −6712 A）、大安寺西塔主要軒瓦（大安寺 51 Aa −6712 B）、大安寺経楼出土平安時代後期の軒丸瓦（大安寺 60 A・77 A）、大安寺出土凸面布目平瓦、大安寺出土金堂北側出土施釉垂木先瓦（円形）、大安寺出土金堂北側出土施釉垂木先瓦（方形）、大安寺南大門出土超大型軒平瓦（6716 G）と通常サイズの軒平瓦（6716 C）、大安寺講堂出土隅木蓋瓦、大安寺第 57 次調査出土墨書土器、大安寺第 64 次調査墨書土器、大安寺第 22 次調査墨書土器、大安寺第 22 次調査墨書土器「大二」刻字拡大、大安寺第 57 次調査出土木簡、大安寺杉山古墳周濠出土円盤状土製品、大安寺南大門出土台座形土製品（側面）、大安寺南大門出土台座形土製品（上面）各写真1枚合計 32 枚	貸出・掲載許可
23	R 3.12. 10	社会医療法人 平和会理事長	法人広報誌「へいわと健康」へ掲載	赤田横穴墓群第 6 次調査区全景写真1点、19 号横穴墓写真 1 点、赤田横穴墓群平面図1点	貸出・掲載許可
24	R 4. 1.18	奈良県文化・教育・くらし創造部文化資源活用課長	文化庁「博物館等の国際交流の促進事業」の受託事業として、奈良県が制作する、古代の日中交流を題材とした動画コンテンツへの掲載	西大寺跡第 25 次調査出土墨書須恵器「皇甫東朝」写真1点	貸出・掲載許可
25	R 4. 2. 3	苅田町教育委員会職員	『埴輪論叢』11 号へ掲載	若草中学校旧所蔵埴輪の図面・写真	掲載許可

	申請日	申請機関（申請者）	目的	内容	その他
26	R 4. 2.10	中京テレビ放送株式会社	ニュース情報番組で放送・Web 配信	富雄丸山古墳発掘体験風景写真2枚	掲載許可
27	R 4. 2.10	株式会社共同通信社代表取締役社長	「発掘された日本列島2022」展の公式図録へ掲載	赤田横穴墓群第6次調査 19 号墓 写真1枚	貸出・掲載許可
28	R 4. 3. 4	一般社団法人なら文化交流機構月刊大和路ならら編集部理事長	月刊大和路ならら4月号に掲載	「大安寺」・「大安寺塔（寶塔）」文字紋軒瓦写真1枚	掲載許可
29	R 4. 3. 8	奈良国立博物館長	奈良国立博物館特別展「大安寺のすべて」で図録、会場パネル、グッズに使用	大安寺航空写真1枚、大安寺杉山瓦窯2号窯（西南から）写真1枚、大安寺出土施釉垂木先瓦復元図1枚、大安寺第 140 次調査出土隅木蓋瓦実測図1枚、奈良市指定文化財 杉山古墳出土家形埴輪附埴輪残欠一括写真1枚、大安寺出土大官大寺式軒瓦（6231 A -6661 B）写真1枚、大安寺出土金堂北側出土施釉垂木先瓦（円形）写真1枚、大安寺西塔出土風鐸・風招（相輪用）写真1枚	貸出・掲載許可
30	R 4. 3.14	株式会社NHKエンタープライズ近畿総支社 総支社長	奈良国立博物館で開催される特別展「大安寺のすべて～天平のみほとけと祈り～」の展示会で流される展示映像での使用	螺髪（大安寺金堂・講堂付近出土）、大官大寺式軒瓦（大安寺出土）、垂木先瓦（大安寺出土）、奈良三 彩（大安寺出土）、墨書土器「大安寺」「大寺」「大安寺左右酒」「東院」「大家」など（大安寺出土）、木簡（大安寺出土）、半球状土製品（大安寺金堂・講堂付近出土）、金糸、ガラス製品、水晶玉（大安寺金堂・講堂付近出土）、彩色された漆喰片（大安寺金堂・講堂付近出土）	掲載許可
31	R 4. 3.18	奈良市役所児童相談所設置推進課長	奈良市子どもセンターに展示する、出土品表示パネルを作成するため	平城京跡第 746 次調査全景・掘立柱建物・井戸・木簡（表・裏）・熨斗瓦（表・裏）写真各1枚、貴族の邸宅模型写真1枚	貸出・掲載許可
32	R 4. 3.25	大和・多聞城研究会 会長	案内冊子「幻の城 多聞城―2022 年度改訂版」の表紙に掲載	多聞城創建軒瓦 写真1枚	掲載許可

表5 学術研究等に関わる資料閲覧

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	R 3. 4. 4	京都大学大学院生	修士論文	ベンショ塚古墳出土鉄製品（鏃・鑿・斧・針）の観察・実測・撮影
2	R 3. 4.23	京都大学学生	卒業論文	平城京右京二条三坊十五坪（HJ第 460 次調査）出土「分銅」形土製品1点の観察・実測・撮影
3	R 3. 6. 7	京都大学大学院生	論文執筆	水間遺跡出土曲物・刳物未製品の観察・撮影
4	R 3. 9. 3	滋賀県立大学人間文化学部教授	研究発表	『多聞廃城跡発掘調査報告書』掲載土器類 一式、『奈良市埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和 58 年度』81 頁記載の多聞廃城跡出土土師器釜の観察・実測・撮影
5	R 3.10.21・27・28	奈良大学学生	卒業論文	富雄丸山古墳出土鰭付円筒埴輪の観察・実測・撮影・模写
6	R 3.11. 2	明治大学大学院生	博士論文	菅原東遺跡出土の竪櫛 1 点、土師器 4 点（高坏 1 点、壺 1 点、甕 2 点）の観察・実測・撮影
7	R 3.11.15	元武蔵野美術大学教授	個人研究	史跡大安寺旧境内出土獣脚付円盤状土製品の観察・実測・撮影
8	R 4. 3. 9	奈良国立博物館員	展示図録執筆	「史跡大安寺旧境内第 133 次調査出土壁画片科学分析結果」の閲覧・複写

第３章　研究報告

平城京出土軒瓦の新種・参考資料について／原田　憲二郎

平城京出土軒瓦の新種・参考資料について

原田憲二郎

Ⅰ　はじめに

2021 年 5 月 13 日と 2023 年 10 月 6 日に、奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・大和郡山市教育委員会・奈良市教育委員会の瓦研究者によって、軒瓦型式検討会が実施され、平城京・藤原京出土軒瓦の型式・種の新設定および変更等について検討が行われた。

このうち 2021 年の奈良文化財研究所所蔵分の検討結果については、その概要が報告されている（今井・林 2023）

本稿では、2021 年と 2023 年の軒瓦型式検討会を経た奈良市教育委員会保管の軒瓦のうち、新種が設定された軒瓦と、参考資料となった軒瓦について以下に紹介する。

Ⅱ　平城京出土軒丸瓦の新種

６３０１型式Ｋ種　6301 型式ではＢ・Ｃ・Ｊ種とほぼ同程度のやや小型の軒丸瓦である。内区に複弁８弁蓮華紋を飾り、弁の子葉は 6301 型式Ｂ・Ｃ・Ｊと比べ、や

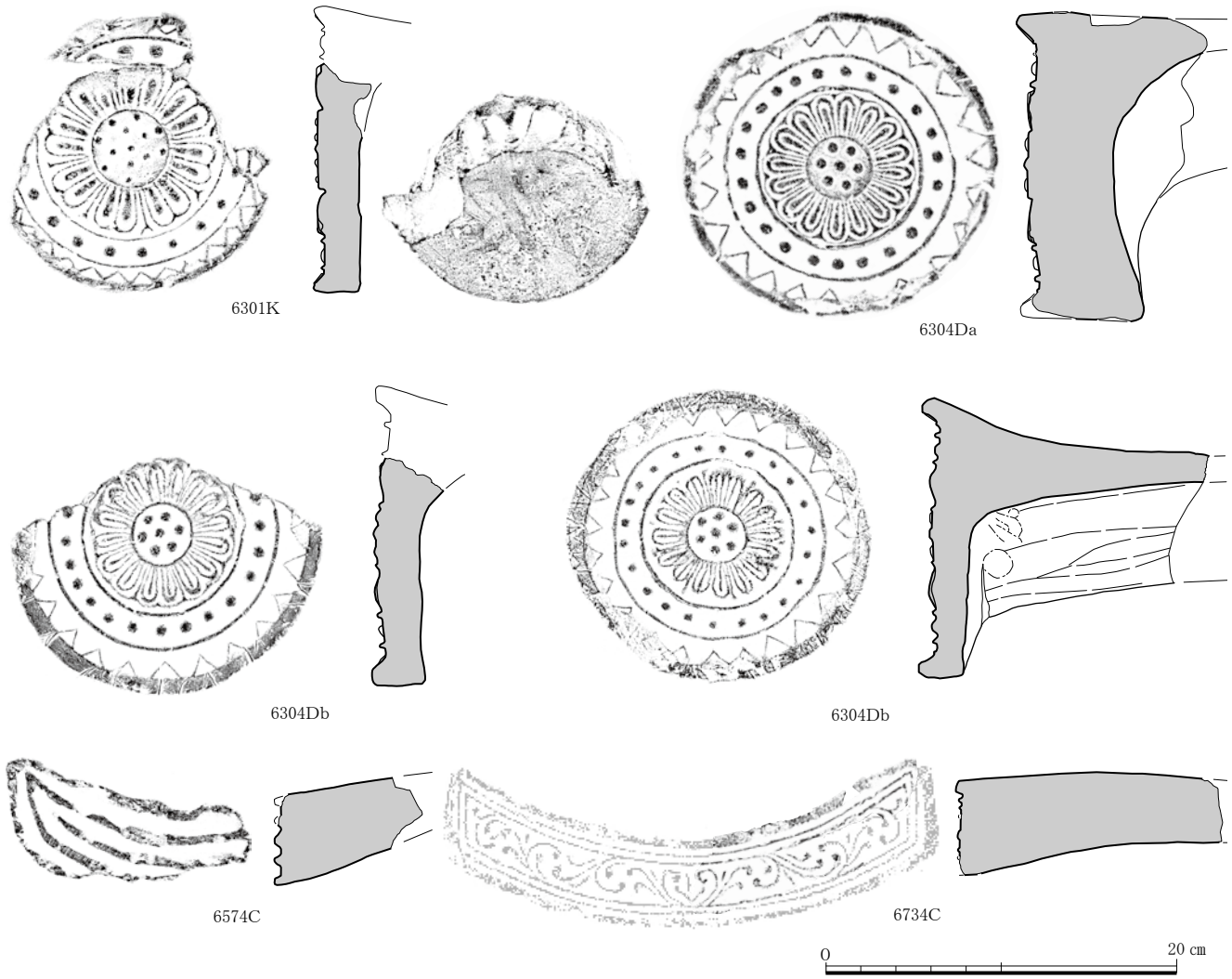


図 1　平城京出土新種の軒瓦（1/4）

や太めな点は特徴的である。中房蓮子配置は１＋５＋８で、この配置は、蓮子配置が不明である6301型式Ｅ・Ｆ種を除けは、6301型式で唯一である。外区内縁に珠紋、外区外縁に線鋸歯紋をあらわす。外縁頂部に凹線をめぐらさない点は、6301型式Ｃ種と共通する。

6301型式は瓦当裏面に布目痕跡を残す布目押圧技法による製作と確認できるものが多いが、瓦当裏面にタテナデ、瓦当裏面周縁にはこれに沿うナデをほどこしており、布目痕跡は確認できない。ただし丸瓦部剥離痕に指頭圧痕が確認できる。瓦当下半部側面はヨコナデをほどこす。

胎土は密、焼成はやや軟質、表面黒灰色、内部白灰色を呈する。

6301型式の小型品で、外縁頂部に凹線をめぐらさない点は6301型式Ｃ種と同じであることから、Ｃ種と同じ平城宮・京瓦編年[1]の第Ⅱ－２期（729～745）に属すると考える。

6301型式Ｋ種は左京一条三坊十二・十三坪から１点(奈良市教委2022)、左京二条四坊十坪から小片が１点[2]出土している。

６３０４型式Ｄａ種・Ｄｂ種　大安寺創建軒丸瓦6304型式Ｄ種には笵を彫り直したものが確認でき、彫り直し前をＤａ種[3]、彫り直し後をＤｂ種[4]と設定された。

Ｄｂ種は中房圏線を彫り加え、蓮弁の輪郭、子葉と間弁の一部を彫り直す。間弁が蓮弁のまわりを巡る部分は彫り直しておらず、笵の傷みが進行した資料では、その部分が磨滅した結果、独立した間弁をもつ単弁蓮華紋にみえるものがある。

瓦当上半部はタテケズリ、瓦当側面下半部はヨコケズリ。丸瓦接合位置はＤａ種より低い。脱笵後、外縁頂部を0.5㎝程度削り、平坦面をつくる点はＤａ種と異なる特徴である。瓦当裏面丸瓦接合線に沿って、指頭による押圧を加える。瓦当裏面下半部はヨコケズリ。周縁に沿って、半周する指ナデを加えるものもある。丸瓦部凹面には縦方向のユビナデを施す。Ｄｂ種の瓦当厚は2.0～3.0㎝のものと、4.0～4.5㎝のものの２種に分けることができ、瓦当厚5.0～7.0㎝を測るＤａ種に比べて薄手である。胎土は密である。焼成・色調は、硬質で灰色を呈するものと、やや軟質で褐灰色を呈するもの、さらにやや軟質で表面黒色、内部暗灰色を呈するものの大きく３つに分類できる。

6304型式Ｄｂ種は紋様・技法上の諸特徴から、年代的に大安寺創建軒丸瓦6304型式Ｄａ種と、最初の大安寺式軒丸瓦6138型式Ｅ種の間に位置付けられる（原田2011）。

なお、令和５年までに奈良市教育委員会による大安寺の調査で出土した6304型式Ｄａ種は100点、6304型式Ｄｂ種は73点である。この他小片の為、Ｄａ種かＤｂ種か区別できない6304型式Ｄ種が56点ある。

Ⅲ　平城京出土軒平瓦の新種

６５７４型式Ｃ種　二重郭紋の中央に単弧線を加えた6574型式であるが、既知のＡ・Ｂ種とは郭線・弧線の幅・高さが異なる。郭線断面形状は台形であるが、上辺を支える脚が長い。郭線間の断面形は「Ｕ」字形で、郭線間の間隔は約0.5㎝。

顎部断面形態は顎用粘土を貼り付け、削り出した直線顎[5]である。顎用粘土剥離面には、縦位の縄タタキ目が残り、瓦当部の成形法は複数の粘土板を貼り重ねた「粘土板貼り重ね技法」[6]とみられる。凹面瓦当上縁付近はヨコケズリをほどこし、特に中央付近は深く削る。以下は糸切痕と布目痕を残す。凸面はタテケズリ。胎土は密で、焼成は軟質である。色調は表面黒灰色、内部灰白色を呈する。

左京二条四坊二坪から２点（奈良市教委1989ａ）と、左京二条四坊七坪から１点出土[7]している。

６７３４型式Ｃ種　6734型式は内区に桐葉形を中心葉が囲む中心飾りをもつ唐草紋を飾る。外区と内区の境には、２重に界線をめぐらす。既知のＡ・Ｂ種とは内区唐草紋様が異なるが、信濃国分寺創建軒平瓦は同笵である[8]。

顎部断面形態は直線顎である。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリ、以下は布目痕を残す。凸面はタテケズリ。

胎土はやや粗く、焼成はやや硬質、灰色を呈する。

平城京右京二条二坊十六坪で鎌倉時代の瓦積井戸の枠材として１点（奈良市教委2006ｂ）出土した。

Ⅳ　平城京出土軒丸瓦の参考資料

検討を行った結果、既知の紋様でないことは確実だが、小片の場合は、全体の紋様が判明するまで型式・種の設定を保留する。また奈良時代と断定できないものの場合も設定を保留する。こうしたものを参考資料と呼ぶ。

また、平城京に運ばれたことが判明した軒瓦で、すでに在地の報告書等で型式設定がなされているものについても、参考資料とすることとなった。

ここでは、まず参考資料の軒丸瓦について紹介する(図２)。

図２－１は重圏紋である。圏線は高さ0.5㎝、基底幅

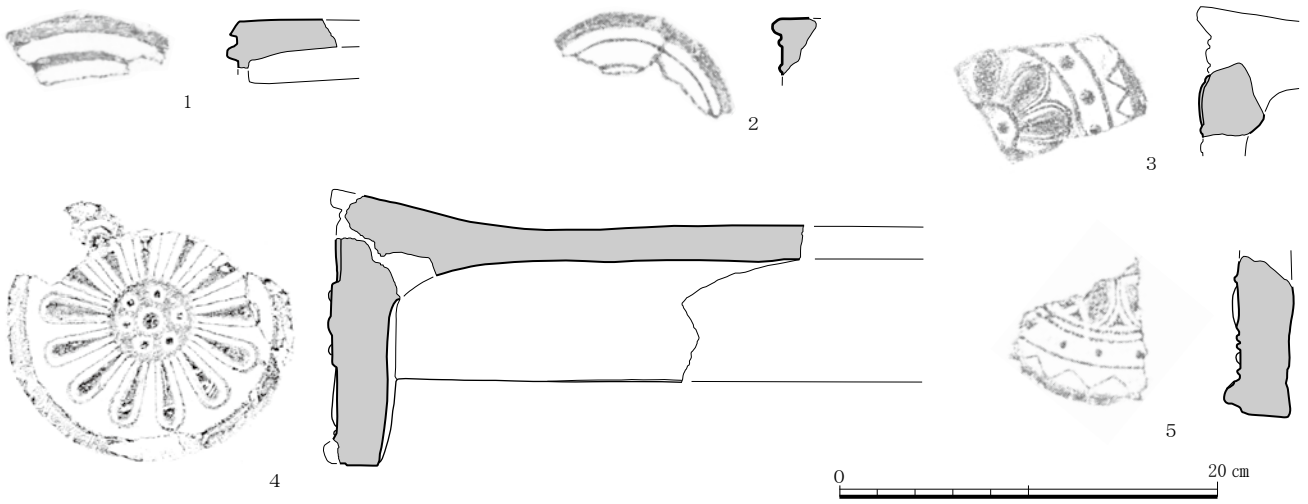


図２ 平城京出土参考資料の軒丸瓦（1/4）

0.8㎝で、断面形状が台形を呈する。

外縁は脱笵後､斜め方向にカットする点特徴的である。瓦当上半部はタテケズリをほどこす。胎土は密で、焼成は軟質である。色調は表面黒灰色､内部灰白色を呈する。左京二条四坊三･四坪間の条間路南側溝から出土した(奈良市教委 1993 a)。小片の為、良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図２－２は小型の重圏紋である。圏線断面形状は半円形で、圏線幅は 0.3㎝と狭い。外縁とその内側の圏線の間は狭く、このことは 6012 型式Ａ種等、比較的古手の重圏紋にみられる特徴である。

瓦当上半部はタテケズリをほどこす。胎土は精良で、焼成は軟質である。色調は淡灰黄色を呈する。左京一条三坊十三坪で、９世紀初めの井戸周囲の石敷から出土した（奈良市教委 2001)。小片の為、良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図２－３は盛り上がった蓮弁が特徴的な、単弁蓮華紋である。間弁は弁輪郭線に沿うようなＹ字状で、弁数は 12 弁の可能性が考えられる。外区内縁は珠紋を、外区外縁は線鋸歯紋をめぐらす。間弁の形状などから 6130 型式あるいは 6134 型式に属するとみられる。

胎土はやや粗く､焼成は軟質である。色調は表面黒色、内部灰色を呈する。

左京五条四坊十五坪から出土した（奈良市教委 2010)。小片の為、良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図２－４は内区に単弁 13 弁蓮華紋を飾る。中房の蓮子配置は１＋６で、中心蓮子は周囲の蓮子より一回り大きい。蓮弁は輪郭線で囲まれた子葉からなる。外縁は素紋の直立縁である。笵傷は弁端と外縁の間に１箇所、さらにその弁の２つ右の弁では、弁輪郭線と子葉を繋ぐ傷が確認できる。

瓦当裏面に接合溝を設け、先端部が無加工の丸瓦を接合する。瓦当上半部と瓦当側面下半部は縦方向のケズリを施す。瓦当裏面は横方向のケズリを施した後、部分的にナデで調整する。瓦当側面下半部の一部には瓦当面から 1.2cm 幅でめぐる面があり、笵の側面の痕跡とみられる。丸瓦側端面の瓦当部付近には、乾燥時に付いたとみられる横方向の棒状圧痕が認められる。胎土は密で白灰色の砂粒を含む｡焼成はやや軟質､色調は白色である。

兵庫県加古川市の古大内遺跡（賀古駅家）出土品を標式名とする古大内式軒丸瓦Ｉ型と同笵である（原田 2013)。製作技法・胎土・色調は播磨出土品と大きな違いは認められず、播磨で製作され、平城京内に持ち込まれたとみてよい。左京五条四坊一坪で１点（奈良市教委 2017)、左京五条四坊八坪で 11 点（奈良市教委 2020 他[9])、左京五条四坊九・十坪間の条間北小路南側溝から１点（奈良市教委 2012)、興福寺境内で１点（奈文研 2016）が出土している。すでに兵庫県内の遺跡で型式設定がなされているため、参考資料となった。

図２－５は内区と外区の間に２重の界線が巡るのが特徴的である。中房からのびる弁の輪郭線は、界線に接続する。間弁は短く三角形状である。外区内縁に珠紋を、外区外縁に線鋸歯紋をめぐらす。外縁の形態は内面が内傾する傾斜縁である。

瓦当裏面は粗いタテ方向のナデをほどこす。瓦当側面には瓦当面から 0.9㎝幅でめぐる笵端痕が確認できる。胎土は粗く、焼成はやや軟質で、灰色を呈する。

左京五条四坊坊間東小路東側溝から出土した（奈良市教委 2012）。福寺池採集品（佐藤亜聖他 2017）は同笵である。左京四条三坊九坪の東堀河出土品（橿考研 2007）も同笵の可能性が高い。これらの資料から、蓮弁は複弁７弁と単弁１弁の複弁単弁混合紋とわかる。今後の良好な出土資料を待って型式設定することとし、参考資料となった。

Ⅴ　平城京出土軒平瓦の参考資料

ここでは参考資料の軒平瓦について紹介する（図３）。

図３－１は単郭紋の中央に単弧線を加えた紋様構成である。単郭紋左右上隅が長くのびる点は特徴的である。

顎部断面形態は直線顎。凸面はタテケズリ。凹面は布目痕を残すが、瓦当上縁付近と狭端部付近はヨコナデをほどこす。胎土は粗く、焼成は堅緻で、灰色を呈する。

左京一条三坊十二・十三坪で出土した[10]。難波宮出土軒瓦の型式を参考にすれば、6571 型式となる。しかし、やや小型の軒平瓦であること、郭線左右両端に不自然に残る部分があることから、笵は２重郭で、脱笵後に外側の郭線を削り取った可能性が残る。このため、もう少し同笵資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図３－２は２重郭紋である。郭線断面形状は台形。郭線間の断面形はＶ字形。郭線間の間隔はほとんど無い。

顎部断面形態は顎面の長い段顎Ｌである。凸面は顎面ヨコケズリ、顎段部はヨコ方向の指ナデで丸く仕上げる。顎面端部には凹型調整台の圧痕が残る。平瓦部は粗いタテケズリ、凹面はヨコケズリをほどこす。胎土は粗く、焼成はやや軟質で、白灰色を呈する。

左京二条三坊十坪で出土した（奈良市教委 2009）。既知の 6572 型式に同笵品はないが、瓦当紋様の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図３－３は中心飾り左端部から左第２単位の均整唐草紋が残る。上外区は珠紋を、下外区には線鋸歯紋をめぐらす。唐草紋の形状は 6661 型式に似る。

顎部断面形態は顎面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面はタテケズリ、顎面はヨコケズリをほどこす。凹面瓦当上縁付近はヨコケズリである。胎土は密で、焼成は堅緻、灰色を呈する。

元興寺寺地北辺で、15 世紀の井戸から出土した（奈良市教委 2006 ａ）。今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図３－４は左上端部の小片である。内区の子葉の先端に２つの珠点を配する点は特徴的である。上外区には、先端部が上下の界線に接続しない細かい線鋸歯紋をめぐらす。脇区は珠紋を配する。

凹面は粗いタテナデをほどこす。胎土は緻密、焼成は硬質で、暗灰色を呈する。

左京五条五坊十三坪で出土した（奈良市教委 1998）。変形葡萄唐草紋とされる和田廃寺のⅢ型式軒平瓦（花谷 2000）と同笵であり、十三坪では他にも和田廃寺と同笵とみられる軒丸瓦が出土している（原田 2002）。このようなことから、これらが十三坪東隣に想定される葛木寺の瓦であり、和田廃寺を葛城尼寺とする考えを補強するものと評価できる（原田 2020）。和田廃寺で型式設定されていることから、参考資料となった。

図３－５は右端部の破片である。左京九条三坊六坪の８世紀後半の井戸枠内から出土した（奈良市教委 2021）。内区右端の唐草が上方に巻き込み、上・下外区と脇区に杏仁形珠紋をめぐらす。

顎部断面形態は直線顎。凸面はタテナデ。凹面もタテナデするが、瓦当上縁付近はヨコナデ調整する。胎土は粗く、焼成は軟質、灰色を呈する。

6692 型式の一種とみられるが、今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図３－６は右半部片で、内区唐草紋は連続し、唐草先端に三葉紋風の蕾を持つ点は特徴的である。外区は素紋。

顎部断面形態は、顎面をもつ曲線顎Ⅱとみられる。凸面はタテケズリ。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリし、以下は布目を残す。胎土には砂粒と黒色のシャモットが多い。焼成は硬質で灰色を呈する。

平城紀寺の寺院地内と想定される左京五条七坊十三坪から出土した（奈良市教委 1989 ｂ）。寝屋川市高宮廃寺ＮＨＩ型式軒平瓦と同笵であることが判明（原田 2020）し、全体の紋様構成が明らかとなった。唐草の反転数は異なるが、中心飾りの垂飾りが水滴形である点や、唐草が連続する点と各唐草先端の形状は大安寺式軒平瓦 6717 型式Ａ種に似る。高宮廃寺ＮＨＩは曲線顎Ⅱである。高宮廃寺では平城京と同笵の軒丸瓦 6314 型式Ａ種と組む（寝屋川市教委 2018）。平城京では平城宮・京瓦編年第Ⅳ期と考える 6316 型式Ｕ種と組む可能性が高いこと、唐草各単位間に三葉紋風の支葉を配する軒平瓦は 6761 型式Ａ種や 6763 型式Ａ種･6764 型式Ａ種等、第Ⅳ期に盛行していることから、平城宮・京瓦編年第Ⅳ期（757 ～ 770）の瓦と考える（原田 2020）。高宮廃寺で型式設定されていることから、参考資料となった。

図３－７は右上の小片である。内区右端の唐草は上方向に巻く。外区には珠紋をめぐらす。上外区には縦断する笵傷が確認できる。

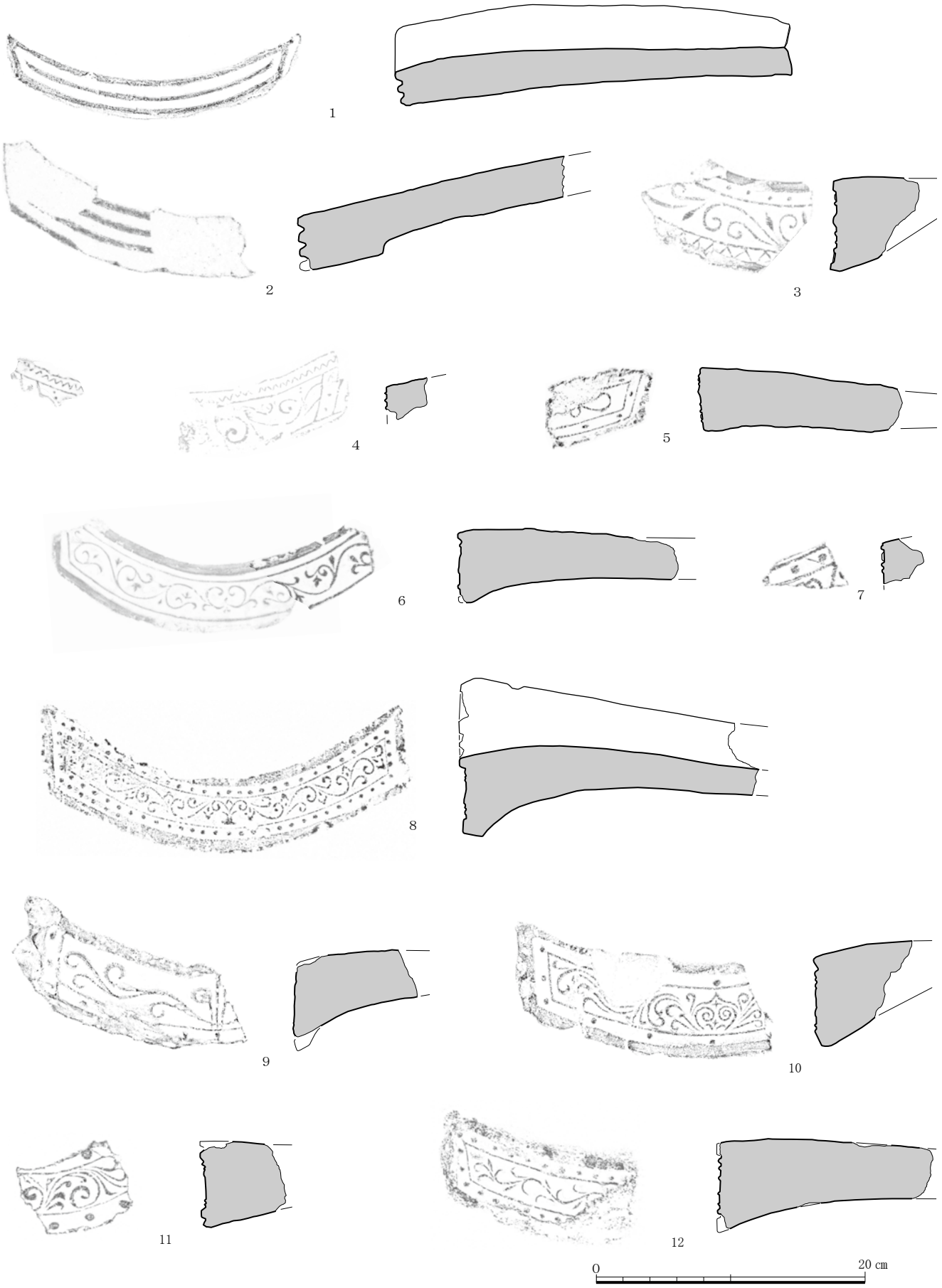


図 3　平城京出土参考資料の軒平瓦（1/4）

胎土は密、焼成はやや軟質、赤灰色を呈する。

元興寺修理所推定地から出土した（奈良市教委1987）。元興寺採集品（梶山2006）は上外区を縦断する笵傷が確認でき、同笵の可能性が高い。東大寺千手堂出土品（平松2008）、東大寺仏餉屋出土品（石田2016）、興福寺北僧房採集品（保井1928・平松2008）も同笵の可能性が考えられる。今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図３－８は内区に樹状の中心飾りを置く５回反転均整唐草紋を飾る。唐草は各単位に山形の蕾を配する。外区には小粒の珠紋を密にめぐらす。中心飾り直上の珠紋とその左側の珠紋の２箇所に笵傷が確認できる。

顎部断面形態は顎面をもつ曲線顎Ⅱである。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリ、以下は狭端に向けてタテケズリをほどこす。凸面はタテケズリを施し、顎面はヨコケズリをほどこす。平瓦部の側面はケズリで成形した後、凹面側の角を面取りする。胎土は密で白灰色の砂粒を含む。焼成はやや軟質、色調は概ね白色であるが、表面の一部は黒灰色である。凹面瓦当付近の両側縁には、横方向の棒状圧痕が認められる。

左京五条四坊八坪から２点（奈良市教委2020他[11]）と、九坪南側の五条条間北小路北側溝から１点（奈良市教委2004）出土した。古大内式軒平瓦と同笵である（原田2013）。製作技法・胎土・色調は播磨出土品と大きな違いは認められず、乾燥時についたとみられる横方向の棒状圧痕は小犬丸遺跡（布勢駅家）出土古大内式軒平瓦に類例が認められる（兵庫県教委1987）ことから、播磨で製作され、平城京内に持ち込まれたものとみてよい。古大内式軒平瓦は笵傷の進行の少ないものを甲類、多いものを乙類と分類でき、古大内遺跡では甲類が、小犬丸遺跡では乙類が多く出土していると報告される（今里1992）。平城京出土品は笵傷の少ない甲類で、比較的早い段階で生産されたものが搬入されているとみられる。すでに兵庫県内の遺跡で型式設定がされているため、参考資料となった。

図３－９は縦線とその左右の上向きの唐草紋を中心飾りとする、３回反転唐草紋を内区に飾る。唐草は途切れず、連続する。外区に珠紋を巡らすが、上外区は無い。

顎部断面形態は曲線顎Ⅱである。顎面はヨコケズリ。凸面は瓦当から顎部にかけてはタテナデ、以下ナナメ縄タタキ痕を残す。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリする。胎土は密でマーブル状を呈する。焼成は軟質である。色調は表面が黒灰色、内部は橙灰色を呈する。

左京五条四坊七坪の西辺を画する溝から１点出土した[12]。保良宮に比定される大津市石山国分遺跡出土軒平瓦ＫＨ05と同笵である[13]。製作・調整技法に違いはみられず、胎土の状況も似ており、近江国から運び込まれたものと考えられる。すでに石山国分遺跡で型式設定がなされているため、参考資料となった。

図３－10は、下から派生する三葉形を、左右に分離して対向する唐草が囲み、その上に対葉花紋を配する、いわゆる東大寺式軒平瓦に似た中心飾りを持つ。対葉花紋下に十字形を配する点は特徴的である。唐草は不明な点が多いが、左第１・２単位を見る限り、かなり分解している。

顎部断面形態は曲線顎Ⅱである。瓦当面中心付近の下外縁は脱笵後ヨコケズリをほどこして、面取りする。凹面は瓦当上縁付近をヨコケズリし、以下は布目を残す。凸面はタテケズリをほどこす。胎土は粗く黒色のシャモットを多く含む。焼成はやや軟質。色調は表面が黒灰色、内部が橙灰色を呈する。

西隆寺跡推定塔跡の基壇掘込地業から出土した[14]。紋様構成から平安時代初めの軒平瓦の可能性が高く、今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

図３－11は中心飾りと右第１・２単位部分の小片であるが、6732型式もしくは6733型式に属する均整唐草紋とみられる。外区は珠紋をめぐらす。

顎断面形態は直線顎である。凹面はヨコケズリ、凸面はタテケズリをほどこす。胎土は密で、黒色のシャモットを多く含む。焼成は硬質で青灰色を呈する。

元興寺西室北階小子房の調査で、13世紀中頃の土坑から出土した（奈良市教委1993ｂ）。6733型式Ⅰ種の未知の紋様部分の補完資料の可能性もあるため、参考資料となった。

図３－12は内区に５回反転均整唐草紋を飾るとみられる。唐草紋は主葉１・支葉２を１単位とし、6721型式Ｊ種に似る。外区には小粒の珠紋を密に巡らす。

顎部断面形態は曲線顎であるが、瓦当面下部が欠損しており、曲線顎ⅠかⅡかは不明である。凹面は丁寧なナデを、凸面はケズリをほどこす。胎土は粗く、焼成は硬質、灰色を呈する。左京一条三坊五坪で、９世紀初めの井戸の枠内から出土した（奈良市教委2007）。平安時代初めの軒平瓦の可能性もあり、今後の良好資料の出土を待つこととし、参考資料となった。

Ⅳ　おわりに

2021・2023年の２度の軒瓦型式検討会で検討された奈良市保管分の軒瓦は、軒瓦型式検討会の開催が2000

年以来ということもあり、軒丸瓦 12 点、軒平瓦 22 点と多い。未発掘区の多い平城京内からは今後も多数の新型式・新種の軒瓦が出土することが予想される。

なお、型式・種の設定がなされていたものの、欠損部分の紋様を補完する資料もある。これについては、稿を改めて紹介したい。

謝辞

本稿で紹介した軒瓦の同笵資料調査にあたって、ご協力やご教示を頂いた多くの皆様に厚く御礼申し上げます。

註

1）以下に使用する時期区分は、毛利光・花谷 1991 で提示された編年に拠る。
2）奈良市教育委員会 2019「平城京跡（左京二条四坊十坪）の調査　第 708 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 28（2016）年度』報告文中の「6301 種別不明」がＫ種と判明した。
3）なお、奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』掲載のものは 6304 型式Ｄａ種である。
4）6304 型式Ｄｂ種は、もと 6304 型式Ｆ種と設定されていた（奈良国立文化財研究所 1978）。その６年後に、6304 型式Ｄ種と 6304 型式Ｆ種が同笵と認定され、Ｆ種が削除された（奈良国立文化財研究所 1984）。2010 年に 6304 型式Ｄ種には技法上の諸特徴が異なる２種があり、これが笵の傷みの進行差にも対応するとし、Ⅰ・Ⅱ類に分類された（中井 2010）。翌年筆者は中井Ⅰ・Ⅱ類の分類が彫り直しによるものであることを明らかにした（原田 2011）。中井・原田による 6304 Ｄ型式のⅠ類がＤａ種、Ⅱ類がＤｂ種である。
5）以下、顎部断面形態の分類呼称は毛利光・花谷 1991 に拠る。
6）「粘土板貼り重ね技法」の用語については、原田憲二郎 2014 を参照。なお、この文中で 6574 型式Ｃ種は、平城京出土重郭紋分類のⅡｂ類に分類した。
7）平城京跡第 775 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和６年度以降報告予定。
8）信濃国分寺と平城京の同笵瓦については、原田 2016 にまとめた。なお、6734 型式Ｃ種の呼称は、山崎 2006 の文中にすでに記載があるが、軒瓦型式検討会を経て設定されたものではなかったため、2021 年の軒瓦型式検討会で追認された。
9）平城京跡第 748・767・772 次調査。いずれも奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和６年度以降報告予定。
10）平城京跡第 774 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和６年度以降報告予定。
11）平城京跡第 748 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和６年度以降報告予定。
12）平城京跡第 752 次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和６年度以降報告予定。
13）2023 年 11 月、大津市埋蔵文化財調査センター青山均氏・木村啓子氏にご協力頂き、石山国分遺跡出土品と実物照合を行った結果、同笵と判明した。
14）西隆寺跡第９次調査。奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査年報』で令和６年度以降報告予定。

参考・引用文献

石田由紀子 2016「仏餉屋下層遺構出土の東大寺創建以前の瓦」栄原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の新研究１　東大寺の美術と考古』 法藏館
今井晃樹・林正憲 2023「平城京・藤原京出土軒瓦の新種について」『奈良文化財研究所紀要 2022』奈良文化財研究所
今里幾次 1992「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『布施駅家―小犬丸遺跡 1990・1991 年度発掘調査概報―』龍野市教育委員会
梶山勝 2006『名古屋市博物館資料図版目録７大和古瓦図版目録』名古屋市博物館
佐藤亜聖・中原七菜子・税田脩介・安楽可奈子・柿本真琴・乗本愛実・三井淳 2017「伝福寺池発見軒瓦について」『元興寺文化財研究所研究報告 2016』
奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告Ⅵ－平城京左京一条三坊の調査』
奈良国立文化財研究所 1978『平城宮出土軒瓦型式一覧』
奈良国立文化財研究所 1984『平城宮出土軒瓦型式一覧〈補遺篇〉』
奈良文化財研究所 2016「興福寺境内の調査　第 553 次・第 559 次」『奈良文化財研究所紀要 2016』
中井公 2010「「棚倉瓦屋」で焼かれた瓦をめぐって」『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館
奈良市教育委員会 1987「第７次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和 61 年度』
奈良市教育委員会 1989 a「平城京左京二条四坊二坪の調査　第 157 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和 63 年度』
奈良市教育委員会 1989 b「Ⅲ - ２. 平城京域・周辺のその他の調査 88-10 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和 63 年度』
奈良市教育委員会 1993 a「平城京左京二条四坊三坪の調査　第 260 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成４年度』
奈良市教育委員会 1993 b「２元興寺旧境内の調査（３）第 37 次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成４年度』
奈良市教育委員会 1998「平城京左京五条五坊十三坪の調査　第 274 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成５年度』
奈良市教育委員会 2001「平城京左京一条三坊十三坪の調査　第 440 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 11 年度』
奈良市教育委員会 2004「平城京跡（左京五条四坊七・九・十坪）第 459- １・- ２・- ３・- ４次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 13 年度』
奈良市教育委員会 2006 a「元興寺旧境内　第 56 次調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 14 年度』
奈良市教育委員会 2006 b「平城京跡（右京二条二坊十六坪）の調査　第 504 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 15 年度』
奈良市教育委員会 2007「法華寺垣内古墳・平城京跡（左京一条三坊四・五坪）の調査　第 520 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 16 年度』
奈良市教育委員会 2009「平城京跡（左京二条三坊十坪）の調査　第 561 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 18 年度（2006）年度』
奈良市教育委員会 2010「平城京跡（左京五条四坊十五坪・東四坊大路）の調査　第 553・565・575・581 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 19 年度（2007）年度』
奈良市教育委員会 2012「平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊坊間東小路）の調査　第 608 次・622 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 21 年度（2009）年度』
奈良市教育員会 2017「平城京跡（左京五条四坊一坪）の調査　第 626・656・666・667・668・680 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 26 年度（2014）年度』
奈良市教育委員会 2020「平城京跡（左京五条四坊八坪）の調査　第 649・701 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 29（2017）年度』
奈良市教育委員会 2021「平城京跡（左京九条三坊五・六坪）の調査　第 727 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 30（2018）年度』
奈良市教育委員会 2022「平城京跡（左京一条三坊十二・十三坪）の調査　ＨＪ第 733・743 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報令和元（2019）年度』
奈良県立橿原考古学研究所 2007「平城京左京四条三坊九坪（東堀河）の調査」『平城京左京四条四坊・四条五坊発掘調査報告書』
寝屋川市教育委員会 2018『国史跡高宮廃寺跡発掘調査報告書』
花谷浩 2000「京内廿四寺について」『研究論集ＸⅠ』奈良国立文化財研究所
原田憲二郎 2002「平城京左京五条五坊十三坪出土瓦製品について」奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 2001』
原田憲二郎 2011「「大安寺式」軒瓦の成立」奈良市教育員会『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 20 年度（2008）年度』
原田憲二郎 2013「平城京における播磨産瓦出土の背景について」『帝塚山大学考古学研究所研究報告ＸＶ』帝塚山大学考古学研究所
原田憲二郎 2014「平城京の重圏文系軒瓦」『古代瓦研究Ⅵ－大官大寺式・鴻臚館式軒瓦の展開・重圏文系軒瓦の展開－』奈良文化財研究所
原田憲二郎 2016「国分寺造営期における中央と国分寺の同笵瓦」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社
原田憲二郎 2020「平城紀寺・葛木寺・海龍王寺前身寺院・済恩院の瓦」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成 29 年度（2017）年度』
平松良雄 2008「東大寺千手堂跡の古瓦」『南都仏教』92 号
兵庫県教育委員会 1987『推定布勢駅家跡小犬丸遺跡Ⅰ』
毛利光俊彦・花谷浩 1991「第Ⅵ章考察１屋瓦Ａ平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』
森郁夫 1983「興福寺式軒瓦」奈良国立文化財研究所『文化財論叢』
保井芳太郎 1928『南都七大寺古瓦紋様集』鹿鳴荘
山崎信二 2006「平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦」『古代信濃と東山道諸国の国分寺』上田市立信濃国分寺資料館

図版出典

図１の 6734 Ｃの薄拓本は山崎 2006、図３－４の薄拓本は花谷 2000、図３－６の薄拓本は寝屋川市教委 2018 掲載の拓本に一部修正を加え転載。その他は著者作成。

印刷・製本仕様データ

表　　紙 ： アートポストカード220kg/㎡・マットpp加工
見 返 し ： 白色上質紙110kg/㎡
巻頭図版 ： 特アート紙135kg/㎡
本　　文 ： 白色マットコート紙104.7kg/㎡
本文ﾌｫﾝﾄ ： ヒラギノ明朝体
製　　本 ： 縦開き・糸かがり綴じ

ⓒ2024 by the Nara Municipal Board of Education
No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written perm ission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

令和3(2021)年度

ISSN 1882-9775

印　刷　令和6（2024)年3月12日

発　行　令和6（2024)年3月22日

編　集　奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135　奈良市大安寺西二丁目281番地
ＴＥＬ　０７４２－３３－１８２１
ＦＡＸ　０７４２－３３－１８２２
ＵＲＬ http://www.city.nara.nara.jp/
E-mail　maizoubunka@city.nara.lg.jp

発　行　奈良市教育委員会
630-8580　奈良市二条大路南一丁目１－１
ＴＥＬ　０７４２－３４－１１１１(代)

印　刷　株式会社　明新社
630-8141　奈良市南京終町三丁目464番地

ISSN 1882-9775

ANNUAL RESEARCH REPORT OF ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA 2021

CONTENTS

Ⅰ PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION IN NARA CITY AREA IN 2021

Ⅱ REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITE AND MATERIALS IN 2021

Ⅲ THE REPORT OF ANCIENT RELICS

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION
2024

ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
Archaeology in Nara City Area
2021

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2024